

人のために

東 暁成

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が発生した。この震災によって6434人もの命が奪われた。震災から29年、私たちのような震災を経験していない年代が増加している。これから、未災者から未災者へ教訓を語ることが多くなるだろう。過去の教訓を学んだ私たちが自分や周囲の人の命を守るため、また、過去の教訓を風化させないために、次世代へ語り継いでいく責任がある。

2 阪神・淡路大震災

祖父の体験

祖父は当時、神戸市北区の谷上に住んでいた。当時の谷上は、倒壊している家は無かったが、ブロック塀が倒れていたり、屋根瓦がそこら中に飛び散っていたりした。谷上では水が出たものの、水道管の水が流れず、中にたまり、水道管の鉄の錆びによって赤い水が蛇口から出てきた。祖父は本震が落ち着いた昼頃、経営している水道会社へ行った。

会社の近くに住んでいる知人のアパートの2階部分が道路に放り出されている。アパートによって生き埋め状態になっていた知人は息をしておらず、祖父は軽トラックの後ろに乗せ、御影小学校に連れて行った。祖父は水道業者であるため、神戸の水道の復旧作業を行った。地震による水道の被害の規模が大きすぎるため、人手が足りず、祖母や伯父に手伝ってもらいながら復旧作業を行った。祖父の会社は神戸市公認企業であるため、工事をするために「交通許可書」という証明書が警察から配られた。地震によって一般車は交通規制されており、復旧作業を行うガス、水道、電気屋などのライフライン関係の会社は交通許可書が配られた。緊急時には、これを使用することによって、車を自由に駐車したり、道路を自由に通ったりすることができる。水道管はいたるところが損傷や破裂、管をつないでいるボルトが緩んでおり、震災から1ヶ月程は神戸市中の水道管を直していたため大変だった。

3 祖父の話聞いて

私は、改めて祖父の行動力に感銘を受けた。祖父は私の家のウッドデッキを作る時や、タンスの固定などを頼んだ時は手伝ってくれる。そんな祖父が阪神・淡路大震災で活躍したと母から聞いたときはカッコいいと感じた。これをきっかけに、今回インタビューすることを決意した。インタビューをして、共助の大切さを再認識した。祖父が知人を瓦礫から抜け出したように、阪神・淡路大震災では、近隣の人同士で助け合う、共助が多かった。消防士や自衛隊がすぐに助けに来てくれるわけではない。1人でも多く人の命を救うためには、すぐに駆け付けることができる近隣の住民同士や親戚の協力関係が大切だ。そのためにまず、私が近隣の方に挨拶をしたり、地域のイベントに積極的に参加したりし、良好な関係を築いていきたい。

さらに、ライフライン業者の大変さを知った。ライフラインが整っている生活に慣れてしまっている私たちは、災害が発生したら早く復旧して欲しいと思うだろう。しかし、心配な家族のことをおいて、復旧作業を行ってくれている人もいることを知った。そんな人たちに感謝をしなければならないと感じた。

災害時、自分のことで精一杯な人が多い中、人のために真っ先に行動をした祖父を尊敬している。私が大人になっても祖父のような大人でありたいと心から思う。

4 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学した理由は消防士になりたいという夢の影響が大きい。私は中学生の頃、明確な志望校がなかった。当時、志望校の前にまず、高校卒業後の自分の進路について考えることにした。その時、消防士のある訓練の動画を目にした。その動画ではメリハリをつけ、人のために辛い訓練をしていて、地域を災害から守っている消防士に憧れを抱いた。そのことを中学校の先生に伝えると、この環境防災科を勧められた。そして、消防士になる上で防災について学び、活用することは重要だと考え入学を決意した。

(2) 環境防災科の活動と学び

私が環境防災科で最も印象に残っている活動は、校内の避難訓練とあわせて環境防災科生徒が普通科の生徒に対して行う防災学習だ。私が最初に参加したのは1年生の時、3年生の先輩と2人で行った。正直、当時は防災の知識も浅く、人前で話すことが苦手だったので不安でいっぱいだった。事前にもどのようなことを話すのか考えたが、実際はほとんど先輩に頼り切ってしまう形になってしまった。そこで、自分の話す力を伸ばさなければ先輩のようになれないと思った。先輩は活動をしていたらいつかできるようになると言ってくれたが、当時の私は本当になれるのかと心配だった。その後、2年生の3学期に同じ活動をするようになった。今回は私が先輩の立場になり、後輩のサポートをしないとイケないため、より不安だった。しかし、始めてみると思っていた以上に伝えたいことを緊張せず、伝えることができた。絶対に覚えてほしいことも強調して伝えることができ、少し先輩に近づくことができた。この体験は私が環境防災科に入学してから初めて実感した成長体験だ。

数々の講義の内容にもあったが、「防災」はコミュニケーションが大切だ。私はまだ、防災を語るには未熟だが、人に伝えるための手段はボランティア活動の経験を通して得ることができた。これからも身近の人から関わる機会を増やし、今後も、多くの人とコミュニケーションをとり、地域の防災力の向上に努めたい。

(3) ボランティア活動

私はボランティア活動にはあまり参加していない方だが、1学期間に1回は必ず参加するようにしていた。特に、平野中学校の出前授業と多聞東小学校で行われた、ハロウィンイベントが印象に残っている。平野中学校の出前授業では自分の言葉で伝えることの大切さを学んだ。1年生から3年生まで学年ごとに1時間ずつ、1日に3回同じ授業を行った。最初は、事前に考えていた原稿をそのまま読んでいた。そして、1回目が終わった後、先生に自分の言葉で伝えることも大切だと教えて頂いた。2回目以降は自分の言葉を交えながら伝えるために、休憩時間に伝えたいことをあらかじめ箇条書きにし、あまりメモを見ないよう工夫した。すると、2回目以降は「堅苦しい言い方ではなく、声のトーンが明るくなってわかりやすくなった」と先生から褒めて頂いた。

多聞東小学校で行われたハロウィンイベントでは幅広い年齢層に対する、話し方を学んだ。親子連れや年配の方、議員の方とも話す機会があった。小さい子どもに対しては、しゃがんで目線を合わせることで早く打ち解けることができると学んだ。「小さい子は自分より背が高いと怖がってしまうから、目線を合わせることで話をしてくれる」と先輩に教えて頂いた。年配の方はできるだけ実際の距離を縮めて会話した方がいいと感じた。年配の方は耳が聞こえにくいことが多い。それは、大きな声を出すことで解決できるが、自分に負担が掛かってしまう。だから、自分が近づくことで、誰の負担にもならずに会話ができると学んだ。議員の方とは、敬語を使おうと意識しすぎないことが大切だと学んだ。議員の方とは、普段から話す機会がなく、何を話したらいいのかわからなかった。しかし、相手が聞きたいことは、年配の方や保護者の方とあまり変わらない。つまり、過剰に気を遣わなくてもいいということだ。敬語を使おうとして、誤解を生むより、高校生らしい話し方でいいということ学んだ。

(4) 消防学校体験入校

将来の夢が消防士である私は、消防士の訓練ができると思い、楽しみにしていた。私は運動部に所属をしていたため、体力には自信があり、厳しい訓練も大丈夫だろうと思っていた。しかし、訓練が始まると慢心していた感情は一瞬に消失した。1年生は初級の訓練で主に規律訓練を行った。規律訓練では、大きな声を出し、機敏に動きかなければならず、さらに、周りとの息を合わせて行動をしなければならなかった。この中でも私は特に、周りとの息を合わせることが印象に残っている。部活動のランニングでも足を揃えなければならず、正直、なぜこんなことをやらなければならないのかわからなかった。しかし、消防学校体験入校を通じて周りとの息を合わせることの大切さを学んだ。息を合わせることは周りの行動を確認することだと知った。災害現場では、1人が勝手な行動をとることは許されず、周りとの協力しなければ火災の消火や人命を救助することができない。

2年生は上級の訓練でホースの取り扱いや放水訓練を行った。私は小隊長として指示を出した。部隊に緊張感を持つ的確な指示を出した。中隊長からの指示には誰よりも早く行動することを意識して取り組んだ。指示を出す側と指示を聞く側のどちらも経験し、私は指示を聞く側の方が集中力を使うと感じた。なぜなら、常にアンテナを張り続けなければならないからだ。指示を出す側は考えなければならない量は多くあるが、指示を聞く側にも考えなければならない時間が長いと感じた。この経験から、お

互いの訓練の辛さを理解することができた。

(5) 垂水消防署体験

この活動では他の活動ではあまりできていなかった積極性を持って取り組もうと思い、自ら消防署体験のリーダーに立候補した。リーダーには責任が伴う。当時は私がリーダーになったことに私は不安を感じていた。とにかく大きな声を出して挨拶をすることや号令をかけることを意識した。この体験は9月と11月の2回にわたって行われる。1回目は、消防署で講義を聞いた。内容は主に、阪神・淡路大震災や実際の現場などの映像を見ることによってわかってくる当時の消防の課題や、それに対してどのように解決したのかを教えて頂いた。全体の講義で特に、チームワークの大切さが印象に残っている。実際に過去に宝塚市役所で火災が発生したことがあった。その火災では死者は0人だった。それはチームワークがとれていたからだ。火災が発生すると、周りが何も見えなくなるため、避難経路に誘導する係が一定間隔に配置したことにより避難をスムーズに行うことができた。このように、周りを意識して消火や救助をすることは、消防士にも関係することだと教えて頂いた。2回目は実際の訓練を行った。降下訓練では、見ているだけでは簡単そうだが、実際にやってみると想像以上に難しかった。特に、壁を伝わなければならないことが難しかった。ロープだけではバランスが取れず、簡単にやってのける消防士は本当にすごいと感じた。

5 夢と防災

(1) 消防士

初めのきっかけは消防士の訓練の動画を目にしたからだ。しかし、2年間環境防災科で防災について学んでいくうちに消防士という職業に対する考え方や見方が大きく変化した。私が中学生のとき、消防士はカッコいいというざっくりした印象で、火を消したり、人を救助したりするだけだと思っていた。しかし、今では消防士が地域で大きな役割を果たしていることを学んだ。例えば、地域の避難訓練に参加したり、学校などに直接出向き、火災防止などの啓発活動を行ったりしていることだ。これらを知り、消防士は私たちが考えている以上の役割を果たしているという考え方へ変化した。

私は環境防災科で防災を学ぶまでは、将来、消火隊や救助隊で活躍したいと考えていた。しかし、心肺蘇生法の講義や消防体験、その他の今まで受けてきた講義によって、救急隊に興味を持つようになった。私は救急隊の、直接人を救うことができるということに大きな魅力を感じた。近年、救急車の出動回数が全国的に増加している。ある消防士の方によると、救急隊の1日の消防署内にいる時間はほぼゼロに等しく、1日に10回以上は出動している。他の隊に比べると、出動回数が圧倒的に多く、ハードな仕事だが、その数だけ助けを求めている人がいることに気づいた。そして、その人たちを1人でも多く助けたいと強く感じた。これらの理由から私は消防士の中でも救急隊で活躍したいと考えている。

(2) 南海トラフ巨大地震

2022年1月13日、地震調査委員会では、南海トラフ巨大地震の発生確率を40年以内に90%以上、また、10年以内は30%と発表した。私は正直、南海トラフ巨大地震は事前に準備をしても、被害は大きなものになると考えている。なぜなら、地震や津波による被害が広範囲であると予想され、助けを求めている人を全員助けることができないからだ。しかし、備えていれば救われる命もあるに違いない。家具を固定するだけでも地震によって死亡する確率を下げることができる。このように、防災は簡単にできるのだ。そのため、1人でも多くの人が苦しまないように、備えをしなければいけない。

6 最後に

『語り継ぐ』を執筆するにあたり、体験談を聞かせてくれた祖父や何気ない日常での会話で阪神・淡路大震災のときに祖父が活躍したことについて話してくれた母に感謝したい。私は環境防災科に入学したことで、多くの経験をし、災害に対する考え方が大きく変化した。学んだことや経験したことを自分の言葉で書き綴るべきだと思い、執筆した。私の『語り継ぐ』の執筆は自分なりの決意だ。災害や防災減災の知識はまだ未熟であるが、人のために尽くしたいという思いは大きい。そのために、私は消防士になるのであって、今後起こる大きな災害に、1人でも多くの命を救い、1人でも死なせないために、これからも何事にも努力を続けていきたい。

防災を世界に

足立 大地

1 はじめに

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生した。この日から29年の月日が経った。長い月日が経ち、人々からこの地震に対する記憶が薄れ始めた。私を含め、地震発生当時に生まれていない世代も目立つようになってきた。このような「風化」が進む現状に、私たちができることとは何かを考え、語り継いでいく必要があると強く感じた。阪神・淡路大震災の教訓を次の世代、さらに次の世代と引き継いでいかなければならない。環境防災科20期生の「語り継ぐ」が一人でも多くの人の記憶に残ってほしいと思う。

2 母と伯母の体験談

地震発生当時、母は、姫路に住んでおり、地震による被害はそれほど大きいものではなかった。地震発生直前、地鳴りが聞こえ、揺れ始めた。揺れはそこまで大きいものではなかったが、災害対策が不十分だった当時の状況では、家具の固定などもなく、食器棚の食器が飛び出て粉々になってしまった。落ち着きを取り戻し、テレビをつけてみると変わり果てた神戸の姿が目に見え込んできた。火災によって焼け野原になっていく神戸の街並み、黒い煙が、まるで戦時中かのように感じていた。横倒しになった高速道路など、呆然とニュースを見ていた時、パニックになり気が付かなかったが、「お姉ちゃんは大丈夫なのか。」と思った。母の姉はポートアイランドに住んでいた為とっさに電話をかけたが電話はつながらず。ポートアイランドもライフラインが機能しておらず、姉の安否確認はポートアイランドまで行くしかなかった。そのために神戸の情報を得ようとしてテレビを見ていた。姫路、大阪、などの震度が表示される中、肝心の神戸の震度が表示されておらず不思議に思ったが、あまりにも大きな地震だから震度が計測できないという情報がすぐに入ってきて、より一層不安が大きくなった。その後、神戸は震度7という表示があり、今までに見たことがなかった震度だったため、目を疑った。

そして、母と祖母は、車で姉の安否確認のためにポートアイランドまで向かった。今姫路から神戸までは1時間もあれば到着するが、震災発生時には、道路ががれきで通行できず、渋滞などもあり、全6時間もかけてポートアイランドまで行った。車に乗りながら見た神戸の街は見るのもつらいほど悲惨な状態だった。ポートアイランドにつくと、液状化現象がひどく、車で通ることが困難だった。地震の影響で地割れを起こし、その割れ目から泥水が噴出していた。車を停車させておくと、車が泥だらけになり、地面に2cm程度の泥が積もっていたそうだ。姉の元に到着すると、幸運なことに姉は無事で、怪我一つなかった。姉の家のガラスはすべて割れ、冷蔵庫がリビングの反対側まで飛ばされていて、一つも立っている家具はなかった。ポートアイランドから見えた、和田岬や、長田の方面の空は、真っ赤に染まり、黒煙が立ち上っており、その時に本当に核爆弾でも落とされたのではないのかと思った。家の目の前に、市民病院があったが、そこは地獄絵図で、大けがをして血だらけの人や、骨折している人で溢れかえり、パニック状態になっていた。

当時、伯母はカナリアを飼っていたが、地震発生3日ほど前から異様な行動をしていた。当時、藁でカナリアの巣を作っていたが、いつもはそこに入らず、外に出ていたのに、災害発生前になると急に巣の中で縮こまっていた。よくニュースなどで見かける動物の災害発生前の異常行動は本当にあるのだと感じたそうだ。それ以外にも、一種の予兆なのか、近くの住人が災害発生前に異様な雲を見かけたと言っていたそうだ。

ポートアイランドでは電気は全く通らず、情報を手に入れることができたのは次の日のラジオだった。その後、電気とガスはすぐに復旧したが、水は復旧に時間がかかり、1日に何度もポリタンクに水を汲みに行った。食料には困らなかった。ポートアイランドでは、ボランティアの人たちはあまり見かけず、物資の配給などはほとんど自衛隊の方が行っていた。

伯母も、神戸には地震が来ないだろうと信じていて、自分の家もそうだが、実際に友達の家などの家具が固定されているのは見たことがなかった。この地震以来、姉は背の高い家具を買うのはやめようと決めたと言っていた。特に寝室の家具の置き場所にはすごく注意深くなったそうだ。

姫路とポートアイランド、同じ県でここまで被害の規模が違うのだと感じた。また伯母は北区のほうに行くことがあったが、その時に見た景色は、被害がなく、ちょっと離れただけなのにこんなにも状況が変わるのだと思ったそうだ。

3 話を聞いて

私は、伯母の体験談を聞いて、ここまで阪神・淡路大震災の記憶が鮮明に残っているのは、それほど衝撃的な震災で、大きな恐怖や不安などがあったからだろうと感じた。自分に置き換えてみると、兄が震災現場に住んでいるとすごく不安になるし、自分ではどうしようもできないもどかしさがある。実際に、震災が起きている訳ではないのにも関わらず、私がここまで不安になるということは、当時の母は、私では計り知れないほど不安だったのだろう。話を聞いていながら、こんなこともあったなどスラスラと思い出しており、地震というものはどれほど記憶に残り、どれほど人々に恐怖を与えるものなのかと再確認した。当時、神戸には地震が来ないとよく言われており、それを信じる人も多かった。母も、神戸には地震が来ないと思っており、その思い込みがより大きな被害を生み出してしまうのだと感じた。

今回のインタビューで、身近な人に震災の経験を聞くと、より震災当時の状況が分かってくると感じた。震災当時の状況を色々な人に語り継ぐことはすごく大切だが、まずは家族や友人などの身近な人に語り継いでいくことが大切ではないのだろうか。身近な人に語り継いでいくことによって語り継ぐことに対するハードルが下がるのではないのかと考えている。私は、将来海外で防災を広めて行きたいと考えている。その為には、環境防災科での3年間で学んできたこと、今回、インタビューで聞かせていただいたお話など、すべての学びを大切にし、感謝していくことが大切だ。

4 環境防災科に入った経緯

(1) 進学しようと思った経緯

私が環境防災科の存在を知ったのは、中学2年生の頃だ。当時の担任の先生との面談で、進路はどうするのかと聞かれたが、私はその時に具体的に考えていた進路はなく、答えに詰まっていた。その際に、先生から提案されたのが、今、私が在籍している、環境防災科だ。「進路に困ったなら、専門分野を学べる学科にあって強みを身に付けるのもいいのではないか」と言われ、私は、舞子高校の環境防災科という存在を意識し始めた。そして中学3年生になった頃、いよいよ具体的に進路を決めていかなければならないという状況であったが、まだ私は迷っていた。そんな中、青年海外協力隊として、海外で教師をするという活動をしていた先生が、経験を伝えてくれる機会があった。その話を聞いて、私は、海外で人のために働くということに強い憧れを持つようになった。しかし、自分には突出した強みがあるわけではなく、どうすれば強みを持つことができるかを考えた時に、1年前、先生から言われた言葉を思い出した。「進路に困ったなら、専門分野を学べる学科にあって強みを身に付けるのもいいのではないか」、この言葉を思い出し、環境防災科の3年間で防災を学び、自分の強みにし、将来、海外で専門分野を生かして働くことができるのではないのかと考え、環境防災科に進学しようと決めた。

(2) ボランティア活動

私は、ボランティアには部活動との兼ね合いもあり、あまり参加することはできなかったが、その中でも、参加させていただいたボランティアの経験はすごく貴重なものとなった。1年生の夏に参加した出前授業では、人前で授業をすることの難しさを知った。先輩方は、事前準備の時、「中学生ならこっちの言い方のほうが理解しやすいんじゃない？」など、授業を受ける側の気持ちになって考えることを常に意識していた。事前準備の時に、最後の最後まで詰めていくことによって、人前で堂々と授業をしていくことができるのだと感じ、事前準備の大切さに気づかされた。先輩方は、「教えてあげる」といった姿勢で授業をしていなかった。常に、「一緒に学ぶ」といった、対等な気持ちを感じられた。その姿勢を見て、ボランティアの意味について考えた。私は入学当初、ボランティアは、「してあげる」といった考え方だった。「困っている人を助けに行きあげよう。」など、自分はどこか、上から目線の立場で考えていたのかもしれない。しかし、上から目線の考えでは、救助を必要としている人の気持ちに、寄り添っていくことはできない。いかに、腰を低く、対等な立場で、「一緒に頑張ろう」といった気持ちを持てるかが、ボランティアをする上で大切なことになってくる。こういった姿勢を意識し続けると、被災者の方から、震災当時の状況を話していただけることがある。これを次につなげていくまでが、ボランティア活動の意味であり、環境防災科の生徒としての役割ではないのかと考えた。

(3) 消防学校

私は消防学校の体験で命を守る厳しさを知った。体験をする前は命を守るということを軽く考えてしまっていた。災害時に自分の身を投げ出してほかの人の命を守ればよいと思っていたが、まずは自分の命が第一優先だと気づかされた。自分の命が守れた上で、他の人の命を守る。これが消防職員の方はしっか

りと根底にあるのだと思った。自分の命を守る為には、厳しい訓練を積み重ねなければいけないのだと思った。腕立て伏せを 100 回、腹筋を 100 回軽々としていた消防職員の方を見て驚いた。人の命を守るということは自分の限界を超えるほど追い込まなければいけないのだと感じた。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、青年海外協力隊の一員として、災害の多い日本で学んだ防災知識を海外に伝えていくことだ。日本では、地震、台風、大雨、噴火、豪雪など、あらゆる災害が頻繁に発生している。この弱みとも言える部分を逆に生かし、私が学んだ防災知識を、発展途上国など、防災知識の少ない国に共有し、今後発生するのであろう災害による被害を最小限にしていくという方法だ。地震の予測などは現段階では難しい。普段の日常生活から災害に対する意識付けをし、いかなる場面でも落ち着いて行動しなければいけない。普段、災害が身近にない人は緊急時の対応などがまだまだ不十分であることが多い。経験の少なさによる被害を最小限に抑えるために青年海外協力隊の力が必要になる。そのために、環境防災科で学ぶ災害の知識、災害発生後の知識をしっかりと身に付け、海外で命の守り方を繋いでいきたい。

(2) 青年海外協力隊について

青年海外協力隊は、国際協力事業団「JICA」が発展途上国に人材を派遣する機関だ。

職種は 190 種類以上あり、例えば、防災分野、スポーツインストラクター、保険関係の仕事などがある。個人の持っている専門知識を最大限に生かすために、多くの職種が存在している。青年海外協力隊の活躍の場としては、アメリカや中国などの先進国ではなく、主に、ネパールや、エジプト、ボリビアなどの、発展途上国と呼ばれる地域に配属される。青年海外協力隊になるには、JICA に応募し、選考試験を合格しなければならない。20～39 歳までが応募資格であるが、自分の適した職種が募集されているかは、確認してみなければ分からない。任期は 1～2 年で、帰国後の進路に困ることがないように、企業との連携で就職を手助けするなど、帰国者への配慮も充実している。このように海外派遣のハードルを下げていく動きがあるなかで、若者と呼ばれる私たちが青年海外協力隊の一員となり、海外に日本の知識や技術を伝え、経験を日本に持ち帰り、今後の世代に引き継いでいくことが大切だと考える。

(3) 青年海外協力隊と防災

青年海外協力隊での防災の仕事は、発展途上国といわれる地域に日本の防災知識を持った人が派遣され、防災活動を行うという仕事だ。具体的には、現地住民とハザードマップを作成したり、防災に関する講義などをしたりしている。東日本大震災の教訓や、阪神・淡路大震災の教訓などを海外に伝えていくなど、「語り継ぐ」といったことにも力を入れている。他には行政との防災計画作りだ。発展途上国では、災害が発生した時にどう行動するか、行政が被災者に対してどう対応するかなどの基礎がまだ完璧に整備されていない。それを改善するために、災害が多く、災害発生後の対応が整備されている日本の防災計画を発展途上国に持っていき、知識を共有するという事を行っている。実際に、海外での知らない土地での防災は、どこが危険かなど現地住民の方にしか分からないことが多くある。それを改善するために出前授業やボランティア活動などで人とのコミュニケーション能力を高め、言語力を身に付け災害に関する知識をより深くまで知っておく必要がある。

6 終わりに

環境防災科での学びは、今後の私の人生に大きく関わりを持つだろう。ボランティア活動では人との関わりや人の温かさを学ぶことができた。この 3 年間で新しい出会いが増え、新しい目標が増え、新しい考え方を持つようになり、これらの学びで自分を表現することができるようになった。防災だけでなく、人とのコミュニケーションや、仲間との助け合い、出会いの大切さ、新しい自分を見つけること。ここまでの色々な学びを支えてくれた先生方や仲間、家族、環境防災科に関わってくれたすべての方に恩返しできるように、自分の道を突き進み、誰にでも優しく、逞しく、役に立てるような人間になっていきたい。

「ともに」

阿部 豪志

1 はじめに

この「語り継ぐ」を執筆するにあたり、私は入学してからの自分を振り返った。

1年生の頃は何も分からないままボランティアに参加し、参加しただけで満足していた。しかし、ふとした時に、私はなぜ環境防災科に入学したのか疑問に思うことが多くあった。

2年生になり防災ジュニアリーダーとして活動することを決意した。学習会や他校との交流を通して、1年生の頃より防災に興味を持つようになり、出前授業などのボランティアにも積極的に参加するようになった。

そして3年生。「語り継ぐ」を執筆する。

2 環境防災科

(1) きっかけ

中学2年生の時に職業体験で家の近くの消防署に行かせていただいた。そこで他人の命を救うために自分の体を鍛えて市民を守っている消防士に憧れた。そのことを消防士である父に話すと、「神戸消防に環境防災科出身の人がたくさんいるよ」という話を聞き、環境防災科に興味を持った。ホームページを見ると防災について学び、ネパール訪問や東北訪問などがあり、特色ある学校だと思った。消防士を目指している自分にとって防災を専門的に学べるのはとてもいい学校だと思い環境防災科に入学したいと思った。

(2) 活動

(1) ジュニアリーダー

私は2年生の1年間ジュニアリーダーとして防災について学んできた。中学生の頃は防災など興味がなく全く無縁だった。しかし、高校に入学し環境防災科として1年間防災について学んできて日本に住んでいるなら災害からは逃げられないと思った。より良い対策をするためにもっと深く防災について学びたいと思いジュニアリーダーに入った。

特に力を入れたのは避難訓練だ。避難訓練班は毎学期末に行われる避難訓練を計画する。具体的には、どのような災害を想定して各クラスがどのルートで避難し、どれだけの負傷者が出るのかを考えたり、物が倒れたという想定でどこに障害物を置くのかなどを計画したりする班だ。中学生の頃は避難訓練をしている側だったが、ジュニアリーダーに入り、計画する側になって避難訓練の重要さや、より実践に近い状況で行うことの大切さが分かった。また、計画する側になったことで様々な場面で想定外のことが起きることを考えて計画しなければいけなかったのが難しかったが、達成感があり楽しかった。

(2) 出前授業

私が環境防災科で行った活動で1番楽しかったのは出前授業だ。今まで3回ぐらいしか行ったことはないが、どの出前授業も楽しかったと思える授業だった。その中でも私の母校である平野中学校での活動が一番心に残っている。

リーダーとして仕事を全うできたかと聞かれたら、素直に「はい」と答えることはできないと思う。しかし、母校だから知っている生徒の雰囲気や、どのような防災活動をしているかなど、私しか知らないことを踏まえた出前授業ができたと思う。さらに体を動かして防災を学んでもらうことで、生徒も自然と笑顔になっていて授業をする側としてもすごく楽しい出前授業だった。

(3) 募金活動

私は令和2年7月豪雨で被災された肥薩線の募金活動を行った。被害はJR九州全体では17路線計730か所に被害が広がった。具体的には、路盤流出や橋りょう流失、駅が流されるなど鉄道の運営に欠かせない部分が被害を受けた。そこで舞子高校では、校内募金を行った。初めての募金活動で掛け声や募金をしてくださった方への対応、地域住民との関わり方など学ぶことが多くあった。

3 東日本大震災で救助活動を行った父の話

私の父は宮城県仙台市出身だ。東日本大震災発災当時父は神戸で消防士として勤務していた。

発災して真っ先に考えたことは仙台に残っていた家族や地元の友人の安否だ。家族の安全は確認できたが、地元の友人全員に連絡することはできず、不安な日々を過ごしていた。そして発災から1週間以内には神戸で勤務していた父のもとにも出動要請が出た。出動要請が出て1番にしたことは被災地の状況把握だ。ある程度下調べを行い、被災地でどのようなことが起き、どれくらいの被害があるかは確認できたのでその情報をもとに資機材の準備などを始めた。

被災地は、戦争後のようになっており、自分の知っている仙台ではなく頭が真っ白になった。また、「跡形もなく」というのがこのことなのかと実感した。しかし被災地に驚いている時間もなくすぐに人命救助にあたった。阪神・淡路大震災とは違い、津波が発生していたため人命検索には多くの時間がかかった。そこで「人海戦術」という作戦で人命検索にあたった。人海戦術とは津波がどの方向から流れてきたかを考え、障害物などにより水の溜まるであろう場所を考え、そこを重点的に探すという戦術だ。この方法により多くの人を見つけることができた。被災地では避難所で被災者同士の喧嘩が起きると言われていたが、消防士同士でそのようなことは起きなかった。それには理由があり、消防士は全員が「人の命を救いたい」という強い気持ちで活動していたことや、トラブルが起きないように事前に、1週間で作業を切り上げ、入れ替えて神戸から別の部隊を派遣するという計画があったためと考えられる。そして被災地では想定外のことがたくさん起きた。しかしどんな時でも消防士として自分のできることを100%行うということを心掛けて活動していた。

被災地での役割分担

自衛隊・・・ライフラインの整備・橋が壊れたところなどに道を作る・避難所での炊き出し・風呂作り・人命救助

警察・・・人命救助

県単位で動くので自由に動けない

消防・・・人命救助

市町村単位で動くので警察より身軽に動ける

父は、被災地で活動をしてよかったと思えることは、南海トラフ巨大地震が起きた時のことを想定できるようになったことだと言っていた。南海トラフ巨大地震でも津波が発生すると言われていた。発生するまでに東日本大震災で救命活動を行った消防士たちが、若い消防士に経験を「語り継ぐ」ことが、南海トラフ巨大地震で死者を減らすことや効率の良い救助活動につながるのではないかと私は考える。

4 阪神淡路大震災 友人の母 K さんの話

地震発生時は独身で三木の家に家族全員で住んでいた。「ドン」というものすごい衝撃で一瞬体が浮き、目が覚めた。過去に福井県で発生していた地震を体験していた K さんの両親がすぐに「外に出て一」と叫び外に出た。家族全員が無事で家も棚の上にあった物が落ちたくらいで大きな被害は無かった。少しの間停電したが、すぐに復旧し断水も無かった。

それから明石にある職場に行くと事務所がぐちゃぐちゃになっており、テレビで長田の映像を確認し、地震の大きさを知った。そして家に帰ると、名谷に住んでいた友人が水を汲みに来ていたので、その手伝いをした。このように三木では大きな被害は無かったが、いつこのような地震が起きるか分からないので毎日を大切に生きようと思ったそう。

5 消防学校体験入校

環境防災科では、1年時に初級、2年時に上級と2度消防学校に体験入校させていただいた。

1年の初級では、初めに規律訓練を教わった。規律訓練では普段体育で行っている「右向け右」や「回れ右」など動作はほとんど同じだった。しかし実際に近くで消防士の手本を見ると、声の大きさや一つ一つの動作のキレなどが全く違った。これが市民を普段から守っている人たちかと実感した。実際に自分たちがやってみて、はじめは全員声の出し方や動きなどが全然合わなかった。しかし小隊長を中心にポイントなどをまとめて全員が意識高く練習すると体育の時間とは全然違うぐ

らい声が出て、普段の体育でいかにサボっていたかが分かった。午後からは、主に体力錬成を行った。腕立て、腹筋、フェニックスどれも今までの筋トレの中で一番しんどかった。特に腕立てが一番大変だった。しかし消防士の人たちは「しんどくても声だけは全力で出せ」と言っていた。腕立てができなくなっても全員が声を出してお互いを励ましあっていたことにより頑張ろうという気持ちにもなり、これがチームの力だと改めて感じた。

2年の上級では、私は中隊長を務めた。先生が授業中に消防学校で中隊長をやりたい人を募集すると言っていたが、少し迷った。それは自分でできるのかとか、自分がミスしたら全員が怒られるなど考えてしまったからだ。少し迷いがあったが他の人が中隊長をやって後悔するより、たくさんミスして自分の隊が怒られてもいいから全力でできることをやろうと思い、中隊長をすることを決意した。

規律訓練が始まり、声を出すタイミングやどのようにしたらみんなに自分の伝えたいことが分かりやすく伝わるかなど考えないといけなく、すごく難しかった。しかし小隊長の協力もあり全力でいい規律訓練を行うことができた。放水訓練では中隊ごとに分かれ、訓練棟が燃えているという想定だった。ここでは、ロープをつなげる時や放水開始・停止する時など1つ1つの動作で声を出さなければいけなかった。これは現場で誰がどんな仕事をしているかなど共通認識させるためだ。放水訓練の時の自分の役割は各小隊長に指示を出し、どのような作戦で消火していくかの指示だ。本当の現場では、その中隊長の指示一つで多くの命が救われることもあるし、時には隊員が命の危険にさらされることもある。だから自分が務めている中隊長という役目でのミスは許されないし、責任重大な役職だということをこの放水訓練で感じた。実際に放水が始まり、いきなりホースが破けるというトラブルが起きた。しかし自分とトラブルが起きた小隊長を中心に冷静に対処することができよかった。

反省点としては、放水中に筒の先を回転させ様々な水の出し方を確認すればよかった。実際の現場では炎の勢いは常に変化する。だから水の出し方も変化させ、その時にあった対応をしていかなければいけないと感じた。

私は中隊長を務めたことで、消防士に必要な臨機応変な対応力や自分で状況を理解し、隊員に指示を送る難しさを感じることができた。この経験は消防士を目指す私にとってすごくいい経験になった。

6 将来の夢

私の将来の夢は神戸の消防士になり、水難救助隊に入ることだ。この夢を持つきっかけとなったのは父の影響と西日本豪雨だ。私の父は消防士で小さいころから消防署に行くことが多くあり、はしご車に乗せてもらったり消防署を見学させてもらったり、気が付いたら消防士に憧れを抱いていた。その頃に西日本豪雨が発生した。この西日本豪雨は負傷者 484 名・死者 263 名を出した大水害だ。当時テレビや新聞では大きく報じられ、中学生であった私も関心を持つほどの災害であった。テレビでは川が氾濫し濁流に巻き込まれた人や、家の屋根に取り残された人を消防士や自衛隊の人が救助している映像が何日も放送されていた。この映像を見てやっぱり消防士はカッコいいなと思ったと同時に、消防士という職業についてもっと知りたいと思った。それを父に話すと水難救助隊というのがあることが分かり、さらに父は水難救助隊発足時のメンバーだったことを知り、私は絶対神戸消防の水難救助隊に入るとその時決めた。神戸消防の水難救助隊には WSR という水難救助特別隊がある。そこは水難救助の精鋭しか入ることができず、狭き門だが私はそこを目指したい。

7 最後に

この「語り継ぐ」を執筆することで、改めて防災の大切さを実感した。過去の災害をもとに次に来る災害に備える。当たり前のことだが中学生の自分にはできていなかった。恐らく防災について学ぶ機会がなかった人はテレビやネットの情報を頼りに災害に備えるだろう。有名な企業などが発信しているのであれば間違いはない。しかし、自分で過去の災害から調べて対策をすることに意味があると思う。この自分の思いを消防士になったら地域の人にイベントなどを通じて発信していきたい。

「語り継ぐことの重要性」

池田 智裕

1 はじめに

阪神・淡路大震災が発生してから 29 年になる。当時の甚大な被害を受けた神戸は、現在では震災があったとは思えないほどに復興しており、当時のことを知らない人も多い。そのような状況にある神戸で、当時の被災者の思いや命を守るための教訓について震災を知らない人へ語り継いでいくことが必要だと思う。私たちがこれから生きていく中で、自然災害の脅威から逃げることはできない。自然災害によって命を落とす人を出さないためにも自分が学んだことを語り継いでいきたい。

2 両親の話

(1) 母の話

母は当時、神戸市須磨区に住んでいた。地震発生 5 時 46 分に「ゴー」という地鳴りとともに目が覚め、その直後、経験したことのないような揺れに襲われた。最初は何が起きているかわからなかった。揺れがおさまってから数秒間真っ暗で物音がひとつも聞こえず、とても不気味だったそう。部屋を出ると食器棚が倒れて食器が散乱し、テレビは置いてあった場所とは全く違う場所に動いていた。当時、玄関で金魚を飼っていたが地震の揺れにより、水槽が割れて水浸しになっていた。明るくなるのを待って、散乱したものを片付けていると、8 時過ぎくらいに電気が回復した。テレビをつけると破壊された神戸の街が映し出された。長田区の火事、阪神高速神戸線の倒壊、建物の倒壊、これは本当に起こっていることなのか、一瞬分からなかった。テレビを見ていると当時、母が通っていた三宮にある学校が倒壊していたのを見た。もし、この地震が学校にいる昼間だったらと考えるととても怖かったと話していた。震災のあった日は余震がとても多く、家の中で寝るのが怖かったため、駐車場の車の中で寝たそうだ。

母の後日談になるが、震災前日に前兆のようなことがあったそうだ。前日は天気が良く、夕日がよく見えたそうだが、その夕日がいつもより赤く、空に鳥が飛んでいなかったと話す。母の家の近くのスーパー付近では毎日夕方になるとおびただしい数の鳥がやってきていたらしいが、震災の前日はその鳥がおらず、不気味だったそうだ。震災後に改めて考えるとその現象は地震の予兆だったのかもしれないと語っていた。

(2) 父の話

父は当時、大学生で神戸市西区に住んでいた。揺れにより目を覚ましたが、最初は何が起きているのか把握できなかったそうだ。持っていたラジオで地震が発生したということを理解した。そして、テレビをつけると倒壊した建物など壊滅的な神戸の様子が映し出された。「本当に神戸で起こっていることなのだろうか」「夢ではないのか」と啞然としていたそうだ。父の住む地域ではあまり被害はなかったが、電気・水道が止まったそうだ。父の家はマンションの 8 階で、普段はエレベーターを使って上がっていたが、停電によってエレベーターが停止し、水を運ぶのが大変だったと話していた。

(3) 両親の話を聞いて

環境防災科に入学して様々な人の被災体験を聞いてきたが、両親の被災体験を聞いたのは初めてだった。両親は住宅の倒壊など大きな被害こそなかったものの、ライフラインの寸断で不自由な生活を体験していた。そのような経験があったから、今現在、私の家では非常用持ち出し袋や家具の転倒防止などの防災対策がされている。高校入学前は、「そこまで準備しなくても…」「心配しすぎ…」などと思っていたが、今回両親から震災体験を聞いて、阪神・淡路大震災のライフライン寸断の不自由さを体験していたからこそしっかりとした防災対策がなされているのだと気づくことができた。自分もこれから生きていくうえで、両親が行っている防災対策を見習っていきたいと感じた。今回、「語り継ぐ」の執筆にあたってこのような貴重な話を聞くことができてよかった。

4 環境防災科に入って

(1) 入学したきっかけ

中学生の頃、進路にこだわりがなく、進路選びもあまり深く考えずに家から近い普通科の高校に行こうとしていた。しかし、中学2年生終わり頃にこのまま自分が普通でありきたりな人生を歩んでいては自分に誇れるような強みがないと感じた。他人にない強みを手に入れるためには何を学ばよいかを考え進路を探していくうちに、「防災」について深く考えている舞子高校環境防災科にたどり着いた。また、進路に迷っていたときに、母の高校時代の先生である諏訪清二先生が舞子高校に環境防災科をつくり、防災の活動を行っているということ知ったということも要因となった。

小学校に入る少し前に、東日本大震災が発生した。真っ黒な津波が町を飲み込んでいく様子を見て、子どもながらに恐怖を感じたのを鮮明に覚えている。そのときは災害という認識がなかったが、後に地震による津波だということがわかる。自然災害は怖いというのが幼いころの印象だったが、次第に自然災害によって大切な人の命が失われ、悲しむ人がいるということを知っていった。これが私の人生で初めて防災の重要性に気づいたきっかけだった。そして、環境防災科の被災地ボランティアや阪神・淡路大震災のことを語り継いでいく活動を知り、同年代の人たちが「人のために」と活動する姿に感銘を受け、自分もそのような他人のために動ける人になりたいと感じ、心を動かされた。そのようなきっかけがあり、入学を決意した。

（２）出前授業

高校3年間の中で出前授業を体験させていただいた。自分が教える立場になるというのは初めての経験だった。初めて出前授業に行ったのは近隣の多聞東小学校だった。準備の段階では「このポイントをわかってほしい」など自分が伝えたいことがたくさんあったのだが、いざ、子どもたちを目の前に授業をすると自分の心の内を上手く伝えることができなかった。人に何かを伝えることがどれだけ難しいことなのか身に染みて感じた。また、この経験から情報を人に伝える手段についても高校3年間で学ぶことができた。情報を人に伝える手段はたくさんある。話すことはもちろん、文章、スライドなど様々だ。その1つ1つがどのような人に適しているのか、同じ媒体でもどのように感じられるのかを考えることができるようになったと思う。私は子どもたちの前で様々なことを伝えていきたい。高校生の中にこのような貴重な体験ができたのは、自分が教員になるにあたってプラスになったと感じる。この体験から得たものをこの先の将来に活かしていきたい。

（３）六甲山フィールドワーク

高校2年生のときに、「環境と科学」という授業の中で六甲山フィールドワークを行った。私たちが住んでいる神戸の街並みは特徴的な地形や地質が見られ、神戸に生まれた子どもは幼少期から六甲山に慣れ親しんでいる。そのような関係性がある私たちと六甲山だが、どのように形成されていったのかは全く知らなかった。そもそもそれらに関係してくる地学や地理が理解できていなかった。しかし、環境防災科に入学し、地学や、地理を学ぶうちに地球が現在のような地形に至るまでに様々な変遷を経ているということを知り、地球の神秘を感じることもできた。防災と地学、地理は切っても切り離せない関係性があると思う。引き続き、勉強していきたい。

また、六甲山の地形、地質を学んだことで高校3年生の「人と社会」という科目の理解を深めることができた。人と社会では都賀川の水難事故について学んだが、六甲水系や地形の特徴が複雑に絡み合っていた。六甲山の地形について知り、川の危険性をみんなが知っていれば、事故は発生しなかったと思う。そのような点からみても地学や、地理の学習が防災の一部となっているのだと感じた。実際に、自分の目で地形や地質を見ることができ、貴重な体験だった。

（４）授業内での講義

高校1年生で行った「災害と人間」という科目では、電気、ガス、水道などのライフラインや警察、消防、自衛隊など公的機関など様々な方の講義をいただいた。その中で、阪神・淡路大震災や東日本大震災での被害、活動をそれぞれの視点から学んだ。そのお話から、震災の知識をより深めることができた。

特に印象に残っているのが神戸市消防局の講義だ。人命救助に限らず、防災を広めるための活動も行っているところに感銘を受けた。この講義を受けるまでは消防は消火や人命救助をするという印象のほうが強かった。消防のような公的機関の防災啓発活動のおかげで私たちの命が守られているのだと感じた。このような方たちがいるから私たちが安心して生活を送れているのだと感謝しながら生きていきたい。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私は将来、中学校の英語の教員を目指している。もともと環境防災科に入学する前は、警察や消防など直接的に人命を救助する職業を目指していた。しかし、高校での活動の中で小・中学校の防災教育に関わることが多くあり、小・中学生への防災教育の徹底が災害による被害者を減らすことに繋がるのだと考えた。また、中学生の頃から英語が得意で、高校へ入学した後も積極的に英語検定の取得などで英語の力を伸ばしてきた。その自分の得意分野を活かすことができ、なおかつ、防災に関わることでできる職業を探した結果、教員への道を志すことになった。

私は、小学校・中学校・高校と様々な先生にお世話になってきた。その中でも、中学校・高校のときの先生に影響された。先生方は進路の相談や部活動など学習以外でも私に真摯に向き合ってくださった。私が、今のように進路選択できているのは間違いなく過去、そして現在とお世話になってきた先生のおかげだと感じている。担当教科や防災はもちろんのこと、進路指導や生活指導などで生徒とまっすぐに向き合い、生徒が困っていたら、すぐに手を差し伸べることができるような教員になりたい。

(2) 教員と防災の関わり

教員と防災は密接に関わり合っている。その理由は主に2つある。まずは、災害発生時の対応についてだ。学校内に生徒がいる際に災害が発生すれば、教員は生徒の命を守り、安全な場所へ避難させる必要がある。つまり、災害時に教員は、冷静に正しい判断をする必要があるということだ。そのためには防災の知識が必要不可欠になってくる。過去に教員の対応の不十分さで発生した悲惨な事例がある。石巻市立大川小学校の事例だ。東日本大震災で津波に飲み込まれ、児童 108 人中 74 人、教員 10 人が亡くなった。地震後、大津波警報が発令され、町が避難を呼びかけていたのにも関わらず、教員たちは校庭にとどまることを選択し、結果として多くの犠牲者を出すこととなった。この事例から災害時の教員の判断が生徒の命を左右するということを理解した。自分が教員となれば、受け持つ生徒全員の命を預かっているのだという自覚をもって職務を果たしたい。また、環境防災科で3年間学んできた防災の知識を活かしていくことはもちろんのこと、高校卒業後、大学へ進学しても、防災への意識は持ち続けていき、さらなる防災力の向上に向けて動いていきたい。

次に、日頃の防災教育についてだ。日本の学校では防災という科目はなく、主に、理科や社会を通して災害のメカニズムや社会の防災設備を学んでいる。しかし、これだけでは十分な防災教育とは言えないと思う。なぜなら、教員の一方的な知識の押し付けになっているからだ。これでは、実際に災害が発生した際に対応できない。災害時に対応できる生徒を生み出すためには、生徒が主体的に防災を学ぶことができる場を作ることが必要だ。例えば、実際に災害が発生したときを想定して、どう行動するかをグループディスカッションで話し合わせるということを考えている。生徒たちが緊急時にどう行動するべきなのかを自ら発言させ、防災への理解がより深いものになるようにしていきたいと思う。

6 最後に

自然災害は避けることができない。私たちが生きていくうえで、南海トラフ巨大地震はほぼ確実と言っていいほどの確率で遭うことになる。南海トラフ巨大地震が発生すれば近畿全域が揺れや津波に襲われ、壊滅的な被害を受ける。広範囲で被害を受けるため、十分な支援が来ないということを講義で知った。つまり、自分のことは自分で準備しなければならないということだ。私たちが生まれ育った神戸という町は過去に阪神・淡路大震災により甚大な被害を受け、当時の教訓を未災者につないでいくという活動を行っている地域だと感じる。実際に、自分の小・中学校でも阪神・淡路大震災について学ぶ機会が多く、そこから災害の怖さを学んでいったという経験がある。そのような地域だからこそ、防災の重要性は十分に理解していると思う。南海トラフ巨大地震による新たな被災者を出さないために、過去に大災害を受けた経験のある神戸が率先して防災を発信していくべきだと思う。しかし、そのためには被災者の声を発信する人が必要だ。震災から 29 年経った今は、当時の記憶を話すことのできる方も多く、実際に私たちも、3 年間で多くの被災体験を聞かせていただいた。しかし、もう 30 年経つとどうだろうか。おそらく、当時の記憶を話すことができる人は激減するだろう。それはつまり、私たちが何もしなければその記憶は誰にも伝えられないまま放置されるということだ。近い未来に南海トラフ巨大地震が来るのにも関わらず、このような状態でもいいのだろうか。実際に被災者のお話を聞くことができる世代だからこそ、その声を大切に繋いでいかなければならない。

私はこの3年間、他の高校ではできないような体験をさせていただいた。そして、その経験は私が将来、働き、生きていくうえで、非常に貴重な経験となった。3年間お世話になった方々に心から感謝し、どんなときでも「感謝」を忘れないように生きていきたい。

言葉を紡ぐ

今井千愛

1 はじめに

1995年1月17日、淡路島北部を震源とする地震により阪神・淡路大震災が発生して6434名の尊い命が失われた。私が環境防災科に入り、いろんな語り部さんや被災した方々からお話を聞かせていただく中で知ったのは、29年前の神戸は災害に対する備えが十分にできていなかったということだ。語り部さんの語りの中によく「神戸には地震は来ないと思っていた」という言葉が出てくる。しかし、阪神・淡路大震災のように、いつどこで災害に襲われるかは誰にも分からない。そのことを、身を持って感じ、備えの重要性に気付いた被災者の方々は、震災から時間が経つにつれて減少している。だから、私たち災害を経験していない未災者が、震災を経験された方々の分も語り継いでいかなければならない。

2 両親の経験

(1) 父の経験

震災当時、父は神戸市職員として働いていた。5時46分、父はまだ自宅で寝ていた。地震の揺れで目が覚め、揺れが収まるまで布団に潜ることしかできなかった。家は物が散乱して、ライフラインは使えない状態だった。しかし、父は神戸市の職員だったため、どんな状況であっても防災マニュアルに記載されている通り職場に向かわなければならなかった。家に帰るのは1週間に1回程度で、基本的に職場で寝泊りをして仕事を行っていた。当時住んでいた自宅は、職場から徒歩30分の場所にあったため歩いて職場に向かっていた。自宅が遠い職員は、自転車を使って職場に来ていたそうだ。

職員の仕事は、部署によって担当が決められている。当時の父の部署の担当は食料の配給だった。王子動物園のすぐそばにある陸上競技場で、自衛隊がヘリコプターで運んできたパンやおにぎりなどの食料をダンプカーに寄せ換えるという作業を2週間程度行っていた。食料を乗せたダンプカーは市内の避難所を回り、自衛隊が食料を配給していった。

約2週間の食料の配給が落ち着いたら、次は避難所の運営にあたった。運営といっても、避難所は住民がルールを決めて生活していく場所なので、特に大きな仕事という形ではなく見守りや見回りという形でそれぞれの避難所を市の職員が分担して回るといったものだった。その時には電車も動きだしていたため、電車を使って、神戸市内の避難所、主に小学校や中学校に行った。避難所では自衛隊がテントの簡易銭湯の支援、ダンプカーで運んできた物資を学校職員と連携を取りながらの配給が行われていた。東灘区、灘区、中央区は比較的早く復旧が進んでいたが、神戸市のその他の地域ではなかなか水が出ないなど復旧が進んでいない地域もあったため、支援の在り方や避難所の様子も地域によって異なっていた。

災害時に運ばれてくる食料は工場や企業から送られてくることが多い。これは元々企業と市区町村が協定を結んでおり、災害時に被災地は物資を支援してもらい、街が復旧してから支援をいただいた工場や企業にお金を返すというルールが備わっているからだ。送られてくる食料は、アンパンやジャムパン、クリームパンなどが多かった。最初は食べる物がなくて被災者も仕方なく食べていたが、時間が経つにつれて同じ食べ物に飽きて食べなくなってしまい、食料は余っていくようになった。父をはじめ、市の職員はその余った食料を食べていたという。また、食料だけではなく避難所には日本赤十字社からの義援金も届いた。日本赤十字社は被災の状況ごとに金額を定め、社会福祉協議会と連携をとって義援金を給付していた。そんな苦しい生活の場も時間が経つにつれて避難所から仮設住宅へと移っていった。

父が見たその他の仕事では、父と同じ市の職員が行っていた遺体の処理などの悲惨なものもあった。運ばれてきた遺体は数が多すぎて棺がいっぱいになり、火葬が追い付かないほどだった。すぐに火葬できるわけではなく、遺族の確認が必要だったため火葬までには多くの時間を要した。市内の決まった場所で1日に何回も火葬された。遺体の数が多すぎて棺は足りず、布をかけるだけしかできない遺体もあった。震災時には、ボランティアで困った人を助けるなど感謝される仕事が注目される一方で、悲惨な仕事をしている人もたくさんいた。

現在も父は神戸市の職員として働いているが、阪神・淡路大震災を経験した職員の半分以上は定年を迎え退職しているという。

(2) 母の経験

母は大阪出身で神戸に引っ越してきたばかりの時に、阪神・淡路大震災に襲われた。知らない土地に知らない人ばかりで頼れる人も少なく、大きな不安を抱えていた。5時46分、揺れを感じたと同時に大きな地鳴りが響いた。一瞬、爆発が起きたのかと思うぐらいの大きな音に驚いたが、すぐに地震だとわかった。経験したことのない大きな地震で、腰が抜けて立つこともできず布団に潜ることしかできなかった。幸い、倒れてくるものや落ちてくるものがない部屋で寝ていたため怪我はなかった。しかし、キッチンの食器棚の食器は飛び出し、ガラスの破片が散らばっていて、家の中は物が散乱した状態だった。

地震の揺れが収まって外に出ると、まるで戦争が起こったかのような凄まじい光景が広がっていた。その光景と共に、ガスの匂いが充満していて何人かが家を出て外の様子を見に来ていた。母は頼れる人がいなかったのも、とりあえず様子を見に行こうと思い避難所である近所の小学校に向かった。小学校までの道のりは5分程度、足場の悪い道を歩いた。避難所にたどり着いた母だったが、中に入る勇気が出ず公衆電話の行列に並び、実家に安否の連絡を入れただけで自宅に戻った。当時は今のように携帯電話も普及しておらず、家の電話も回線が繋がらないため、小学校の公衆電話は地域の人たちでごった返していた。母の家は被害が少なく、ライフラインは使えないものの、住めない状況ではなかった。そのため、避難所は被害が大きくて住める家を失った人が生活する場所だと思っていた母は、私程度の被災者は入ってはいけなような気がしたという。また、知り合いがいなかったため1人で避難所に入る勇気が出なかった。夜まで停電が続いたら、避難所に行こうと思っていたが、母の住む地域は夜には電気が復旧して不自由の少ない生活を送ることができたため、避難所の中に入ることはなかった。

(3) 両親の話を聞いて

父の話を聞いて、街の復旧・復興を支えているのは被災地の外から来たボランティアや医療組織だけではないということに気付いた。被災地の外にいる私たちは何か被災者の支援をしたいと、物資を送ったり、義援金を送ったりすることを考える。しかし、父のような外からの支援を受け取り、作業をする側の人間のことを思いやるということも大切なのだと感じた。被災地の市の職員など市民を陰で支える人たちは、自分自身が被災者でありながら被災者を支援する立場でもあるため、他の被災者とは違った負担があると感じた。また、母のように自分は大きな被害を受けていないからと、自ら支援を遠慮して受けない人もいる。そのことから、陰で心にストレスや不安を感じている人もいるだろうと思った。例えば、自分自身が被害を受けていなくても家族や友人を震災で失った人など、自分自身の心の声を吐き出せない人に対する支援も必要だと感じた。

3 環境防災科に入って

(1) きっかけ

私は将来小学校教諭になり、防災教育に力を入れたいと思い、この環境防災科に入学した。小学校の頃の担任だった先生の影響で、当時からその先生に憧れを持ち、私も小学校の先生になりたいと考えようになった。また、そのころから両親に震災の体験を聞いていたため、防災と自分の夢はすぐにつながった。

学校の先生には子どもの命を預かるという責任が伴っている。私は自分の小学校時代を振り返ると、避難訓練での先生の真剣さが印象的だった。過去の事例として、東日本大震災のように学校がある時間に災害が来ることは珍しいことではないため、小学校の時に担任だった先生のように平時の避難訓練からいつ何時も子どもたちの命を守れる小学校教師になりたいと思った。

(2) 出前授業

私は今まで小学校教師になるために様々な出前授業に参加してきた。参加した出前授業の多くは小学校だったが、自分の経験を積むために何度か中学校の出前授業にも参加してきた。

私が出前授業で大切にしているのは、「相手の貴重な時間をいただく」という意識だ。45分や50分など限られた授業時間の中で、災害時に命を守ることができる授業にしたいという思いがあったからだ。その意識を忘れずに出前授業に取り組む中で、これまでたくさんの学びがあった。今回、その中での学びを2つに絞って紹介する。

1つ目は、「事前準備を怠らない」ということだ。出前授業当日までの準備にかけられる時間は限られている。相手の貴重な時間をいただく上で、私たちができることは丁寧な事前準備をすることだ。そ

の学校のその学年に授業をするのは1度だけなので、子どもたちの防災意識を高められる授業にするために準備の段階から計画を立ててこの日までに何をするか、など小さな目標を立てながら準備をするように心掛けた。子どもたちに教えるために、自分の言葉で相手に説明できなければならない。小学校の中でも、低学年の子ども、高学年の子ども、それぞれの年齢層にあった話口調や言葉で伝えることはとても難しいことだった。授業を作る中で難しい言葉や漢字の修正を繰り返し、少しずつ授業が完成していく。準備の中で、そういったことに目を向けないと、子どもたちの防災意識を高められる授業にはならない。準備はただ授業を作るだけではなく、それぞれの対象を意識して作っていく必要があった。

2つ目は、「縦の関係を作る」ということだ。出前授業は3学年全員の参加メンバーで授業を作っていく。先輩や後輩とコミュニケーションが取れなければ、一緒に授業を作っていくことは難しい。私は1年生の時にそれに気付き、自分の意見や提案を先輩に伝えたり、自分からコミュニケーションを取ったりして出前授業に取り組んできた。2年生の後半からは出前授業の主体となり、後輩と相談をしながら一緒に授業を作っていた。他学年との関わり方は難しいことも多かった。1つの出前授業を作るのに学年でグループができてしまったこともありリーダーとして悩むこともあった。自分ひとりでやるのではなく、学年関係なく授業を作っていくことを心掛けていた。

私は環境防災科に入り、出前授業に参加してたくさんサポートしてくださる方々のおかげで自分の将来のための貴重な体験ができた。これからもボランティアや出前授業などのいろんな活動に参加できることを当たり前だと思わず、後輩たちにもたくさんの出前授業に参加してほしい。

（３）東北訪問

自分の防災への考え方や捉え方が大きく変化したのは、1・2年生で訪れた宮城県での活動だった。環境防災科に入学した時から、震災を乗り越えてきた神戸以外の街を訪れてみたいと思っていた。映像で見るのとは全く違って、震災当時の静けさを自分の肌で、目で、耳で、感じる事ができた。

小学校教師を目指す私にとって、東北訪問で最も印象に残ったのは大川小学校を訪問したことだ。学校が、教師と生徒の命が失われる場所になるという事実は信じがたいものだった。震災当時、地震発生直後に2次避難場所を考えながら、50分間校庭にとどまっていたという事実から、防災マニュアルの見直しが指摘された。しかし、私は実際に84人の命が失われた大川小学校を見て、防災マニュアルが整っていたとしても、それを学校現場で生徒に指示するのは教師であり、子どもの命を守ることができるのはマニュアルではなく、教師の行動だということに気が付いた。

大川小学校を訪れた私たちは、子どもたちが避難することができなかった小学校のすぐそばにある山に登った。少し急で足場の悪い道だったが、たった2、3分で登ることができた。この山を登りきることができていたら、たくさん子どもたちと教師の命は失われずに済んだのだと考え、この震災で亡くなった人の遺族の方の悲しい顔が浮かんだ。そして、これ以上悲しい思いをする人を増やしてはいけないという気持ちが強く心に残った。語り部さんのお話から、大川小学校の遺族のような辛い思いをする人を出さないために、もっと深く防災について学んでいきたいと改めて感じた。そして、防災に強い小学校教師になりたいという思いは強くなっていた。

（４）福島訪問

2年生の時には、学校の代表として原発について勉強するために福島県視察に訪れた。沖縄、広島、北海道の同じ高校生と、現地、福島の高中生と「福島のこれから」について話し合ったり、福島の復興に携わった方々のお話を聞いたりした。

そこで、また私の価値観が変わる場所を訪れた。福島県双葉郡浪江町にある請戸小学校だ。請戸小学校は、生徒と教師、共に津波の被害に合うことなく安全に逃げる事ができた小学校として震災遺構となっている。この小学校では、1次避難場所までは先生が先頭に立って避難したが、子どもたちがもっと安全なところに行こうと先生を引き連れてより高い場所に避難した。津波は1次避難場所までやってきたので、もし、その場で避難を終えていたら命が助かっていたかどうかは分からない。そのことを知って、全員が命を守ることを第一に考えて行動することに、生徒や教師といった立場は関係ないのだと思った。私はこの小学校で、先生は生徒に指示する立場ではなく一緒に命を守るために協力する対等な立場であるべきだと感じる事ができた。

小学校の中の様子は大川小学校と同じ、津波の被害を受けた場所だったが、私の感じ方は違った。請戸小学校の中の様子を見た時、津波から逃げ切った生徒や先生の姿が頭に浮かんだ。きっと学校で普段から行っている避難訓練通りに避難したのだろう。パニックになったとしても命を守るという行動から

目を背けなかったのだと思った。被災地の震災遺構には、大きく2つに分けられる。たくさんの命が失われた場所とたくさんの命が助かった場所だ。私は環境防災科で3年間を過ごし、この2つの被災地を訪れることができた。これから私が小学校教師になった時には、請戸小学校のようなたくさんの命が救われた小学校を作っていきたい。

4 将来の夢

私は小学校教師になりたいと思い、環境防災科に入学した。今まで震災遺構の小学校を訪れてきて、子どもの命を守ることにいろいろな側面からお話を聞いたり、一緒に考えたりして防災と自分の夢を繋げながら将来について考えられるようになった。

防災は子どもの命を預かる教師にとって必要不可欠なものと言える。大川小学校のような悲劇の場所を作らないために、私にできることは自分の持つ防災・減災の知識を子どもたちに伝えることだ。私が子どものころは、両親の阪神・淡路大震災の被災の話を聞いて、ただ怖いとしか思うことができなかった。しかし、高校生になった今は違う。災害の怖さを理解した上で、死にたくない、自分や大切な人の命を守りたいと思っている。両親だけではなく、様々な語り部さんや被災された方々からお話を聞き、災害と隣合わせの死、そして家族や友人を亡くした心の傷など環境防災科で学んだのは、防災の知識だけではない。人が持つ複雑で繊細な心の部分も学んできた。

大川小学校で語り部さんの語りの中に、「災害は恐怖を煽るためのものではない。」という言葉があった。環境防災科で3年間学んできた今、自分は災害への恐怖心しかなかったからこそ、子どもたちには恐怖心を煽るだけではなく、正しく恐れる上で生きていくために大切な防災・減災を伝えられる教師になりたい。

5 最後に

伝えることはとても難しい。これは3年間環境防災科で学び、実践的な活動を通して私が最も感じたことだ。私たちは、阪神・淡路大震災のような大きな災害を経験していない。しかし、これから必ずと言っていいほど南海トラフ地震などの大きな災害を経験する。私たちは経験していないのに何を伝えられるだろうか。今までたくさんの被災者のお話を聞いてきた。それを卒業してからは、色んな人に自分の言葉で伝えていかなければならない。大切なのはその話を聞いた人にとってプラスになるかどうかということだ。被災者の体験から災害が恐怖を煽るものだと感じさせてはいけない。より多くの人から起こる災害で命を守れるようにするために、もっと伝え方を学び、多くの被災者の言葉を紡いでいきたい。

知らなければならないこと

岩崎美羽

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 29 年。被災した地域に当時の面影はほとんど残っていない。しかし、一見復興したかのように見える町も人の心も完全に復興したかといわれると「はい」とは言えない。私はこの「語り継ぐ」執筆のために祖母に話を聞いたことがきっかけで、遠い親戚が阪神・淡路大震災で亡くなったことを知った。このように身近なはずなのにきっかけがなく知らないことがたくさんある。

「語り継ぐ」この 4 文字は環境防災科生徒にとって、とても重みのある言葉だ。語っていただいたものを理解し、継いでいく。震災を経験していない私たちにはとても難しく、責任が重すぎる。しかし、環境防災科で学んできた知識とボランティア活動での経験を生かして少しでも多くの方に語り継ぎ、風化の進行をできるだけ抑え、次に来る災害に備えられるよう不器用ながらも語り継ぎたい。

2 阪神・淡路大震災の時のお話

(1) 祖母の話

私の母は京都出身だ。阪神・淡路大震災の時も京都にいた。

私の母方の大叔父は六甲道に家族 4 人で暮らしていた。阪神淡路大震災によって大叔父の家はつぶれた。当時、大叔父は夜勤で家を出ていた。妻と子は家に残り、1 階では妻が、2 階では 2 人の子どもが寝ていた。地震発生時、子ども 2 人は窓から飛び降りて無事だった。だが、妻はタンスの下敷きとなり地域の方に助け出されたが亡くなった。鳥取に住む大叔母から大学生だった母のもとに亡くなった知らせがあった。テレビに流れる死亡者名に大叔父の妻の名前があった。京都は震災の影響は少なく、仕事や学校は通常通り行われていたため、親族のその知らせに、この震災が急にただ事ではないことに気づかされた。そこで祖父は地震発生後、大阪に住むもう一人の大叔父と一緒に、「電車は動いていない、道路も壊れている、それならバイクで行こう」と決め、京都から六甲道にある大叔父の家へ向かった。想像を絶する街の変わりように会話もなく、崩壊した建物の脇を縫うように道とは言い難い道を 1 歩 1 歩進み、ようやくたどり着いた。神戸に行くのは危ないといろいろな人から言われたが、震災直後に大叔父と直接会い話せたことは、本当に良かったと祖父は何度も言っていたと祖母から聞いた。災害の知識はなく、支援物資などは何も持って行かなかった。祖母は「パンやらおにぎりやら持って行ったらいいのにな」と呆れたように言ったそうだ。大叔父の子どもは当時まだ小学生と幼かったため、祖父は懸命に大叔父家族のサポートを続けていた。その当時交わした会話や、震災による被害を受けた街並みを見て何か感じるものがあったのか、それから祖父はボランティア活動や地域の活動により積極的に参加するようになった。

(2) 話を聞いて

私はこの話を聞いたことは今までなかった。この「語り継ぐ 20」が無ければ一生知らなかった話だった。まさか親戚が亡くなっていたとは思わなかった。もっと早く、環境防災科に入学する前から知っていたら 1 つ 1 つの授業の受け取り方は絶対に変っていたし、まちあるきでの考え方も変わっていた。もっと早く聞いておくべきだったと後悔している。

母の実家に祖父が消防や警察から貰った表彰状がたくさん飾られていることに先日気づいた。日付を見ると阪神・淡路大震災以降のものが多かった。祖父は、阪神・淡路大震災での被害の状況を実際に見て衝撃を受けるだけでなく、行動に移して人を助けていたということを知って、テレビなどで見る映像だけではわからない、強く感じるものがあったのだと思った。

(3) 父の話

私の父はほかの人とは違う状態で被災した。インフルエンザに罹っていた。その日はなかなか寝付けず、やっと眠りにつけた時部屋に飾っていたはずの額が頭に落ちてきた。震度 7 の揺れはめまいだと思っていた。うつろな状態でなぜ額が落ちてきたのかと考えていたら祖父の「大丈夫か」という声が聞こえた。そのあと電気が復活し、テレビで神戸の街がめちゃくちゃになっていると知り、あれはめまいじゃなく地震の揺れであったことが分かった。

(4) この話を聞いて

父の住んでいた神戸の塩屋辺りは被害が少なかったが、住んでいた場所が長田など被害の大きかった地域だったらもっと大変だったと思った。

今、新型コロナウイルスが流行している。父の様に感染症に罹っている状態の人がたくさんいる。避難所のことだけでなく、もし家族に感染者がいるときに災害が起きたらどうするのかを考えて話し合っておかなければならないと思った。

3 環境防災科に入学して

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは東日本大震災だ。当時はまだ6歳だったが、津波がどんな被害をもたらすのかを知り、そして津波が来ているのに海にむかって走る車を見てただ唖然としていた。

小学3年生になったとき、スナッグゴルフの全国大会が復興支援という形で、宮城県で行われた。私はその大会に兵庫県代表として参加した。私の人生を動かしたのは試合ではなくそのあと行われた被災地見学だった。実際に津波にのまれた山元町立中浜小学校を訪れ、極寒の中で泣かずにじっと耐えて学校の屋根裏で一晩過ごした話、逆向きに開いている玄関の扉、窓枠の歪み、ボロボロになった1本の松の木、そこにある景色からは震災が起こる前の街並みを想像できないほどの広い更地。小学生の私にとって生まれて一番の衝撃と恐怖だった。そこを訪ねて書いた感想文に当時の私は、「どうして津波はやんちゃなのか」「地震で、津波で死ぬのだけは絶対に嫌だ」と書いていた。私はこの大会に小学6年生になるまで毎年参加した。小学4年生の時には亙理町をバスで走りながら語り部の方が涙ながらにビデオとともに訴えるようにお話ししてくださった。その方の言葉、目、体からあふれ出る感情に震災はこんなにも人を苦しめるものだと思った。小学5年生、6年生では開催地が福島県に変わった。福島県でも被災地見学として資料館のようなところへ行き、福島第一原子力発電所事故について学んだ。何度聞いても難しい話で理解することが難しかった。しかし、まだ家に帰れていない人がたくさんいる、とにかく怖い。ということだけは理解できた。友達と離れ離れになるなんて辛いなと感じた。震災で、津波で死なないためにどうすればいいのか、地震と津波は人を簡単に殺すと感じた私は、家に帰ってきてからいつ地震に襲われるかわからない恐怖心から眠れない日が続いた。そんな私に父が「地震とは何なのか、どうすれば助かるのかを知ることができる。」と環境防災科の存在を教えてくれた。小学生ながらこの学校に行けたらいいなと思った瞬間だった。以上が、私が環境防災科に入学したきっかけだ。

(2) 東北訪問

私は高校1年生の冬、2年生の冬の2回、東北訪問に参加した。そこでまちづくりについて、大川小学校の教訓、多賀城高校との交流など沢山の方のお話を聞いて学んだ。最も記憶に残っているのは大川小学校見学だ。大川小学校で語り部活動をしている佐藤敏郎先生のお話を聞きながら当時のまま残されている校舎を見たり、当時の環境を聞いたりした。佐藤敏郎先生の話の言葉遣いは、2年生の時と1年生の時では違っていた。1年生の時は言葉の中に「なんで、どうして。」という気持ちが表れていた気がした。それが1年たつと言葉が優しくなっているように思えた。どんな思いでこの1年を過ごされたのか、私たちにとっての1年と被災者、遺族の方々の1年の重みは違うと感じた瞬間だった。

話を聞く以外に全国防災ジュニアリーダーの方とSDGsについて話し合ったり、一緒に学んで災害や防災について考えて問題点と解決策を出し合ったり、新しい考え方も知ることができた。普段環境防災科で活動しているとどうしても意見や考え方は似てきてしまう。だが他校の方と考えることで視野を広げることができた。

東北で交流のある方々が東日本大震災で「環境防災科の生徒がボランティアに来てくれて助かった。本当にありがとう。」と言っていたのを覚えている。そのたびに環境防災科に誇りを持つと同時に、環境防災科の1人としてより努力しなければならないと感じた。東日本大震災では今回交流させていただいた方だけでなくもっとたくさんの犠牲者、被災者、遺族の方がいる。その方々の復興の努力と生きていた証と事実を私達が伝えて次の災害に備えていかなければならない。私達のような地震による被害を受けたことのない未災者がどのように伝えていけばいいのか不安と正しく伝えていけるかの恐怖がある。今回2度目の訪問で佐藤敏郎先生の変化に気づき、少しでも正しい情報を多くの人に知ってもらい理解してもらえるようにさらに努力しようと決めた。東北訪問は決して楽ではない。3日間ずっと人間にとって辛い話を聞き続ける。でもこの行事は環境防災科として進んで参加するべきことだと思う。話してくださる

方全員が事実を隠すことなく話してくれる。そのお話を受け取って咀嚼して自分なりに理解して、とても難しかったし、まだすべてを完璧に理解できたと言える自信はないが、私は本当に参加して良かったと思った。

4 将来の夢

私の夢はまだはっきりと決まっていない。ただぼんやりと考えているのはテレビやラジオ、新聞、SNS、これらを上手く利用して防災を効率よく広めていきたいということだ。

現在の日本は防災を先延ばしにしている人が5割弱いることが分かっている。そんな人たちに防災を行うきっかけを作りたいと思った。[「防災に関する世論調査\(令和4年9月調査\)」概略版 \(gov-online.go.jp\)](https://www.gov-online.go.jp)から例えばテレビであれば災害、防災ウィークとして毎日防災を扱う企画を行い、災害の恐ろしさも防災の必要性を広める。そうすることで日常に防災が存在し、意識向上につながると思う。

5 ボランティア活動

(1) 反省したこと

私は環境防災科でたくさんのボランティアに参加した。中でももちろん成功もあったが、失敗と反省を繰り返した。特に反省しているのは芦屋特別支援学校で行われた交流だ。それは芦屋特別支援学校と舞子高校が共同で授業を行い、一緒に災害や防災を学ぶというものだった。

当時、私は1年生で、顧問の先生に進められて軽い気持ちで参加することを決めた。ボランティア活動は事前準備が本当に大切で夜遅くまで行うこともある。私は本番まで時間がない中で行われた芦屋特別支援学校事前準備に行かなかった。その日、1年生は1.17のつどいがあり、HAT神戸に行っていた。学校に戻るのか戻らないのか、当時の参加していた10人ほどで話し合った結果戻らないと判断してしまった。それは一緒に授業をする先輩にはもちろん、芦屋特別支援学校の方に対しても失礼なことだ。今考えると本当になぜ、あのような判断をしたのか反省するでは済まされないと思う。

私はボランティアの重みや、責任、相手の方の時間を貰っているということ、そして交流の意味を本当に知った。それまでは知っているつもりでいたと気づいた。それは1年生の冬で遅すぎたと思う。そこからは事前準備や確認はしっかり行うよう気を付け、一緒に活動するメンバーと内容や細かいところまで確認をしあい「相手の方の時間を貰っている」ということを忘れずに活動している。

(2) 大変だったこと

私は女子バレーボール部に所属していた。練習も多く、環境防災科の活動との両立が本当に大変だった。せっかく入りたいと思っていた環境防災科に入学し、たくさんの活動が目前にあるのに部活の練習で自由に参加できない。かといってチームスポーツでもあるバレーボールの練習を軽い気持ちで休むことはできない。出前授業に参加した時、部員に「練習を休みます。」という連絡が続いた時申し訳ないという気持ちが膨らんでいった。それからボランティアにあまり参加しない時期ができた。

そこで顧問の先生と話し、レギュラーから外れ環境防災科の活動に参加しやすい環境を作った。その悔しさや葛藤は言葉では表し切れないが、自分が器用な人間ではないから仕方ないと何度も自分に言い聞かせた。

部活動との両立は私を精神的にも成長させてくれた。苦しかったけれどこの選択も何か意味のあることだと信じて、参加したいと思うボランティア活動には積極的に参加し、自信をもって真剣に取り組むことができた。

6 最後に

私は今年の3月上旬に入試休みで部活動もなく久しぶりに時間ができたため、京都に1人で住む祖母の家へ遊びに行った。祖母と夜ごはんを2人で食べているとき東日本大震災のニュースが流れた。その時震災つながりで祖母が今回書いた内容の話をしてくれた。私はその話を聞くまでこの語り継ぐに何を書けばいいのか、考えていた。母は京都に住んでおり被災していないに等しい、父はインフルエンザで記憶があいまいだった。祖母が話してくれた時「これしかない」と思いご飯を食べていたことを忘れ夢中で話を聞いて質問し、祖母も嫌がることなく記憶の限り答えてくれた。だが私は環境防災科として授業を受ける中で知らない人の話は沢山聞いていたのに、親戚が阪神・淡路大震災で亡くなっていたことを全く知らなかったという事実を知り自分にがっかりした。

「語り継ぐ」を“書く”ことは“話す”ことよりも何倍も難しく、自分の頭でわかっている文章に起こすと文の並びがおかしくなったり、伝わっているのか不安になったりした。だが環境防災科の最終目標の「語り継ぐ」を完成し、阪神・淡路大震災を風化させないよう環境防災科として活動できる最後の仕上げを執筆できたと思う。

阪神・淡路大震災から 29 年たった今でも環境防災科に入学したいと受験する生徒がいることは完全に風化してしまうことはない証だと思う。毎年 40 人の高校生が阪神・淡路大震災について 3 年を通して学ぶことになるからだ。

南海トラフ巨大地震はもうすぐ来ると言われ続けている。被害を少しでも小さくできるよう努力し、伝えていくことが環境防災科生徒、卒業生、教師の使命であり、1 つの目標である。この「語り継ぐ」を読んで少しでも多くの方に災害、防災について専門的に学んでいる高校生がいること、1 つの学科になるほど災害は日本にとって切り離せない関係にあることを知ってほしい。

そして災害を、防災をもっと自分事として考えてほしい。この「語り継ぐ 20」を読んで災害をもっと知りたい人、防災を行う人が増え、誰かの命を救うきっかけになればとてもうれしく思う。

未災者の思い

大戸 悠聖

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 29 年目を迎える。私は震災を経験しておらず、震災を体験している人が少なくなっていく。そのような中、若い世代の私たちが環境防災科で 3 年間学んできたことを阪神・淡路大震災を体験していない人やたくさんの人に知ってもらい、震災を風化させないために語り継いでいく。

2 阪神・淡路大震災の被害の概要

強烈な揺れを伴った都市直下型の地震であったことから大きな被害をもたらした。阪神高速道路 3 号神戸線の倒壊に象徴される道路網や鉄道網の寸断及び電気・ガス・水道等のライフラインの途絶により都市生活機能に壊滅的打撃を与えた。古い木造家屋の密集した地域において、地震による大規模な倒壊や火災が発生して、多数の死傷者を出すとともに家屋等を焼失し、多数の住民が住居を失って避難することになった。地震に強いと思われていたビルに、倒壊や中層階の破壊などの被害が多発した。世界有数の貿易港である神戸港の港湾施設がほぼ壊滅するとともに、埋立地において広範囲の液状化現象が発生して地盤沈下等を引き起こした。

3 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 父の体験

父は当時、神戸市垂水区に住んでいた。阪神・淡路大震災当日は自宅の自分の部屋のベッドで寝ていた。ゴォーという大きな音とともに大きな揺れがやってきて揺れが収まるまで布団の中で待つことができなかった。揺れが収まった後、1 階のリビングに家族の安全を確認しに行った。家族は全員無事だった。外はまだ真っ暗だったので夜が明けるまで懐中電灯の光だけで家族 4 人で過ごした。家の中は、食器棚の中にあったお皿が床に散乱していたり、靴箱の上に置いてあった花瓶が割れていたり、ガラスの破片が至るところにあり、スリッパ無しでは歩けない状態だった。

公共交通機関が止まっており、車で職場に向かい 2、3 日家に帰れなくなり大変な思いをした覚えがあった。

(2) 母の体験

母は当時、神戸市西区に住んでいた。阪神・淡路大震災当日、自宅の 2 階にあるベッドで寝ていた。下から突き上げるような揺れの後、最初はカタカタと小さい揺れだったので布団の中で様子を見ていたが揺れが収まらずに、立っているのもやっとで、横揺れになったので 1 階に下り、やっとの思いで玄関の外に出た。家族は全員無事だった。外は真っ暗で寒く車の中で夜が明けるまで家族 5 人で過ごす。車の中でも余震が続いた。もうあと何回か揺れたら家が倒れてくるのではないかと、生きた心地がしなかったのを覚えている。夜が明けて、明るくなったので家の中に入ってみると家具はすべて倒れて、割れた食器などが散乱していたので、土足で家の中を歩いた。電気は通っていたのでテレビをつけると高速道路が倒れている映像、大きなビルが倒壊している映像などが映し出されていた。交通機関も全く運行しておらず、大学へ行くどころではなかった。家はガス、電気は通っていたが、水道が止まって水が出ずお風呂、トイレなどはとても不自由した覚えがある。

後に大学の友人、先生が亡くなったことを知ってとても悲しい思いをした。自分も揺れが続いているときはこのまま死ぬかもしれないと思った。

(3) 話を聞いて

私は、阪神・淡路大震災を経験しておらず大きな地震も経験したことは一度もない。両親の被災した話を詳しく聞いたのは初めてだった。両親の話を聞いて改めて地震の恐ろしさ、大変さを知ることができた。環境防災科でたくさんの人から災害について話を聞く機会はあったが、自分の一番身近な両親の話を聞いて当時の状況や阪神・淡路大震災がどれだけ大きな地震だったのか、また、自分が知っている人が亡くなることはどれだけつらいかなどを聞いて、災害は絶対に風化させてはならないと思った。

4 環境防災科

(1) 環境防災科に入学するきっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、中学3年生の時にテレビで見た新潟県中越地震(2004年)の特集だ。私はそのテレビを見るまでは環境防災科に入学したいなどという気持ちはなかった。もちろん防災にも興味はなかったが、テレビの特集でたくさんのがれきの中から消防士が少年を助けている映像を見て、私も将来こんな大人になりたいと思った。そのためにはもっと過去に起こった災害や防災について知る必要があると思った。

さらに、環境防災科に入学するためにいろいろな災害や防災について調べたときに、南海トラフ巨大地震について調べる機会があった。はじめは南海トラフと聞いても大きな地震が和歌山県沖で起きるから自分が住んでいる町には関係のないこととして、ニュースなども聞き流すような感じであった。でも少しずつ南海トラフ巨大地震が起きたら大変なことになるということが分かってきて自分の命や家族などを守るためにもっと防災について知りたいと思った。

(2) 入学後

環境防災科に入学して授業や講義、校外学習などを通して様々な貴重な体験をすることができた。1年生では「災害と人間」の授業で防災や災害について学んだり、講義などでは様々な職種が災害や防災とつながっていることを学び、防災・減災の重要性について知ることができた。2年生では、実際に校外に出て地層について学んだり、町を歩いたりしてより詳しく学び考えを深めることができた。私が3年間環境防災科で学んできて一番大切だと思ったことは、災害のことを考え、備えることだ。日頃から災害について考え、備えることで、もし災害が起こったときも冷静に動くことができ、自分や周りの人も助けることができると考える。

日本は、地震が多く、30年以内に高い確率で南海トラフ巨大地震が起こるといわれている。環境防災科3年間で学んだことをしっかりと活かすことができるようにしたい。

(3) ボランティア活動について

環境防災科に入学してボランティアに参加する機会があった。高校に入学するまではボランティアに参加したことがなく、初めてのボランティアでは不安と緊張が大きかったが、何度か参加していくにつれて学校の人だけではなく地域の人などたくさんの人と関わる機会が増えて、とても貴重な体験ができた。一番印象に残っているボランティア活動がトルコ・シリア地震の募金活動だ。私は、募金活動で感じたことが2つある。

1つ目が人の温かさだ。募金箱にお金をいれてくれる人がたくさんいて、お金を入れるときに「ありがとう」や「頑張ってるね」などと声をかけてくれる人がたくさんいたからだ。人の温かさにつれて、感謝をすることがどれだけ大切かということを知ることができた。

2つ目が協力することの大切さだ。たくさんの人が募金箱の中にお金を入れてくれたことで、たった2時間の活動でたくさんのお金が集まった。その活動で私は、一人だとできることは限られているけど協力することですごく大きな力になっていくということを感じた。

(4) 3年間で振り返って

環境防災科での3年間で振り返ってみるとすごく充実した3年間だった。神戸市水道局に行ったり、実際に野島断層を見て地震について学んだり、六甲山フィールドワークで山について学んだり、外部講師の先生方にたくさん災害や防災、減災について教えていただいたりと、環境防災科でしかできないことを経験することができた。

5 長田のまち歩き

阪神・淡路大震災の2次災害の火災で大きな被害を受けた長田のまち。高校2年生の時、私たちは長田のまち歩きを行った。阪神・淡路大震災前の長田のまち、火災によって被害を受けた長田のまち、災害から復旧・復興し新しくなった長田のまち、様々な長田のまちを見ることができた。私はその中で、長田で起こった火災の境目となった大国公園のクスノキが印象に残っている。大国公園にある1本のクスノキが長田の大火災の延焼を止めたということを聞いたとき驚いた。私の中で「木は100%燃えるもの」だと思っていたからだ。そのため1本のクスノキが大きな火災を止めたことを信じられなかった。

長田のまち歩きを行って火災によって被害を受けた長田のまちと、クスノキのある大国公園、クスノキのおかげで火災の被害を受けなかった長田のまちは全くといっていいほど景色や雰囲気が違っていた。火災の被害を受けた側は新しくまちを作り直し、「区画整理」を行って、様々な規制をかけながら「災害に強いまちづくり」を行っていた。しかし、火災の被害を受けなかった側は家が建っていたままのため、まち全体の整備、建て直しはできなかった。そのため大国公園を中心として西と東では建物間の広さや建て方、まち並みになどに大きな差が生まれていた。阪神・淡路大震災による2次災害の火災は、長田という小さな町全体に大きな影響を与えた。

私は生まれてからずっと垂水区で暮らしているが、垂水区が災害に強いまちづくりができているかどうかをまだ分らない。

6 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震は近い未来必ず起こるといわれている。南海トラフ近辺では、100年～150年ほどの間隔で巨大地震が発生している。南海トラフ巨大地震は、震源域によって「東海地震」「東南海地震」「南海地震」と呼ばれている。しかしこの3つの地震が別々に発生するとは限らず、2連動、3連動するケースもある。1944年に発生した昭和東南海地震、1946年に発生した昭和南海地震は連動して起こったが東海地震は発生しておらず3連動が心配されている。

地震の発生に伴い大津波が襲ってくるといわれていて、最悪のケースでは34メートルの津波が来襲するといわれている。

死者は最大で32万人、被害総額は220兆円を超えるといわれており甚大な被害になることが予想されている。地震・津波の翌日には最大430万人が避難所に来ることが予想されている。食料は1週間で9600万食、飲料水は1億4500万リットルが不足すると考えられている。

しっかりとハザードを理解し、備蓄などの備えを実行し、避難訓練などを繰り返し行い、被害を小さくすることが大切だと思った。

7 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、高校の地歴公民科の先生になることだ。私は小さい時から野球をしてきたことを活かせる職業を考えていて、指導者として野球に関わりたいと思っている。地歴公民科の先生として分かりやすく、楽しい授業にすることはもちろんだが、学校の先生として生徒の命を守るために環境防災科で3年間学んできたことを防災教育などで活かしていきたいと思っている。環境防災科で外部講師の方などから聞いた当時の状況などを私たちよりも若い世代へと語り継いで、自分の命の大切さや身近な人の命の守り方を学び続けたい。

(2) 将来の夢と防災との関わり

私は環境防災科に入学したての頃、防災や減災についてあまり大切とは考えていなかった。環境防災科に入学して3年間で外部講師の先生や普段の授業で防災や減災について学んでいくにつれて、災害の恐ろしさを知ることができた。学校の先生として生徒の命を守るために、災害の恐ろしさを生徒に知ってもらうために防災教育を積極的に行っていきたいと思う。

8 最後に

今回「語り継ぐ」を執筆していくなかで、防災のことを誰かに伝えるということの大切さを学んだ。阪神・淡路大震災から28年が経ち当時を知っている人がだんだんと少なくなっている中で私たちのような災害を経験していない世代が阪神・淡路大震災を風化させないためにも環境防災科で学んだこと、聞いた話を後世に語り継いでいきたい。

過去を伝える、未来へつなぐ

岡田 理希

1 はじめに

平成7年1月17日午前5時46分 兵庫県淡路島北部を震源とするマグニチュード7.3の都市直下型地震が発生した。恐怖を与え約6,000人以上の尊い命を奪った未曾有の大地震である。どれだけの大災害であろうと、時間とともに阪神・淡路大震災を知らない人が増加し風化しているのが今の現実である。人間の記憶は徐々に薄れていくものであるから少しでも今後伝えていかなければならないものだと思う。「天災は忘れた頃にやってくる」これは昔から言い伝えられている言葉であるが、この言葉の重みをしっかりと受け取り、今の自分にできることをやりきることが私たち環防生の使命だと考える。環境防災科での活動を通じ、たくさんの方に出会い、たくさんのことを学ばせていただいた。3年間の学びを「語り継ぎ」に執筆する。

2 阪神・淡路大震災での祖父の被災体験

私の祖父は震災当時兵庫県警察本部の外事課員として港島庁舎で勤務していた。

(1) 1月17日地震発生当日

地震発生直前、私の祖父は出勤準備をしていた。5時46分グラグラと家が揺れたので「地震だ!」と思っていた直後、床は上下左右と大きく揺れ、屋内のあちらこちらでメキメキと凄まじい音を立て、棚の上のものが落下した。咄嗟に家の柱にしがみついた。辺りは停電し真っ暗で、動こうにも動くことが出来ず、揺れが収まるのを待つしかなかった。揺れが収まりすぐに自主参集の準備をしていると、同じ係員から「交通機関は途絶している、車で迎えに行く。」との連絡があり、共に参集することにした。

自宅周辺の被害は道路がひび割れ、屋根の瓦が落ちている家もあった。勤務地である港島本部に近づくにつれ、兵庫区、長田区内のあちこちで火の手が上がり、天気は晴れているのに両区内の空は煙で真っ黒である。やっとのことで神戸大橋を渡りポートアイランドに入ると、泥の海である、液状化現象だ。ズボンの袖を捲り上げ、港島庁舎についた時には靴のなかに泥が入り、ズボンもドロドロの状態だった。

(2) 勤務先での出来事

港島庁舎に着き、しばらくの間待機していたところ、各府県から応援部隊の受援の任務付与をされた。祖父は西宮警察署への派遣を命じられた。交通機関は途絶しており公用車で出発した。国道2号線まで出たものの大渋滞。焦るばかりである。このままではどうにもならない。

18日午前8時頃本部を出発し、やっとの思いで西宮警察署に着いたのは翌朝19日の午前5時頃であった。活動現場に向かうと、既に部隊は救出作業中であった。この現場は木造家屋で、倒壊し中に家人が埋まっているとのこと。手作業で、1時間余りで発見したが既に死亡していた。日が変わり1つの現場が終われば次の現場へと署の指示に基づき移動する。食事をする間もない、休憩を取る間もない。隊員は当日、急遽派遣出勤したもので十分な資機材もなく手作業である。途中、手袋が破れ素手で作業している者もいたが隊員は不平不満も言わず、また表情にも出さず救助活動をしていた。ようやく食事が取れたのは19日の昼だった。部隊は活動の連続で休憩時間が少ない。毎日睡眠時間は3～4時間であった。それでも疲れは感じなかった。

以後も受援班として四国連合第2機動隊、警視庁第6機動隊、福岡県機動隊(2回)の受援活動に当たった。地震発生から7日後の24日任務解除となった。

3 祖父の話聞いて

西宮警察署への派遣を命じられ、普段であれば警察本部から数十分で到着するところ至る所で建造物や住宅が倒壊し、また、道路には瓦礫が散乱し、1時間に数メートルしか進まず到着まで24時間近くもかかってしまう未曾有の大災害であった。

現場に向かう途中、空腹に耐えかねた車の運転手が食料を求め、倒壊したコンビニエンスストアのガラスを割り商品を盗んでいた。同調性バイアスが働き周りの住民も真似をする。本来であれば窃盗罪で、現行犯逮捕するところ、災害発生当時は逮捕どころではなく、警察官として制止するのが精一杯であった。

「この光景が自分の中で一番心に残っている。あの光景だけは目に焼き付いて忘れられない。」と語ってくれた。

人は極限状態まで追い込まれると理性を失い、店のガラスを割ってまで、商品を盗む人がいる。災害によって、精神状態が不安定になり、普段は許されないことも、ついやってしまうほど極限状態にまで追い込まれる。

また、未曾有の大災害はどれだけの人が救助活動を求めているか、阪神・淡路大震災という出来事が私たちの平穏な街を変え、どれだけの被害を及ぼしたか、計り知れない。常日頃から私達一人ひとりが有事に備え、食料品の備蓄などの防災対策を心掛けていれば、これほどまでに理性を失わなかったのではないかと、防災対策の重要性を改めて痛感した。

この話を聞き私は、これからできる限り防災に目を向け、環境防災科で学んだことはもちろんボランティア活動を通して、さらなる防災意識向上に努めていかなければならないと強く感じた。

4 環境防災科

(1) きっかけ

小学1年生の時に家族で明石防災センターを訪れ煙避難の疑似体験をした。煙は一瞬で広がり動けなくなり、これが本当の火災だったらと考えたときに恐怖を覚え、その日から防災に興味を持つようになった。夏休みの自由研究で防災や自然環境をテーマに取り組むうちに防災についてもっと知りたいと思うようになり、舞子高校環境防災科のボランティア活動や、消防学校体験入校など実践的・体験的な授業に興味を惹かれ入学した。

(2) ボランティア活動

今まで私は、多くのボランティア活動に参加させていただいた。その中で、特に力を入れたのが、3年間継続し、参加した防災ジュニアリーダーである。1年生のときは、不安と緊張から先輩について行くことに必死で、積極的に意見交流することができなかった。

2年生では1年生の反省を活かそうと思い、再び防災ジュニアリーダーへの参加を希望した。舞子高校は主管校で、活動の中心となる場面が多くあり、うまくいかないことも多々あったがたくさんの仲間と防災を学び伝えるうちに、楽しく、この活動に魅力を感じるようになった。

そして、3年生になり、今までの自分の経験を活かし、次は後輩へ繋ぎたい、支えたいという気持ちで参加した。

ボランティア活動では、相手に楽しく、興味を持ってもらえるよう、自分から積極的にコミュニケーションを交わし、場の雰囲気明るくなるよう意識した。ボランティア活動は、達成感や、やりがいを感じられるだけでなく、多くの学びを得ることができるので、1年で学びを終えるのではなく、3年間の積み重ねを通し、得られる立場や意識の変化をみなさんにも感じてもらいたい。誰かにやらされる、みんながやるから自分もやるボランティア活動ではなく、向上心があるボランティア活動にして欲しいと思う。

(3) 東北訪問

平成23年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生した。震災から10年経った東北の現状や、実際に被災地に足を運び、語り部さんのお話を「生の声」で聴きたいという思いから高校1年生の冬、東北訪問に参加した。

宮城県石巻市にある大川小学校は、東日本大震災により、全児童108名のうち74名と職員10名が亡くなられた。未曾有の大災害を「仕方がない」という言葉で片付けてはいけないということを強く感じた。それは、震災でお子様を亡くされた今野さん夫妻から、当時大川小学校ではすぐに避難行動をとらず多くの命が犠牲になったこと、その対応について職員は未曾有の災害だから仕方がないという態度しかとらなかった事に対して失望したという話を聞いたからである。

大川小学校は震災当時の姿のまま残されていて、この場所で多くの方が津波にのみ込まれたのだと想像すると、悲しみがあふれると同時にショックを受けた。人の命を「仕方がない」で片付けられる訳がない。遺族の方の、後悔しても仕切れない思いが痛いほど伝わり、同じ事を繰り返してはいけないと強く思った。

たくさんのお話や研修を通して、伝える大切さや災害対策の重要性を学び、皆が「ここまでしたから万全だ」と言えるようになれば良いと思う。そのために今後もたくさんのボランティア、防災活動に積極的に参加し、多くの人に防災を広めたい。

(4) 芦屋特別支援学校

私が1番印象に残っているボランティア活動は、芦屋特別支援学校での交流・共同学習である。障害がある方に防災・減災を伝える機会は初めてだったため、ペアの子と、どうすれば楽しく共に学べるか言葉や資料をどのように駆使すれば良いか試行錯誤した結果、私たちは、絵を使い防災3択クイズをすることにした。絵を使うことで、写真やイラストとは違い不必要な情報が入らず必要な部分だけを伝えることができる。

その他、伝えたい部分を私たちが口にするだけでなく、実際に体を使ったり、声に出してもらったりと何度も反復するといった工夫をした。交流後「ありがとうございました！とても楽しかったです！」とたくさんの方々に言っていただいたおかげで達成感を感じ、自分の自信へと繋がった。交流・共同学習は大成功に終わった。

この経験を通し、事前準備の大切さを学んだ。それと同時に、障害がある方への考え方が変わった。以前までは、障害があると言われると、コミュニケーションをとるのが難しいという偏見を持っていたが、いざお話をしてみると、普段友達と会話している内容と変わりがなく、むしろ、明るく笑顔で話を聞いてくださる姿に、勝手な偏見を持ち、距離を作ってしまうそんな差別的考えを無くさなければならなかった。私にとって芦屋特別支援学校での交流・共同学習はとても意識の変わる貴重な体験となった。

5 夢と防災

環境防災科のボランティア活動を通し、「企画・発案」していくうちに楽しく、とてもやりがいを感じた。マーケティングが学べる大学に進学し、将来は「企画・営業」を職種として、防災を広めていきたいと考えている。また、SNSや防災イベントなどを通し、防災を発信することはもちろん、その中でも、「防災意識の日常化」をテーマに発信したいと考えている。

防災をどの様に日常に取り入れるか考えた時に、いつどこで起きるかわからない災害に備えるための防災バッグを、毎日持ち運べるようにすれば良いと思いついた。なぜかと言うと、アンケート調査より近年、非常持ち出し袋を一式用意していない人がほとんどであることが分かった。理由として、「何を揃えればいいのかわからない」「用意することが面倒だから」ということが多く挙げられている。「皆さんも非常持ち出し袋を用意しているか」また「それを毎日持ち運んでいるか」このような質問に「毎日持ち歩いている」と答える人は少ないだろう。

この現状を変えるべく、具体的にカバンと防災グッズがセットになった防災バッグを3つのポイントに分けて考えた。

1つ目は、SNS映えが流行っている近年、まずは見た目をスタイリッシュにすること。

2つ目は、普段使いするために軽量の防災グッズを選ぶこと。

3つ目は、利便性を上げるために、個別収納を作り背面に収納できるような作りにすることである。

実際に、非常食やポリ袋、ライト、衛生用品、ポンチョ、ソーイングセット、救急セット、モバイルバッテリーなど普段使いできるものを収納スペースにセットする。

このように3つのポイントを押さえ販売することで、現状を改善することができ、日ごろから持ち歩き、防災意識も高まると思う。1つのアイデアだが、このように小さな企画から「防災意識を日常化」させることが今の私の夢である。

まずは、マーケティングが学べる大学に進学し、そこで学んだ知識を自分の将来へと繋げていきたい。

6 最後に

環境防災科に入学し、とても濃い3年間を送ることができた。それは、最後まで一緒に頑張った仲間、ずっとそばで支えてくださった先生方、そして先輩が語り継いでくださったおかげである。この感謝の気持ちを決して忘れてはいけない。自然災害というものは、私たちの手でくい止めることはできないが、被害をできるだけ小さくすることは可能である。「被災者」であれ「未災者」であれ、「大人」であれ、「子ども」であれ災害について全員が正しい知識を持ち、自分が未曾有の大災害に直面した時に、悔いのない行動をとることが重要になる。

そこで、この「語り継ぐ」を1人でも多くの方に読んでもらい、災害の恐ろしさ、その時人々はどう行動したのか、その後の生活にどのような影響を及ぼしたのかなどを感じていただき、防災の大切さ、災害から身を守る方法を実行して欲しいと思う。

7 参考文献

- ・ <https://econte.co.jp/works/survival-kit/>（令和5年4月21日閲覧）

次の世代へつなぐ

荻野 彩

1 はじめに

1995年1月17日5時46分、阪神・淡路大震災が発生した。多くの人の日常を奪った震災から29年が経過した現在、私たちと同じように震災を経験していない世代が増えてきている。そんな現在でも被災者の経験や災害の教訓を風化させず、次へと繋げていくために環境防災科として「語り継ぐ」ことが必要である。

2 阪神・淡路大震災での被災体験

(1) 母の話

当時、私の母は高校3年生で大学受験の真只中であった。以下は母の言葉である。1月14日、15日のセンター試験を終えて翌日の16日には高校で同級生と自己採点を行っていた。苦手科目の点数が思うように獲得できず、2次試験の重要性を実感する傍ら、ほんの一握りの解放感とともに友達と三宮に買い物に行った。

2月に迫っている入試本番に向け、いよいよ追い込みがスタートするはずだった1月17日に地震は起こった。朝5時46分、突然ギシギシという大きな音とともにベッドが前後に揺れた。眠っていた私は何が起こったのかわからず、ただ恐怖で目を閉じて耳を塞いで揺れが収まるのを耐えながら待っていた。隣で寝ていた母のキャーキャーという叫び声は鮮明に聞こえた。しばらくして揺れが収まった後、家族の安全を確認した。今まで家具が倒れるほどの揺れは体験したことがなく、あまりの衝撃でいてもたってもいられず、咄嗟に愛知県の祖母宅に電話をかけた。早朝の段階では地震の状況は報道されておらず、電話で起こされた祖母は何も把握していなかったが、一方的に「大丈夫だから安心してね」とだけ伝えて電話を切った。後から分かったことだが、早朝だけは通電していたそう。その後すぐに停電となり連絡手段は無くなったが、後に祖母に話を聞くと「あの時、電話をかけてくれて本当に助かった」と言っていた。

テレビでは次から次へと神戸の被害が報道されるため、親戚中が神戸に電話をかけたけれども誰も連絡が取れずに心配しており、祖母だけは早朝に連絡を受けていたので、不安な気持ちは他の人とは比べると小さかったようだ。

家の被害は一部損壊で留まったが、ライフラインは大きく影響を受け、電気・水道・ガスの全てが止まった。電気の回復が最も早く、当日のお昼ごろに復旧したが、倒壊した阪神高速道路とポツポツと火の手が上がり始めている長田の映像を見て啞然とした。水道は3～4日、ガスは1月末まで遮断されたままだった。明石方面はライフラインに影響がなかったため、明石のスーパーや銭湯に車で行っていた。最初にお風呂に入れたのは、地震から5日ほど経過してからだった。どの銭湯も大行列で2時間ほど並んでようやく入ることが出来た。その後も2～3日に一度、銭湯に行っていた。車がない家庭はどうしていたのかがあまり思い出せない。

垂水区の自宅付近は多少の道路の陥没程度であったが、まさか神戸がそんなひどい事態になっているとは思わず、テレビから目が離せなかった。消火活動はままならず、どんどん延焼は広がり、火の黒煙は垂水区まで流れてきていた。真っ黒な空は恐ろしく、寝ている間に自分の家にも火の手が及ぶのではないかと気が気でなかった。人生において一番怖かった日である。

長田区にあった高校は避難所になっていたため、登校したのは卒業式を含めて2回だけである。家を焼失した同級生も複数いると聞いたが、卒業式には全員出席していた記憶がある。制服などは学校側が手配したのだろう。また、避難所となっていた講堂もその日だけは避難者が一時的に移動してくれて、場所を開放してくれたと聞いた。本当は誰よりも辛いはずなのに、式典を優先させてくれた心遣いがありがたく感じ、助け合いの大切さを実感した。

(2) 話を聞いて

私は母から詳しい被災体験を聞いたのが初めてだった。長田から離れた垂水にも火災による煙や灰が流れてきたことなどは、今まで講義を通してたくさんの被災者から話を聞いてきたが、それでもまだまだ知らないことが多くあるのだということを実感した。母が今まで人に被災経験を話すことがなかったのには、被災者としての思いや責任があったからなのではと考えている。卒業式のために避難者が移動

してくれたという話を聞いて、阪神・淡路大震災では近隣住民による救出が多いが、助け合いは救助活動だけでなく、その後の避難所生活や日常生活などの色々な場面で求められているものなのだと思います。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科を知ったのは小学3年生の時である。多聞東小学校に通っていた私は、舞子高校生との防災マップ作りで環境防災科を知った。当時、阪神・淡路大震災発生から20年という節目の年ということで、防災マップ作りの様子が震災特集の番組に映ると聞いていた。その番組を見て環境防災科という名前の学科があり、地震のことを勉強している、ということぐらいは知っていた。中学生の時に舞子高校での1・17メモリアル行事に学年で参加し、東日本大震災で子どもを亡くした方の被災体験を聞いて防災について興味を持つようになった。中学3年生で進路を考えたときに防災に興味があり、また南海トラフ巨大地震が来るとも言われていたので、災害や防災について勉強し、自分が環境防災科の生徒に教えてもらったのと同じように、自分も防災について人に伝えることが出来るようになりたいと思ったことが環境防災科を選んだきっかけである。

(2) 学んだこと

私は環境防災科で人と関わる大切さを学ぶことが出来た。防災についてもたくさん学ぶことが出来たが、出前授業や先輩後輩との関わりを通してコミュニケーションの重要性を改めて知ることが出来た。

阪神・淡路大震災では瓦礫の下敷きになり自力で脱出できなかった3万5000人のうち、2万7000人が近隣の住民によって救出された。日頃から近隣住民とコミュニケーションを取り続けていたことで多くの命が助かっている。それによって、災害時に生き残るためには普段から近隣住民とコミュニケーションを取り、地域での助け合いについて備えておく必要があると思う。実際に阪神・淡路大震災ではその家に住んでいる人数や高齢者が住んでいるかなどを近隣住民が把握していたので、救助が円滑に進んだと言われている。普段から地域との関わりを持つことで救われる命もあるということを学んだので、人との関わりは大切だと思った。

また、私は多聞東地区の担当として地域で行われる防コミの会議に参加しているが、高齢化が進んでいる一方で小学校があるため若い世代も多くいることにより、地域でのコミュニティが形成されていないという話を聞いた。時代の変化などもあり、現代では隣の人の名前すら知らなかったり、防災意識がある人となない人の差が大きかったりと地域防災としての課題が多くある。多聞東では年に4回ほど地域住民に参加してもらう防災訓練や応急給水訓練を実施しているため、その場を活用して環境防災科で学んだ地域との関わり大切さを伝えていきたいと考えている。

(3) 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震が発生すると、静岡県から宮崎県にかけての一部では震度7となる可能性がある。そのほかにも、それに隣接する周辺の広い地域で、震度6弱から6強の強い揺れになることが想定されている。また、関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸の広い地域に、大津波が襲来すると言われている。南海トラフ沿いで起こる最大クラスの地震の規模はマグニチュード9.1、津波の高さは最大で高知県黒潮町と土佐清水市で34メートル、静岡県下田市で33メートルと想定されている。その他にも四国から関東にかけての23市町村にも、20メートル以上の津波が想定され、10メートル以上の津波が静岡県、和歌山県、徳島県、高知県、宮崎県の沿岸部のほとんどの地域を襲うと発表されている。

そんな南海トラフ巨大地震から自分の命を守るためには、家具の固定や非常持ち出し袋の用意だけでなく、知識を身に付ける必要がある。災害時に備えて正しい知識を身に付けるためにも、災害の恐ろしさを発信し、伝えていかなければならない。

【気象庁 | 南海トラフ地震について (jma.go.jp) より引用】

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、理学療法士になることだ。理学療法士は、身体に障害がある人に対して基本動作能力の回復や悪化の防止を目的に、自立した日常生活が送れるように支援する人だ。一人一人の目標に合ったプログラムを元に、自立した生活が送れるようリハビリテーション支援を行っていく。

私が理学療法士になりたいと思ったきっかけは、一緒に住んでいる祖父が病気を患っており、家で理学療法士の方がトレーニングしているのを見たからである。家族である私たちが祖父を手助けしようとしてもうまくサポートできないのに対して、理学療法士の方が軽やかに祖父の身体を動かしている様子を実際に見て、身体を動かすのが困難な方を回復に導いている理学療法士に興味を持った。

また、理学療法士の方と楽しそうにコミュニケーションをとりながらトレーニングをしている祖父を見たことや、けがをしてつらい思いをしている時に理学療法士の方に励まされたというのをインターネットで見たことで、私も理学療法士になって患者さんを心の面でも支え不安を軽減出来るようになりたいと思った。

（２）防災との関わり

理学療法士は患者さんと会話をする機会が多く、関わりが多い職業なので、その関わりを活かして環境防災科で学んだ命を守るための知識を積極的に話していきたいと思う。災害時に要配慮者となる高齢者や身体が不自由な人と関わる機会が多くあるので、災害時に逃げ遅れてしまわないように平時から災害について考えてもらうきっかけを作していきたい。

1人暮らしで身近に避難を手伝ってくれる人がいない場合や、2人暮らしでもどちらも高齢者で避難に時間がかかってしまう場合が多いが、治療中のコミュニケーションとして環境防災科で学んだ災害や防災に関する知識を積極的に話し、リハビリの一環として外を歩く機会があれば一緒に危険な場所を考えたりどこに避難したらいいか教えたりして、患者さんと一緒に防災意識を高めていきたい。

災害が発生し避難所で生活することになった場合は、活動量が減るので身体機能が低下する人が増えてしまうと思う。避難所という限られたスペースでは、障がいのある方が生活しにくいなどの課題がある。そういった課題に対して、理学療法士は現地へ行って動作指導や福祉用具の検討、トイレ・入浴の支援などを行っていく必要がある。バリアフリー化が進んでいない避難所では、手すりの取り付けや段差解消など、災害時に理学療法士が必要となる場面は多くある。

東日本大震災をきっかけに発足した「JRAT（大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会）」という団体では、災害に合わせたリハビリテーション支援を実施している。JRATでは理学療法士のほかにリハビリテーション科医師、作業療法士、言語聴覚士、看護師、ケアマネージャー、義肢装具士、その他医療福祉関連職が連携を取りながら要配慮者、被災高齢者が自立生活を再建できるようリハビリテーション支援を行っている。平成28年4月16日に発生した熊本地震では、最も被害が甚大であった益城町に支援チームの活動を調整する目的として派遣され、避難所で起こる様々な課題の中でJRATが対応可能な内容に関して積極的に情報収集を行い、2次避難所や仮設住宅の環境などの問題解決に携わった。災害時リハビリテーションの歴史は浅く、経験者も少ないので人材育成が必要であることや大規模災害になれば組織的な活動が求められるため準備が必要であるなどの課題点がある。そのためには平時から災害時に備えた研修や組織作りなど、いざという時に動ける人を増やしていく必要がある。

私は理学療法士になって災害発生時、被災地に支援に行くとなった場合に備えて日頃から緊急事態が発生したことを想定しながら行動できるようになり、環境防災科で将来に生きることをたくさん勉強できたので、理学療法士を通して学んだことを伝えられるようにしたい。この先、様々な災害が起こると言われているので、患者さんを中心とした周りの人に防災をもっと身近に考えてもらい、コミュニケーションを取りながら一緒に防災意識を高めていきたいと考えている。

5 最後に

私はこの「語り継ぐ」の執筆を通して、伝えることの大切さや聞いた話を表現する難しさを学ぶことができた。私たちのように大きな災害を経験していない世代が増え、南海トラフ巨大地震が発生するとされている現在に、過去の災害を風化させず継承していくためには、責任をもって伝えていく必要があると思う。

1.17 震災メモリアル行事で『16歳の語り部』の著者である雁部那由多さんがおっしゃっていたように、実際に災害を経験した人にとって、自分自身の体験を人に話すことは簡単ではなく忘れたくらい辛い記憶を思い出さなければならないこともある。私は今回母から聞いた阪神・淡路大震災当時の体験を執筆して、被災者が苦しみを感じながら話してくださった話を意味のあるものにするためには「語り」を「語り」で終わらせてはいけない、ということを実感するきっかけになった。「語り」だけで終わらせず、災害を経験していない世代から災害を経験していない世代へ「継ぐ」ことが被災者である私たちがすべきことである。

災害が発生しても自分の命を自分で守り、生き残るためには過去の災害の教訓を学び、行動に移せるようにしなければならない。そして、多くの人が生き残るために未災者である私たちは、被災者の貴重な経験や語りを無駄にせず、伝承していかなければならないという使命があるのだと考える。

知らないあの日を、忘れないあの日へ

川端 百望

1 はじめに

29年前、神戸を襲った兵庫県南部地震。私は11年後の2006年に生まれ、この阪神・淡路大震災を経験していない。また命を落としてしまうような大きな災害も経験していない。だから、いま私たちが住んでいる町で、震災当時何が起こり、どれだけの被害があったのかは分からない。未災者が増えつづけるこの時代に、決して忘れることのないあの日を、どう残すか、どう伝えるか。環境防災科20期生としてここに記す。

2 阪神・淡路大震災での体験談

(1) 父の話

父は、阪神・淡路大震災が起きた1995年1月17日は神戸市中央区のトアロード沿いにある独身寮に居た。

1月17日午前5時46分。下からの突き上げるような強い衝撃で目を覚ました。地震であることや、過去経験のない揺れだったと認識はあったものの、地震直後は驚くほど静寂だったことや、目が覚めた直後の状態だったこともあり、現実を受け止めるのに時間を要した覚えがあったそうだ。幸いにも鉄筋コンクリート造りの寮は地震に耐えた。同僚や付近にも大きな被害がなかったことから、海岸通りにある職場に出勤を試みた。

通り慣れた道沿いの、あまりにも変わり果てた姿に愕然とした。この地震による災害が未曾有のものだとすぐに分かったが、本当にこれが現実なのか、理解ができないまま職場に向かったことを記憶しているそうだ。結局その日はあまりにも混乱が大きく、職場の建物でも小さな火災があり、寮に戻ることにした。なんとか職場に入ることができたのは次の日だった。ドアも開かないほど書類が散乱しており中に入るだけでもかなりの時間を要した。

職場は港湾関連の仕事をしていた。被災直後の数日は集まることができた数人で手分けをして神戸港の被災状況調査を行うことになった。父のチームはポートアイランドに向かうことになった。当然ながら車は使えず自転車で測量機器を抱えながら、がれきの散乱する道や大きな被害を受けた神戸大橋を少しずつ進み、なんとかポートアイランドにある岸壁にたどり着くことができた。こちら市街地と同様、被害は甚大で、防波堤工事のためのケーソンは大きく傾き、クレーンは倒壊、地面は液状化するなどといった悲惨な状況となっていた。窪んだ地中の空間に入り調査をしている時、「もし今大きな余震が来たら生き埋めになるかもしれない」などと思いながら調査を進めた。今思うととても危険な行動だった。その頃は2次災害に対する意識がとても希薄だった。幸い生き埋めになることもなく、その日の調査を終えて帰りの支度をしていた時、西側を眺めると広範囲に黒い煙が空高く立ち込めているのに気づいた。それが長田の大規模火災と知ったのは混乱の影響もあり数日後だったと記憶しているそうだ。

それから少しずつ職場に来られる人も増えた。神戸港の被害状況も明らかになるにつれ、明治時代から整備を進めてきた世界に誇る神戸港が一瞬にして壊滅状態になっていることに失望した。職場の雰囲気としては「一日も早い復興を目指す」といった強い意思の方が勝っていたそうだ。更に日が経つと全国からの応援で組織も強化され、関係者が一丸となって復興を進めた結果、震災発生からわずか2年後には「神戸港復興宣言」が発表された。

父は、地震から29年が経過して、今では何もなかったかのような平和な神戸になっているが、震災当時全国から応援に駆け付け、昼夜を問わず復興のために汗を流してくれた方への恩は忘れてはならないと言う。また、阪神・淡路大震災を語り継ぎ、どこかで災害が起きた時、恩返しのために何ができるかを、市民それぞれが考えることも大切だと、父はあの時を振り返る。

(2) 父の話を聞いて

これまで何度か父から震災の話を聞いたことはあったが、父の当時の詳しい動きなどは初めて聞いた。今では考えられないが、当時2次被害の意識が希薄で父自身が生き埋めになりそうな現場で活動していたと聞いて、生きていてよかったという思いと、死と隣り合わせの中働いてくれた方々への感謝の気持ちが込み上げた。今も昔も変わらないが、生きていることが奇跡だなと思う。

また、私たちが想像するより前向きで冷静な判断ができていることに驚いた。震災と聞いて混乱のイメージが強いが、マニュアルや対策があれば、大きな混乱を起こすことが少ない。社会が落ち着いていると、そこについていく市民の心にも余裕ができるのだと思った。震災発生からわずか2年で「神戸港復興宣言」が出せたのも当時港で働く方々の大きな活躍のおかげであり、この先もずっとこの神戸港を守っていきたいと思った。

いま日本では、南海トラフ巨大地震が懸念され、南海トラフでは、過去たくさんの地震が発生している。過去の教訓をしっかりと生かし、被害を最小限にしたい。

3 環境防災科

(1) きっかけ

私は中学2年生の時に環境防災科を知った。進路を決めるにあたって学校を調べていた時、父が提案してくれた学校だ。オープン・ハイスクールで先輩方からの説明を聞いたとき、堂々と自信にあふれた姿がとても印象に残った。環境防災科という普通科とは違うカリキュラムや活動内容を聞いて、社会との交流や、国際的な関わりがあることを知った。初めて見た環境防災科の先輩方の背中と活動内容に大きな憧れを持ち、環境防災科を志望した。

(2) 学んだこと

環境防災科で学んだことは、地域コミュニティの大切さだ。講義や授業で阪神・淡路大震災の時、共助が一番多かったこと、共助をするためには地域の方との繋がりが必要だということを学んだ。そして多聞東地区の防災訓練や、季節イベントのボランティアに参加させていただいたとき、小さい子どもからお年寄りの方まで、老若男女問わず笑顔で楽しんでいる姿を見て、私の住む地域を見つめ直した。

私の住む地域には多くの大学や専門学校があり、一人暮らしの大学生が多い。学生からすると自分が生まれ育った場所とは違う、土地勘もなく地域のコミュニティも1から始まり、とても不安だ。阪神・淡路大震災の時、木造アパートに住む一人暮らしの学生が多く亡くなったと知り、建物の耐震化や、一人暮らしであっても誰がどこに住んでいるのかなどを事前に把握しておけるような、ある程度のコミュニティが大切だと思った。

私の地域の良いところは各大学の学生が主催するイベントやお祭りが頻繁にあったり、小中学校の授業の中で大学生と交流をしたり、地域の大きな夏祭りでも大学生がブースを作ったり運営をしていて、学生が主体となって地域を支えてくれているところだ。私も今まで、大学生が主催するイベントにたくさん参加してとても楽しかった思い出がある。小さい子どもにも居場所づくりは災害時にもとても重要になると思う。私自身、大学生と遊んだり、話したりした場所、内容は今でも頭に残っている。きっと子どもの頃本当に楽しかった思い出や情景はいつまでも心に残るのだろう。

また、外部講師の方の授業では「建物は人の命や財産を守るものであるが、災害時には人の命と財産を奪うもの」だということを学習した。日本列島は他国に比べ地形・地質条件が厳しく、地震や台風が頻繁に襲うため、建築の技術は世界有数である。そのため建築基準法もある程度しっかりしている。一方で都市の中に古い建物や歴史ある建物も多く残っていて相応の被害は出る。火災をはじめとする災害は、いつ起こるかわからず一瞬にして貴重な建物を破壊し、人命に関わる事態にも繋がる、深刻なリスクである。日本に住む限り、災害と隣り合わせであるため、環境防災科で防災について詳しく学ぶことは、自分や他人の命を守るためにとても良い経験だと思う。

環境防災科で学んだことと照らし合わせて私の地域のコミュニティはとても良いと思った。また今ある良いコミュニティを崩さず、より良い街にしていけることが私たちの役割だと学んだ。

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、一級建築士になって、災害に強い街や建物を造ることだ。

2011年3月、ニュースの映像で見た黒い濁流に街ごと呑まれた映像。東日本大震災だ。「街ってこんなに一瞬でなくなるの」と、今でも鮮明に覚えているほど衝撃を受けた。当時、地震の知識など名前程度でしたが、これをきっかけに震災について興味を持ち、防災についても考えるようになった。

環境防災科での活動を通して防災に一番大切なことは、より良い「まちづくり」だと考えた。

幼い頃から物を作ったり、組み立てたりすることが大好きで、休みの日には一日中ブロックで家を創ったり、工作をしていた。その頃の夢は大工になることだった。一級建築士に興味を持ったきっかけは、建

物一つではなく、まちづくりに携わりたいと思い、公共の建物の設計ができる一級建築士を目指すようになった。

また、最終的な目標は国立の建物の建築に携わることだ。世の中には多様なデザインで魅力的な建物が多くあるが、その中でも国立の競技場や美術館、博物館に特に魅力を感じた。国立の建物は世界的にも有名であり、競技場などでは新しい歴史が生まれたり、人々を感動させ笑顔にさせたりするパワーがあると思う。まちづくりに一番大切なことは人々の活気だと考えた。そしてまちづくりに一番必要なものは災害が発生する前から活躍する「防災拠点」である。私は住民から愛され、頼りにされる防災拠点をつくりたい。

(2)一級建築士と防災

29年前に発災した阪神・淡路大震災。「29年」の感じ方は人それぞれかもしれないが、私は「たった29年」で今の神戸の姿になっていることに驚いた。初めて阪神・淡路大震災について防災学習をした小学1年生の時まで、私の身の回りで被災地を感じさせる光景はなかった。火災で真っ黒になった長田の街や、真下に潰れたオフィスビルなどと画像として見てきた神戸の街が、今の形に生まれ変わるまでどのような取り組みがあったのか、また震災前と変わったことは何か。まちづくりの観点で興味を持った。

阪神・淡路大震災で多くの木造住宅が倒壊したことから、2000年に建築基準法が改正され、旧耐震基準をより強化し、バランスの良い家づくりが義務化された。そして地域のコミュニティが多く形成され、防災訓練やマニュアルの作成がされている。現在の建築法では、家を建て替える場合、道幅を4m設けなければならない。阪神・淡路大震災の被災地のような木造密集地では、道を広げるのがむずかしく、結果、建て替えが進まない。そうしてまちの老朽化が進んでいるのが現状だ。

建築士としてできることは、それぞれのまちが持つ良い雰囲気と、良い伝統、良い街並みを壊さずに良いまちへと更新していくことだ。

5 新型コロナウイルス感染症

災害はいつ起こるかわからない。災害が起きたとき「想定外」という言葉をよく耳にする。相手が自然である限り今の社会でできることは限られている。

中学2年生(令和2年)の冬から高校3年生(令和5年)の春まで、私たちの生活に大きな影響を与えた「新型コロナウイルス感染症」も、楽しい中学校・高校生活にもたらした想定外の大きな災害だったと思う。令和5年5月、「新型コロナウイルス感染症」の感染法上の位置づけが、季節性インフルエンザと同じ5類に引き下げられた。マスクの制限が解消されてもなお、ほとんどの人がマスクを着用している現状を見て、コロナ前の当たり前の日常がコロナによって奪われてしまい、「復興」が必要な状況だと思った。

私たちは「新型コロナウイルス感染症」でたくさんのものを失ったが、それと同時に多くのものを得た。コロナ禍の災害現場や、「感染症+防災」について学ぶことができた。また誹謗中傷やいじめも問題になった。人それぞれ色々な考え方があり、よくない言葉も耳にした。言った側は忘れていても、言われた側は一生忘れることができないものだと思った。辛いとき家族や、大好きな親友が優しい言葉をかけ、支えてくれた。そして差別することなくいつも通りに接してくれる親友がいてとても嬉しかった。その時の優しさもこの先の人生忘れることないと思う。また忘れてはいけない人の温かさを感じることができた。

自然災害が起きた時も、人々は混乱してしまい、争いが起きてしまう。これは仕方ないことで、災害がある限り避けられないことだと思う。どんなに孤立しても、自分を受け入れ、待ってくれる人が必ずいる。人のぬくもりは何よりも心の癒しになる。そう気づかされたコロナ禍だった。

6 「語り継ぐ」

今回、父の話だけでなく、過去の「語り継ぐ」に目を通して多くの語りを得ることができた。初めて聞くお話や、震災当時支援する側だった方など様々な視点からの語りなど、「語り継ぐ」がなければ得られなかった発見があった。この「語り継ぐ」がなければ沢山の語りを知ることなく、私の父の体験もだれにも知られることもなかっただろう。また、いつどこで起こるかわからない災害の恐ろしさと、自分の命は自分で守ることの大切さを、改めて学ぶことができた。

環境防災科1期生の「語り継ぐ」を読んだとき、実際に被災した先輩の語りがあり、未災者の私たちの語りとは全く違う「語り継ぐ」に感動した。この思いをこうしてさらに伝えていくことで、「語り継ぐ」の目的がしっかりと果たされていると思う。

7 最後に

「語り継ぐ」の執筆にあたって、将来について深く考えた。災害は本当にいつ起こるかわからない。そしていつ起こってもおかしくはない。だから今すぐにでも「防災対策」や「備え」をしなければならない。災害が多いこの日本で、一人ひとりが常に防災と向き合える習慣を作ることが大切だと思う。日本や世界のより良い未来のために、「語り継ぐ」ということはとても大切な材料になり、今もなお、過去の教訓や語り継ぎによってより良い街が形成されている。また今、私が書いているこの「語り継ぐ」も環境防災科の後輩や、新しい世代へと語り継がれていくと思うと、文字に起こして残していくということの大切さを実感した。

環境防災科での3年間は本当にあっという間だった。環境防災科でしか得られない経験や、学び、沢山の人の関わりを経て、改めて1日1日大切に生きようと思えたとても貴重な3年間だったと心から言うことができる。

これからのためにできること

楠見 葵

1 はじめに

阪神・淡路大震災から、29年となった。私たちは、大きな災害を経験していない世代だ。写真や動画だけでは伝わらないほど大きなことが過去に起きている。しかし、過去のことを繋ぐことができるのは災害を経験していない私たちだ。今までたくさんの方にお話を聞いてきた。そのたびに今の生活は当たり前ではないことに気づかされる。だからこそ、今の日常を大切にし、語り継いでもらったことを私たちが次へと繋いでいかなければならない。

2 阪神・淡路大震災当時のお話

叔母の知人 K さんの話

当時 K さんは、六甲道駅周辺の7階建てマンションの1階に住んでいた。大きな縦揺れで、びっくりして目が覚めた。家の中は、タンスやテレビが倒れ、ライフラインは止まり、足の踏み場もない状態だった。揺れは収まったが、何が起きたかわからないまま座っていると、7階の人が訪ねてきた。「ドアは開きますか。もし開くなら、開けておいた方がいいですよ。」そう言われドアを開けた。その時、壊れた街が目に入ってきた。一軒家は潰れ、道が瓦礫で塞がれていた。そして、六甲道駅は駅舎の1階部分がつぶれていた。K さんはその時、状況が理解できず愕然とした。

食糧確保のために、近所のコンビニに行った。しかし、すでに水や食糧はなかった。その後、近くの小学校に行ったが、避難している人が多くそのまま追返された。「トイレだけでも…」と小学校のトイレを借りた。しかし、水も使えない状況の中では、排泄物がそのままだった。近くで同じようにトイレがなく困っていた方たちのために、マンホールを外し、ファンシーケースの底を取り外し、外から見えないように簡易トイレを作った。

K さんはマンションに帰ってきて、たまたま捨てていなかったお風呂の水を使い、トイレを流した。食料は、冷蔵庫のものに限りがあるので、道路の隅っこにテントをたてて、近所の人たちと一緒に炊き出しを行った。近所に住んでいて、田舎や避難所に行く人たちから、冷凍食品などの食料、水などもらった。そのため、食糧には困らなかった。K さんが住んでいるところには、1人住まいのお年寄りが多く、自分でご飯を作れない人も多かった。心配なため、布団を持ってきて一緒に過ごしたり、炊き出しを行ったりした。お風呂は、1週間ぐらい経つまでは、有馬まで車で行っていた。自衛隊の提供してくれたお風呂もあったが、お年寄り優先でいっぱいだった。それから少し経つと近所の銭湯が無料でお風呂を提供してくれた。K さんはこのテントでお年寄りや近所の方たちと1週間過ごした。1週間経つと自衛隊の方が水や物資を配ってくれた。でも、自衛隊の人たちは車で入れるところまでしか来ることができなかった。それを解決するために、水などはペットボトルに入れて配ったりして、届いてない人にも配ることができた。そして、近所のスーパーでは従業員の人が来て、無料で食料や水を配っていた。いつもなら、上の人に確認が必要だが、「腐らせるぐらいなら」と自分で判断し無料で配ったそうだ。そのあとは、空いている家に泥棒が多く入るので、パトロールを行った。実際にパトロールをしているときに、見られて逃げていく人を見た。その時にどんどん治安が悪くなっていったと感じた。

救出のお手伝いもした。近所で潰れている家を見つけ、「あそこ潰れているから見に行こう」と近所の人と一緒に救出を行った。そこでは、スコップなどの道具がなくどうしようかと困っていたところ、ほかの家の倉庫から道具を見つけ、それで下にいる人を救出した。その人を自分たちが過ごしているテントに連れて行った。だが、もともといた人が「なんで自分たちのところにこの人を入れないといけないの」と言われ、少しもめてしまった。でもこういう時は助け合いをしないといけないと説得し、なんとか救出した人を保護することができた。六甲道駅周辺は復旧が遅く、ライフラインの回復も1番遅かった。だが、近所の人との助け合いにより、何とか過ごすことができた。

時間が経つにつれ、たくさんのボランティアの方が訪れてくれた。水を配ってくれたり、物資を配ってくれたり、その行いはとても温かく、うれしいものだった。でも、そのこととは反対に、悲しい出来事もたくさんあった。近所の子どもが亡くなった時、葬式もできず、火葬場は一杯で順番待ちだった。そのため近くの公民館で合同の葬式を行った。そこにいる人みんなが泣いていて、とても重い気持ちになった。病院ではたくさんの亡くなった方の遺体が運ばれ、並んでいた。この時、K さんは「災害には勝てない」と思った。

このような出来事を通して、悲しいこともたくさんあったが、人の温かさや思いやりを感じることができた。次また、災害が起きたときは、お互いに助け合っていけるようにしたい。

3 話を聞いて

私がKさんのお話を聞いて思ったことが2つある。

1つ目は、災害の怖さだ。阪神・淡路大震災は、早朝の寝ている人が多い時間帯に起きた。「揺れで目が覚め、外を見ると、がれきだらけになっていた」と聞いて、あっという間に今までの景色が変わってしまうのだと実感した。今まで当たり前にあるものがなくなってしまうのは怖いと思った。Kさんのお話の中でも近所の子どもが亡くなったというお話があった。災害は建物などを壊すだけでなく、人の命までも奪ってしまう可能性があるということを改めて実感した。だからこそ、毎日毎日を大切に生きないといけないと思った。

2つ目は、助け合いの大切さだ。今まで授業や講師さんなどから助け合いの大切さについて学んできた。そして、今回、お話を聞いた時に何度も「助け合い」という言葉が出てきた。たくさんの方が亡くなっていく中で、それでも前を向けたのは周りの人とお互いに助け合うことができたからだ聞いた。いろいろな人のお話を聞く前は、いざ災害が起きたら、自分のことだけを考えてしまうと思っていた。だけど、いざという時に助け合い、支え合えることができることは災害時とても大切なことを知った。今の自分は、家族はもちろんたくさんの人に支えられて生きてきた。だから、若い世代の私が、災害時に率先して助け合っていけるようになりたいと思った。そして、災害や防災を学んで、様々な方からお話を聞いてきたことをしっかりと思い出し、いざという時に動けるようこれからも学び続けていきたいと思った。

4 環境防災科

(1) 環境防災科に入学したきっかけ

私が環境防災科に入学する前は、災害や防災について学校での防災教育でしか学ばなかった。小学校の時は、阪神・淡路大震災というとても大きな災害があったという認識しかなかった。そして、中学校にあがり、テレビで被災地への支援活動を見て、防災について興味を持つようになった。防災教育の時に中学の先生が、阪神・淡路大震災当時の話をしてくれた。当時担当していたクラスの子が地震によって亡くなったというお話だった。その時に災害というものが本当に恐ろしいもので、簡単に大切な人の命まで奪う可能性があるものだと知った。そして、先生は泣きながら当時のことを話してくれた。そのことが今でも私の心の中に残っている。最初は、つらい思い出なのにどうして私たちに話してくれたのだろうと思っていた。でも、先生はただ過去にあったことを話しているのではなく、私たちが同じことにならないように話してくれたのだと思った。今まで、大きな災害を体験したことがなく、正直、他人ごとと感じている部分もあったと思う。だけど、先生の話聞いて、過去のことを知って、自分の中で防災や過去の災害が他人ごとではなくなった。そして、進路の授業の時に、環境防災科という防災について勉強している学科があると知った。そこで、私も人の役に立てようになりたい、もっと災害や防災について学びたいと思ったのが、環境防災科を目指したきっかけだ。

(2) 東北訪問

私は高校1年生の冬休みに東北訪問に参加した。もともと東北訪問には、入学した時から参加したいと思っていた。だが、新型コロナウイルス感染症の関係でもともと夏だった東北訪問は延期という形になってしまった。そして、たくさんの人の協力で冬に行けることが決定した。最初は、1年生で行くのは無理だと思っていたので、参加することができてよかった。そして、行けることに感謝したいと思った。

私が、東北訪問で一番印象に残っているのが大川小学校だ。まず、東北訪問に参加する前に、これから行く場所について少し調べていた。その中で大川小学校についても調べていた。でも、実際に大川小学校を目の前にしてみると、今まで感じたことのない様な重い気持ちになったのを今でも覚えている。最初に目に入ってきた光景は、壁のない校舎だった。そして、汚れている壁は津波の跡を示していた。語り部さんが実際に大川小学校で起きたことを話しながら、校舎の周りを歩いていく。どのような経緯で逃げ遅れてしまったのか、助かる方法はあった、マニュアルはあるだけではない、子どもたちについて、たくさんのお話を聞いた。ここはかつて子どもたちが過ごしていた場所。「あの大川小学校ではなく、あの時までの楽しかったことも伝えたい」「大川小学校は決して悲惨な場所ではなく、未来を

切り拓いていく場所だ」と聞いて、当たり前が日常があったということを私も伝えていかないといけないと思った。

東北訪問では、たくさんの方と交流し、たくさんのお話を聞いた。実際に震災を経験している方のお話は重く、悲しいものもあった。今ある日常が、当たり前ではないということを知った。でもその悲しいものとは違って、とても温かいものも感じる事ができた。私たちが訪れる場所ごとに、毎回温かく話してくれる東北の方達を見て、私も誰かに対して温かい人になりたいと思った。そして、東北の人たちがくれたものを自分から繋いでいけるようにしたいと思った。

(3) 出前授業

私は、この3年間で様々なボランティアに参加した。その中でも印象に残っているのが出前授業だ。初めて出前授業に参加した時、緊張で相手の人の目を見て話すことができなかった。そして、授業をするにあたってその内容についてしっかりと調べていても、自分が授業をしてもいいのかなという不安感があった。でも、様々な出前授業に参加していくうちに、自分は授業をするけど、一緒に学ぶことができるのが出前授業なのだったと思った。考え方も人によって違っていたり、自分で想定していた通りにいかない事もあり、新たに学ぶことが多くあった。今でも人前で話すのは緊張するけど、いろんな人と関わることの大切さを知った今は、自分でいいのかなと考えるのではなく、自分が大切だと思ったことを伝えることが重要だと知ることができた。人に何かを伝えることは簡単ではない。でも、自分が熱意をもって伝えようと思えば、相手もそれに応じてくれることが分かった。これから先、出前授業をする機会はほとんどなくなってしまうと思う。けれど、出前授業で得たことを形は変わってもいろんなことに活かしていけるようにしたい。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、歯科衛生士になることだ。高校入学時は、将来の夢がなく叔母が歯科衛生士だった影響で、歯科衛生士になりたいと思っていた。だけど、歯科衛生士について調べていくにつれて、歯の健康はとても重要なことを知った。そして歯科衛生士になりたいと心から思えるようになった。

まず、私たちがおいしくご飯を食べることができたり、会話できたり、笑いあえたりするのは歯が健康だからだ。私たちが健康でいられるために必要もののうちの1つは歯の健康だと思う。歯科衛生士の仕事は、当たり前の日常を作ることができる。

そして、叔母から歯科衛生士のやりがいについて聞いた。叔母は、患者さんが帰るときに笑顔になって帰る姿を見るととてもうれしいと言っていた。このことを聞いて、私も患者さんを笑顔にしたいと思った。だから私は、当たり前の日常を作れる、たくさんの人を笑顔にできる、そんな歯科衛生士になりたい。

(2) 歯科衛生士と防災

歯科衛生士と防災は関係ないように思えるが、災害時に人が健康でいるためには重要になる仕事の1つだ。歯科衛生士の仕事の1つである歯科健康指導というものがある。これは、歯のセルフケアのスキルアップのための指導をしたり、出前授業のような形で歯の指導をしたりする。そこで私は、災害時での歯のケアや非常用持ち出し袋の中に必要なものについて広めていきたい。

災害時、避難所で配られる食事はいつも食べているような規則正しい食事とは限らない。そこから、虫歯ができたり、口の中の菌が増え、病気にかかりやすくなったりする。この問題を減らすことができるのは、歯のケアだ。だが、避難所でいつものように歯を磨くのは難しいと思う。だから、少量の水でもできる歯のケアの方法や、マウスウォッシュや歯ブラシ、歯間ブラシを防災バッグに入れておくなどを事前に広めておくことで、口腔トラブルが減ると思う。そして、災害時は、特に高齢者の方や子どもたちに気を使わないといけない。高齢者の方は、入れ歯をしている方が多い。だが、避難所では外しにくいということからそのままつけたままにして、菌が増殖し、その菌が体の器官に入り、病気になってしまう。子どもたちは、避難所生活で不規則な食事をすることによって虫歯が増えることがある。このように世代別で、抱える問題は違ってくる。その人にあったものやケアを提供するのが大切だ。だから、このようなケアの方法、持ち出し袋に必要なものなどを歯科保健指導で、よりわかりやすく、より多くの人に伝えていきたい。

このように歯科衛生士としての仕事をしっかりするのは大前提として、被災地や避難所で1番大切に

しないといけないのは、その人に寄り添うことだ。災害が発生して、避難所生活が始まった時に歯科衛生士は動き始める。診療していく人の中には、心の傷を負った方もいるかもしれない。その時に、環境防災科で学んだこと、聞いたことを踏まえて、たくさんの人に寄り添っていけるようになりたい。

6 最後に

私が環境防災科で過ごした3年間は、今後生きていくうえでとても大切なことをたくさん学ぶことができた日々だったと思う。普通の高校生では体験できないことをこの3年間で経験してきた。防災や災害について学ぶことは、災害大国に生きる私たちにとっては必要なものだ。「語り継ぐ」を執筆するにあたって、私たちが執筆する理由を考えた。それは、阪神・淡路大震災や過去にあった災害を風化させないために書いているのだと考えた。そして、風化させないのはもちろん、これから自分達がどのように防災に関わっていくのかを考えることができるものだと思った。これから先、必ず災害は起きる。その時に、被害が少しでもなくなるように、誰かがこの「語り継ぐ」を読んで、災害や防災について知るきっかけになればいいと思っている。そして、いろんな形にはなるが、これからも防災に関わっていきたい。

「語り継ぐ 私から次世代へ」

小林 蓮

1 はじめに

1995年1月17日、突然にして、神戸の街を襲った阪神・淡路大震災。この地震で一瞬にして街が壊され、多くの命が奪われた。私たちは震災から10年後に生まれた。阪神・淡路大震災を経験していない世代は今後も増えていく。そして、次世代に語り継がないことで記憶は風化されていく。風化することで当時の状況、被害の大きさ、備えの大切さが分からなくなっていく、今後災害が発生した場合、阪神・淡路大震災のときよりも多くの犠牲を生む恐れがある。これからは災害は起きていく。起こりうる災害から被害、犠牲者を減らすことが語り継ぐことの意味であると私は考える。

2 阪神淡路大震災での体験談

(1) 母の被災体験

当時18歳であった母は、今も私たちが住んでいる神戸市兵庫区の家 にいた。電気やガス、水道といったライフラインの停止により、家にあったガスコンロでご飯を作り、お湯を沸かしていた。母は、「何よりも風呂に入れなかったことがつらかった。」と話した。

少し離れていた場所に住んでいた曾祖母を、祖母と祖父が迎えに車を走らせた。高校生であった母には交通手段がなかったことから家で過ごすしか他はなかったと言っていた。ただひたすらに家の中に散らかっている割れた食器や食器棚のガラスの片づけをしていた。仏壇に添えていたろうそくや線香が地震の揺れによって倒れ、火事になった場所があったということを知った。さらに倒れたタンスの下敷きになり動けないまま火事で亡くなった人たちを想い、涙を流したと話す。

(2) 父の被災体験

「地震やで。」という言葉聞いて、飛び起きたが、揺れを体感しその恐怖から布団に潜った。「その恐怖心は今でも覚えている」と私に話してくれた。大きな揺れが収まり当時18歳だった父は、祖母と叔父の3人で小学校の体育館に避難した。1月であったため、避難所内はとても寒く、その寒さに耐えられなかった叔父を見て、父は1人で家まで毛布を取りに戻った。そのあとはずっと避難所で過ごした。テレビで状況を確認していたとき、倒壊した高速道路や高速道路の上でぎりぎり止まったバス、火事で焼け野原になった長田区を見て、さらに恐ろしくなると父は話す。

(3) 祖母の被災体験

突然、ダンプカーが家に突っ込んできたような音がして家が揺れ恐怖を感じた。それが何度も続き恐怖心が膨れ上がった。1人で暮らしていた曾祖母に電話を掛け続けたがライフラインの遮断により繋がらず、心配になり見に行ったが外には今まで見たことの無い風景が広がっていた。信号機は倒壊し、道路は寸断されていたことから、さらに恐ろしくなった。曾祖母の家に何とか着き、様子を確認したところ曾祖母が寝ていた布団の上にテレビが落ち、反対側にはタンスが倒れていた。だが、奇跡的にも曾祖母は無事であった。

(4) 祖父の被災体験

被災時には、食べるものがなかったが、水がなかったことが一番辛いことであった。蛇口をいくらひねっても水は出ない。翌日、サッカー場に自衛隊の給水タンク車が到着し、順番に並びポリタンクに水をもらった。だが、必要以上に水を受け取った人に対し、立腹した。助け合わなければならない時に、欲を出すべきではないと。身体の不自由な人も水を受け取りに来ていた。そこで助けあうべきであると思い、身体が不自由であった人の家まで水を運んだ。小学校へ行き、避難所内に入れてもらった。翌日、助けた人のもとへ向かった。とても感謝されたと祖父は話す。祖父は阪神・淡路大震災を経験して、助け合うことの大切さを、身をもって感じた振り返る。

3 家族の話聞いて

家族の話聞いて思ったことがある。それは、自分以外の誰かを思いやることの大切さだ。父は叔父の

ことを思い毛布を取りに行った。母は、亡くなった方々のことを思い、その感情から涙があふれた。祖母は、曾祖母のことを思い、家を見に行った。もう少しだけ時間が遅ければ命はなかっただろう。祖父は、他人のことを思い、人を注意した。このように自分以外の誰かのことを災害時のときにこそ思いやることで困っている人のためになる。災害が起きると人はパニックを起こす傾向にある。必ずしも皆が落ち着いているとも限らない。被災してからすぐは自分のことを考えなければ生きることができない。だが、被災して時間が経つにつれて視野を広げ、周りを見ることで誰かの助けになることができる。

また、家族から聞いた話は私の中だけではとどめてはいけない。被災時に大切となってくるのは、共助である。被災時に互いを助け合うためには今この瞬間から何を思って行動すればよいのかを考え行動していかなければならない。それがこれから先を生きて行く私たちに課せられたことの1つであると私は考える。

4 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学したのは幼い頃から消防士になりたいという夢があったからだ。私がまだ幼稚園の頃、神戸から長野へ車で向かう高速道路の途中で突然車から煙が出た。危険だと判断した両親が家族を車の外へ避難させた。家族全員が外へ避難し終わったときには車は炎に包まれていた。高速道路であったため、消防の到着にかなり時間がかかったが、到着次第、率先して消火活動を行ってくれた。私はそのときの消防士の方の姿に憧れを抱いた。人を助ける人間になりたいと強く思った。母の勧めもあり、消防士になると決めた。中学で進学を考えていた時、友人の兄が舞子高校の環境防災科に入学し、防災について学んでいると聞いた。そして、オープン・ハイスクールに参加し、入学を決意した。

(2) 入学して

環境防災科に入学し、授業や講義を受ける中で大半のことが分からず、自分の知識が未熟であることに気づかされた。環境防災科での授業は「環境と科学」、「自然環境と防災」、「社会環境と防災」といった今までに受けたことのない科目を学び、自然災害のメカニズム、教訓、備えの必要性そして、命の大切さを一から教わった。講義からは授業では聴くことがなかった方のお話や体験から様々な知識を得ることができた。受けた講義をレポートにまとめ上げたり、パワーポイントを使い発表を行ったり、ワークショップを行ったりと環境防災科ならではのことから、文章をまとめ上げる力や人前で話す力、自分の意見を伝える力を身につけることができた。

(3) ボランティア活動

環境防災科には授業とは別にボランティア活動がある。私はこの3年間で多くのボランティアに参加させていただいた。どんなボランティアにも参加しようと1年生のはじめにそう思った。だが、どのボランティアにも入念な準備が必要であることと生半可な気持ちでは取り組んでいけないことを知った。そして、参加を始めた頃は行動に移すことができないことが多く、迷惑をかけるばかりであったが、先輩たちの行動を見たり、発言を聴いたり、回数を重ねていく中で徐々に自分の力でできることが多くなっていった。私たちは「ボランティアはしてあげているのではなくさせてもらっている」という気持ちを持っていくてはならない。私はその言葉を常に意識しながらボランティアをしてきた。ボランティアをやっていると多くの方に話しかけていただける。家族や学校以外の人と話す機会は滅多になかった。ただ、家族や学校以外の人と話しをするその時間は自分にとってとても貴重なものとなっていた。3年間ボランティアに参加してきた中で、HAT 神戸で行われた防災推進国民大会でのボランティア活動は特に印象深いものだった。なぜなら、オープニングセレモニーに呼んでいただき、たくさんの方の前で「つなぐ CanBous」をテーマとし、阪神・淡路大震災から学んだことや自らの将来について話したからだ。また、環境防災科の生徒のほかに防災を学んでいる高校生の方との交流をしたり阪神・淡路大震災を実際に経験された年配の方のお話をうかがったり、幅広い年代の方に防災を学んでもらうためのひまわり楽習迷路の設営などいろいろな経験をすることができた。

(4) 3年間を通して学んだこと

私は環境防災科に入学してからこの3年間の授業やボランティア活動を通して、とても成長することができたと思う。中学生の頃は投げやりにしていたことが何度もあり、すべてうまくいくと思っていたが、高校生になりとても慎重に物事を進めるようになっていった。それは、ボランティア活動で大きく発揮

されたことであった。そのとき、自分自身の成長に大きな喜びを感じた。だが、それは友人や先生の力を借りたことで、成し遂げられたことであった。自分の成長のきっかけくれた方にはとても感謝している。その感謝を忘れることなく、さらに成長していきたい。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の夢は消防士になることだ。多くの講義や今までに調べてきたこと、垂水消防署での体験そして、消防学校入校体験を通して改めて消防士になることの難しさを実感した。特に訓練の厳しさからそのことが最も感じられた。しかし、人の命に係わる職業であるため、当然だと感じた。自分一人の行動で誰かの命を奪ってしまうこともある。自分のために訓練を行っているわけではないことを改めて教えてもらった。私は小さな時からたくさんの人に助けていただいた。その方々には本当に感謝している。その方たちがいたことで今の自分がいると言っても過言ではないと思う。助けてもらって終わりではなく、次は私が誰かを助ける人間になるべきだと強く思った。そして、消防士となり、まちの問題点や課題に向き合い、まちや人を守るための活動を行っていきたい。

(2) 自分の課題

この3年間で防災についてのことを数えきれないほど学んできた。だが、まだ不十分なことだらけだ。今の自分が世に出て人のために活動しようと思っても、かえって誰かの命を奪うことになる。なぜなら、冷静な判断力や的確かつ迅速に動くための意識が備わっていないと感じるからだ。行動力はすべての人に備わっているものではないが、消防士には必要不可欠なもの。今後、南海トラフ巨大地震が起きるとされている。そして、いつ起きるのかは誰にも分からない。明日起きないとも限らない、そんな中で私たちは生活している。いつ起きても対処できる行動力を身につけることが私に課せられたものであると考える。

(3) 防災とどう関わっていくか

私の住むマンションでは高齢者が多く住み、そして、少し離れたところでは一軒家が建ち並び、小学生や中学生が多く住んでいる。つまり、幅広い世代が狭い地域の中で暮らしている。私は少しでもその人たちの力になりたいと思っている。そのためには環境防災科で培ってきた防災の知識や、ボランティアを通して身につけた力を活かし、防災の場を作る必要がある。私が通っていた小学校では幼児から高齢者までの方が参加することのできる防災スポーツ大会というものがあった。そこでは消防士が主催となり、防災について学ぶ場として、たくさんの人に防災の大切さを知ってもらうというものであった。そのように自分が主催となり、地域で誰もが参加できる防災の場をつくり、防災を学ぶことの大切さを理解してもらい、災害が起きた時に地域住民同士で助け合えるようにしたい。どんなときも共助であふれる地域づくりをすることが今の目標である。

6 南海トラフ巨大地震

私たちが生きている限り必ず起きるとされている南海トラフ巨大地震。その規模は、最大震度7、マグニチュード9.1の揺れが予測されている。最悪の場合、32万3000人の人が被害に遭う。これは、東日本大震災をも上回る数である。このような大災害が今後30年以内に近畿地方をはじめとし、東海・中国・四国・九州で起きるとされている。この巨大地震が刻一刻と迫っている中で、今を生きる私たちがどのような備えをし、どのような対策を取っていかなければならないかを考える必要がある。まず、私たちが今すぐにでもできることは、ハザードマップを確認することである。地震が発生し、避難することは誰もが知っている。だが、ハザードマップを事前に確認しないことで、避難の際、経路の危険の有無が分からないまま行動してしまう。その危険を未然に防ぐためにハザードマップを事前に確認しておくことが大切である。さらに非常用持ち出し袋を備えておくことも大切である。南海トラフ巨大地震が発生し、最悪の被害が出た場合、1週間で食料9600万食、飲料水1億4500万リットルが不足すると考えられている。食料の問題を引き起こさないためにも非常用持ち出し袋の準備をすべての家庭で行っておくことが大切である。食料のほかに現在も続いている新型コロナウイルス感染症対策として、マスクやアルコールなどを準備するなど、避難所で何が必要なのかを考えることが大切である。これらの一つ一つを全員が日常的に少しずつ行うことで、災害時に被害を減らす減災へとつながっていく。

7 最後に

この「語り継ぐ」を執筆していくことで、私は生まれてからこの18年間で多くの人に助けられてきたことに気づき、お世話になったすべての方に感謝したいと思った。特に、阪神・淡路大震災の大変な中を生き抜いてくれた両親と祖父母には心から感謝している。私は、その両親や祖父母のほかに、私を育ててくれた大切な人たちやこれからの未来を生きる人を守る人間になりたいと強く思う。環境防災科に入学し、多くの話を聞かせてもらったが、どの講師の先生も「大切なのは日ごろからの備え」であると話してくれた。生きていることでこの言葉を聴く機会はあると思う。だが、理解できていない人も中にはいるだろう。その人たちが防災を意識し始めた時、防災の輪が広がると私は思う。その人たちの防災力を高めていくことが今の私たちにできることであると私は考える。その伝え方は人それぞれであり、どのような形になっても伝えていかなければ記憶の風化は進んでいく。その記憶の風化を止められるのは今を生きる私たちである。今後、必ず私たち未災者が防災の中心となる時がやってくる。その中を生きて行くには、これから先も防災の知識を絶やすことは許されない。私は、行き抜くための知識と力をさらにつけていき、語り継ぐとともに私自身も成長していきたいと思う。

あの日から未来へ

白谷 奈緒

1 はじめに

29年。阪神・淡路大震災が発生してからこんなにも長い月日が経った。

1995年1月17日午前5時46分という時間は、当時の人たちの生活を大きく変えることになった。私は阪神・淡路大震災を経験していない。この世の中には私たちのような震災を経験していない人たちが多く、それは阪神・淡路大震災だけに限らないだろう。災害を知らない人が多くなっていくと、過去の災害が忘れ去られてしまうかもしれない。私は、私の生まれ育った場所で発生した災害が、絶対に忘れ去られて欲しくない。もっと多くの人に阪神・淡路大震災のことを知って欲しい。そして忘れないで欲しい。そのために私は今から語り継ぎをする。私が語り継いでいいのか、という不安もあるが、それは『語り継ぐ』を執筆しているみんなが思っていることだと思う。だからこそ、全員でこの『語り継ぐ』を完成させたい。

2 I先生の被災体験

地震発生直後はまだ就寝していたI先生は、地震の揺れで目が覚めた。「とても大きな揺れだったため、死ぬかと思った」と当時の様子を思い出しながら語られていた。幸いにも、服を掛けているラックのみが倒れ、大きな家具はほとんど倒れなかった。「体が揺れに持っていられる感じだった」と、当時の様子を振り返る。

揺れが収まって、I先生はまず実家に電話をかけた。その後、自転車で行ける距離に実家があったため、様子を見るために自転車で実家へ向かった。家に入ると食器が散乱していた程度の被害だった。その後、I先生は「出勤しないといけない」と思い、自転車で駅まで行った。案の定、電車は止まっていたため自転車で勤め先の高校へ向かった。

高校に到着すると、避難してきた人はまだいなかった。だが、埋め立て地に学校があったため校内で液状化が発生してしまい、高校が避難所として使用できなくなった。生徒や先生も亡くなり、「何故自分たちが生き残ったのだろう」と考える生徒や先生が多くいた。I先生もその一人だった。I先生と普段からよく話をする生徒がいた。阪神・淡路大震災が発生する前日、I先生はその生徒と「また明日」と言葉を交わし、別れた。しかし、その生徒は帰らぬ人となってしまった。I先生は「人は、本当に悲しいときは泣くことができないのだと知った」と、言葉に詰まりながらも語ってくれた。

一方、隣の大阪府はどんな状況なのか。電車の窓から見た大阪府は、何ら変わらない、普通の生活を送っていたのだ。兵庫県はこんなにも大変な状況にあるのに、隣にあるのにも関わらず、こんなにも違うのかと衝撃を受けた。I先生自身も被災しているため、一部のライフラインはまだ使用できない状況だった。しかし、大阪府は全く被害を受けていないようだった。

ご飯は電気鍋を使って食べていた。具材は、I先生のお父さんが職場からもらってくる新鮮な野菜だった。そんな時、I先生の友だちからインスタントコーヒーをもらった。早速コーヒーを飲んだ。そのコーヒーが、本当に美味しかった。被災してから一度も飲んでいなかったコーヒー。久しぶりに飲んだコーヒーは被災生活で疲れた体を癒してくれているようだった。

被災してから何ヶ月か経ち、春になった。学校の前に桜が咲いていた。その桜を見て、被災してから一度もなかった涙を流した。自然は私たちを決して待ってはくれない。春が来れば桜が咲き、夏になれば新緑が広がる。秋には紅葉を、冬は雪を降らせる。そんな自然と共生しているのだ。どれだけ大きな災害が発生しても、この自然現象は変わることなく動き続ける。その瞬間を体感した日だった。

そしてI先生は今も舞子高校の教員として私たちにたくさんの知識や経験を語ってくださっている。

3 被災体験を聞いて

I先生はいつも明るく、生徒思いの優しい先生だ。しかし、被災体験を話している先生はいつもとは何か違うような気がした。被災当時の状況を思い出している先生を見ると切なくなった。災害を体験したことは、少なくともいい思い出ではない。思い出したくないことも多々あるだろう。それでも、私に先生の被災体験を話してくださったことに心から感謝したい。

話を聞いているうちに、やはり私が先生の被災体験を書いていいのだろうかと考えた時もあった。「語り継ぐ」と口では簡単に言えても、いざ自分が語り継ぐとなると不安になることもあった。先生の気持ちや経験を私の言葉で伝えるというのは本当に難しいことだと実感した。

被災体験を生で聞いて、こんなにも悲しく胸が締め付けられるような気持ちになったのは初めてだった。それは大好きな先生から被災体験を聞いたからなのかはわからない。ただ、被災体験を話す先生の姿を見て、「聞いたからにはしっかり私なりの形で語り継ぎたい」と感じた。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知るきっかけになったのは、中学3年生の時だった。警察官になりたいという夢を持っていた私は、仲のいい近所の人に「警察官になりたいねんけどなかなかいい学校がなくて困ってるんよな」と相談をしていた。「それやったら舞子高校にある環境防災科って聞いたことある？そこやったら警察官になるきっかけとかたくさん見つけれると思うで」と言われた。そこで初めて舞子高校の環境防災科の存在を知った。色々調べていくと、災害のことを学ぶ学科であることを知った。推薦となると倍率も厳しいものになると考えていたため、少し不安もあった。それを母に相談し、「オープンハイスクールだけでも行ってみたら？」と勧められ、行くことにした。

学校に着いたときは雰囲気も良く、挨拶が飛び交っていたため「明るそうな学校やな」というのが最初の印象だった。説明会が始まると、思っていた以上に面白そうなことをしているなど上から目線ではあるが思った。情報室へ誘導され、そこで環境防災科の細かい説明を受けた。たくさんボランティア活動を行っていること、国際交流もあること、被災地へ赴き被災体験を聞く、などの活動内容を聞いた。私が一番興味を持ったのはボランティア活動だった。中学生の時から何度かボランティア活動をして、すべての活動が終わった時の達成感が好きだった。この学科でもっとたくさんボランティアに参加したい、地域と密に関わりたと思った。その時に私は「環境防災科に絶対に入学する」と決意した。

(2) 募金活動

1年生で最初に行ったボランティアは募金活動だった。説明会へ行った時から「募金活動をしてみたい」という気持ちがあったからだ。募集が始まった時に友達へ声をかけ、何人かで一緒に募金活動を行うことになった。人数がとても少なく、先輩と関わることも初めてだったため緊張していた。当日になると緊張が限界を超えそうだった。最初は声を出すことに抵抗があり、普通の声よりも少し大きめの声で呼びかけをしていた。すると通りかかる地域の方が「暑いのに偉いね〜。頑張ってるね」と声をかけてくださった。そして募金箱にお金をいれてくださった。その時に「声を出すからこそたくさんの人が募金をしたいという気持ちになる」と分かった。その時から募金活動では私の気持ちを多くの人に伝えられるよう、声を出して募金を呼びかけている。

募金活動を行う上で先生方に教えていただいた言葉がとても印象に残っている。それは「募金活動は地域の方がいないと成り立たない」という言葉だ。私たちが呼びかけをしても応えてくれる人がいなければ、私たちの活動はすべて意味のないものになってしまう。しかし、「阪神・淡路大震災の時に助けてもらったから」という理由で私たちに思いを託してくださる地域の方がいるからこそ、私たちの募金活動は初めて形となり、困っている人のもとへ届けられる。そのお気持ちがなければ募金活動は成り立たない。私たちは、募金をしてくださった全ての方々の気持ちを背負って声を出すという気持ちで募金活動を行わなければならないと感じた。

(3) 地域でのボランティア

私は地域の方と関わるができるボランティアに数多く参加してきた。防災訓練やイベントの手伝いなど種類は多岐にわたる。特に私の印象に残るボランティアは地域の防災訓練のボランティアだ。

1年生の時は募金活動と同じくらい私の熱が入っていたボランティアだったと思う。小さい子どもや地域の方とする防災訓練が本当に楽しかったからだ。そのため、2年生になっても防災訓練のボランティアは何度か参加していた。

ある時、本多聞小学校で防災訓練が行われた。水消火器を使って消火器の使い方を教える担当になった。先輩方と一緒に小学生へ消火器の使い方を教えていた。使い方は簡単だが、それを小学生に教えるとなると難易度が上がる。特に低学年になってくると本当に難しい。そんなことを考えていると思ってもみないハプニングがそこかしこで発生していた。消火器についている安全ピンを止めるのを忘れてしまい、そのままの状態ではレバーを掴む小学生が多くいた。ノズルは止めている状態だった。泥が飛び散ってしまい、服が汚れてしまった子もいた。訓練が終わってから反省した。先輩方とよく話し合ってたちゃんと指示をするべきだったと思った。その反省から今後このようなことにならないよう、防災訓練で水消火器

を使うことになった時は、しっかり注意を呼び掛けてから訓練に当たろうと思った。もしもこれから水消火器を使うボランティアに参加する人がいたら気を付けて欲しい。

5 将来の夢

(1) きっかけ

私が警察官になりたいと強く思ったきっかけは私が高校2年生の時だ。志したのは中学3年生の進路を決める時期だった。ただその時は少し迷いがあった。それは私が高校2年生の時も同じだった。

警察官になりたいくてこの学科に入学したのはいいものの、これから先どうしていけばいいのかわからず、本当に警察官になっていいのだろうか悩んだ時もあった。物忘れが酷く、大切な約束事すら忘れてしまうような人が警察官になって、果たして人を守る資格があるのかと今でも悩むことがある。しかし、とある一件からそんなことはないのかもしれないと思うようになった。

警察官には色々な人柄の警察官がいる。正義感の強い警察官、頼りがいのある警察官などだ。そんな中で私は優しい警察官になりたいと思った。警察官は治安維持のため、強くないと治安が悪くなると考える人もいるだろう。しかし、私は優しい警察官も活躍できるような場があると考えている。それは生活安全課だ。生活安全課は、地域の人との身近に起こる犯罪を抑止するための警察官だ。仕事の例をあげると防犯対策や防犯教室、子ども・女性の安全対策、サイバー犯罪対策、少年非行の防止などだ。生活安全課には、日常的に悩む地域の方の相談も多く寄せられる。その相談に乗るのも仕事の1つだ。相談に来る人の中には「怖くて眠れない」という人もいるかもしれない。そんな時に話を聞いたり、被害者の気持ちに寄り添うことのできる警察官がいたらとても心強いと思う。私はそんな警察官になりたいと考えている。

私自身、生活安全課の警察官とお話をする機会があった。将来に不安を感じていたためどうしたらいいのかわからずにいた。しかし、そんな悩みを優しく包み込んでくれたのは生活安全課の警察官だった。私のペースで話をしても頷きながら聞いてくださった。私の言葉と気持ちを汲み取り、最後まで支えて頂き、本当に感謝している。今では悩むことも少なくなり、私らしく生きることができている。

このことから、私のような相談者の悩みや気持ち、不安を少しでも少なくできるような警察官になりたいと考えるようになった。また、被害者の立場にも加害者の立場にも、どちらの立場の人でもそれぞれの思いがあることを前提において、それぞれの立場の人を支えられるような警察官になりたい。

これが、私が警察官を本気で志すようになったきっかけである。

(2) 夢と防災の関わり

警察官と防災は深く関わりがある。警察官は災害が発生すると部署などは関係なく、全部署が被災地へ派遣され、救助活動や被災地支援にあたる。

被災地に行くということはそれなりの危険があることを理解しておかなければならない。余震や津波、土砂災害などの2次災害、支援活動中の怪我など、危険がたくさん潜んでいる中で被災地に行くということは、まず自分の身は自分で守ることが大前提になる。そのためにはそれぞれの災害の知識や、どのように行動するかを知る必要がある。環境防災科では、災害のメカニズムだけでなく防災に関する多くの知識や経験を積むことになる。その知識や経験が災害現場で役に立つ。自分の身を守るだけでなく、その場にいる警察官や被災者の身を守ることもつながる。しかし、それを分かっている現場で活かすことができなければ全ての知識が無駄になってしまう。そうならないために日々訓練を行い、高校生活で身に付けた知識や経験が決して無駄にならないよう、頑張りたい。

また、警察官は防災を広めることもできる。防災に関する講演会やイベントを開催したり、ホームページを活用して防災の大切さやそれぞれの災害についての情報を盛り込んだりすることだ。特にイベントは来てくれた人たちと直接関わり、防災の大切さを広めることができる。この先何が起こるか分からないからこそ、今から備えることの大切さを多くの人に知って欲しい。

今まで環境防災科で多くの災害のことを学んだが、私が1番大切にしたいことは災害の被害の大きさと教訓だ。阪神・淡路大震災は、ガス漏れによる火災や建物の下敷きになることで多くの人々が亡くなった。それらで亡くなられた方々の分まで私たちがその災害の大きさや被害のことを広め、伝え、活かす必要がある。今後災害が起きても、過去に発生した災害以上の被害を起こさないためにも、過去の災害の被害の大きさや教訓は必ず後世に残さなければならない。阪神・淡路大震災は家屋の倒壊と火災のために大きな被害を出した。それを知っている若者は現在何人いるだろうか。防災に関わりのない若者や学生はあまり気にすることがないのかもしれない。私はそんな人たちを一人でも減らしたいと考えている。警察官という災害と深い関わりのある職業で、防災・減災を広めたい。

6 最後に

私は『語り継ぐ』を執筆することで防災や災害、将来の夢に改めて向き合うことができた。3年間、防災と災害について多くのことを学んできた。その集大成と言える『語り継ぐ』で私は何か1つでも読んでくれた人の記憶に残るような話を書くことができただろうか。『語り継ぐ』を執筆しているこの時も地球は動き続け、将来起こると言われている南海トラフ巨大地震が発生する日までの時間を刻んでいる。いつもと変わらない生活を送り、当たり前のようにご飯や水があり、友達がいて、こんなごく普通の生活が一瞬にして壊れると思うと、どれだけ防災や災害について学んでも怖くなる。学んできたことを全て活かすことができるのか不安になる。しかしそれは、みんなも同じなのかもしれないと思うと「もっと防災を学びたい」と思うようになった。そこは、私がこの高校3年間で1番成長したところだと思う。防災以外にも、人として学んだことも多くある。それは多くの失敗をしてこそその成長なのだと思う。だからこそ、これから高校生活を送る人には、どんな困難があっても頑張って乗り越えて欲しい。乗り越えた先に必ず明るい未来が待っているから、めげずに頑張っていて欲しい。

私にとってこの高校生活の3年間はかけがえのないものになった。周りの高校生とは一味違った、楽しい高校生活だった。これからも環境防災科で得た大切な知識や思い出を忘れないたくない。20期生として環境防災科に入学できたことを嬉しく思う。

これまで述べてきたように、3年間防災を学んで得たものは数えきれないほどある。それらは、高校生活3年間で関わってくれた全ての人がいてくれたからこそのものである。舞子高校や他校の先生、講義をしてくださった講師の方、先輩・後輩、友達、地域の方、そして家族。3年間で数えきれない多くの人たちと関わったこと、そして防災を教えてくださった全ての人に感謝したい。多くの人に支えてもらっていたことにも改めて気づくことができた3年間だった。

これからも、先輩方や私たちの『語り継ぐ』が読み継がれていくこと、これから入学する後輩たちや今から執筆しようとしているあなたに受け継がれていくことを願い、執筆を終える。

生きた記憶

杉山瑛一朗

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災が起こった。私はこの災害を経験していない。そして私と同じように経験をしていない世代はこれからも増えていく。その中には経験をしていないのだから語り継ぐことはできないと考える人もいるだろう。確かに私たちが知っている阪神・淡路大震災は映像や記録、語り部さんの話の中のものだ。しかし、そんな私たちだからこそ、経験した人の視点と経験をしない私たちからの視点を合わせて考えることができる。経験をしていないからできないと考えるのではなく、経験していない自分でも新しい視点を見つけて語り継ぐことが大切だと考える。

2 阪神・淡路大震災

(1)母の体験

阪神・淡路大震災当時、母親は西脇市野村町に住んでいた。母は高校3年生で阪神・淡路大震災が起こる前々日はセンター試験を受けて、家に帰るとすぐに寝た。その日寝ていると午前5時46分に地震が来て目覚めた。それまであまり地震を体験したことがなかったので地震の揺れを相当強く感じた。震源地からは距離が離れていたため、神戸や淡路のような被害は出なかった。家の中でも棚から貯金箱が落ちて割れただけで、母や家族にけがはなかった。今ほどはネット環境も発展していなかったため、テレビでニュースを見ると神戸市の建物が崩れていく様子や長田区の火災、倒れた阪神高速道路などを見てこんなことが起こるのかと衝撃的だったという。母の家の近くでは被害が少なかった。17日は高校の登校日だったので、学校に行くと校舎の壁にひびが入っていた。母は神戸の大学を受験していたが、その大学が被災していたため、違う学校で大学の入試を受けた。大学に入った後も大学が始まったのは5月だった。

(2)父の体験

当時父は鳥取に住んでいて、直接被災はしなかったため被害はなかった。祖母が長田区に住んでいて地震後に電話をかけてみたが繋がらなかったため、神戸に向かうことを決意した。このことを友達に話すと水などを分けてくれてとてもありがたかった。車に水や食料などの支援物資を入れて神戸に向かったが普段よりも着くのに時間がかかった。祖母のもとについた時にとっても感謝されたそうだ。祖母の家は半壊だったが父の家族には特に大きなけがはなかった。

3 お話を聞いて

今まで環境防災科に入って多くの人に震災の体験を聞かせていただいたが、家族には聞いたことがなかった。それはつらい記憶を呼び起こすことになると思ったからだ。しかし、話してもらい震災当時のことを詳しく知ることができた。私はこの体験のお話を自分の中で完結させるのではなく多くの人に伝えていきたいと思う。

(1)母の話を聞いて

母親の話では、災害は私たちの想像を軽々と超えてくるということを改めて理解した。体験を聞いた時に母は西日本で地震は起こらないと思っていたと言っていた。しかし、大きな被害になってしまった。日本に住んでいる限り災害が絶対に起こらないことはない。そして今後、南海トラフ巨大地震などの大きな災害は必ず起こる。過去の災害の時のような被害を繰り返さないためにも、誰しもが災害のことについて知り、一人一人が減災や防災について考えなければならない。災害の被害を完全になくすことはできないが、想定外の災害を想定内にできるように知識を身に付け、災害について考えられる人になっていきたい。

(2)父の話を聞いて

父親の話を聞いて、人間の繋がりの大切さを改めて知ることができた。関係を作っていると被災地だけで役立つのではなく、それ以外の地域でも役に立つことがある。だから、日ごろから地域の人たちと関係を築いて過ごして、被災した時も、支援する時も助け合って、少しでも被害を減らしていきたいと思った。

4 環境防災科

(1) 入学した経緯

私は中学3年生の時に神戸市の中央区にある人と未来防災センターに行き、そこで初めて環境防災科の存在を知った。それまで私はどこの高校もやっていることは一緒だろうと思っていたが、その時に環境防災科のことを知って、防災のことを専門に扱う学科があるのだと知って興味を抱いた。そこからどんな勉強をしているのか、どんな活動をしているのかななどを調べて、自分も災害や防災、減災のことを学びたいと思った。そしてその学んだ知識を将来に生かして人の役に立つことをしたいと思い入学した。

(2) 入学して学んだこと

入学してからは防災のことを学ぶ授業やたくさんの講義を受けた。防災を学ぶ授業では、今まで自分が知らなかった知識が次から次へと出てきて、自分の知識の少なさに驚いた。講義では、多くの講師に教えていただいた。そして、様々な分野の講義を聞いて気づいたのは、どの分野も災害や防災につながるということだ。防災を学ぶ重要性を改めて知ることができた。

また環境防災科に入って防災を学ぶうえで重要なことに気づいた。入学する前までは、耐震化だけをしていれば問題ないと思っていたが、それだけでなく物資の備え、災害についての知識、地域交流など様々な視点から防災を考えていくことが重要であるということだ。災害時に一つのことしか対策をしていないと新たな問題が出てきた時に対応が遅れてしまう。そうならないためにも、様々な視点や知識で防災を考えていかなければならない。

(3) 講義

環境防災科に入って、たくさんの人に話を聞かせていただいた。警察や消防、海上保安庁などの公助や電気やガス、水道などのライフライン関係など様々な人の講義を受けた。阪神・淡路大震災や東日本大震災の被害状況や活動、南海トラフ巨大地震に備えていることなどを教えていただいた。それまでは、災害時のおおまかな情報しか知らなかったが、講義を聞くことで多くの知識を得ることができた。様々な職種の講義を受けて、講師の皆さんが言っていたのは、災害は想定を超えてくるということだ。たとえ対策をしていても災害はそれ以上のものを私たちにぶつけてくる。しかし、どの業種の人たちも未曾有の災害だったから仕方がないとは言っていなかった。そこから学び、さらに強いものを作って対策をしていた。直接人を助ける対策でなくても、誰かの役に立とうと動いていることを知ることができた。どのような仕事でも人に繋がると講義を受けて理解した。私もこの人たちのように責任を持って仕事に取り組んでいきたい。

(4) 出前授業

環境防災科の授業の中に小学校への出前授業があり、ここで人に教えることへの難しさを知った。出前授業は当たり前だが、相手の年齢を考えて言葉を選んでいかななくてはならない。小学生にこの言葉を使って伝わるのか、この表現は分かりにくいのか、考えながら授業をしていかなければならない。私は、今まで誰かに教えることはなかったのでどうやればいいのかわからなかった。しかし、その分この経験を通して自分には足りていないものを知ることができた。出前授業は相手に伝えて相手に理解してもらうためのものだが、同時に自分の現状を知って成長していける機会なのだと実感することができた。そして防災教育は社会の防災力を上げるためには必ず必要になるものだ。これから起こると言われている南海トラフ巨大地震に備えるためにも防災の知識を多くの人に広げていきたい。

(5) ボランティア活動

環境防災科に入って、様々なボランティアに参加した。高校に入学するまで、ボランティアに参加したことがなかったので、入学した頃は何をすればいいのかわからず困っていたが、先輩たちに教えてもらった。先輩たちは強いリーダーシップを持っていて、自分と先輩との間にこんなにも大きな差があるのだと知った。

2年生になると、ボランティアでの役割も重くなっていった大変だった。しかし、ボランティアをしていると、たくさんの人から「ありがとう」と言ってもらい、この言葉を忘れずにこれからも続けていこうという気持ちになった。

高校3年間で様々なボランティアに行かせていただいた。この経験を自分だけのものにするのではなく後輩に伝えていきたい。

(6) 視覚特別支援学校

高校1年生の時に視覚特別支援学校に行って、ゴールボールの体験とワークショップをした。ゴールボールは目隠しを着けた状態で鈴の入ったボールを転がしてゴールを狙う競技なのだが、何も見えない中で体を動かすのは想像していたよりも怖く、目が見えない人の不自由さを、身をもって知ることができた。そのあとのワークショップでは、目が見えない人が災害に遭うというのを想定して話し合った。その中で特別支援学校の学生さんが、点字ブロックがなかったら怖いと話していた。目の見えない人にとって道標である点字ブロックは災害時に使えなくなる可能性もある。そうなれば、避難するのもさらに難しくなり、さらには危険なところに行ってしまうかもしれない。そうならないためにも、障害者のニーズに合わせて安全に暮らしていける社会を作っていく必要があると、この体験で知ることができた。

5 将来の夢

私の将来の夢は防災に関する仕事に就くことだ。私は小学校の頃からこれといってなりたいものはなかった。しかし、環境防災科に入って災害や防災についてたくさん知ることができて、この経験と知識を生かして、多くの人に役立てていきたいと思った。その夢をかなえるためには、今よりも広く災害のことを学んで考えていかなければならない。だから、日ごろからニュースや番組などを見て、災害や防災について知って、自分ならどのように対応、対策するのかなど考えていきたい。

日本は世界でもトップクラスに災害の多い国で、いつどこで災害が起こるかはわからない。災害が起こった時に被害を少なくするためにも社会の防災力を向上させ、一人でも多くの人を守る社会にしていきたいと考えている。

6 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震と呼ばれるマグニチュード8～9クラスの海溝型地震が、30年以内に70～80%の確率で起こると言われている。この南海トラフ巨大地震では津波も発生する可能性が高く、最悪の場合32万人を超える人が亡くなり、建物の被害は200万を超え、経済被害も220兆円にもなると言われている。

この地震の被害を減らすためにはすぐに避難をすることが大切だ。東日本大震災では避難をせずに津波に飲み込まれた人が多くいた。津波は来るまでに時間の猶予があり、その間に避難ができれば死者を減らすことができる。そうするためにも、災害が起こる前からどこに避難するかを家族と話し合ったり、家具の固定をしたりすることが大切だ。内閣府によると、建物の耐震化をすると80%、家具の固定をすることによって60%から70%の死者を減らすことができると言われている。他にも地域の人の家族構成やどんな人が住んでいるのかを知っておくと共助をスムーズにすることができる。そしてもう1つ大切なのが防災バックなどの準備だ。南海トラフ巨大地震では本州全土が被害を受ける。その中で支援を待っていてもすぐには来ないだろう。そうした中で困らないためにも、安全時に食料や水、懐中電灯、ラジオ、など使えるかどうか確かめながら備えることが重要だ。

日本では毎年多くの災害が起こっている。そのせいで、災害に慣れてしまう人が多くなってしまっている。経験をすることは対策をする時に重要だが、それに頼りすぎてしまうと想定を超えてしまったときに行動ができなくなってしまう。そうした状態に陥らないためにも一人一人が日頃から災害に対する知識を蓄えて備えることが必要だ。このように日常的に少しでも対策をしておくことで、災害時に被害を減らす減災に繋げることができる。

7 最後に

今回「語り継ぐ」を執筆して、伝えることの重要性を学んだ。私は環境防災科に入学して、多くの被災者や未災者の方からお話を聞かせていただいた。伝えることは、簡単ではなく、辛い記憶を呼び起こすことにもなる。それでも、話していただいたことを私たちは語り継いでいかないといけない。そのまま話していただいたことを伝えるのではなく、聞いたことを自分なりに理解・整理をして次の未災者に伝えていくことが私の使命だと思う。

最後にこの3年間様々なことを学び、体験してきた。今までの人生で1番記憶に残る日々だった。たくさんの人と助け合いながら過ごしてきた。この環境防災科で学んだ、災害や防災・減災の知識を無駄にしないためにも、たくさんの場所で生かしていきたい。先ほども書いたように南海トラフ巨大地震がいつ起こってもおかしくない。そんな中動かなければいけないのは、私たちだ。これからたくさんの知識を身に付け、自分にできることを精一杯やっていきたい。災害を風化させないためにも多くの人に

語り継いでいきたい。

今までを次へ

副島萌々

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 29 年がたった今、この震災を経験していない私たちに何ができるのか。風化させないための 1 つとしてこの「語り継ぐ」があると思う。経験していないから知らないではなく、経験していないからこそできることを自分自身で考え行動し、未来の災害に備えることができるのではないかな。

2 阪神・淡路大震災

(1) 叔母の話

5 時 46 分、叔母は寝ていた。すると激しく揺れた。部屋の中にあったタンスの中身が降ってくると思いつきに布団をかぶった。揺れが落ち着き家の中を見ると、テレビが落ちていた。外に出ようとするドアが開かなかった。近隣の人が手伝ってくれて外に出ることができた。1 月だったので震災直後の外は暗かった。鈴蘭台に住んでいたため電気はつき、被害もそこまで大きくなかった。役所の人が「地震が起きた」と車で巡回し、知らせていた。テレビは見ることができたが、地震が起きてすぐだったため地震のニュースはしていなかった。他の地域の情報は分らなかった。その後、何度か余震があつて恐怖だった。当時住んでいた家は水道管が壁についていた。地震によって水道管が壊れ台所が水浸しになった。外にある水道管の元栓を閉め、なんとか水を止めることができたが、もちろん水は使えなかった。ガスと電気は使えたため水以外のライフラインは困ることがなかった。2 日後には大家さんが見回りに来てくれたため直った。テレビも地震の情報が放送され徐々に世の中の状況が分かってきた。

叔母は水を確保するために駅へ向かった。水道関係の行政が水を配っていた。無事に水を確保することができた。地震が来ることはもちろん分かっていなかったため食料がなかった。近くのスーパーへ行ったが、行ったときには遅く、品はほとんどなく手に入れることができなかった。

叔母はその時、妊婦だった。ひとりだったため不安が大きかった。バスが通っていたため検診を受けるために産婦人科の病院へ行くことができた。病院は壁にひびが入っていたくらいだった。この状況で生まれてもひとりで面倒を見ることは難しく、病院で少しでも生活できる方がよかった。予定日より遅れていたが、1 月 26 日に無事に生まれた。病院には他の病院からの子どもがいてベッドが埋まっていた。鈴蘭台は被害が大きかった場所との間に山があるためか兵庫区や長田区と比べ、被害が大きくなることはなく数日後には普通の生活に戻った。それでも揺れは毎日続いていた。

(2) 父の話

父は当時学生だった。淡路の三原町でひとり暮らしをしていた。1 月 15 日が成人式だったため神戸にいたが、16 日には淡路へ帰った。5 時 46 分、父は寝ていた。とても激しく揺れ、目が覚めた。何が起きたのかわからなかった。現状がわからず二度寝をした。もう一度起きて、夢か現実なのかわからなかったがコップや食器が落ちているのを見て地震だと分かった。震源地の近くだったけれどコンクリートマンションは壊れることもなく、ライフラインも機能していた。テレビを見ると神戸の町が映っていた。一番驚いたことは高速道路が倒れていたことだった。ニュースを見ると少しずつではあったがひどい状況であることが分かってきた。両親のことが心配になり電話をしようとしたがつながらなかった。

17 日火曜日は散らばった食器やペットボトルを片付けて、学校へ行った。クラスには学校に来ている人もいれば来ることができない人もいた。クラスの中には家が壊れている人が半分以上いた。けが人や死亡した人は周りにいなかった。父は看護学校に通っていたが、もちろん看護師免許はまだなかったのでボランティアで派遣されることもなかった。

父が住んでいた地域では、四国からの支援が多く生活に困ることはなかったと言っていた。すぐに普段の生活に戻り、数日後には両親からも連絡があった。父はこの震災で情報の大切を知ったと言っていた。

(3) 母の話

母は 1 月 17 日に受験を控えていた。そのため 5 時には起床していた。出かけるための準備をしていた時に大きく揺れた。マンションの 7 階に住んでいたため揺れがとても大きかった。余震も起きた。余震

が起きるたびに「ゴー」という地鳴りの音がした。祖母は母のお弁当を作るために起きていたが、普段であつたら寝ているときに頭がある部分にテレビが落ちていた。母は兵庫区に住んでいた。窓から南の方を見ると、外は暗かったが長田の町が一面真っ赤だった。

母は受験会場に向かった。バスが来て神戸駅まで行こうとしたが、バスに乗った5分後スーパーに売っている品が道路に散乱していて道路が塞がれていて通れなかったので、スから降ろされた。バスの運転手は北区から来ていたため地震の揺れに気づかずにバスを運転していた。兵庫区で建物が崩れているのを見て地震だと分かった。急いで母は受験会場に電話した。バスと電車が止まって受験会場に行けないと伝え、後日受験することになった。次の日に大阪で受験することになり、ハーバーランドから船で向かいその後は家に帰らず親戚の家を転々としていた。その後、家に帰った。ライフラインは電気、ガス、水道の順に復旧した。2週間後には普通の生活に戻ったが、地震が起きた恐怖で母はしばらくの間パジャマを着て寝るのが怖かったと言っていた。

（４）話を聞いて

3人の話を聞いて、今こうして普通の生活ができて生きていることは当たり前ではないと改めて感じた。震災が起きた後も恐怖に感じ、不便な生活を送ってきたことを聞いて私だったら耐えられないと思った。備えをあまりしていなかったことで、震災後大変な生活を送っていた。今はテレビやインターネットで災害の危険性や備え方についての内容が増えている。当時より備える人も増えているが、もっと震災について一人一人が危険性を認識して備えをしていかなければいけないと思う。父は情報の大切さを学んだと言っていた。震災は悪いことだけではなくて学ぶこともあるのだなと感じた。それが教訓となり次の災害に備えられるべきだと思う。

3 環境防災科

（１）環境防災科に入学したきっかけ

環境防災科を知ったのは中学3年生の時に母がパンフレットを見せてくれたことだ。小学校の時から地域のボランティア団体に所属して募金活動や防災訓練に参加し、中学2年生ではマレーシアに実際に行って、環境問題や国際交流について学ぶ経験をした。環境防災科ではボランティア活動ができ、今まで小・中学校で勉強してきた災害や防災についてさらに詳しく深く学べることを知った。

夏に舞子高校で行われた地域防災セミナーに参加した。そこで出会った先輩方は知識のない私に分かりやすく防災について教えてくれた。教えてくれる姿がかっこよかった。そこで受験することを決めた。それから入学するために災害のニュースを見るようになり、小論文を書く練習や面接練習を繰り返した。そして、無事に入学することができた。

（２）環境防災科ならではの授業

入学してカリキュラムを見たときに、「災害と人間」「環境と科学」「社会環境と防災」など初めて目にする科目がたくさんあった。

外部講師の授業では専門家、自衛隊、ライフライン関係者、NPOなど多くの方が幅広い分野の内容を深くお話して下さった。ほかにも災害や防災に特化した施設での校外学習、消防学校体験入校など実践的な授業も多くあった。それぞれ全く違った内容だったけれど共通して言えることは、必ず学びになることがあったことだ。様々な視点からのお話を聞くことができて相手の立場になって考えるようになり、さらに、学ぶことが私には増えた。

実際に授業を受けて、災害や防災の知識が全然ないことに気づいた。3年間防災について勉強してもまだ知らないことがたくさんあるが、防災について触れる機会がない人たちがたくさんいると思うと怖いことだと思った。そのためにまずは自分の周りの人に学んだことを話してみようと思うようになった。

（３）出前授業で学んだこと

環境防災科でたくさんのお出前授業がある中で私はいくつか参加した。出前授業と聞いて自分たちで考えた文章を読むことが授業だと思っていたが、実際は違った。授業構成を自分たちで考え、ネットの情報に頼るのではなく自分たちが勉強した内容をいかに分かりやすく伝えるかが本当の出前授業だった。

出前授業を通して難しかったことが2つあった。1つ目は、小学生や中学生に投げかけや質問をした後の返し方だ。初めて授業する立場になって難しいと気が付いた。今まで受けた授業で先生方はしっか

り私の考えを拾ってくださって、答えやすかったと感じた。授業の時に質問しているからには、否定してはいけないし、同調するだけでは物足りない。ここで今まで勉強してきた知識の見せ所になると学んだ。2つ目は、授業を実施する相手校の要望に合わせた内容や防災ゲームを考えることだ。過去の先輩方の出前授業を参考にしながらオリジナリティーのある内容にすることは、簡単ではなかった。しかし、出前授業と一緒に取り組むメンバーと協力し、限られた時間内で作り上げることができた。

環境防災科に入って参加してきた出前授業は、決して簡単ではなかった。原稿に頼らず緊張しすぎないように分かりやすく授業することを心掛けた。災害や防災の授業が楽しく学べ、さらに広がるきっかけにするために全力で取り組んだ。人前で話すことが苦手だった私は準備の時に注意されることもあり、間違えることもあった。それでも、最後までやり切った後の達成感は、参加したからこそ得ることができ、少し強くなれたと改めて感じた。

(4) 地域交流

舞子高校では地域のつながりを大切にしている。私は毎年1回、地域のイベントのボランティアに参加するようにしていた。そこでは先輩や後輩はもちろん地域の方や子どもたちとの新しい出会いがたくさんあった。地域のイベントでは年齢や性別を問わず地域の方みんなが楽しく参加し、話をしてくれて毎回楽しいと思えた。地域のイベントは楽しいだけでなく、同時に防災を学べたり地域の方同士でコミュニケーションができたりと地域の居場所づくりにつながっていると思った。

私は多聞南地区のリーダーになり、直接地区リーダーの方とイベントづくりのアドバイスをしたり運営を手伝う立場になった。今まで先輩たちがつないできた関係をこれからも受け継いでいくために真剣に参加した。実際に地域の方と一緒に防災を学ぶことができて参加させていただいてよかったなと改めて感じた。

4 将来の夢

(1) 歯科衛生士

私の将来の夢は歯科衛生士になることだ。母から手に職をつけるために資格のある仕事がいいと勧められたことがきっかけで、中学3年生の時に決めた。歯科衛生士は働く環境の選択肢もたくさんあり、一度離職しても資格があればまた再就職ができ、生涯にわたり社会貢献できる職業であることを知り、目指すようになった。

歯科衛生士は歯・口腔の健康づくりをサポートする国家資格の専門職で、主な仕事内容は歯科予防処置、歯科検診の補助、歯科保健指導がある。人々の健康をサポートする歯科衛生士に私はなりたい。

(2) 防災と夢

大規模災害時、被害の状況によっては避難生活が長期化することがある。時間が経過すると共に食べ物を食べるが歯磨きができない問題が表面化する。歯の健康が損なわれると歯周病になり、それが原因で心臓病や肺炎になる可能性もある。歯の健康は体の健康維持のためにも大切なことだ。日本歯科衛生士会では「災害歯科保健歯科衛生士」登録制度がある。主な活動は災害歯科保健コーディネーター歯科衛生士の補佐や災害歯科保健活動することだ。歯磨きは健康問題にもかかわる重要な役割であるから私も研修を受けて登録したいと思っている。

備えは家だけではなく学校や職場、どこにいても必要である。歯科衛生士の職業が日常で直接防災に関わることは少ないが、診療中に地震が来た時、命を守る行動を患者さんに伝えたり、治療器具がけがにつながらないように移動させたり、いつ災害が起きても安全を確保し冷静な判断で行動できるようにしたい。ほかにも災害時の避難経路の確保や物の配置など、今まで勉強してきた防災の知識を活用していきたい。

(3) 働く時に大切にしたいこと

歯科衛生士になったら2つのことを大切にしたいと思っている。1つは今まで学んできた人との関わりやコミュニケーションを大切にすることだ。小さい子どもが歯医者を怖がるのを見たことがある。私も子供の頃、歯医者に行くのが怖かった。しかし、歯科衛生士の方が優しく話しかけてくれて、「大丈夫。」と言ってくれた。その間に歯科医師の方があつという間に治療をしてくれた。それを見て、私も年齢に関わらず誰とでもコミュニケーションができ、患者さんに寄り添える歯科衛生士を目指したいと思った。歯科保健指導では必要なことだけ言うのではなく正しく分かりやすい指導をし、伝えた方法をこ

れからの生活で続けてもらえるような指導をしたい。

2つ目は常に先を見て行動することだ。どの職業についても普段の生活でもこのスキルは強みになる。当たり前のことだが実際にするのは難しいと高校生活を通して実感した。それができることで周りを見て行動し信頼される人になれると思った。そして立派に働き社会の役に立つ人材になりたいと強く思った。

5 最後に

「語り継ぐ」を執筆して、阪神・淡路大震災の恐ろしさを改めて感じた。普段、被災体験を家族に聞くことがなかったが初めて話を聞いて、今、生きていることが当たり前ではないのだと感じた。一つの震災だが同じ体験談を話す人はいない。この貴重な話を絶対に風化させてはいけない。

南海トラフ巨大地震はこれまでにないくらいに大きな被害が出ると予想されている。これまで聞いた話をもとに自分自身で考え、次の災害に備えていかないとはいけない。今ある生活を当たり前だと思わず、毎日を大切に過ごそうと思う。

災害弱者

高砂 藍樹

1 はじめに

1995 年、阪神・淡路大震災が神戸の街を襲った。私が生まれたのが 2005 年。震災からちょうど 10 年が過ぎようとしている時に神戸で生まれた。生まれも育ちも神戸だが物心がついた時に阪神・淡路大震災について知り、実際には震災を経験していない未災者となる。

近年、震災の記憶の風化が危惧されている中で、高齢化が進む被災者の方々の体験を未災者である私たちが後世に語り継ぎ、記憶を途絶えさせない必要がある。

2 阪神・淡路大震災

(1) 祖父の話

祖父は目に障害を負っていて、はっきりと景色を見ることができない。そんな祖父は震災当時、鍼灸師として自宅がある神戸市西区から治療院がある板宿まで電車で勤務していた。

地震発生の午前 5 時 46 分、突然の揺れで目が覚めた、祖母の叫び声と同時に本棚から本は落下し、ピアノやテレビが動き回ってまるでゴミ屋敷のように部屋は散らかっていた。生まれて初めての経験だった。幸いにも神戸市西区にあった自宅の家具は散乱したものの被害は少なく、すぐに職場のある板宿に行こうとするが地下鉄が運行停止していたため職場に行けなかった。

午前 10 時、買い物をするため近くのスーパーに娘と一緒にいったが、買えたのはお菓子だけで地震から約 4 時間後の時点でスーパーに飲食物は少なく、すでに品薄状態だった。

震災から 4 日後、ようやく地下鉄の運行が再開したので、職場のある板宿まで移動した。駅を出た瞬間に物が燃えた焦げ臭い匂いがした。移動する道中で、近所の 2 階建てだった家が潰れて 1 階建てになっていた。辺りは随分と見通しが良かった。なぜなら周囲の家は潰れた挙句、火事によって焼けてしまったからだだった。10 分ほど歩いて職場に到着すると、屋根の瓦は落下して、雨よけの軒にあたって破けていたドアは曲がって開けられない。とにかく屋内の状態は酷かった。仕事が再開できるまで近所の人と助け合いながら生活した。

(2) 祖父の話を聞いて

生まれつき目の不自由な祖父の震災の経験を聞き、当時の不安感は計り知れないと思った。祖父のように視覚に障害を患っている人は災害弱者となり、災害時は普段の生活の何倍も生き辛い生活になってしまうため、災害弱者の方の視点から見えづらい避難生活を知らないことには避難所などで誰もが安心して過ごすことは難しい。

阪神・淡路大震災が発生した 1995 年に全国からボランティア団体が来てくださったため、祖父は東日本大震災が発生した時に恩返しをしたかったと言い、被災地まで足を運び鍼灸師として被災者の体のケアに尽力した。その功績が認められ内閣総理大臣から旭日双光章を頂いたことを誇りに思っている。祖父のように災害時において自分が今何をすべきなのかを考え行動できるようになりたいと感じた。

(3) 祖母の話

祖母も目に障害を患っているため、阪神・淡路大震災発生直後の避難生活で多くの困難があった。

当時はスマートフォンが今よりも普及していなかったため、知り合いの安否が分からなかったことが不安だった。九州に住んでいる親戚には電話が繋がったが、西宮に住んでいる友人には繋がらなかった。安否がすぐに分かった人もいれば、1 週間して亡くなっていた事が分かった人もいたという。祖母の友人で視覚障害者の方の体験談として、災害時はみなパニック状態で視覚障害者のみならず災害弱者は、助けられる事なく置いて行かれてしまい、死を悟ったという。震災直後は災害弱者に対する救いの手は多くはなかった。

時間が経つにつれて、共助の輪が広がっていった。祖母はお世話になるだけではなく、災害弱者である自分達は何ができるのか考えた。周囲の人とできるだけ連絡を交わし、お互いの安否状況を確認した。お金を援助してくれる人もいた。避難生活を送っていく中で、災害時だけでなく普段から助け合いや、近所付き合いをよくしていることで、いざという時に孤立しないということを知るきっかけとなっ

た。

（４）祖母の話を聞いて

視覚障害者の方は、道路が寸断していても、物が落下してきても直視で確認するのが困難なため、災害時は非常に不便になる。ヘルパーも来てくれないため災害弱者と一目でわかるようにすることで、地域全体で助け合う事ができると感じた。また盲導犬や家で飼っているペットの持ち込みを拒否する避難所もある。避難所では共同生活になるため、動物アレルギーなどを持っている人も少なからずいるため人間と動物の生活の場を切り離すなどのペット受け入れ体制を見直して、誰もが安心して共同生活が送れるような避難所にしていく必要がある。

３ 環境防災科

（１）入学のきっかけ

舞子高校環境防災科の存在を知ったのは、中学３年生の時に母からの勧めがあったからだ。進路で迷っている時に母から防災について専門的に学べる環境防災科があると知らされた。当時、災害や防災についての知識は無く、地震が起きたら机の下に潜るという程度しか理解していなかった。

しかし、中学生の時、阪神・淡路大震災についての特別番組を見たときに、阪神高速道路が柱ごと横倒しになっている光景や神戸の街が黒い煙で覆われている映像を見た時に地震の恐ろしさに気づき、そこで初めて防災や減災について考えるようになった。

神戸市民として何かできることはないかと思いオープン・ハイスクールなどに参加する中で、阪神・淡路大震災の教訓を活かして地域に貢献したいという気持ちが強くなり、入学することを決意した。

（２）入学後

環境防災科に入学してから３年間で人として大きく成長できたと感じている。入学前と入学後で、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの自然災害に対する考え方や意識の違いに変化があることは間違いない。それは多くの方々から震災についてお話を聞いてきたからだと思う。

環境防災科に入学してから校外の人達と関わらせて頂く機会が増えた。授業内でグループワークをしていく中で、自分の意見を素直に、そして具体的に人に話せるようになったと思う。中学生の時までは、自分の意見を言うということにも委縮して、話しかけられて初めて口を開くような性格だった。しかし、環境防災科の授業で発表を当てられた時に第一声が「分かりません。」ではなく、他の人と意見が同じでもしっかり自分の言葉で意見を言う、答えが分からなくても分からないなりに自分の思ったことを言うということを繰り返すことで初めて素直に自分の意見を言うことができた。普段の授業のおかげで前よりも人として成長することができたと感じている。

防災の基本である自助、共助、公助など今では当たり前のように感じる言葉も１年生の時の自分からしたら分からないことだらけで、毎日初めて聞く情報や言葉だらけだった。環境防災科の特徴の１つとして授業内での講義がある。阪神・淡路大震災の被災者の方や、防災を専門的に学んでいる方などの講義を受けさせて頂く中で、人の命を守ることがどれだけ大変なのか、阪神・淡路大震災の教訓を風化させないためには何が必要なのかを深く考えさせられる期間となった。

環境防災科に入学してから３年が経ち、ボランティア活動や講義を受けていく中で、気付いたことがある。それは、防災とは自分ひとりが生き残ればいいと考えるのではない。災害が起こる前から地域住民の方との交流を深め、地域コミュニティの確立、拡大をすることでその地域の防災力が高まり自助だけでなく、共助もできるようになる。その結果、災害に強い街になることを知った。これからは色々な視点から防災、減災について考えボランティア活動などを通じて地域との関りを大事にして、災害に強いまちづくりに貢献したいと思う。

４ ボランティア活動

環境防災科に入学してから、出前授業や募金活動、地域の防災イベントの手伝いなど多種多様なボランティア活動をしてきた。その中でも３年生の時に参加した、神戸市総合児童センター主催の「こべっこ防災イベント」が印象に残っている。

このボランティアの趣旨は、防災劇や、クイズ形式の防災迷路を通じて神戸の街の子ども達に災害時の避難行動や避難時の知識を教え、防災意識を高めようというものだった。このボランティア活動は今まで３年間してきたボランティアの基本が集約されているように感じた。

本番前の準備で改善点が挙げた中で防災クイズの問題の伝え方を工夫した。私は防災迷路で子ども達に問題を伝える役を担当していた。相手は小学生以下の子ども達なので、漢字をまだ習っていない子ども中にはいる。そのため、分かりにくい専門的用語は使わず、小学生でも理解できるような簡単な言葉で子ども達に伝えたり、漢字の上にふり仮名を書いたりして問題を簡略化した。

次に注意することとして子ども達と高校生の目線の違いが改善点として挙げた。立った状態だと小学生の目線と高校生の目線は、身長差が激しく小学生から見た高校生は背も高く体格も大きいので高圧的に見えてしまう。高校生は屈んで子ども達と目線を合わせることで身長差を抑えた。このような課題は今までのボランティア活動で学んできたので、その経験が活かした場面だった。

「こべっこ防災イベント」のボランティアの趣旨として説明した通り、子ども達と保護者に防災意識をつけることで、未災者が未災者に震災の教訓を伝えるという語り継ぐができたため、3年間ボランティア活動をしてきた中で1番印象に残っている。

5 視覚特別支援学校での交流・共同学習

私がこの3年間で1番印象に残っている出前授業は1年生の時に参加した兵庫県垂水区にある兵庫県立視覚特別支援学校での交流・共同学習だ。

災害時の避難生活では身体に障害を負っている方との共同生活も必要になる。視覚障害者の方は目が見えていない分、行動範囲も限られ、視覚での情報収集が困難になる。このような避難生活での課題を目の見える人と目の見えない人との両方の視点から考えた。

この視覚特別支援学校では視覚が全く機能していない視力障害の生徒から、周囲はぼんやりとは見えているが中心は見えない生徒、反対に中心は見えるが周囲が見えない視野障害の生徒などがある。生徒ひとりひとりの障害の種類も違い、見え方も違う。そのような生徒と環境防災科の生徒対抗でパラスポーツのゴールボールを体験した。ゴールボールは3人対3人で行い、アイシェイドという目隠しをつけ鈴の入ったボールを相手ゴールに転がし、その得点で競い合う競技である。1976年のトロント大会で正式種目となったパラスポーツを1度は見たことがあるのではない。その競技を見る側からする側になり競技を行った。競技者はアイシェイドを装着するため視覚は完全に遮断され、聴覚と触覚だけで転がってくるボールの位置を把握することが非常に難しく、聴覚と触覚を研ぎ澄ましてボールを受け止める感覚を生まれて初めて体感した。対照的に視覚特別支援学校の生徒は空間把握能力に優れており、転がしたほとんどのボールを体で受け止めることができている、その姿にさすがだなと圧倒された。

ゴールボールを体験した後は、環境防災科の生徒と視覚特別支援学校の生徒で災害時や避難所生活の視覚障害者の課題についてグループワークを行った。ここで話し合った中から1つに絞って紹介する。避難所生活で困りそうな事について話し合っている時に、視覚特別支援学校の生徒から「目が見えないから貼り紙が貼られても文字は見えない」という意見が挙げた。目が見える人からしたら貼り紙を貼られていたら当たり前のように情報収集ができるが、目が見えない人からしたら貼り紙の存在すら気付かない。この実情を知った時に共同生活の難しさを実感した。貼り紙で情報収集ができない場合はアナウンスで知らせるなどの工夫が必要なのだと知ることができた。これは、視覚障害者の方に限らず全員が安心、そして安全に避難生活が送れるために、事前に心身の状態に合わせた準備が大切なのだと学ぶことができた。

6 将来の夢

私は警察官になりたいと考えている。私が中学生の頃、姉が航空自衛官として働くようになった。業務内容を聞く中で過酷な訓練を乗り越えて国民の安全を守っている姉の姿に憧れを持つようになり、人の命を守る仕事に興味を持ち警察官を目指すようになった。舞子高校環境防災科に入学したのも、防災について学び、警察官として地域住民への防災啓発や災害時に冷静で適切な災害対応を行いたかったからだ。

2020年には、東京五輪の開催国として日本が世界中から注目されるようになり、公共の場での衛生面や美意識の高さなどで称賛された。その一方で警察の警備体制が問題視されるような事件も起こった。日頃訓練をしている人でも、守れない命もある。防災も同じで、日頃から避難訓練や危機管理を心掛けていても、いざ災害が起こったときに適切な行動ができるとは限らない。肝心なのは起こりえる災害をどれだけ予測し、想定外の事態を起こさせないということが大事だ。目まぐるしく変わる社会情勢の中で治安維持のため、身を挺して人の命を守る警察官の姿に感銘を受けた。3年間で学んだ防災の知識を活かし、自分以外の人の命を守ることでできる警察官になりたい。

7 最後に

「語り継ぐ」を執筆するにあたって、初めて祖父母に阪神・淡路大震災について話を聞いた。話を聴く前に震災の嫌な記憶を思い起こさせないか不安だったが、聴いていく中で私達の体験をもっとたくさんの人に知ってほしいと話してくれた。視覚障害者の視点で避難行動や、避難所生活、災害弱者としての苦労など身体の障害によって起こってしまう様々な弊害を話してくれた。この「語り継ぐ」を執筆できたのも、ボランティア活動ができるのも、3年間で多くの人の支えや協力があつたからだと改めて感じた。

環境防災科での学びを通じて分かったことは、日本にいる以上、必要最低限の防災知識は必要だということだ。環境防災科に入学していたから、講義やボランティア活動などを通じて、事前準備の大切さや、職業ごとの災害対応を学習する機会がある。しかし専門的に防災を学んでいなければ災害時の心のケアや適切な避難行動などを知る機会がない。そのようなときに舞子高校環境防災科を通じて防災について知ってもらえれば嬉しい。

また、ボランティア活動で防災壁新聞を地域の方々に説明した際に、「勉強になった」「知らなかった」と言う人もいる。南海トラフ巨大地震や今後起こる自然災害で被害を最小限にするためにも、更に防災について知ってもらふ必要があると感じた。だからこそ3年間学んできた防災に関する知識や被災者の方々の体験を無駄にすることなく、色んな形で語り継ぎ、地域コミュニティの拡大と共に自分自身も成長していきたい。

未災者が語り継ぐ

田川 昂

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分阪神・淡路大震災が発生し、死者6434名、行方不明者3名と大きな人的被害をもたらした。あの日から29年が経ち、神戸には地震の面影はほとんどと言っていいほどない。同時に阪神・淡路大震災を経験していない未災者も増え、記憶が風化している。私も阪神・淡路大震災を経験していない未災者の一人だ。どうしたら阪神・淡路大震災の記憶は風化されないのか。私たち環境防災科が阪神・淡路大震災の記憶を語りつぎ、後世に継承していく必要がある。そして、今後起こるとされている南海トラフ巨大地震に備え、過去の教訓を活かしてほしい。

2 阪神・淡路大震災

(1) 父の話

父は当時、小学生で神戸市内に住んでいた。寝室で寝ているとゴースという音が聞こえ目を覚ました。その直後、大きな揺れを感じた。生まれて初めて地震の揺れを体験し、怖くて動けなかった。それを隣で寝ていた両親が気づき、覆い被さる状態で守ってくれた。地震の揺れは15秒間くらいと言われているが体感はずっと長かった。揺れはおさまり外が明るくなってくると、部屋の物が少し散らばっているのが見え始めた。幸い部屋にはタンスなど倒れると危ない物を置いてなかったのも、家族は怪我なく済んだ。

外も明るくなり部屋から出た。当時、電気は使えたが水道と都市ガスは止まってしまった。都市ガスは止まっていたが、父の住んでいる地域はプロパンガスを使っていたのでガスは使えた。水さえあれば生活はできるが、水道は2週間程水が出ず使えなかった。そのため、給水車まで水を貰いに行っていた。給水車の水は取り合いになることはなく、地域の人と分け合って使った。貰った水は食事の時に使ったり、お風呂にも使用することができた。お風呂の水は毎日捨てるのはもったいないので、2日～3日は同じ水を使っていた。

地震が発生してから2週間は学校が無かった。父の住んでいる地域は、他の地域に比べて被害は少ない方だったので小学校に避難してくる人はいなかった。そして、2週間後には学校が再開した。学校が再開すると2週間会えなかった友達に会えて、安心感と嬉しさでいっぱいだった。

(2) 母の話

母は当時、小学生で兵庫県外に住んでいた。地震の揺れを感じることもなくいつも通り起床した。リビングで朝ごはんを食べているとテレビで神戸の様子が映り、地震があったことを知った。映像では、燃えている長田の町や倒れている高速道路が映っていた。テレビを見た第1印象は「これは本当に神戸の映像なのか」と現実味は無かったようだ。連日、テレビで神戸の映像が流れており、地震が起きたことを実感した。理解するのには少し時間がかかった。

(3) 父の話を聞いて

父の話を聞いて、今まで父と阪神・淡路大震災について深く話したことがなかったので、とてもいい機会となった。父が震災当時のことを語ってくれている時は、いつもとは違う表情、言葉使いだった。

初めて父に阪神・淡路大震災当時のことを聞き、感じたことは「今、当たり前のように生活できているのは当たり前ではない」ということだ。災害はいつくるかは分からない。阪神・淡路大震災当時も神戸は地震が起きないと言われていた。しかし、それではいけない。災害がいつ起きても生きのびるために対策しておく必要がある。南海トラフ巨大地震もほぼ確実に起きると言われている。阪神・淡路大震災の教訓を生かし、少しでも南海トラフ巨大地震での被害を減らしていかなければならない。そのためにも舞子高校環境防災科が、防災・減災について語り継いでいかなければいけないと感じた。

(4) 母の話を聞いて

母の話を聞いて、他の地域で大きな災害が起きても実感できないのだということを感じた。私も実際に同じ体験をしたことがある。私が5歳の時に東日本大震災が発生した。当時、テレビで津波が押し寄せている映像を見て「本当に同じ日本で起きているのか」と実感できなかった。そして、地震が発生し

てから毎日東北の映像が流れているのを見て、地震が発生したことを理解することができた。理解することはできたが、当時の私は少し他人事だと思っていたように思う。今後、もし災害が発生してしまったら環防生として少しでも被災した人や被災地に貢献できるようになりたいと思った。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私は、環境防災科に入学するまで災害や防災の知識はあまりなかった。中学卒業後の進路を悩んでいる時に親から環境防災科について教えてもらった。当時、私は人の命を守る消防士に憧れをもっていたということもあり、環境防災科に興味を持った。どういう学科なのか調べていくと防災について深く学び、ボランティア活動にも力をいれているということが分かった。防災やボランティア活動に興味を持ったことや、卒業後の進路のひとつに消防士になれるということを知り、環境防災科への入学を決めた。

(2) 入学後

環境防災科での3年間はとても充実していた。クラス替えが無かったこともありクラスの仲を深めることができた。

1年生では、消防学校に体験入校したり、多くの方々に講義をしていただいたりと、環境防災科でしか学べないことを多く学べてとても勉強になった。特に、消防学校では貴重な体験ができたと思う。規律訓練やトレーニング、消防士の体験談などを学ぶことができた。中でも規律訓練はとても厳しかった。1人でもミスや遅れがあると、班のメンバーに迷惑をかけてしまう。迷惑をかけないためにも一人一人の行動の大切さを知った。

2年生になると高校生活にも十分慣れると同時に、後輩もできて日頃の行動も意識し始めた。2年生では、長田のまち歩きや2回目の消防学校にも行った。長田のまち歩きでは、実際に長田の街を歩いて道路や家の造りなどを知ることができた。その中でも1番印象に残っているのは大国公園だ。実際に阪神・淡路大震災の時に建っていた街灯がそのまま残っていて、上の方が黒く焦げているのを見ると阪神・淡路大震災の被害がどれだけ大きかったのかを確認することができた。消防学校では、放水訓練など実際に消防士の体験をした。

3年生になってからは、進路や将来について考えることが多くなった。今まで、深く考えたことがなかったのも、とても貴重な時間になった。

4 環防での様々な活動

(1) 交流・共同学習を通して

私は部活の関係でボランティアに参加をすることが少なかったが、冬のオフシーズンに参加するように心がけた。1年生の時は緊張してあまり自分から話すことができず、言われたことしかできなかった。2年生では先輩に頼ることもあったが、少しずつ自分から考えて行動することができ、やりがいを感じるようになってきた。私は、1年生の時あまり自分から話せなかったため、後輩には自分から話しかけることも心がけた。

私が1番印象に残っている共同学習は、1年生の時に初めて参加したボランティアの視覚特別支援学校の生徒との交流だ。この交流では、グループワークでの話し合いやゴールボールを体験することができた。ゴールボールとは1チーム3人の選手が、鈴の入ったボールを転がすように投げ合って、味方ゴールを守りながら、相手ゴールにボールを入れて得点を競う競技だ。グループワークでは、視覚障害のある方と災害が起きた時に何が困るかを話し合うことができ、自分では気付くことができない問題も気付くことができた。それは、避難する時に地面が割れていたら点字ブロックも割れてしまい避難することができないということだ。この問題も視覚障害がある方の本人の意見が無かったら気づくことができなかったのも、貴重な経験ができたと思う。ゴールボールでも実際に体験することで新たな発見をすることができた。それは、周りが見えない不安と聴覚だけで判断する難しさだ。ゴールボールでは、目にマスクを付けるので周りを見渡しても外の景色をみることはできない。情報を聴覚だけで判断しなければならない。ボールの中の鈴の音が聞こえてきた方向に飛んでも、実際には全く違う所に転がっているということが何回もあった。実際に体験をしてみて目が見えない不安・怖さ、聴覚で判断する難しさを改めて知ることができた貴重な経験だった。

(2) 交流学习 (以下「こばと」と表記)

私は出前授業で1年生と2年生の時に、こばと聴覚特別支援学校の子どもとの交流に参加した。1年生では、こばとに行き子どもたちと防災学習を一緒にする予定だったが、コロナの関係で行くことができなかった。そのため、学校で劇の動画を撮影し、こばとに動画を送ることになった。劇は、地震が起きた時の行動をテーマにした。こばとの園児は聴覚に障害があるので、劇では手話と大きな動作をして伝わるようにした。私は初めて手話をするので最初は自分の自己紹介を覚えるだけでも難しかった。だが、日を重ねるうちに覚えることができ、劇でもスムーズに手話ができるようになった。本番でも焦らずやることができ、無事終えることができた。

2年生では、1年生の時にこばとに行くことができなかったため、次こそはという思いで参加した。2年生では、こばとに行くことができ紙芝居をすることになった。紙芝居では大雨が降った時に川の水位が上がり氾濫してしまうということをテーマで作成した。1年生の時よりも手話を覚える量が増えて難しかったが、落ち着いてやることができた。本番前のリハーサルで変更点も多かったが、臨機応変に対応できたのは自分の成長だと思う。

こばとの子どもとの交流に参加してとても印象に残っていることがある。それは、「こばとの園児達は耳が聞こえない分、自分から積極的に覚えようと頑張っている」と、こばとの先生が言っていたことだ。私はそのことを聞いて、耳が聞こえるのは当たり前じゃないのだなと感じた。自分が幼稚園の時は、覚えようと思っていなくても耳から音が入ってくるので簡単に覚えることができた。しかし、世の中には耳が聞こえない分、努力している人がいるということを改めて知ることができた。私が普段当たり前のように聞こえている音も、当たり前じゃないということに気づくことができ、貴重な経験と気づきができたと思う。

(3) 募金活動

私は1年生の時に人生で初めての募金活動に参加した。コロナと最前線で戦っている医療従事者に向けての募金活動を垂水駅で行った。募金活動をしてお金を寄付してくれる人への感謝を感じることができた。最初はお金を入れてくれるか参加するまで不安だったが、実際に終わってみると、多くの方々が私たちの呼びかけに答えてくださり、とてもやりがいを感じられた。そして、募金活動に参加してとても貴重な経験になった。今後、募金活動をしている人を街中で見かけたら少しの額でも募金していきたいと感じた。

(4) 防災訓練

2年生の冬に多聞の丘小学校での防災訓練のボランティアに参加した。防災訓練では、災害時の担架の作り方・運び方や消火器の使い方などがあった。私は、災害時の担架の作り方を担当した。防災訓練を通して感じたことは、説明の難しさだ。小学生の前で説明するのはとても難しかった。中でも、低学年の生徒よりも高学年の生徒の方が教えるのが大変だった。低学年の子は積極的に体験したいと多くの子が手を挙げてくれたが、高学年の子は控えめな生徒が多く、体験してくれる子が少なかった。今後、また教える機会があれば積極的に話していき、体験してくれる子を増やしたい。他にも、自分が理解できていてもそれを言葉にする難しさがある。特に、細かい所までを教えるのは大変だった。今後、また小学生などに教える機会があればこの経験を活かしていきたいと思った。

5 南海トラフ巨大地震

近い将来、南海トラフ巨大地震が起これと予想されている。南海トラフ巨大地震はM8～M9クラスの海溝型地震で、2023年6月時点で30年以内に70%～80%の確率で起これと予想されている。政府が2019年5月に発表したデータによると、死者23万1,000人、全壊または焼失する建物は209万4,000棟と予測されている。また経済被害は東日本大震災の10倍以上となる220兆円を超えると想定している。このような災害がいつ起きてもおかしくない状況の中で、私たちや被害が起きると想定される地域に住んでいる人は、被害を少なくする対策を考えなければならない。まずは、自分が住んでいる地域のハザードマップを確認しておくことが大切だ。自分が住んでいる地域でどこが危険なのか事前に知っておくことが必要だ。また、東日本大震災と同様に津波の被害が大きいと予想されている。地震が発生したら、住んでいる地域で予想されている津波の高さよりも高い場所に避難できるように、日頃から対策しておく必要がある。他人事ではなく自分が被害にあうことを想定して考えてほしい。そして、東日本大震災での経験を活かし被害を少しでも減らしていきたい。

6 最後に

私はこの「語り継ぐ」を執筆するにあたり、両親から阪神・淡路大震災当時の話を聞くことができた。今までにも両親に当時の話を聞くことがあったが、ここまで深く話を聞いたことはとてもいい経験になったと思う。今後、今回のように当時の出来事を深く話しあうことがあるかは分からない。

私は「風化」というものは時間が経っていくにつれて起こるもので、防ぐことができないと思う。そこで、私たちが被災者の話を聞き、後世に語り継ぐ必要がある。語り継ぐことで、災害を経験していない世代に過去の災害を知ってもらえる機会が増えると思う。そして、環境防災科で学んだこと、経験したことを活かし後世に語り継いでいきたい。

震災を忘れない

立道 大貴

1 はじめに

阪神・淡路大震災発生から 29 年。被災を直接経験した人達は減少している中、この地震について日本国民のどれくらいの人たちが知っているのだろうか。私は、環境防災科に入学する前、阪神・淡路大震災といえば高速道路が倒壊した映像と、多くの長田区民が火災によって亡くなったことしか知らなかった。環境防災科に入学して、たくさんの講義や語り部さんの話を聞いて、私は過去に起きた災害は絶対に忘れてはいけないということを学んだ。阪神・淡路大震災について環境防災科で学んできたことを今、私の「語り継ぐ」を読んでいる人たちや、その次の世代の人たちにも知ってもらいたいという思いで、私は執筆していく。

2 阪神・淡路大震災当時の両親の話

(1) 父の話

地震の揺れで目が覚めて、まず布団の横にあったタンスを押さえた。揺れがおさまったあと、家族の安否確認をすると食器類が割れており、祖母がパニック状態であった。家族全員を落ち着かせた後、情報を得るために車に乗ってラジオを聞いた。長田区の情報を知った父と祖父は曾祖母が住む長田区の家が火事になっていることを知り救助に向かったが、渋滞をおそれ向かっている途中であきらめて家に引き返した。垂水区の本多聞に父は住んでいたが、長田区の火事の灰が降ってきたり、火事の匂いがしたりした。午前 10 時ごろに電気が復旧したため、テレビで高速道路が倒れたことや地震のことなどの情報を得た。近所の人にトイレを 1 回貸して以来、水が流れなくなってトイレの使用ができなくなった。そのため、酒屋にいったり水を買ったり水道局に夜中並んで水をもらいに行ったりした。地震から 2 日後、父は長田区の避難所にカセットボンベを届けるために、三木市や小野市に行ってガスボンベを買い届けに行った。神戸市役所近くの父の仕事場はつぶれていた。地震から 1 週間後に会社から建物の中にあるものを出してほしいと連絡があり、お客様の郵便物を取り出した。祖父は火事で家がなくなった曾祖母が避難している小学校に救援物資を届けた。高齢であった曾祖母は避難所生活が困難であったため父の家に半年ほど住んだ。テレビには温泉の運営情報や水の情報が放送された。お風呂に入るために温泉にいったり、会社の風呂に入ったりした。父のところには救援物資が 3 月ぐらいまで来なかった。親戚や会社の知り合いから食料や食器をもらった。父は阪神・淡路大震災で被災して、人と人とのつながりの大切さを感じた。

(2) 母の話

地響きが 30 秒あり、縦の大きな揺れでとっさに母は布団をかぶった。寝ている頭部近くに本棚があったが布団をかぶっていたため、本棚のすりガラスの破片が体に刺さることはなかった。1 階に曾祖母がいたため見に行くと靴を履くように指示があった。そして、祖父と祖母の安否確認をした。懐中電灯を母は探したが、普段おいている場所にはなかったため携帯電話のライトを利用して探し出した。祖母はタンスとタンスの倒れた間の隙間に奇跡的にいたためケガすることなく、靴とコートを身に着けて近所の公園に避難した。公園の前にある理髪店から助けを求める女性の細い声が聞こえたため、大人の男の人たちで瓦礫をどかして女性を助けた。災害から 2～3 日後に避難していた近隣の公園に行政の人が来て、避難所を小学校に移してほしいと言われた。高齢者がいて大人数の移動が難しいため、行政の人に一時的な避難場所にしてほしいと祖父が頼んだ。一時的に避難場所に認められたため自衛隊が来てテントとお風呂、食料、給水タンクなどが提供された。公園に集まっていた人たちが家から材料を集めて、スープをみんなで作った。母が住んでいた家は火事もなく一部損壊程度ですんだ。大阪で仕事をしていた母は会社と 1～2 週間連絡が取れなかったが、1 か月後に電車とバスを利用して仕事場に行った。家は修復したが次の南海トラフ巨大地震で全壊するといわれているので、備えをしておくことが大切だと考える。近くのビルが斜めに傾いていたため火が母が住んでいる町に移らなかった。そのビルの 1 階がつぶれてしまいビルに住んでいる人たちから助けを求める声があったが、そのビルに火が移ってしまったり強い余震が立て続けに発生したりしたため助けることはできなかった。

3 話を聞いて

私は両親の話を聞いて人と人のつながりと助け合いがとても大切だと教えられた。災害時、近隣の方や親族からの支援物資をいただくために人と人とのつながりがとても大切なので、日頃から近隣の人との交流や身近な人とのつながりを大切にする。これから起こるといわれている南海トラフ巨大地震に備えて家族で災害についての話をする場を設け、防災の意識を家族と一緒に高めていくことが大切だと思った。

4 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科に入学を決めた理由は父の勧めがあったからだ。幼いころから消防士になりたいという私の夢を知っていた父から環境防災科を教えてもらった。そこから私は学校のホームページを見たり、オープン・ハイスクールにも参加したりした。私に声をかけてくれた中学校からの先輩と話をしたとき、とても分かりやすく説明してくれたことが今でも印象に残っている。私も先輩のように話す力を身につけ、防災について勉強して消防士になるという夢を叶えたいと思った。

(2) ボランティア活動

私は、ボランティア活動をさせていただいてたくさんのことを学んだ。募金活動では人の温かみを感じることができた。私たちが大きな声で呼びかけをしていたら多くの人からお金だけでなく、応援をいただいた。その募金活動を終え、私自身、今まで募金をあまりしてこなかったがコンビニエンスストア等に行ったとき、少ないながらも募金をする心をかけるようになった。この活動を通して募金をしてもらえる嬉しさと困ったときは助け合うという募金の大切さを学んだ。

(3) こばと聴覚特別支援学校との交流・共同学習

私は将来消防士になったとき、耳に障害がある方を救助するときにコミュニケーションがとれるようになりたいと思いがありこの活動に参加した。1年生の時は新型コロナウイルス感染症防止のため、こばとの子どもたちと交流をすることができず、津波についての劇を動画で送ることになった。慣れない手話に戸惑っていた私に、おすすめの手話の動画を3年生から教えていただき、私は自分の役を無事やりきることができた。3年生が劇に参加できなくなってしまったが、当時の2年生の先輩方が指揮をとっていたおかげで動画が完成した。私は臨機応変に対応してくれた先輩を見て、また、この活動に参加したいと思い2年生でも参加した。この年は、こばとの子どもたちと交流することができた。そこでは、紙芝居をしたり、一緒に綱引きや鬼ごっこをしたりして遊んだ。子どもたちは聴覚に障害があるが、全く音を聞き取れないというわけではないため、私たちが手話を行いながら、大きな声と口の動きを利用することで何とか紙芝居の内容を伝えることができた。遊びでは、私は子どもと交流することがあまり得意ではなかったが、一緒に遊ぶことで一人一人の性格が理解でき、仲良く遊ぶことができた。ここで学んだ手話は、将来にも生かすことができる。まだまだ私が知らない手話がたくさんあるのでもっと学びたいと思う。

(4) 出前授業

私は出前授業で多聞東小学校と、多聞の丘小学校と伊川谷小学校に行った。多聞東小学校が初めての出前授業で、shakeoutについて授業をした。子どもの目線と合わせて話をしたり一緒にshakeoutの動きをしたりした。思いのほか、小学生がたくさんの知識を持っていて、問題を出題したらすぐ答えていた。全国の小学生が多聞東小学校の子どもようになってほしいと思った。

多聞の丘小学校では、救急の担架づくりについて授業をした。事前準備や確認が先輩方とできていなくていきなり本番で私は困惑してしまった。消防士の方に助けてもらいながら授業を終えたものの、私の中ではとても後悔した出前授業になった。そこから学んだことは、事前準備の必要性だということだ。

伊川谷小学校では、防災すごろくと防災バックの授業をした。小学生の元気の良さで授業はとても楽しく行うことができた。前回の失敗を踏まえて事前準備をしっかりと行った。私は他人と比べて説明をしたり授業をしたりなどが得意ではなかったけれど、3年生からいろいろなアドバイスを受けてよい授業をすることができた。説明や授業などこれからどの職業に就いても必要になってくるので、とても貴重な経験をすることができた。

(5) 神戸市消防学校体験入校

1年生の時、消防学校で規律訓練や集団行動をした。これらは消防士にとって基礎基本で、特に規律訓練は災害現場に行った際には、全員の安否確認を確かめる手段として行われている。私の班では規律訓練について消防士の方から教えていただきながら何度も繰り返し練習をした。その他にも消防士の方と一緒にトレーニングしたり消防士についての講義を受けたりした。講義では、消防士の構成について学んだ。初めて知ったことがたくさん出てきたためもっと消防士について自分で勉強しなければならないと気づかされた。トレーニングでは、腕立て伏せや腹筋そしてフェニックスというトレーニングなどを行った。腕立て伏せができて声が出ていないから数に含まれなかったり、途中で状態をキープさせられなかったりしたためともしんどかったが、みんなで声を出してそのトレーニングを終えて協力する大切さを学んだ。

2年生では、放水訓練を行った。小隊長になった私は去年の規律訓練や集団行動を思い出しながら放水の時には指揮をとった。小隊長として指揮を出す難しさと指示の量がとても多くて戸惑った時もあったが、班員が教えてくれたおかげで小隊長を無事にやり抜くことができた。1年生の時より実践的なことをやらせていただいたおかげで、消防士に対する興味関心がさらに湧いた。

(6) 神戸市消防局垂水消防署体験

私は1, 2年生ともに垂水消防署へ行った。消防士にかかわってくる法律、火災についての講義や査察の体験、訓練をおこなった。消防士には多くの法律が関係していて危険物を扱うときにも制限などがあることを知った。事故現場を想定した訓練では、日々私たちが安全に暮らせるように仕事をしている姿を見てとても勉強になった。消防士を目指している私にとって、とても貴重な体験になった。

5 将来の夢

私の将来の夢は消防士になることだ。消防士とは、地方自治体の消防本部や消防署に所属し、火災の消火や救急によって、人々の安全を守る職業だ。消防士になろうと思った経緯は、父に消防士について教えてもらったことからだ。消防士の中でも私は、レスキュー隊員になりたいと考えている。きっかけは、西日本豪雨災害のニュースで、消防士の方が救助活動をしている姿を見て、あこがれを抱いたからだ。私は、自分の長所である明るさを生かして多くの市民を助け、安心させられるような声をかけられる消防士になる。そのためには、地域との交流を大切にしたい。私は、環境防災科であったことを武器に多くの人に防災の大切さを知ってもらおうと思う。私は地域に愛される消防士になる。

6 新型コロナウイルス

私は新型コロナウイルス感染症も災害の一つであると考えている。流行する前は当たり前のようにできていたことが不可能になり、私たちの生活に大きな影響を与えたからだ。現在は、たくさんの規制が緩和され元の生活に戻りつつあるが、地球温暖化や南海トラフ巨大地震など、今この日本はいつ・どこで・どんな災害が起こるかわからない。避難所生活を余儀なくされたとき、個人のプライバシーも保護しながら感染対策もしていかななくてはならない。私はこの新型コロナウイルス感染症を機に日本の防災意識を高める必要があると考える。感染対策を意識した避難生活をするために一人一人が防災バックの準備をしておきマスクやウェットティッシュを入れておくことが必要になる。

7 講義

私はたくさんの講義を受けて多くの職種の人たちが災害や防災・減災にかかわっていることを知った。私はその中でも高齢者疑似体験の講義が特に印象に残っている。想像以上に体が動かなくて視界もぼやけていたことを今でも覚えている。今の日本は少子高齢化が進んでいて、一人暮らしをしている高齢者も多いので、避難する際には、近隣の方の協力がとても必要であると思う。私の近隣の人たちの中にも高齢者がたくさんいるので、日ごろから挨拶をして交流関係を深めなければならないと実感した。

8 最後に

「語り継ぐ」を書いて、環境防災科で学んだことを振り返ってみると、普通科では経験できないことをたくさんさせていただいた。私自身、入学前の自分と比べると防災に対する意識が増し、災害に対する向き合い方も変わった。現在、阪神・淡路大震災を経験した人が減り、未災者が増えていく中、同じような災害が風化しないためにも過去の災害を知り、防災に生かすということはとても大切である。環境防災科

に入学して、過去の災害について勉強をしてきたが、この 30 年以内に 70%～80%の確率で発生するといわれている南海トラフ巨大地震は、今までの災害とは比べ物にならないほど大きな被害をもたらすと予測されている。私の「語り継ぐ」を読んでいただいた人たちすべてが防災に対する意識が向上してくれればという思いを残して私の執筆を終了とする。

「ともに繋ぐ」

田畑 元稀

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災が発生し、たくさんの命が失われ、街並みが破壊されることとなった。震災発生から10年後に生まれた私は震災を経験していない。私と同じように震災を経験していない人は多くいる。これからもたくさんの災害が起こることが予想されており、私たちはその災害に対処することが必要になる。少しずつだが、被災者の経験や知識、思いなどが失われつつある。その被災者の教訓を無駄にしないために、震災を経験していない未災者に向けて正確に語り継ぐ必要がある。そしてこれから起こる災害に対して大きな被害を出さないよう、少しでも減らすことが重要になってくる。

2 阪神・淡路大震災

(1) 父と母の話

震災当時、私の家族は父と母と当時1歳の兄の3人で西宮のマンションに住んでいた。震災当日の朝、突然ドーン！と突き上げるような衝撃で母は目が覚めた。その直後ゴゴゴゴという音と共にマンションが左右にゆっくりグワン…グワン…と大きく揺れ、体験したことのない大きな揺れに「あかん！マンション倒れる！！」と恐怖のあまり母は体が動かなかった。父の「地震や！！」の声で寝ぼけてボーっとしている兄を母が抱きかかえ、布団の中に潜り込み、揺れが収まるのを待った。揺れが収まると布団から立ち上がり、部屋の電気をつけようとしたが、停電でつかなかった。外からは人の話し声が聞こえ、窓から覗くと、民家の屋根が崩れている様子や、建物の外へ避難している人たちが見えた。外はまだ暗かったが、父たちも外へ出ることにした。外へ出ると、どこかでガス漏れが発生していて、ひどくガス臭かった。父は動揺していたのか、落ち着こうとタバコに火を点けようとしたため、母が慌てて「ガス漏れてるのに、火使ったらあかん！」と止めたと言っていた。停電で電話が使えないので、尼崎の母の実家まで車で様子を見に行くことにした。信号は全部消えていて、道路には亀裂や陥没しているところもたくさんあった。道路はどれも大渋滞で普段の倍以上の時間がかかった。母の実家は、増築部分が傾き、1部屋使えない状態だったが、全員怪我無く無事で安堵した。父の実家は稲美町で、阪神高速道路が倒壊して使えないため、六甲山方面から下道を使って行った。父の実家は大きな被害はなく、みんな無事だった。自宅のマンションは壁面にヒビが入り、電気、ガスが使えなくなっていた。震災後も大きな余震は続いていたため、マンションで母と幼い兄の2人でいるのは不安で、父の職場近くの先輩の家に1週間ほど避難させてもらった。その後も、ライフラインが使える大阪の先輩の家に避難させてもらった。父と母はみんなに助けてもらって有難かった、感謝しかないと言っていた。

(2) 父と母の話を聞いて

私は今回の「語り継ぐ」を書くにあたって、初めて両親の被災体験を詳しく聞いた。今までたくさんの阪神・淡路大震災を経験された方からお話を聞いていたが、自分に一番身近な存在である両親の体験談は重みが違った。両親の体験談は身近にいる人であり、人物像が分かるので、とても共有しやすいものである。自ら被災体験を話したくない人がいる中で、話をしてくれた両親に感謝し、語り継いでいくことが大切だと思う。話を聞いて、震災が起きた後は冷静な判断ができなくなる可能性があるを知った。ガスが漏れているのにも関わらずにタバコに火を点けようとしてしまう。もしここで火を点けてしまっていたら、両親はおろか、周りの人たちも巻き込んでいたかもしれない。火を点けようとしていた父を止めた母は命の恩人だと思う。それは、私が今生きているということは決して当たり前ではないことだと改めて知ったからだ。あの時父が被害を大きくしていたら、私は生まれていなかった。だから今の自分が毎日元気に暮らせていることに当たり前という気持ちを持たず生きていることに感謝したい。

3 環境防災科

(1) きっかけ

舞子高校環境防災科に入学したきっかけは、消防士である兄に憧れて消防士になろうと思ったからだ。私は人の役に立ちたい、人のために働きたいという思いがあり、消防士は自分の思いを叶えられると思った。その目標を叶えるには環境防災科に入学し、防災に関する知識はもちろん、消防学校体験や

ボランティア活動を行っていくことが必要だと考えた。その経験から地元で防災について伝えていき、今よりもっと防災対策の取れた町づくりをしたいと思い、環境防災科を受験することにした。

（２）入学して

環境防災科に入学して変わったことは避難訓練に対する考え方だ。もともと中学校でも避難訓練を行っていた。しかし、環境防災科に入学してから、避難訓練をしてみると、自分が今までしてきたものは意識が低いものだったと気付かされた。今までの自分だと、喋りながら避難をしたり走って避難をしたりしていた。それは実際に災害が起きた時のことを想定しながら行ったものではなく、ふざけてしていたからだ。だが、環境防災科で避難訓練を行ってみると、あらかじめ決めていた避難経路にするのではなく、ドアを塞ぐことで決められていた避難経路を行けないようにする取り組みや、先頭の人がビブスを着て誘導することなど、中学校ではしていなかったものばかりだった。その意識の違いからもっと災害や防災について学びたいと思うようになった。

（３）ボランティア活動

入学する前、私は誰かのために募金活動を行ってみたいという思いがあった。自分が募金活動することで被災された方々の支援になることが誇りなのだと思っていた。しかし、ボランティア活動を行っていく中で自分の考えは違っており、行かせてもらっている、学ばせてもらっているという考え方に変わり、入学前に考えていたただ行ってみようというのとは自分の一時の感情に過ぎないことが分かった。

（４）募金活動

募金活動に参加し始めた頃は緊張してどう声を出したらいいのかかわからず、「募金よろしくお願いします」としか言えなくて声も小さめだった。だが、募金活動を行っていると「頑張って」「募金します」と温かい声をかけてくださる方がいた。そのとき私は緊張から解放され、頑張ろうという気持ちが出た。そして募金活動から、私は声掛けのありがたさについて学んだ。今度は自分が応援する側や募金活動をしている人に声掛けをするべきだと気付かされた。

（５）出前授業

出前授業では小学校、中学校を対象とした生徒に災害や防災について授業を行った。この活動でも私は多くのことを学ばせていただいた。それは相手の立場になって考えることだ。初めて出前授業をしたときは緊張をして、なかなか声を出して交流をすることができなかった。小学生・中学生の知識量が自分の思っていたよりも多く、発想が豊かなため、自分では思いつかなかった答えが出てしまい、思うように答えることができなかった。その他には小学生同士で喋ったり、中学生同士で喋ったりするので、自分は黙ってしまった。その時先生に声をかけていただいた。「もっと積極的に生徒と学ぶ」と言ってもらい、考え方が変わった。授業をする側は教えること以外に学ぶこともするのだと。それから私は喋りかけられるようになった。まずは自己紹介や最近の話題を話すことで仲良くなり、話しやすい関係にすることで、お互いに距離感を感じさせないようにした。片方が意見を出すだけで学びの場を狭めるのではなく、お互いに意見を出し合い、考えたことを整理することで、小学生や中学生が間違った情報を鵜呑みにすることなく出前授業を行うことができた。あの時に先生から声をかけていただいたから、私は出前授業をより良い形でやり遂げることができた。

（６）舞子ビラのワークショップ

ワークショップではその時その時に災害が起こった時にどう対応するのかについて意見を交換し合った。自分の災害経験から対策すべきことを考えた人や、災害を経験していないが、とある事例から考えた人などいろいろな考え方が見られた。普段では話す機会がない方と災害について話し合えることは重要なことである。地域の方々とこのようなイベントや行事を行うことで、コミュニケーションを取ることができ、これで地域の防災力を高め、災害に強い町づくりへ繋がると考える。そのため、ワークショップは地域の方々と話し合えるきっかけだと分かり、そして地域との交流の大切さについて知れた。ワークショップで地域の防災力を高めていくことは、今後起こる大規模災害の被害を減らす、減災への第一歩であると思う。

4 夢と防災

(1) 自分の夢

私の将来の夢は前述のとおり消防士になることだ。消防士になろうと思った理由は、兄が消防士で私も同じように人を救うことに憧れたからだ。小学生の頃に消防士の仕事紹介が加古川市で実施され、ヘリコプターを使った消火活動や、ハシゴを利用し2階まで素早く登って救助活動をする消防士を見て、消防士という人を救う仕事の魅力について知ることができた。

消防士の仕事で消火活動や救助活動が目立っているが、火災など未然に防ぐために建物や消火設備の検査や、防災訓練の指導などを行う予防活動や防災活動を私は大切にしたい。そのためには、地域の防災計画の立案や火災予防の意識を高める啓発活動、会社や学校、地域で行う防災訓練の指導を行うことで防災力を高めることが必要である。震災は消防団を中心とした行政機関と住民の連携によって被害を最小にすることができる。そのため、住民を中心とした防災活動を行うこと、消防団との連携を図ることは必要になり、消防士の予防活動から地域との連携が大事なのだと考える。

(2) 消防士と防災

私が消防士になった場合は火災や水難事故などが発生しないよう、地域住民の防火・防災意識を高める取り組みをしていきたい。啓発活動や指導などを行い、自治会や小中学校の防災訓練への参加や、消防署の施設見学など、さまざまな活動を通して火災や災害を防止する活動を行っていく。消火器を使った消火体験や実際の火災現場を想定した煙体験訓練、地震の揺れを体験できる起震車による地震体験など、リアルな体験ができる場を提供することで防災活動を行うことが重要だと思う。環境防災科で学んだことを今度は、私が教える立場になることで幅広い年代に防災活動について興味をもってもらいたい。興味を持つことで家族や友達に話すきっかけになり、住民全員が防災意識を高めようと思ってもらうことで減災へと繋げたい。防災活動を行う上で大切なことは、被害を最小限に抑えること、生徒たちが周囲の状況から避難するときにどう行動すべきかを自らが判断できるようにすることだと思う。なぜなら被害を最小限に抑えるために、一人ひとりが正しい知識を持ち、普段から備えることができれば災害が発生した際に適切な方法で身を守ることができるからだ。そこから自分の命だけでなく周りの命も助けられる人たちが増えてほしい。

5 南海トラフ巨大地震

近いうちに必ず起きると予想される南海トラフ巨大地震は、30年以内に70から80%の確率で起きるとされている。南海トラフ巨大地震が発生すると、静岡県から宮崎県にかけての一部では震度7となる可能性があり、隣接する広い地域でも震度6弱から6強の強い揺れになると想定されている。南海トラフ巨大地震による被害は32万人を超え、経済被害も220兆円を超えると予想されている。

このような大規模災害が迫ってきている中で私たちはどのような対策をとることが必要か、考える必要がある。まずはハザードマップを確認しておくことが大切である。今まで阪神・淡路大震災や東日本大震災などの大規模災害が発生しているが、ハザードマップの想定を超えるものであった。それでも予めハザードマップを確認しておくことで、同じ場所で起きる被害について理解しておくことが大切である。

他には防災バッグを準備しておくことも必要である。食料不足の問題にならないように防災バッグには食料を入れておくことは大切である。また、日常で非常食を食べて、食べた分を補充するローリングストック法も必要である。ローリングストック法を行うことで賞味期限切れをなくし、非常食の料理方法などを調べておくことで、避難所生活で活かすことができると考える。このように日常から少しでも1人1人が対策をしておくことで、災害時に被害を減らす減災に繋げることができる。

6 終わりに

今回「語り継ぐ」を執筆するにあたって感じたことが2つある。

1つ目は、この「語り継ぐ」を多くの方に伝えていきたいことだ。私のように災害を経験していない人は数多くいる。そして災害について考えたこともない人も中にはいると思う。このような人たちに「語り継ぐ」を読んでもらい、少しでも防災に関する知識や考えを持ってもらいたい。そして、実際に災害が起きた時には自分の命を守れる人になり、家族や地域の人まで助けられる人が一人でも多く増えて欲しい。

2つ目は、感謝の気持ちを忘れないことだ。今までは家族と被災体験について話すことをしていなかった。この3年間で学んだ知識や行動を、今後の活動や災害に活かしたいと思えるのは「語り継ぐ」があっ

たからだ。そして、この経験が無駄にしないことが重要である。そのため、今の自分がいることに感謝し、このような経験や活動をさせてくださった方々に感謝の気持ちを忘れずに日々を過ごしていきたい。

「明日」を生きるために

田路 獅誠

1 はじめに

1995年、2004年、2013年、これらは阪神・淡路大震災、新潟中越地震、東日本大震災がそれぞれ発生した年である。時代が積み重なるに連れて、震災の年から遠ざかっていく。人々の記憶からも遠ざかっていく。人々の記憶からも遠ざかれば、その災害について語る人もいなくなる。そうなることで過去の災害の記憶・体験・教訓も失われてしまう。時の流れは止めることができない。では過去の災害の風化は止めることができないだろうか。私は阪神・淡路大震災の時は生まれておらず、記憶の欠片もない。けれど実際に体験された方のお話は、たくさん聞かさせてもらった。その中には悲しみ、怒り、苦しみ、喜び、などの感情が込められていた。次はそのお話を、私が語り継ぐ番ではないだろうか。災害を体験された方から、未災者へと橋渡しをする。それが私の使命だ。

2 環境防災科の一員

(1) 志願

私は幼稚園の時、テレビで東北地方太平洋沖地震の発生直後の中継を見た。津波が街を襲っていた、あの光景にとっても衝撃を受け、今でも私の記憶に残っている。その日から少しずつ「防災」に対する考え方が変わり、小学生の時には母親と一緒に防災クイズを解いてみたり、自分なりに防災バックを作ったりした。そして神戸に引っ越しした際、神戸に環境防災科があることを母親に教えてもらった。中学生になった私は、防災にさらに興味を持ち、自分で調べるようになった。その後も防災に対する想いは変わらず、中学時代の3年間、環境防災科への入学を目指し続けた。

(2) 環境防災科の活動

(「災害と人間」での「防災メソッド」づくり)

私が環境防災科に入学してすぐに「災害と人間」の授業で「防災メソッド」をグループで制作した。まだ入学したばかりで同じ班員のことをあまり知らなかった。しかしブレインストーミングや話し合いを重ねるうちに、班員全員で協力し合い素晴らしい防災メソッドが完成した。一人で行うことよりも協力し合うことで、創造するものが大きく変革することを改めて学んだ。

(環境と科学)

2年生の「環境と科学」では神戸親和大学の髙本先生による授業を受けた。地震のメカニズムから、神戸の地質、岩石について、数回にわたって学校に来てくださり、丁寧に教えてくださった。髙本先生の授業によって私は環境科学に非常に興味を持つようになった。また座学だけではなく、「六甲山フィールドワーク」では実際に六甲山を登り、地質調査を行った。そこで阪神・淡路大震災で発生した地すべりや過去に発生した土砂崩れの痕跡、元々は海に浮いた島だった甲山の歴史を調査した。地球が残してくれたメッセージを、実際に目で見て手で触れる。そうすることで、なんだかその地の歴史を体感した気分になった。

また髙本先生に個別に質問した際、2つのことを私に教えてくださった。1つ目は「地球には答えがない」こと。46億年前もの前に誕生した地球の全てを知り尽くすことは当然不可能である。私たちが当たり前に思っていることが間違っているもおかしくはない。だからこそ、些細なことでも疑問を持ち、地球が残してくれたメッセージを読み取ると新たな発見が見つかるかもしれない。2つ目は「人間は未知に迫ることが使命」だということ。地球を解き明かせるのは、地球に住む私たち人間しかいない。人間が動かなければ未知に迫ることができない。もしかすると、たった1つの石でも時代は変わるかもしれない。

髙本先生による授業は一瞬だった。しかし学習の思い出は一生であつたに違いない。また、髙本先生への感謝は一生忘れない。

(出前授業)

私は環境防災科に入学し、いくつかの出前授業に参加した。中でも印象に残った出前授業は、私が1年生の時に参加した南あわじ市の小中学生に向けた出前授業である。この経験は、私の「出前授業」に対する考えが大きく変わったものの1つだ。その理由が2つある。1つ目は準備の大切さだ。人に教えるとい

うことは当然自分も知っておかなければならない。また間違ったことを教えないためにも、練習を重ねて本番へ向かう。私は、当時3年生の先輩に練習を見て貰った際、多くの指摘をいただいた。ここで初めて私は「人にもものを伝える難しさ」を実感した。どうしたらよりよく伝わるか、どうしたら記憶に残してもらえるようにできるか、工夫することが大切だと考えさせられた機会であった。2つ目は下調べである。出前授業に行く前に、予め出前授業先の学校の周辺地図を見ておく。また過去に、そこでは災害が発生したかを調べる。すると、聞いている人に説得力があるだけでなく、自分も相手もお互い学び合える環境を作ることができる。そして、どの出前授業も通して共通していることがある。それは私たちが一方的に教えるだけでなく、反対に私たちも教えてもらうことがあるということだ。人は1人1人違った視点・考えがある。だから私には思いつかなかった、分からなかった発見があるからだ。

（灘フィールドワーク）

2008年7月28日都賀川で発生した都賀川水難事故。初めて都賀川を見たときは水遊びのできる穏やかな川に見えた。時には増水し流れの激しい川になるなんて思えなかった。そして誘因、素因、災害対応の観点から、考察し整理することで、どこが問題・課題点を分析できた。数々の情報を集めてピックアップし、様々な立場になって考えてみる。分析するには時間も柔軟な思考も必要。私にはまだまだ分析する力が足りないから、もっと高度な分析ができるようになりたいと思った。

（多聞東小学校との安全マップ作り）

環境防災科の私たちと多聞東小学校の児童たちとが班になって校区を歩き、安全マップを作成した。異なる年齢かつ、異校種の交流である。つまり環境防災科から見る視点と小学生から見る視点の2つがあり、危険箇所だけでなく、「より町を好きになる！」という楽しみもあふれた安全マップを完成させることが出来た。視点や立場を変えて考えてみれば、「新たな発見」もあることを学んだ。

2 阪神・淡路大震災

（1）母親の話（被災体験）

母親は阪神・淡路大震災の発生当時、兵庫県赤穂郡上郡町に住んでいた。上郡町は兵庫県の最西端に位置する場所にある。しかし、阪神・淡路大震災の地震の揺れはとて大きく、驚いて起きた。阪神・淡路大震災の発生から3ヶ月後、祖母と電車に乗り三宮へと向かった。祖母が普段からお世話になっていたお店の方と連絡がつかないためだった。通常であれば姫路から神戸への車窓は田舎から都会へ進んでいく感じだった。しかし、長田の手前から徐行運転になり、背筋の凍る衝撃的な光景が目にくっきりと入った。戦後のように変わり果てた長田。今もその光景は記憶に残っている。三宮に着いても衝撃的な景色が広がっていた。祖母のお世話になっていたお店へと向かおうとしたが、道がデコボコで亀裂が入り、遠回りを繰り返すことになってしまった。やっとの思いで店に着いたが建物自体が無くなり更地になっていた。店は倒壊し解体工事が行なわれてしまったに違いない。その後、一度もそのお店とは連絡が取れることはなかった。

（2）父親の話（職業目線で思ったこと）

阪神・淡路大震災の発生当時、自衛隊には、人命救助に関する装備があまりにも少なすぎたように思う。発生後、倒壊した家屋の現場に到着しても、ほぼ人力に頼るしかない。救助活動を行うには、大掛かりな救助装置を持った消防署隊員と連携しなければ困難であった。現在ほどの技術と装備があれば、もっと多くの命を救うことができたと思う。何十年もの間、大災害に見舞われることが無く、災害に対する危機管理能力に欠けていたことかもしれない。常に最新の装備を保有しておくことも大切である。しかし、最悪の事態を想定した訓練を行い、また検証を重ねて人々に継続した防災意識を植え付けさせる。それが重要な課題だと考える。

（3）親の話を聞いて

今回、両親から阪神・淡路大震災の話を聞いて、阪神・淡路大震災の「規模の大きさ」を改めて実感した。なぜなら母親と父親が話してくれた、言葉1つ1つに重みを感じたからだ。28年前の体験の記憶を蘇らせて話をしてくれた言葉は、私の心に深く刺さった。

母親からは、主に地震後の神戸の街の様子について聞いた。私はもちろん変わり果てた神戸の街は見えていない。しかし、母親の話を聞いて、阪神・淡路大震災後の荒廃した長田を実際に見たような気持ちになった。

父親は、主に職業の視点から話をしてくれた。救助活動を行いたいのにできない、そんな現実があったことを知った。私は目の前に失ってはならない命があるのに、救うのが遅れたり、救うことができなかったりしてはならないと思った。だから大災害を想定した「対策」は必ず必要だと思った。

私は両親の話を聞いて、また新たな視点から「阪神・淡路大震災」を見ることができた。だから両親から聞いた貴重な話は決して無駄にしないようにしたい。

3 防災士

高校2年生も終わりに差し掛かる頃、私は防災士資格試験を受験した。なぜなら、自助・共助の「精神」のもと家庭、地域、学校で、防災・減災の強化を行うためである。そのためには、知識と技術を常に維持・向上させることが必要だと考えたからだ。

防災士を取得するにはまず講習を受ける必要がある。大学の教授などの方々が講義をしてくださり、環境防災科で学ぶこととは別視点で、「防災」について学ぶことができた。私は講習で受けた話を丸暗記して覚えておくのではなく、常識として知っておけるように意識した。また、講習の休憩時間、多くの他の受講者とお話した。その時よく言われたのが「若いのに防災士取得を目指して偉いね」という言葉だった。その言葉を言われたとき、私は「若いのに」ではなく「若いから」防災を学ばないといけないのだと考えた。その思いを胸に筆記試験に臨み、見事満点で合格することができた。そして、取得したから満足するのではなく、防災の「リーダー」として安心・安全の街づくりのためにも、市民を牽引できるようにしたい。また私は新たな目標ができた。それは気象予報士を取得することだ。なぜなら気象庁から提供される、防災情報と密接な関係を持つ気象情報や高度な予測データを、適切に利用できる技術者になるためである。また、取得を目指す理由として自分の将来の夢とも大きく関係する。

4 将来の夢

私は「IT企業」で働くことが夢である。

私の父は自衛隊員である。だから昔から父に憧れ、いつか自分も父のような自衛隊員になると決めていた。中学生の時は陸上自衛隊高等工科学校に進学を考えていた。しかし自分は持病があり、身体検査が通らないため諦めてしまった。この出来事はとても悔しかった。しかし、「父のような人の役に立つ仕事」をどうしてもしたい。その思いが私の中にあった。

環境防災科に進学した頃、私はある言葉が目にとまった。それはIT（情報技術）だ。ITを駆使し、ビジネスやサービス、経済を支えていることを知り、私は魅力を感じた。IT企業はIT企業でも様々な分野と融合できる。例えば、農業。水やり、ビニールハウスの室温等を一括で管理することで効率的に農業を行える。「IT」は手で触れる事ができないソフトウェア。つまりITは普段目に見えない「裏」で動いている。まさに縁の下の力持ちである。そんなITは防災と大きく関わっている。主に予測に困難なゲリラ豪雨対策のため、空状況を定期的に監視・観測している。危険が高まるとそれと同時に避難の呼びかけを行う。そして様々な数値をデータベース化するため、小さな誤差でも許されない。もし自分がIT企業に就いたら、「一家に1台タブレット」というシステムを開発したい。災害が発生した時、一番大切なことは情報であり、「山が崩れた」や「川が氾濫した」、「避難指示が出た」などの情報は、的確に、かつスピーディーに自分の耳に入ることは難しい。そこで考えたのが、「一家に1台タブレット」である。性能として、緊急地震速報の通知・川の水位の通知・避難情報の通知がタブレット1台でできる。川の水位の通知があると、実際に川を見に行くこともない。なぜなら水位の情報はタブレットで見ることができるからだ。避難情報の通知があれば、正しく、かつ安全に避難行動ができる。また、タブレットは防災として使用するだけでなく、自治体の案内・地域でのイベント案内・近所のスーパーの通知もあれば、もっと使用できる幅が広がるのではないだろうか。課題点もたくさんあるかもしれない。しかし、試行錯誤繰り返し最高のシステムを作りあげるようにしたい。ソフト面として人々を支え、安心安全の暮らしを誰もが送れるようなシステムを提供できる人になりたい。

5 最後に

1兆円が手に入ると聞くと誰もが受け取るだろう。しかし明日からの人生を引き換えに、1兆円を受

け取れるなら受け取るだろうか。その場合は誰も受け取らないだろう。要するに私たちの人生1日1日に1兆円や、それ以上の価値がある。私たちは、毎日毎日とても価値のある日々を、そして人生を歩んでいる。また私たちはそれが当たり前だと捉えている。しかし阪神・淡路大震災が発生してしまった時、多くの方々が亡くなられ、その人の人生が失われた。また、これから災害が発生すると、私たちの人生が失われてしまうかもしれない。失わないためにも、過去の災害の教訓を活かし、また実際に体験された方のお話を私の下世代はもちろん、一人でも多くの人へ語り継ぐ。一人一人の防災への意識が変われば、大災害が発生しても一人でも多くの人が残ることができるかもしれない。だから語り継ぐ。価値のある「明日」を生きるために。

記憶と教訓を次世代へ

富田遙生

1 はじめに

1995年1月17日突如兵庫県南部の街を襲い、たくさんの方が犠牲となった阪神・淡路大震災が起こった。また私が6歳の時に東日本大震災が起こった。しかし、2つの災害を含めて大きな災害そのものを私は、経験したことがない。テレビや授業、書籍などでしか当時の状況を知ることができない。しかし環境防災科に身を置き3年間様々なことを学んできた。これから起こると言われている南海トラフ巨大地震による犠牲者をこれまでの災害の教訓を生かして最小限に抑えたい。そのためには震災を経験していない私たちが阪神・淡路大震災を風化させずに、経験していない世代に語り継ぐ必要があるのではないのか。

2 祖母の話

(1) 阪神・淡路大震災

祖母は、農家を営んでおり、震災当時から今も変わらず淡路市野島に住んでいる。今までに経験したことがない床から突き上げられるほどの縦揺れに襲われた。祖母の家の下には、ちょうど野島断層が走っており家は、はなれを除いてほぼ全壊した。一緒に住んでいた両親が潰れた家に埋もれてしまった。地震発生直後の辺りは暗く、周りの状況が分からず祖母の家だけが全壊していると思い、両親を助けるために近くの駐在所に助けを求めた。しかし駐在所の警察官は家まで来たが1人では助けることができないと判断し、応援を連れて戻ってくると言い家を離れた。その後祖母の両親は、近くに住む人に救出された。夜が明けて祖母は何もかもが壊れて通るところもない状況の町に驚いた。現在とは異なり道幅が狭く住宅も密集していた。全壊した家はすぐに業者に撤去してもらい、家を建て直すまでの間、仮設住宅には入らず6畳ほどのコンテナハウスを2つ借りて生活したという。仮設住宅に入らなかったのは、ペットを飼っていたことや家を離れることへの寂しさ、高齢の両親がそこで生活していけるのかという不安が大きかったからだ。北淡町（現在は淡路市）は淡路島でも特に被害が大きかった地区で多くの木造住宅が全壊していた。そのため立て直す時には、大工が足らず祖母の家は和歌山県の大工によって再建された。地震によって仕事である農業にも影響が出た。地震によって地盤が傾き、田んぼそのものが傾いたため平らにしなければいけなかったが、平らにしていればトラクターや田植え機などの機械は、残っていたため、家を再建するより時間はかからなかった。地震から4か月後の5月には、地盤の傾きを元に戻す作業が終了し、田植えを始めた。そして祖母は最後に「東北の方に比べたらうちなんかましな方やと思うで」と呟いた。

(2) 東日本大震災

上記の祖母の呟きが気になったので祖母に東日本大震災について聞いてみることにした。祖母は東日本大震災の様子をテレビやニュースなどで見ていても、辛く感じるころがあったという。阪神・淡路大震災のときは地震だけであったため、例えば家が潰れたとしても、その下を探せば大切にしていたものが見つからないこともない。しかし東日本大震災では地震だけでなく津波の被害によってあらゆるものが跡形もなく流され、福島原子力発電所事故により立ち入ることさえ困難になった地域もあり、大切にしていたものを探したくても探しようがなく、農家という面から見ても土地そのものが失われてしまい、農業をすぐには再開できないことが阪神・淡路大震災とは大きく異なる点だという。

3 話を聞いて

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。当時の様子は写真や書籍、講義でしか知ることができなかった。初めて祖母から被災体験を聞いた。表情には見せないが阪神・淡路大震災への思いが込められているように感じると同時に、聞くだけでなく私たちのような災害を経験していない多くの人に伝えたいと感じた。今まで小学校や中学校の防災授業や環境防災科の授業の中で多くの被災した神戸や淡路島の写真を見たり被災体験を聞いたりしてきたが、どこか自分事としてではなく他人事としてとらえてしまうころがあった。しかし今回身近な祖母の被災体験を聞いて、今まで以上の衝撃を受けた。特に印象に残っているのは何もかもが壊れてしまっていた北淡町の話だ。言葉だけだが、とても多くの被害を受けたことを知った。

北淡町（現 淡路市）は震源から最も近く、被害も大きかった。祖母の家は全壊したがペットを飼育し

ていたり曾祖父母が高齢だったりしたことから避難所生活を送らなかった。支援物資は被災した全ての人には届いていないということだ。避難所に行きたくても行けない人がいるということを初めて知った。祖母が避難所や仮設住宅に入らなかったように、それに関しては、まだまだ改善する点があると感じた。

4 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が舞子高校環境防災科に入学したいと思ったきっかけは、中学2年生の時に友人から「姉が今学校の行事でネパールに行っている。」という話を聞いたことだ。自分で調べてみると全国でも2校しかない学科であることが分かった。調べていくと災害ボランティアをしている写真が目に残った。他の高校では行わない活動だと感じた。そして私も実際、災害現場で困っている人を助け、人の役に立ちたいと思った。また将来の夢が消防士であり、消防士になるための必要な知識を学ぶことができると思い、環境防災科を志した。

(2) 入学してから

舞子高校環境防災科に入学した当初は、部活動もボランティアも勉強も全て頑張るという気持ちでいた。しかし、想像以上に忙しく1年生の時は、ボランティアにあまり参加できなかった。しかし2年生になるとリズムがつかめるようになってボランティアにも参加できるようになった。入学してから様々な分野の講義や授業を受けていく中で、知らないことばかりで知識の少なさに驚いた。もちろん小学校、中学校でも防災教育は、行われていた。入学するまでの自分の知っていた知識は、ほんのわずかにすぎないということ。このように防災や災害に対しての知識が少ない人が多いと思うとぞっとする。私たちが防災を学ぶ必要性を強く感じた。

5 環境防災科での活動

環境防災科に入学してから様々な活動に参加させていただいた中で印象に残っているものがある。

(1) 出前授業

出前授業に何度か参加させていただいた。すべて南あわじ市の小中学校で行う出前授業である。私は中学卒業まで淡路島で育ってきた。現在は淡路島に住んでいないが、地元は、淡路島と思っている。中学卒業までの15年間、地元の方々にとってもお世話になった。高校生になった今、淡路島の人に対して自分にできることは何かと考えた時に、環境防災科で学習した防災の知識を次の世代の小学生や中学生に知ってもらいたいと思い、南あわじ出前授業に積極的に参加した。出前授業に参加して授業をする側の私たちもたくさんのお話を学ばせていただいた。どのようなスライドを作ったら興味を持つのか、どのようにすると分かりやすいのかなど考えながら企画した。自分自身が小学生、中学生の時は、どうだったかと考えながら準備をした。実際、出前授業に参加して驚いた。小学生や中学生の知識の量だ。僕たちが小学生や中学生の時とは違い防災教育が進んでいた。小学生や中学生に質問をするとほとんど想定外の答えが返ってくる。思考、想像力の豊かさに驚かされた。

(2) 消防学校入校体験

入校体験は1年時に初級、2年時に上級の2回実施された。1年時の初級では、集合や整列要領などの規律訓練、体力錬成を行った。陸上競技部に所属していた私は、厳しい規律訓練や体力錬成もできるだろうと精神的にも肉体的にも余裕があったが、規律訓練が終わる頃にはその余裕はなくなった。規律訓練では敬礼の手の向きや足の開く角度など細かく指導が行われ、列が乱れたり声が小さかったりすると、すぐにやり直しをする集中力や気力が必要な訓練だ。体力錬成では、腹筋や腕立てなどの基礎的な体力錬成だが、回数が100回とかなりハードだった。2年時の上級では、規律訓練の復習と放水訓練を行った。規律訓練では2回目ということもあり、何回もやり直しが行われることはなかった。放水訓練では小隊長として小隊員に指示を出した。指示を出すのは、間違っただけを指示してはいけないという緊張感もあり非常に難しかった。中隊ごとに動くときは上からの指示を聞き、全体を見ることを意識した。

(3) 募金活動

募金活動では、朝の通学時間に高校の正門前に立って「募金よろしくお願ひします」と大きな声で呼びかけた。校内で行われたものの最初の方は、緊張や照れくさくさがあるって声が小さかった。先生や友人に

「頑張って」と声をかけられた時、コロナ禍で被災地に行って支援ができない状況でも私なりにできる支援を見つけて行動していきたいと思うきっかけになった。

（４）今までの活動を通して

これまでの活動を通して本当に多くのことを学ぶことができ、成長することができたと思う。特に、昔から人前でスピーチをしたり何かしたりするとおどおどして緊張していた私が、数多くの出前授業などのボランティア活動に参加させていただいて人前でも堂々とスピーチやボランティア活動ができるようになった。私自身を大きく成長させる一歩となったと思う。これらのきっかけをくれた先生や友人、先輩、ボランティア活動をさせてくださった方々に感謝したい。

６ 夢と防災

（１）きっかけ

私は高校入学当初、消防士を志して環境防災科に入ったが、３年間学んで行くと警察官にも興味を持った。どちらの職業も興味深く、現在も決まってはいない。今回、「語り継ぐ」では、警察官について執筆しようと考えている。

私が警察官を目指すきっかけは大きく分けて３つある。１つ目は中学校１年生の時に交通事故に遭い、丁寧に対応くださった警察官が印象に残ったことである。２つ目は高校２年生の２月に友人と垂水警察署前のローソンにいとドンという大きな音が聞こえてきた。交差点の真ん中で乗用車とバイクによる事故が起きていた。その時、僕は通報することしかできなかった。ただただ事故処理を友人と眺めているだけで終わった。この事故で僕は警察官になりたいとより強く思った。そして警察官になり交通事故ゼロの社会を目指し、起こったとしても事故にあった人を助けたいと思った。３つ目は災害現場の映像をテレビなどで見ているときにオレンジ色の服を着ている消防の救助隊や迷彩柄の自衛隊と青色に一部黄色の活動服を着ている人たちが目に映った。どこの組織か分からず調べてみると警察であることが分かった。治安維持だけでなく救助活動をする部隊があることを初めて知り、広域緊急援助隊に入りたいとも思い、警察官になりたいと考えている。

（２）警察官と防災

警察官は事件、事故が発生してから対応に当たり、災害前の防災と警察官はあまり接点がないと考える人も多いだろう。しかし警察官という立場において防災は、日頃から行われているものだと思う。なぜなら、普段での巡回連絡や交通立ち番、立ち番での住民の方との会話が防災に繋がってくると私は考えているからだ。これは３年間環境防災科の授業や部活動で学んだコミュニケーションの大切さに通ずることがあると考える。コミュニケーションを取ることの大切さの理由の１つに挨拶や何気ない会話や地域の方との付き合いを大切にすることで顔見知りの関係を築くことができ、災害時に地域の方のことを理解したうえで公助をすることができるということがある。普段から行っているのに行っていないでは、災害時の救助活動での命が助かる可能性が大幅に変わってくると思う。そのため、警察官になることができたから積極的に地域住民の方とコミュニケーションを取りたいと考えている。災害発生時には迅速に公助ができる関係を築きたい。

（３）警察官になってしたいこと

地域の避難訓練の参加、他の機関との合同訓練の実施、巡回連絡による地域の方との情報共有の３つを行いたいと考える。１つ目の地域の避難訓練の参加は、現在すでに行われているが、警察が参加している避難訓練は、ごくわずかである。私は、将来避難訓練で警察が参加するのが当たり前の社会を実現したいと考える。避難訓練の重要性、連携することの大切さを伝えていきたいと考える。２つ目は既に行われている私が行いたいと考える合同訓練は、広域的なものだ。広域的に合同訓練を実施する理由は、今後、南海トラフ巨大地震などの広域災害が増えると予想するからである。広域的に合同訓練を行うことで広域災害が発生しても連携して対応することができる。３つ目は巡回連絡による地域の方との情報共有である。阪神・淡路大震災では生き埋めや閉じ込められた際の救助主体では、警察を含む救助隊は、わずか１．７％。しかし、友人・隣人・家族に助けられた割合は、およそ６０％に上る。なぜこれほど高いのかというと地域の方と日ごろから自分自身のことや家族のことを話し、情報共有が行われていたからである。この情報共有を巡回連絡に入れていきたいと考える。そこで得た情報を警察で共有し、災害発生時に迅速かつ効率的に救助活動が行えるようなしくみにしたいと考える。

7 最後に

今回この「語り継ぐ」を執筆して感じた事が2つある。

1つ目は、伝えることの大切さと難しさである。私たちのように、大きな災害を経験したことがない人が多くいる。これから先、南海トラフ巨大地震が起こると言われている。阪神・淡路大震災の教訓を伝えることの大切さを感じた。同時に伝えることの難しさも感じた。祖母に聞いたことや環境防災科で学習してきたことを文字だけで伝えることの難しさを感じた。

2つ目は、3年間で得た経験が無駄にしないということだ。3年間で様々なことを学び、経験してきた。これまでの人生の中で1番濃い3年間となった。そして多くの方にお世話になった。先生や友人、家族と数えきれない方々に助けられながら、環境防災科での日々を送ってきた。お世話になった方への感謝を忘れないと同時に3年間で得た知識や技術が無駄にすることなく次の進路でも生かしていきたい考えである。これをもって「語り継ぐ」の執筆を終了する。

防災を紡ぐ

中岡 歩鈴

1 はじめに

1995年1月17日、巨大な地震が神戸の街を一瞬にして飲み込んだ。

震災を経験していない私にとって阪神・淡路大震災はどれほど大きな被害、被災者の数を出したか新聞やテレビなどのメディアでしか見ることができない。しかし、聞いた話を伝えることはできる。

また災害が発生したときに過去の災害から学んだことを生かして次の震災に備えることもできる。そして、一人でも多くの命を救うために語り継ぎはとても大切だ。

2 阪神・淡路大震災

校長先生の体験

当時、校長先生は生徒たちとの修学旅行中に地震があったそう。ホテルのテレビで地震のことを知った。実家に連絡しようと公衆電話を使ったが連絡はつかなかった。連絡がついたのは、17日の13時頃だった。

校長先生の実家のマンションはライフラインが使えず、近くの小学校に水をもらいに行っていた。修学旅行の帰りのバスでは救援物資を乗せて、18時間かけて学校に戻った。帰り際の休憩サービスエリアで修学旅行先の連絡がついた家から保存食を買ってくるように言われた。しかし、そこで販売されていたかまぼこやちくわはすべて売り切れていた。バスが六甲山を越えてから学校周辺で出ている煙を見て、地震が起きている現実を目の当たりにした。学校は避難所で当時は区画整理がされていなかった。夜は電気をつけたまま寝ていた。仮設風呂を業者が作ってくれ、自衛隊が運んできた水をお風呂に溜め、ボランティアの方が沸かしてくれた。

避難所で困ったことは、寝床がなかったことと、何よりもプライベートが見える状況で生活していたことだ。そのため、途中段ボールで間仕切りを作った。救援物資が食糧とともに学校に届いた。服は少し汚れが目立っていたのもあった。

私たち、環境防災科の生徒に伝えたいメッセージは、災害の種類によって被害状況が違ふということを理解するということ。何かあったら、実際に現地に行くことが大切。そこで何を実感して街づくりをどうするか考える。自然と向き合うことも大切。次の地震が起きたら、環境防災科として何をすべきか。語り継ぎの次に何ができるかを考える。

また、障害のある方や外国人に視点を当てて、どうアプローチするか考え、工夫することが大切。例えば、聴覚障害の方には文字を書いたり、目が見えない人には点字を取り入れたりなどである。

日々の変化に気づくことも災害対策へと繋がる。普段の生活の中でいつも通る道路に側溝が詰まっていたら災害に遭ったときにそれが冠水や洪水に繋がる恐れがあって危険だ。危険な場所や被害が想定される場所を区役所に報告するだけでも災害を最小限に抑えられるし、思いやりにもつながる。

3 話を聞いて

今回被災体験を兵庫県出身の校長先生に伺った。話を聞いてプライベートが見える状況で生活をするというのはとても苦痛に感じる事なのだと感じた。確かに自分の生活スタイルがほかの人から丸見えなのは恥ずかしいし、ストレスに感じる。私は避難所生活をしたことがないため、想像することしかできないが、とても共感できた。私は妹と共有で部屋を使っている。カーテンで仕切っているだけなので声や音が全部聞こえてしまう。そのため、気を遣って音楽を聴くこともできないし、電話をすることもできない。自分のしたいことが自由にできないためストレスを感じてしまう。これが避難所生活となるとさらに人が多く、男女混在、仕切りもないため、よりストレスに感じる事が多くなる。避難所生活をするというのは簡単ではないということを忘れず、強い覚悟をもって挑むべきだと思った。

また、歩いていて道路が陥没している場合や、土砂崩れを起こしていて危険だなと小さな異変に気付くことも災害の被害を減らす方法の一つとして重要だなと思った。災害を完全に無くすことはできないが、最小限に収めることはできる。事前に備えるのは、防災バッグの準備だけではなく、普段から自分の地域の特徴や地形をハザードマップなどで理解することで、どこで被害が起きやすいのか想定することができる。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を目指すようになったのは、中学3年生の11月頃で、進路をどうするか一番悩んでいた時期だった。舞子高校に環境防災科があることを母が勧めてくれた。実際に学校説明会に行ってみるとボランティア活動が活発で、プレゼンテーションなど前に立って発表する機会が多く、消極的な私にとって少しでも自分を変えられるチャンスになるのではないかと印象に残った。また、人の役に立つことをしてみたかったので、ボランティア活動などの環境防災科の活動内容に興味があった。将来の夢が看護師になることだったので、災害現場でも看護師が被災者防災の知識を看護に生かされるのではないかと、という気持ちもあり、環境防災科に入ろうと決めた。

(2) 学んだこと

この3年間を通して防災について沢山学ぶことができた。特に印象に残っているのが震災についてだ。阪神・淡路大震災はこれまでテレビのニュースや小中学校の防災学習で学んただけであり身近に感じていなかった。南海トラフ巨大地震が将来起こるだろうと言われていたが、家では防災バッグの準備もしていなかったし、何より災害に対する危機を感じていなかった。大丈夫だろうとどこかで安心している自分がいた。しかし、環境防災科で阪神・淡路大震災について知っていくうちに備えることの大切さを身に染みて実感した。いろんな震災を知っていく中で驚いたことは津波から逃げ遅れた人の中には指定の避難所に避難する人、高台に避難する人で生死が左右されたことだ。それを聞いたとき、また津波が襲い掛かってきたときに被害を少しでも少なくできるように津波の恐ろしさを伝えることは大切だと感じた。

過去の災害から得た教訓を他の人に伝えるために1番身近に実践できる方法は家族、友達に伝えるということだ。私はボランティア活動で行った内容を家に帰って母に伝えている。防災に全く興味がなかった母も私の話を聞いていくうちに防災の大切さを知ったそうだ。少しでも防災について興味を持ってくれるだけでも嬉しかったし、これが伝えるということなのだと改めて感じた。

(3) ボランティア活動を通して

いろいろなボランティア活動に参加させてもらった中で、特に成長できたと感じたのが募金活動だ。中を歩いていて募金活動をしている団体を時々見かけることがあって、やってみたくて入学前から思っていた。しかし、自分は声が小さく、ちゃんと気持ちを伝えることが出来るか不安で参加するのにためらいがあった。初めて参加させてもらったときは恥ずかしさがあったて上手く声を出せなかったが先輩方のはきはきした声と真つすぐな姿勢を見て、私もあんな風になりたいと思った。数を重ねていくうちに少しずつ声を出せるようになっていき、募金活動の呼びかけのセリフも一定のセリフだけではなく、いろんなバリエーションで言えるようになってきた。募金活動をしていく上でやりがいを感じたのは、募金してくださった方が「頑張ってるね」と声をかけてくださったときだ。その瞬間に私たちのメッセージが他の人に届いたのだと実感して嬉しかった。わざわざお茶やお菓子をくださった方もいて感謝の気持ちでいっぱいだった。

募金活動を通して学んだことは、伝える大切さと感謝の気持ちを持つことだ。これは募金活動だけではなく、全てのボランティア活動で共通することだと思う。募金活動は公共の場で行うため、まず、近くのお店に募金活動をしますという挨拶をする。募金活動は簡単にできるものだと思うとはいけない。そのため、1回1回の活動を大切にしなければならない。また、募金活動の際、お金を入れてくださった方に感謝を伝えることも大切だ。急いでいる中、募金をしてくださる方もいれば、小さな子どもが背伸びをしてお金を入れてくれることもある。その方々の思いを受け取って、責任を持つことが私たちの使命だと思った。募金活動で呼びかけをする際にただ自分の用意したメモを読むのではなく、気持ちを込めることでより、街中の人に思いを届けることが出来る。例えば、伝えたいところは少しアクセントをつけることで伝えたいことが明白になる。そういった少しの工夫をすることがより良い募金活動に繋がる。重要なことは伝えようとする事だ。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私は将来、海外で活躍できる国際看護師になるのが夢だ。まず、私が看護師を志望しようと思ったきっかけは、予防注射を受けに病院へ行ったときに注射を怖がる私を看護師さんが優しく「大丈夫だよ」と声

をかけてくださったことだ。そのおかげで少し安心して注射を受けることができた。些細な出来事だが、私にとって看護師を目指すきっかけとなった大切な思い出である。それから私もあの看護師さんのように優しく、人の役に立つ人になりたいと思うようになった。また、私は人とコミュニケーションをとることが好きだったため、患者さんに寄り添って精神的なケアや支えをする看護師が自分に向いているなと思った。

初めは看護師になりたいと思っていたのだが、環境防災科で日本の災害や防災対策を学んでいくうちに海外の防災にも興味を持つようになった。「Active 防災Ⅰ」の授業で、NPOの方と共にウクライナの方へ野菜を届けるという支援をさせていただいたときに、日本での生活や現状など色んな質問をして、話を聞く機会があった。ウクライナは日本とはまた違う地形や環境のため、生活スタイルや食事に違いが生じたそう。直接ウクライナの方に出て話を聞くことで、文面よりも話の重みを感じられた。NPOの方とウクライナの方が楽しそうにコミュニケーションをとっているのを見て、私も災害が発生した国へ足を運び、直接外国の方と話をしてみたい、そこで日本とは異なる災害の防災対策を知りたいと思うようになった。コミュニケーションをとるために必要なのは言語だ。世界共通語である英語を流暢に話せるようになるために、英語と看護を学べる大学に行って学びたいという目標もできた。

(2) 看護と防災

看護をどうやって防災に生かすのかという問いを、中学生のときに環境防災科の面接練習で先生に聞かれたときからずっと考えていた。その時は、はっきりとはわからず、あやふやに答えてしまっていた。正直、私も環境防災科は防災を主に学ぶため、看護と防災は別物だと考えていた。ただ、人の役に立つというところで、少しは生かすことができるのではないと思うぐらいだった。

しかし、環境防災科で3年間防災を学んでいくうちに、どんな夢であろうとも防災は繋がれると感じた。直接防災に関わらない職業だとしても自分で防災を伝える機会を作ることができる。例えば、美容師なら散髪をしているときに防災の豆知識を持ち掛ければ、それがきっかけで、少しでも防災について興味を持ってもらえるかもしれない。保育士なら、絵本の読み聞かせや避難訓練で自分の命を守る大切さ、地震が起きた時、どこへ避難すれば良いか、教えることができる。医療の世界では、患者さんに被災体験を聞いたり、防災に関する話題で防災を広げることができると思う。このようにどんな形であろうとも自分で見つけて防災に繋がれる。看護の場合は国際緊急援助隊医療チームに看護師として参加し、どこかの国で災害が発生したら援助を行うという方法もある。

そしてもう一つ、看護師を目指す上で大切にしたいことがある。それは任された仕事に責任を持つことだ。それはボランティア活動に関わらず、全てにおいてだ。自分のミスや事後報告の遅れによっているんな人に迷惑をかけることになる。それは患者さんの命に関わるとても重要なことだ。自分に足りないものは数えきれないほど沢山あるが、特に責任を持つことが今の自分に必要な要素だと思う。わからないことは自分だけで解決しようとせず、周りに聞く。スケジュール管理をしっかりと行う。早め早めの行動を常に意識する。そして、思いやりの気持ちを持ち、患者さんがどうすれば安心して生活できるのかを考える。周りから信頼してもらえるような素敵な看護師になれるように、少しずつでもいいから1歩1歩新しい自分を更新していきたい。

6. 最後に

今回「語り継ぐ」を執筆して、防災と改めて向き合うことができた。防災という言葉は文字通り「災害を防ぐ」という意味があるが、災害とは具体的にどのような災害なのか、防ぐためにどう備えればよいのかを考えるのが防災の本当の意味だと思う。それを3年間の授業やボランティア活動で学ぶことができた。これからは、蓄えた知識を頭の中に残しておくだけでなく、行動に移すことが次にやるべき使命だと私は思っている。3年間学んできた防災を無駄にしてはいけない。そのために卒業後も地域のボランティア活動や防災イベントに参加するなどして、直接的に防災に関わっていききたい。また海外へ行って海外の災害、防災対策も学び、知ったことを地域の方に伝えるイベントなども開いてみたい。今までは授業やボランティアの内容を家族、友達に伝えてきたが、次は視点を地域の方々において伝える人をどんどん増やしていきたい。そして、自分なりの「語り継ぐ」を見つけて未来に防災を継承し続けたい。

未来へ

中川 瑞葵

1 はじめに

阪神・淡路大震災から29年という月日が経った。月日を重ねるうちに増えていく未災者、薄れていく当時の記憶。風化が進んでいく今、私たち環境防災科生は様々な学びの中で、風化させてはいけないという気持ち、そして防災・減災の大切さを強く感じる事ができた。震災を経験していない未災者の私たちにできることはこの3年間で学んでことを後世に伝え、繋いでいくことだ。正確に、自分の言葉で語り継いでいきたい。

2 阪神・淡路大震災 (祖母の話)

私の祖母は当時、神戸市西区に住んでいた。地震の朝、祖母は仕事へ行く祖父のお弁当を作るため朝早くから起きていた。家事を終え2階から1階に降りようとしたとき、空気が動くのが見えたという。その瞬間は何も気にしなかったが、その数分後「ドンッ」と突き上げるような強い揺れと地鳴りがした。その揺れは立ってはいられないほどの揺れだった。地震が来ても何をすれば良いか分からず、その場に座り込むことしかできなかったという。しかし、幸い祖母が住んでいた場所は被害がほとんどなく、家に置いてあるピアノが数メートル動いていただけであった。大きな被害はなかったものの、余震が続いたため数時間は家の中で過ごした。近隣の家も新築が多く、目立った被害はなかった。昼過ぎに周囲の様子を見ながら近くの公園に向かった。破損している家は見られなかったが、植木鉢が倒れて割れているものがいくつかあった。公園に着くと長田方面から黒い煙が上がっているのが見えた。風の動きにより革やゴムが焼けた臭いと共に、熱風を感じたという。家に帰りテレビで情報収集をしていた際、長田の町の映像を見て衝撃を受けたという。震災後2日ほどは恐怖で眠れなかったという。

(母の話)

地震が起きた朝、母は神戸市西区の家で寝ていた。飼っていた犬が突然吠え、目を覚ました。その数十秒後「ドンッ」という大きな揺れが来た。母は犬を抱きしめ布団にくるまったという。窓際に置いていたドジョウの水槽が床に落ち割れていた。揺れが収まり周囲の様子を確認するため、近所を歩き回った。公衆電話には長蛇の列ができ、家の電話が使えなかった母も会社の人に安否を伝えるためその列に並んだ。

駅の方では自動販売機が倒れており、お金を取るのではなく飲み物をとっていく人たちがいたという。母の家にはキャンプ用品が多数あり、2日ほどはガスコンロを使い、家にあるもので食事をした。3日ほどたったがライフラインが使えず何もできなかったため、家族みんなで親戚のいる広島に避難することになった。

3 話を聞いて

たくさんの方から阪神・淡路大震災のお話を聞いてきたが、一番身近にいる家族に震災当時の話を詳しく聞いたのは初めてだった。阪神・淡路大震災では大きな被害、そして多くの犠牲者が出たが、同じ神戸市でも被害の大きさに差があることを知り、自分の住んでいる場所の特徴など知っておくことが大切だと感じた。祖母の話の中で、地震が来てもどんな行動をとれば良いか分からなかったという話があり、地震に関する知識や備え、行動など当時は全く知らなかったことに驚いた。災害時、どんな行動をとるかによって被害の大きさが変わってくると思う。災害についての知識を知ることや、備えることの大切さを改めて感じた。

4 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私は小学生の頃、阪神・淡路大震災が起こった際、「しあわせ運べるように」の生みの親である臼井真先生率いる合唱団に入っていた。その中で、震災当時の映像を見たり、震災で家族を亡くされた方に話を聞きに行ったりする機会があった。「地震ってこわい」このような認識しかなかった災害が、震災を経験された方の話を聞いてとても身近なもののように感じ、自然災害というものに興味を持った。中

学3年生で進路に迷っていた時、母の紹介により災害に関することが学べる環境防災科に入学したいと思った。

(2) 出前授業

出前授業を通して多くのことを学んできた。

1つ目は、出前授業は「やってあげている」ではなく「させていただいている」ということを忘れてはいけないということだ。これは当たり前のことだが、出前授業をするにあたって一番大切にしてきた。私たちのために貴重な時間を割いてくださっている。授業をするのは私たちだが、私たちも学ぶことがたくさんある。

2つ目は、準備の大切さだ。出前授業をするにはたくさんの準備が必要になる。共に学んでいく中で、まず自分がしっかりと物事について勉強し、知っていることが大切だ。自分も分からないことを相手に伝えようとしても伝わらない。相手に伝えるということはとても難しい。だからこそ、人に伝えるときはまず、自分がしっかりと内容を理解しておくことが大切だ。また、年齢や性別、性格によっても接し方が変わってくる。相手によって話し方や、内容、時間などを考えて授業をする。もちろん初めから全て上手くいくわけではない。一つの活動が終わったら、反省会をしたり皆の感想を聞いたりする。この振り返りの時間で学ぶことも多い。このように、授業の内容だけではなく、出前授業では多くのことを学んできた。

(3) 募金活動

私は小さいころから募金活動を行っているのを見ると、親にお金をもらって入っていた。高校生の人たちがポスターを持ち、大きな声で呼びかけをしているのを見てすごいと思っていたが、募金をしてもお金がどこに行くのか、どのように使われるのかなど詳しく考えたことはなかった。高校に入学して、最初の募金活動の時、新しい発見がたくさんあった。

人の前で大きな声で呼びかけをすることが初めてで、呼びかけの言葉を間違えたらどうしようと募金活動に参加するときから不安に思っていた。しかし、事前に準備を重ねていくうちに、募金活動で大切なことは、言葉を間違えないことではなく、気持ちなのだということが分かった。募金といっても、ただ紙と募金箱を持って呼びかけをするのではない。なぜ募金をするのか、送金先はどこなのか、どのような被害があるのかを一から調べ、自分たちで募金の際の呼びかけの言葉を考え、そしてようやく町へ出て活動することで形となる。町で募金活動を行っている、大量に集めた小銭を、家から持ってきてくださる方がいたり、大金を募金してくださる方がいたりする。募金活動を行うことで、募金してくださるその人たちの助け合いの気持ちや、人の温かさを感じることができる。募金活動を経験したからこそ味わえた気持ちや学びをこれからの人生につなげていきたい。

(4) ボランティア活動

私は、今まで様々なボランティア活動に参加してきた。ボランティア活動をすることで、ボランティア活動を行っている私の方が、学ぶこと、感じることも多くあった。町に出て行うボランティア活動は、地域の方など、たくさんの方から見られることがある、自分が良いと思っている行動でも周りから見たらよい行動ではないかもしれない。校外へ出て行うときは、舞子高校という名を背負っている。これは、後輩と一緒にボランティア活動を行うことで強く感じたことである。自分のことだけでなく、全体を見る大変さも経験することができた。

(5) 3年間で学んだこと

私は、環境防災科に入学できて良かったと思う。環境防災科だからこそ学べたことがたくさんあった。地理的なこと、自然環境や心理的なことなど様々な分野を通して、災害について学んできた。分野は違うが、学んだことはすべてつながっていて、災害時の対応や過去の災害の教訓につながっているのだと身をもって感じた。環境防災科に入学することで、防災意識やこれから起こる災害への向き合い方を考えるようになった。入学したころは、なにも知識がなく、先のことなど考えることができなかったが、今では今後起こるかもしれない災害に、どのように備えていくか、また、私に何ができるのかなどを考えられるようになった。私たちは、環境防災科で学んできたことを自分だけではなく、周りの人にも伝えていきたいと思う。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は理学療法士になることだ。理学療法士とは、病気や怪我などで身体に障害のある人や障害の発生が予測される人に対して、座る、立つ、歩くなどの基本動作能力の回復や維持、障害の悪化の予防を目的に、運動療法や物理療法などを用いて、自立した日常生活が送れるよう支援する医学的リハビリテーションの専門職のことだ。

私は高校3年生まで、将来したいことも就きたい仕事もこれといってなかった。強いて言えば、人と関わり、誰かの役に立つ仕事に就ければいいなと思っていた。環境防災科でのたくさんのボランティア活動を通して人と関わり、多くの方と話す機会があり、人とコミュニケーションを取ることが楽しいと感じた。人の役に立てる仕事をしたいと思っていた私は、母の影響もあって理学療法士という職業に興味を持つようになった。理学療法士は患者さんだけでなく様々な方と関わりが多くある。コミュニケーションを取るのが好きな自分には、環境防災科で学んだ様々なことを活かして防災にも繋げられるような理学療法士になりたいと思う。

(2) 理学療法士と防災

理学療法士になったら2つのことに力を入れたいと考えている。

1つ目が高齢者と関わっていくことだ。理学療法士は怪我や病気をした人の治療だけではなく、高齢者のリハビリのサポートも行っている。高齢者は活動量の低下に伴って体力の低下、筋肉量の減少などの身体機能の低下が見られる。高齢者が多い日本、そして近い将来大きな地震が来るといわれている中で理学療法士ができることは、高齢者の方の身体能力の維持、向上させることだと思う。身体能力が低下してしまうと災害が起きた時に、逃げるのに時間がかかって逃げ遅れてしまう可能性がある。このようなことが起こらないようにするために理学療法士として、なにができるかを考えたところ、地域で健康体操を行うことが良いと考えた。地域の方と一緒に健康体操を行い、健康な体の維持、そしていざというときに動けるような体づくりをすることが、大きな被害や犠牲者を減らす防災につながると思う。またそのような地域交流を行うことで地域のつながりを作ることができる。阪神・淡路大震災の際に、家族や近所に助けられたことが多くあったと学んだ。災害時や避難時にも近所付き合いはとても大切になるため健康な体をつくるとともに地域との交流ができるような活動をしたい。

2つ目が防災教育に携わっていくことだ。防災教育として、普段から適切な姿勢・体勢を身につけることで、災害時の怪我を軽減できることがあると思う。災害時の学習をしてきた中で、避難する際には、道に木や看板が倒れている、道がぬかるんでいたり水がたまっていたりして歩きにくいなど、さまざまな状況があると学んだ。とっさに正しい姿勢をとれなければ、転倒したり、膝や腰に負担がかかって怪我をしたりする危険が出てくる。このようなことがあるため、理学療法士として、地域の防災教育や地域交流の機会に参加して、地域の方に適切な体勢や姿勢を教えるとともに、患者さんと防災に関する話をする事によって災害を身近に考えてもらうことができると考える。

患者さんの治療をするだけでなく、今まで学んできたことを活かして、なくすことのできない災害に対して私ができることをやっていきたい。生きていく上で、災害はつきものだ。逃げることのできない災害とどう向き合うかを考えていかななくてはならない。この、環境防災科で学んだ知識、高校生活で見つけた自分の長所、そして、出会うことのできた仲間との思い出と共に、高校を卒業してからも成長し続け、自分の夢へと一歩ずつ進んでいきたい。

6 最後に

私はこの3年間で多くのことを学び、環境防災科でしかできない経験をする事ができた。そして、過去の災害を風化させてはいけないという思いも強く感じるようになった。私はまだ大きな災害を経験したことがない未災者だ。これまで多くの被災者の方々から震災の話を聞かせていただく機会があった。過去のことを思い出すのはつらいことだったと思う。その貴重なお話を聞かせていただくたびに心に響くものがあり、阪神・淡路大震災を忘れてはいけないと思った。そして語り継ぐことが私たちの使命だと思う。未災者の私たちだが、そんな私たちだからこそできることがあると思う。私たちができる精一杯の力で、正確に語り継ぎたい。

また、環境防災科での学びによって私は物事を考える視点が大きく変わり、成長することができた。入学する前までは、地震が起きても「近くじゃなくてよかった」や、ニュースで災害の報道がされていて

も「かわいそう」「怖いな」と他人事とでしか考えていなかった。しかし、今では地震が起こったらどこで、どんな被害が出ているのか調べたり、私たちができることは何かあるかなどを考えたりして、募金活動の計画を立てて実行するなど、実際に行動することができるようになった。防災を学んでいくにつれ普段起こる小さな地震などの災害に敏感になった。これは良いことだと思う。日本では、近い将来大きな地震が来て膨大な被害が出ると言われている。私たちが生きているうちにきっとくるだろう。そこで私たちができることは、災害が起きる前に備えておくということだ。そして、3年間で学んできた、防災・減災を自分の家族や友達に伝え、大切な人たちを守りたい。災害と生きていくために私は防災・減災を学び続ける。

「未災者による語り継ぐ」

中田 脩生

1 はじめに

どれほど大きな出来事でも、時間が経つにつれ、人々の記憶や関心は薄れていくものだ。もちろんそれは、震災も同じ。震災を経験していない「未災者」が増え、さらに急速に風化が進むだろう。風化を防ぎ、災害での経験や教訓を、将来の防災に活かしてほしいという思いを抱き、「語り継ぐ」を執筆する。

2 阪神・淡路大震災

(1) 祖母の話

阪神・淡路大震災当時、夫と娘、息子と4人で兵庫県淡路市、一宮町尾崎の鉄筋の一軒家に住んでいた。地震発生時、1階の寝室で寝ていた祖母は「ドン！」と体が浮き上がり、横揺れですぐに地震だと気がついた。すぐに夫と一緒に2階の子どもを見に行くと、息子は机の下に潜り、娘は布団で寝ていたが、上に鏡台が倒れていた。部屋中に物が散乱しており冷蔵庫も中身が全て出ていた。家の周りには古い木造家屋が多かったので、倒壊しており、余震も続いていた。家は鉄筋とはいえ心配なので、避難所である体育館へ移動した。避難所の体育館にはすでに人が集まり、奥から埋まっていたので入り口付近しかスペースがなく、すぐに逃げられるようにと戸口が開けられていたので、とても寒かった。体育館には2日間ほど避難し、友人宅へ身を寄せた。昼間は半倒壊の自宅の片付けをし、夜は友人宅へ帰る日々が続いた。一番困ったことは水道が使えないことだった。支援のため、地震当日に淡路島で一番早く自衛隊が来たものの、水を運べる量が限られていたので食器を洗わずにもう一度使ったり、お風呂には入れなかったりした。役所に勤めていた娘も役所に行ったきり何日も帰ってこなかった。地震は怖くて恐ろしい経験だったが、ちょっとした贈り物や、かけてもらった言葉がとてもうれしかったのを覚えている。自衛隊の方も、息子に「がんばれよ」と声をかけてくれ、温かいごはんやお風呂を提供してくれてありがたかった。

(2) 祖父の話

消防団に入っていた祖父は地震発生直後、家族の安否確認をした後、パジャマ姿のまま近所の人たちの安否確認へ向かった。確認を終えた後は消防団の団長として、救助活動を行った。1人暮らしの世帯リストを見ながら家を回ったことで、迅速に救助が出来た。同時に位牌探しも行った。

(3) 話を聞いて

祖父母に震災体験を聞いたときは、話の内容が曖昧だったり、「あまり覚えていない」と言っていたことから、「震災体験の風化」というのを肌で感じた。しかし、話していくにつれ当時の様子を少しずつ思い出していた。震災から29年の月日が経った今でも、思い出せたのは、私の想像を上回る苦労や思いがあったのだろう。今回祖父母は快く、当時の体験を話してくれたが、全員がそういうわけではない。震災体験を思い出さないように日々過ごしている人もたくさんいる。話を聞けるだけでもとても貴重なことだと思った。話を聞いていて、当時の状況をイメージしにくいと思う場面が何度かあった。このことから震災は「記録」ではなく、「記憶」として語り継いでいく必要があると思った。「その時に〇〇した」という行動だけではなく、「その時に〇〇という思いの中で、〇〇した」というように当時の思いや考えを踏まえたうえで語り継ぐことが、震災の風化を防ぐのにつながると思った。

3 環境防災科

(1) きっかけ

淡路島に住んでいる私が、舞子高校の環境防災科について知るようになったのは、母がきっかけだ。「知り合いの娘が、環境防災科の卒業生らしくて、話を聞いたら面白そうやったで」という話を聞き、環境防災科について調べると、出前授業があることや、ボランティア活動があることを知った。小さい頃から、人前に立って話すことや、人の役に立つことが好きだった私は、防災についての知識が乏しい不安を抱えながらも入学を決めた。

(2) 入学して

入学してからの1年間は怒涛の日々だった。1年生では毎週のように講義があり、そこで幅広い分野の防災知識を得る。そしてそれを1週間の間にレポートとしてまとめ、提出する。その他にも多くのボランティア活動の募集があり、それに参加するには、当然、事前準備・事前学習が必要となる。これらに加えて、通常授業や部活動もある。何をするにも初めてで、教えて貰った内容を忘れないように常にメモを握りしめていた。その時の私は、毎日クタクタになって家に帰っていたが、間違いなく充実した日々を送っていた。そんな日々を送っていく中で、私に身についたのは「計画性」だ。しなければいけないことが多くて、忙しいからこそ「これは早めに終わらせているほうがいいな」など、先のことを考えて行動できるようになった。将来に役立つ大きな財産を得た。

1年生で最も記憶に残っているのは、東北訪問での先輩方の行動だ。1年生の1月に、東日本大震災の被災地である宮城県に訪問させていただいた。訪問して2日目の朝、私たち1年生は集合時間に合わせて支度し、時間内には集合していた。しかし、先輩方は集合時間までの間に地域のごみ拾いに行ったり、訪問中に行く予定だった「あおい地区」と呼ばれる場所まで、事前学習として下見に行ったりしていた。それらは、先生に言われてしたことではなく、先輩方が自ら行った行動だった。明らかにその時の私とは、防災について学ぶ姿勢が違った。この時、1年生の自分と2・3年生の先輩方との差を明確に感じた。同時に自分も当たり前のようこういった行動が出来る人になりたいなと素直に思った。3日目からは自分たちで考え、行動するというのを心掛けた。先輩方がしていたように、朝に周辺地域の緊急避難場所の確認などを行い、被災者のお話での休憩中に積極的に質問に行かせていただいた。訪問後の事後報告会では、行くことのできなかったクラスメイトに、訪問して聞かせていただいたお話や、現地に行き肌で感じたことなどに加えて、私たちは防災について学ぶ姿勢をもっと考える必要があるということも伝え、環境防災科の生徒としてどのように防災と関わっていくのかを改めて考えた。

これらの1年生で得た「防災に関する幅広い知識」「計画性」「環境防災科の生徒としての在り方」というのは、2・3年生で活かすことができた。出前授業や学期末に行う防災教育などで、1年生でインプットした知識を周りに伝える(アウトプット)する機会が増えた。原稿を見なくてもスムーズに相手に説明できたり、質問されたことにもすぐに答えることができたりした。この環境防災科で過ごした3年間は、これからの人生に大きく意味を持つと思う。間違いなく私は大きく成長することができた。

(3) ボランティア活動

私が初めてボランティア活動に参加したのは小学生の時だ。母親に連れられ、海のごみ拾いを行った。この時はただ、参加すると貰えるわらび餅に釣られ何も考えずに行っていた。

現在、環境防災科の生徒として行っているボランティア活動はとても本格的だ。ボランティア活動の事前準備として、活動内容の確認などの他に、活動の意図や心構えなどを明確にする。そのうえで活動を行い、最後に反省や改善点を話し合って終了する。1つの活動を行うだけでもかなりの時間を用いた。1年生の時は先輩に支えられ続け、その優しさに甘えていたこともあった。しかし、先生の「人前に立てば学年は関係ない」というお話を聞き、考え方が変わった。環境防災科のベストを着れば、周りの人からは1年生として見られていない、環境防災科の生徒として見られていることに気が付いた。同時に、このままの自分ではだめだと思い、先輩方の行動をよく見て動くようになった。おかげで、先輩の立場になった時でも後輩を支えてあげる事ができた。

印象に残っているボランティア活動は出前授業だ。防災の知識を自分の言葉にして、伝えるのは難しかった。小学校低学年の生徒にはどのような説明だと分かりやすいか、防災を楽しく学んでもらうにはどのような工夫をしたらよいか、試行錯誤を繰り返した。回数を重ねるに連れ、1人で授業を進めれるようになり、成長を感じた。

(4) 視覚特別支援学校との交流・共同学習

1年生の時に視覚特別支援学校との交流に行かせていただいた。視覚に障害のある人を対象に考えられた球技であるゴールボールの体験とワークショップを行った。誰もが安全に過ごしやすい、バリアフリーな社会が防災に繋がるということを知った貴重な体験だった。

最初に行ったゴールボールでは、目隠しのアイシェイドを着ける前と着けた状態では自分の体の動きが全然違うことにまず気がついた。着ける前に動くイメージを持っていたも、実際にプレイしてみると目が見えないことから、動きが消極的になったり、横に数歩移動するのにも時間がかかってしまった。しかしチームメイトとの接触を防ぐためにセンターの人はサイドの人より前に出る、今自分がどこにい

るかを分かるようにするために、手で触って分かる紐が床に貼られているなど、コート全体の仕組みを知ることによってその不安が軽減され、ボールを止めるために大きく動くことができた。ゴールボールのコートを普段の道路などに例えると床上の紐は点字ブロック、ボールの音や笛の音は音響式信号機などになり、聴覚や触覚には視覚障害者が行動する際の不安などを軽減する役割があると実感した。

後半のワークショップでは、具体的に地震が起きた時の周りの状況を想定した上で話し合いをした。そこでは、単に「地震が起きたら安全な場所に避難」ではなく、「12月14日に地震が起きた想定なので自分なら駅周辺のモールなどに避難して体が冷えないようにする。」という意見が出た。細かい部分まで1人1人が考えたことで、色々な意見が出て、新たな発見もあった。とても実りのある時間を過ごせた。特に視覚障害者が地震発生時に心配なこととしてあがった意見で、「何が起こったか判断するのが周りの人より遅いので、周りの人に状況を聞きたい。しかし、助けを求めることができるか心配」というものがあった。これに対して私たちがすべきことはまず相手が置かれている状況を把握したうえで、人が多い安全な場所に一緒に避難を行う。ずっと一緒にいられるとは限らないので、相手にコンビニやトイレの場所などを教えて長時間でもいれる状態を作るといった意見が出た。実際に相手の立場になって体を動かす体験をした上で意見交流するのは初めてだった。貴重な経験をした分、それを生かすためにも生きやすい社会を作るには何が必要か、地震の際に自分はどこに注目すべきかしっかり考えていく必要があると感じた。

4 夢と防災

(1) 想い

私は現在、地元である淡路島の防災力を上げたいと考えている。なぜなら淡路島に住む家族など、大切な人たちを南海トラフ巨大地震などの災害から守りたいからだ。淡路島は自然豊かな環境であるがゆえ、地震以外の土砂災害や水害などの危険性も高い。また、多くの木造の建築があることから、防災力が劣っていると考えられる。さらには高齢化に伴う「語り部」の減少も問題となっている。毎日新聞と神戸大学の学術研究院による共同調査では、「語り部」の6割が70代以上と高齢層に偏っていることが明らかになった。自然災害大国である日本では、台風や地震などの災害が全国で相次いでいる。そして、日本に住んでいる以上、災害から逃れることはできないことから、災害での教訓や経験を後世に伝える「語り部」のニーズは高くなっている。17歳という若い年齢である私が将来、防災に携わり、語り継いでいくことで、同世代の関心を集め、結果それが防災力の向上に繋がると思う。

(2) 現在の課題

淡路市の防災組織として、町内会には「自主防災組織」がある。実際、情報班長、消火班長、救出・救護班長、避難誘導班長、給食・給水班長など役割がある。しかし、実情としては1年ごとに役員は交代するし、研修などもほとんどないので有事の時に機能するか疑問である。

(3) 解決・夢

防災・危機管理コンサルタントの資格を取得し、企業や官公庁に対して防災の知識を普及するべく講演会や地域に対して防災イベントを企画する。課題に挙げた防災組織に対しても、実際にどう行動するのかプランを提供、避難訓練を企画するなどし、地域の防災力を上げる手伝いができると思う。また、防災グッズを取り扱う通販もするなど、防災に関しての専門家となり起業し、いずれ「防災の総合会社」を設立したいと考える。

ボランティア団体はいくつもあるが、それぞれをつなぐ役割をして、必要なところに適切なボランティアを紹介することもでき、地域の役に立てるのではないかな。例えば災害時、重機ボランティアをスムーズに淡路島に送り込めるシステムを作ることだ。災害によって倒壊した街などを復旧・復興する際に、人の手だけでは限界がある。ショベルカーなどの重機を使うのが得策だ。そして現在、災害時にショベルカーなどの重機を無料で貸し出すボランティア団体がある。その団体と平時から、淡路島で災害が起こった時にこの場所には何台必要かなどの計画を話し合っておくことで災害時でも迅速な対応を行うことができると考える。これらの活動が上記の課題の解消に繋がると考える。

5 最後に

今まで私たちに震災体験や教訓を教えていただいた語り部の方々には、共通して震災を風化させたくないという思いがあったはずだ。その思いを受け、3年間の集大成であるこの「語り継ぐ」を執筆して

きた。その中で改めて、伝えることの難しさや大切さを感じた。だからこそ、震災の風化を防ぐためにも、この3年間で多くの方々からいただいた恩を返すためにも、私たちが次の世代へと語り継いでいかなければならないと強く感じた。「記録」だけではなく、「記憶」としても未来へ残す。決して容易なことではないが、これからも阪神・淡路大震災と向き合い、この環境防災科としての使命を果たしていこうと思う。私はこの「語り継ぐ」を環境防災科の後輩に見て欲しい。それが私にとって、1番身近な被災者への語り継ぎだ。

命を大切に

永瀨 健人

1 はじめに

命とは、1人1人が持っている世界に1つだけのものだ。そして1番守らなければならないものだ。これからも災害という敵が私たちを襲ってくる。だからこそ災害について過去のこと、そして未来に向けて理解しなければならない。

2 祖父の話

(1) 当時の様子

神戸市西区伊川谷町の3階建ての集合住宅に住んでいた母方の祖父は地震発生時、炬燵で寝ていた。大きな縦揺れで目が覚め、その後の左右の揺れで地震だと確信した。たったの15秒の揺れがものすごく長く感じ、今までに経験したことのない揺れの大きさに天井が降ってくるくらいの恐怖を感じた。それまで生きてきた中で初めて死を感じた瞬間だった。家具は食器棚が倒れ地面にガラスが飛び散ったが幸い無傷で助かった。揺れが収まった後は家族の安否確認をし、その次にライフラインが通っていなかったため近くにあったラジオをつけ地震の情報を得ようとした。家は天井にひびが入った程度であったため、避難する必要はなかった。そのため、兵庫区に住んでいる兄弟に電話をして安否確認をしようと思ったが、連絡がつかなかったため、兄弟の家に行くことにした。車でJR兵庫駅まで行き、それ以降は通行止めであったため徒歩で家まで行った。すると、兄弟の家は全壊しており二階建ての家の一階が潰れていた。兄弟の安否確認ができていないため不安だったが、近くの小学校に避難していることがわかった。祖父の勤務先である明石市二見町は、揺れはあったものの被害は非常に少なくライフラインも通っていた。そのため、二見町の勤務先から水をポリタンクに注ぎ入れ自宅に持って帰り水を確保していた。水道が通っていなかったため、お風呂は加古川市の健康ランドに通い、入浴をしていた。

(2) 未災者に伝えたいこと

日本に住む以上、災害はいつどこで起きてもおかしくない。自分がどこにいても災害が起きた時のことを想定し、備蓄や家具の補強を日頃から行ってほしい。

3 母の話

(1) 当時の様子

母は兵庫区の曾祖母の家に下宿していたが震災前日は成人式であったため、実家に戻っていた。地震発生時ベッドで寝ていたが、「ドンッ!」と大きな音と同時に部屋が縦に揺れ、トラックに突っ込まれる感覚だった。タンスの上に置いていたガラスケースに入った人形が落下し、地面にガラスが飛び散っていたが幸い無傷であった。電気や水道、ガスが止まっているという初めての状況に恐怖と不安で心が押しつぶされそうであった。その時、祖父が部屋まで様子を見に来たため全員無事であることを知りすこし心が落ち着いた。下宿先の様子を見に行くと西区とは違い、あたり一面全壊の家だらけであった。兵庫区の様子を見てここまで被害があることを初めて知り、阪神・淡路大震災の怖さを知った。

(2) 阪神・淡路大震災から今まで思い続けていること

地震の揺れを感じた時の恐怖よりも家具が落ちた音のほうが恐怖を感じ、思考が停止して何をすればいいのかわからなかった。タンスの上にもものを置いたりせず、家具の固定はしっかりとすること。今の社会は、情報社会であり個人情報やお金も通信で扱う。そのため、ライフラインが止まってしまうと、阪神・淡路大震災とは違った、電話番号を知らないことやスマートフォンが使えないことに対する混乱が起きるだろう。そのために、キャッシュレスなどは一部現金にしたり、災害時に困らないようにすることが必要であると思う。

4 祖父と母の話を聞いて

私は大きな地震をこれまでに経験したことが1度もない。そのため、地震が発生した当時の状況も、被災後の辛さも全く知らない。しかし、祖父と母の話を直接聞いて、被災後の状況と災害の怖さを実感することができた。また、「当たり前」とは何も考えずに過ごすことではなく、毎日の1つ1つの

出来事に感謝をして過ごすことであることを知った。祖父と母は避難所生活を経験していないため、避難所での経験を聞くことはできなかった。しかし、避難所生活について「家がある私らでもしんどかったのに、避難所で何日も生活なんか絶対耐えられへん」という言葉を聞いて改めて避難所での生活の辛さを感じた。それと同時に、これから災害に遭い避難所での生活をするのであれば、少しでも避難所の生活を豊かにする方法を考えていきたいと感じた。

私は普段、祖父や母と震災についての話をすることがなかった。そのため、とても新鮮だった。同じ家で震災を経験した2人でも、思うことが違ったり、同じことを思ったり、人それぞれに災害に対する思いがあることを実感した。そして、祖父と母から受け継いだ思いを忘れず繋げていきたい。忙しい中、私のために時間を割いて、苦しい気持ちを振り絞って話をしてくれた、祖父と母に感謝している。

5 環境防災科

(1) きっかけ

環境防災科に入りたいと思ったきっかけは、中学の先輩が環境防災科に入学しており、環境防災科について教えてもらったことだ。将来、消防士になりたいと思っており、環境防災科に入学し災害について学び、知識を身につけた消防士になりたいと思い受験を決めた。

(2) 入学してから

入学してすぐに新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者になり、その後は盲腸に罹り1か月間学校に行けず、なにをすれば良いのかわからなかった。学校に登校してからも授業についていけなかったり、友達ができなかったりと悩むことが多かった。だが、環境防災科の科目では班活動などたくさんの人とコミュニケーションをとる機会が多かったためすぐに打ち解けることができた。

6 環境防災科での活動

募金活動や出前授業などの様々なボランティア活動に参加させていただいた。全活動を通して1番感じたことは、謙虚な姿勢でボランティア活動をさせていただくことだ。また、これまでのボランティア活動で、準備不足でうまくいかなかったボランティア活動を何度も経験した。この経験から物事を行うための準備の大切さを学んだ。

(1) 募金活動

入学して初めて参加したボランティア活動は、垂水駅で行った熱海市伊豆山土石流災害で被害に遭った地域への募金活動だ。大きな声で募金の呼びかけをしていると「頑張ってるね」と温かい声をかけて募金してくださる方がたくさんいた。そこではじめて人の役に立てたと実感し、もっと私たちにできることはないだろうかと様々なボランティア活動に参加したいと思うきっかけになった。

(2) 出前授業

私が出前授業をしてきた中で1番感じたことは、小学生の災害についての知識量の多さだ。授業をしていく中で質問をしたときに、私たちが用意している模範解答にプラスして小学生の個性がついた答えに毎回驚かされる。私が小学生の時とは考え方も授業の雰囲気も違ったため、防災教育が進んでいることを実感することができた。

(3) 交流学习

交流学习では芦屋特別支援学校に行かせていただいた。出前授業は、私たちが防災を教えるのに対して、交流学习は一緒に防災について考えるという所が難しく、準備に苦戦することが多かった。人生で初めて特別支援学校に行って感じたことは、1人1人が様々な意見を持ち個性豊かで、一緒に防災を考えることが楽しかった。交流学习として防災について一緒に考えることで、避難時での特別支援学校の生徒が望む配慮など、様々な課題を身にしみて感じることもできた。このボランティア活動をきっかけに障害についての知識を身につけ、障害のある方が安心してコミュニケーションをとれる人になりたいと思ったきっかけになった。

(4) 地域交流

私は小束山地域の地域リーダーをさせていただいた。リーダーをさせていただいて環境防災科生に考

えてほしいと思ったことが2つある。1つは、小東山地域での活動を増やすことだ。小東山地域では年に1度「まなぼうさい」というイベントがある。「まなぼうさい」では、垂水消防署とブランチ神戸学園都市が協力し、防災を楽しく学ぶイベントである。小東山地域は「まなぼうさい」のイベントのみの活動であり、そのことに対して私は防災イベントを増やすべきだと考える。「まなぼうさい」では、高齢者など地域全体として防災を学ぶことはできていない。また、小東山地域では避難訓練の実施もないため地域コミュニティの確立が十分にできていないと考える。だからこそ、これからの小東山地域を守るため、たくさんの人に防災イベントやボランティア活動の立案をしてほしい。そして年齢関係なくたくさんの人が防災を学べるまちづくりをしてほしいと感じた。もう1つは、「まなぼうさい」を通して環境防災科の活動をもっと紹介することだ。環境防災科はイベントのスタッフとして参加しているため環境防災科のブース展示をするスペースがなかなか少なく、1度見て通り過ぎていく方がとても多かった。体験型や映像などたくさんの人が1度見て目にとまるようなブース展示をして、環境防災科の活動を広めてほしい。

（５） 消防学校体験入校

私は高校生活の中で最も身体的に辛いと感じたことが、高校1年生の体力錬成だ。体力錬成では腕立て伏せを連続100回、腹筋50回、休憩なしで行うという規格外の訓練だった。私は当時、訓練に耐えきれず逃げ出したかった。しかし、消防学校の指揮官の「そんな甘えていたら人を助けられない」という言葉が消防士を目指す私のモットーとなった。自分に厳しく生活し、他人に優しく接していこうと思うきっかけとなった。

7 夢と防災

私は将来消防士になりたいと思っている。そう思ったきっかけは、小学3年生の時に友人を交通事故で亡くしたことだ。このことをきっかけに命とは儚いものだと思い、人を手助けする仕事に就きたいと決意した。これからの社会では少子高齢化が進む問題と直面しなければならない。防災において高齢化が進んでいくと、これまでの避難訓練やイベントなどで私たちがつけた力だけでは救えない命が出てくると思う。だからもっと避難訓練やイベントを増やし、地域コミュニティの確立をするべきである。さらに、消防士の人員を増やすことも必要だと考える。災害への対策だけに集中して目を向けるのではなく、これからの社会で起こる問題、社会背景にも目を向け、どのような対策が必要で、個人が努力できることを伝えるのも防災において消防士の役目であると考えている。

私が消防士になったらしたいことが3つある。1つ目は、災害弱者についての講演会だ。一般の方は災害弱者という言葉すらも知らない。避難所での生活において災害弱者との接し方も知らないため、互いにストレスが溜まってしまう。そのことを防ぐためにたくさんの人に災害弱者について知ってもらい、避難所の良い環境づくりを実施したいと考えている。2つ目は、主に災害弱者からの視点で考えた避難訓練の実施だ。災害弱者は避難所で周囲の人への恐怖や不安を抱えているため、少しでも災害弱者について理解してもらい、災害弱者が安心できる安全な避難活動をするために実施したいと考えている。3つ目は、災害弱者への避難訓練参加の呼びかけだ。これまでのボランティア活動や交流学習で災害弱者と関わった中でたくさんの人から「避難訓練に参加しにくい」「避難訓練に参加しても意味がない」「避難訓練への抵抗がある」という声をよく聞いた。このことから、災害弱者が参加しやすい、災害弱者も含めすべての人に意味のある避難訓練を実施し、そのうえで避難訓練に参加しやすくなる呼びかけをしたいと考えている。

また、私が消防士になることができれば大切にしたいことが2つある。ひとつは、周りの存在を大切にすることだ。これまでに幾つもの失敗を重ね、何度も周りに助けられた。今思うと、周りの存在がいなければここまで成長することはできなかつただろう。だからこれからできる友人や仲間を大切にしたい。もうひとつは、何事も後回しにしないことだ。高校に入学してからの2年間は何事も後回しにし、だらしない生活を送っていたため、3年生となりとても苦しんだ。このことから何事も面倒くさいと思わずに向き合うことを大切に、余裕のある人に成長していきたい。

8 最後に

私は今回の「語り継ぐ」とこれまでの約18年間を通して1番感じたことは、とにかく命を大切にすることだ。未曾有の災害によって被害に遭うことを未然に防ぐことはできない。だが、ほんの少しの対策と災害について知識をつけることで災害との向き合い方や、災害への意識が変わり救える命が増え

る。また、現代では、自殺による死亡者数が異常な割合で増加している。その原因として、家庭問題、学校問題、心理的問題など様々にある。これらの問題を解決することも防災活動のひとつであると思う。まず、命を大切にすることを改めて世界中の人に知ってほしい。

未災者の使命

成本琉真

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に神戸の街でとても大きな出来事が起こった。その大きな出来事、阪神・淡路大震災が発生したことを機に、地震が発生しないと言われていた神戸の街の常識は変わり、今ではこれをきっかけとした様々な取り組みが行われ、これから発生すると言われていた南海トラフ巨大地震に負けない街づくりが行われている。

2 I 先生の被災経験とその経験から考えられる高校生の役割

(1) 当時のお話

I先生は震災当時教員1年目で芦屋市の高校に勤務していた。当時授業を受け持っていた生徒と放課後に「また火曜日ね」と言って別れ、そのまま土日也會うことがなく、その生徒は地震によって亡くなった。それ以降、人と別れる際には会うのはこれで最後かもしれないという想いで別れの挨拶を大切にしている。

(2) 学校が避難所になった場合に高校生にできることは？

大災害が発生し、多くの避難者が学校の体育館に集まることによって、避難所になっている体育館やトイレなどの不特定多数の人が使用する場所が汚くなってきてしまう。そのときに高校生が避難者と一緒に掃除をすることがある。ここで重要なのは全てのことをやってあげるのではなく一緒にやる。それは被災して元気がなかったり辛かったりする避難者にも役割を与えることで、自分にはやることもあるということに気づいて元気を出してもらうためだ。さらに避難者が困っていることや必要としていることに手を差し伸べることができる。ここでも困っているすべてのことを高校生がやってあげるのではなく、一緒に解決に向けて働き、避難者がスムーズに元の日常に戻れるように軌道に乗ってきたら手を放し、見送ってあげることが大切。さらに自分の得意なことを活かし、避難者の生活を支えていくことだ。絵を描くことが得意であれば避難所内の案内や注意書きのポスターのデザインをして掲示をしたり、子どもと関わるのが得意なら保護者が仕事に行ったり、何らかの用事があったりと、子どもが1人になったときに一緒に遊んであげたりすることもできる。

(3) 今大規模災害が起こって舞子高校に避難者がきたときに起こる問題は？

災害時に避難をしてくる人は避難所に行けばなんとかなり、学校や市の職員が案内してくれて、なんでもスムーズに事が進むと思っているかもしれない。しかし学校や市の職員の立場に立つと、あの小さい体育館に多くの避難者が押し寄せてくると混乱が生じてスムーズに行くことは難しいと考えている。こうして避難者と運営側の職員との間で認識のズレが生じてしまい、混乱が発生したり、衝突が発生したりしてしまうかもしれない。このことを防ぐためには事前に避難所運営のシミュレーションをしておく必要がある。シミュレーションをやることによって見えてくる問題点や改善点がありこれを毎年行うことで次々とバージョンアップし、もしものときにスムーズな避難所運営を行うことが出来るようになる。しかし、それでも緊急時には想定外のことが多く起こるのでその都度、臨機応変に対応する必要がある。

(4) お話を聞いて

先生のお話を聞かせていただき、避難所での高校生の役割はいくらでもあると感じたと同時に、自分では気づくことができなかった視点での話が多く、そのお話を聞くことができてとても勉強になった。高校生の役割は与えられるというよりも、自分から進んで探し、見つけて行動しなければ見えてこないことでもあり、いろいろな視点で物事を見て考える必要がある。そのためにも普段から見えていないことや、人の変化などに気づける人になりたいと思う。実際に避難所生活のサポートをする立場になっても、普段から様々な視点で物事を捉え、人の変化などの多くのことに気づくことができる人であれば、自分の役割を存分に見つけ出すことができると思う。また、自分だけでは避難所生活を送っていくことが困難な人への支えとなることができるのではないかと考えた。

3 環境防災科

(1) 環境防災科に進学を決めたきっかけ

私が舞子高校環境防災科を自分の進路として決めたのは、幼い頃からの夢が消防士になることだったからだ。環境防災科を知る中学3年生の夏までは自分が進学したい高校もなく、なんとなく定期テストを受け、特に進路について考えることなく過ごしてきた。そこである日、親に消防士になりたいということを伝え、それなら舞子高校環境防災科なら自分の興味のあることを学べるのではないかと言われた。それがきっかけで環境防災科に興味を持ち、防災について学べば将来消防士になって学んだことを活かせるのではないかと思い、進学することを決めた。

(2) 環境防災科で学んだこと

私が舞子高校環境防災科に入学し学んだことは、環境防災科の専門科目の中にある災害発生のメカニズムや災害への備え方、災害発生時の身の守り方などももちろんだが、それ以上に人として大切なことを学ぶことが多かった。例えば、なにかお話を聞かせていただく際にはメモを取る、教室に入るときには声をかけて礼をする、忘れ物はしない、時間を守る、何かを実際におこなう時には相手のことを考えて入念な準備をする、などの当たり前のことだが、これまではできていなかったことが少しはできるようになったと感じる。これらの1つ1つはただやるだけではなく、全てにおいて意味がある。メモを取るということは連絡事項を忘れたり、間違えたりしないようにしたり、語り部さんからお話を聞かせていただいたことを後から見返して、今後に活かしたり、その話を他のだれかにする、いわゆる語り継ぐということをしてきたりするからだ。教室に入るときには声をかけて礼をするということは挨拶をするという意味と、授業や講義をしてくださる方への敬意をもって授業や講義を受けるという心構え。忘れ物をしないということは自分が忘れ物をしてしまうと自分自身だけでなく周りの人や相手先にも迷惑をかけてしまうためだ。時間を守るということは、忘れ物と同じく、自分自身だけでなく周りの人や自分の後に待っている人に対して迷惑をかけないようにするためだ。何かを実際におこなう時には相手のことを考えて入念な準備をしなければならない。相手が自分のために時間をとってくれているということを忘れず、感謝の気持ちをもって準備をし、さらにその相手の大切な時間を粗末に扱わないように、有意義な意味のあるモノにするためだ。このように環境防災科に入学し、災害などの知識だけでなく日常生活で大切な行動や自分自身のこれから大切にしていきたいと思える心の部分を多く学んだ。災害の知識なども、もちろんだがこの環境防災科で学んだことは無駄ではなく、今後の自分の人生においてとても大切なものだと考える。そのためこの環境防災科で学んだことを無駄にせずこれからさらに大人へと成長していきたい。

(3) ボランティア活動

私は環境防災科に入学してから様々なボランティア活動に参加をさせていただいた。その中でも1番心に残っているのは1年生の時に初めて参加したボランティア活動である募金活動だ。それは熱海市で豪雨の影響で発生した土石流によって被災した地域に向けて行う被災地支援金募金活動だった。このときは募金活動をするにあたっての注意すべきことや大切なことなど、なにも知らずにただ先輩方の背中を追いかけて大きな声を出すことだけを心掛け、活動にあたった。舞子高校は垂水駅で活動することが多いが、募金活動をしていると「暑いのに頑張って偉いね」「頑張ってね」などのお声を沢山かけていただき、多くの街の方々の優しさに触れることができた。急いでいそうなのにわざわざ足を止めて募金箱にお金を入れてくださる人、小さい子どもが恥ずかしながらも小さい手でお金を握りしめて近づいてきて募金箱にお金をいれてくれる姿、自分と同じ年代くらいの高校生の集団がふざけあいながらも募金をしてくれる姿などを見ると、普段ではお互いに関わることもない接点もない街の人々が土石流の被災地である熱海市に向けて心を1つに応援しているような気がして言葉では言い表すことができない嬉しいような感動するような気持ちになった。さらにその姿を見て心の底から「ありがとうございます」という言葉が自然に出てきた。このとき初めて参加した募金活動で、募金活動をする際に注意すべきことやどんな気持ちで活動に取り組むべきなのかということ、相手に対しての感謝の気持ちを知ることができ、それをその後に参加する多くのボランティア活動に活かして取り組んできた。

4 夢と防災

(1) 将来の夢

私はまだ将来の夢が見つかっていない。しかし環境防災科の授業や講義を受けたり、クラスメイトの話や話を聞いたりしていると世の中には魅力的な職業が沢山あるということに気が付いた。私は小さいとき、消

防車やパトカーなどの働く車が大好きだった。そのため、よく親が消防署などに連れて行って本物の消防車を見させてくれ、何度も見るうちに働く車が大好きだった思いはいつの間にか実際にその働く車に乗って人を助けたいという思いに変わっていき、将来は消防士になりたいという夢を持っていた。環境防災科に入学したのも消防士になりたいと思っていたためだ。しかしこの環境防災科に入ると、消防士や警察官、自衛官などの被災地での救助活動をするだけでなく、人を助ける、なにかに困っている人に手を差し伸べる、というのではなく、心理的な面や備えの部分など、様々な方面から人を助けることができる、人に手を差し伸べるができるということを知った。それなら消防士以外の仕事についても知り、じっくり考えた上で将来の夢を確立したいと考え、今、将来の夢がまだ見つかっていない。しかし将来の夢を見つけていなくても人を助けたい、なにか困っている人の役に立つようなことをしたい、人のためになにかをしたいという思いは変わっていない。そのため将来は沢山の人と関わり、なにかに困っている人を支えられるような職業に就きたいと考えている。そこで防災について興味を持ってもらい、防災について知ってもらうことができるようなきっかけを提供したい。

(2) 私と防災

私はこの舞子高校環境防災科に入るまで防災という分野をそれほど深く知らなかった。しかしこの災害の多い日本という国に住んでいる以上、災害から自分や自分の大切なものを守るために、防災という分野はとても大切で必要不可欠なことだ。将来どのような職業に就いても防災という観点を踏まえた上で、物事を考えながら生活をしていきたいと考えている。例えば仕事をする上で主要となるオフィスや自分のスペースを地震が起こった際に危険な場所としないようにする。具体的には安全に配慮して物を最低限にして被害を最小限に抑え込めるような場所づくりをする。さらに将来、自分の家を建てる際には家を耐震補強して建物自体を強化する。また大きい危険な家具を置くことを避け、家具を固定したり、なにが起こっても困らないようにたくさんの食糧や備品を揃えたりし、安全で最強な家づくりをしたい。そうすることによって、この3年間で学んだ備えや備蓄の知識が活かされ、自分や自分の大切な人や物を守ることができ、安心で安全な暮らしを営むことができると思う。

5「語り継ぐ」の執筆をして

この卒業研究で「語り継ぐ」を執筆するにあたって高校生活の思い出を思い出しながらこれまでの活動を振り返った。そして過去の自分と未来の自分と向き合いながら自分自身について改めて考えることができた。環境防災科の活動を通して先生や先輩方、これまでの活動に携わって頂いた方々からたくさんのことを教えて頂き多くのことを学び、自分自身が入学前よりも少し大人に近づくことができたのではないと思う。それは環境防災科の授業や活動を通して、自分だけでなく相手や周りの人の立場に立って考えることが大切だと学んだからだ。入学する前まではボランティア活動といえば被災地支援しかイメージできなかったが、相手の心に寄り添った支援や相手に合わせて何かを行う支援など、被災地支援だけでなく相手を大事にして支えていく、そのような支援の方法を知ることができた。これから長い人生を生きていく中で自分のことだけでなく、相手や周りの人を思いやりながら大切に生きていきたい。

過去から学ぶ

原 健太

1 はじめに

阪神・淡路大震災が起きてから 29 年という長い月日を経て、神戸の街は関西の中でも有数の大きな都市として復興を果たしている。しかし、災害を経験していない未災者である世代が増加し、災害を経験した世代が減少し、高齢化が進んでいることで、災害の経験を語り継ぐことが難しくなりつつある。記憶の風化がこのまま進んでしまうと、過去の災害と同じように被害が拡大する可能性が高まってしまう。だからこそ、未曾有の災害と言われた阪神・淡路大震災を語り継ぎ、共有していくことが重要なのである。自分事として捉え、自分のできることやその状況下で何ができるか思考を展開していくことが自分や地域の防災力を向上させることにつながると思う。私は「語り継ぐ」を通して、聞いた話を私自身の言葉で書き、読者やその周りにいる方々の防災に対する活動の必要性、語り継ぐことの重要性を確認する機会の 1 つとなって欲しいと思う。

2 伯祖母夫婦(祖父の兄弟)夫婦の体験

(1) 当時の家族の状況

家族は伯祖母夫婦(当時 49 歳)と息子(当時 18 歳)で、住居は神戸市東灘区魚崎町だった。伯祖父はクリーニング屋で仕事をしており、築年数の古いアパートに住んでいた。

(2) 直後

被災時は、伯祖母夫婦は 2 階で寝ており、息子は受験勉強のため、1 階で勉強をしていた。地震によって伯祖母夫婦が飛び起き、外を見ると 1 階の風景であった。これは、中層階で起こるパンケーキクラッシュが起こったことによって 1 階が潰れ、2 階が 1 階の位置にあるという現象が起こったからである。伯祖母夫婦は特に怪我はなかったが、息子が 1 階で住居の下敷きとなった。こたつの中に入っていたため、生き埋めにはなっていたが、その後、地域住民によって救出され、大事には至らなかった。伯祖母夫婦は息子が生き埋めになった時はとても心配だったが、息子の声が聞こえて安心したそうだ。家の周りの状況は東西に家が倒れ、住めないような場所もあるくらい被害がひどかった。息子が助けられた後、近所の工場で布団を借り、近隣住民の方々から服を借り、近くの横屋会館へと向かった。この時初めて地域のコミュニティのありがたみを感じたそうだ。

(3) 横屋会館

横屋会館は人が多く、1 階と 2 階の階段の踊り場で 1 日を過ごした。昼の配給を貰うために魚崎小学校まで行っただが、目の前で配給が無くなり、その日は横屋会館でもらった 1 枚のビスケットで過ごした。その夜は余震の怖さや 2 階に安置所があったこともあり寝られなかったそうだ。次の日は近くでガス漏れが起こっていて爆発が起こる可能性があるという放送を受け、実家へ向かった(爆発は起こらなかった)。

(4) 実家

実家の同市同区の岡本へ向かった。岡本では古い家が多かったが、被害が少なく、ガスも出た。さらに、避難物資が青年海外協力隊のおかげで早く届き、炊き出しも行われていたが、唯一水が出なかったことが難点だったそうだ。その後、抽選で大阪府高石市の借上げ住宅が当たり、1 か月で岡本の実家を出ることとなった。

(5) 高石市の借上げ住宅

高石市の借上げ住宅は元々工場の社員寮として使われていた場所で、家賃は無料で 1 年契約だった。1 年が経ち、新居が立ち上がるまでの延長を自治体と交渉したが断られ、家から追い出され、また家を探すこととなり、堺市のアパートに住むこととなった。

(6) 堺市のアパート

堺市のアパートへ引っ越してから、伯祖父は道具も無くなってしまったのでクリーニング屋の仕事を辞め、趣味だった植木を職業にした。この時、50 歳を過ぎると仕事が少ないことに気づいたそうだ。

新居ができるまで堺市のアパートに住んでいた。

(7) 現在

現在は元々住んでいた土地に新しく家を建て、暮らしている。

3 伯祖母夫婦のお話を聞かせて頂き

阪神・淡路大震災を経て、神戸は防災という考え方を持つようになった。しかし、伯祖母夫婦のお話の中に、「何もないから忘れられていっている」や「意識は薄れている」というワードを何度も耳にした。被災地の神戸でさえこのように感じている人がいるということは、災害から時間が経つに連れて、防災意識や震災の記憶が風化され、震災前の状況に近くなってきているということが分かった。私たち環境防災科の活動は記憶の風化を防ぐためのものでもあるにも関わらず、風化が進んでいるという現状は、私たちの活動が他者にあまり行き届いていないことの証明である。私たちは阪神・淡路大震災で学んだ防災・減災の重要性を世間の方々にもっと知ってもらうため、努力をしなければいけないと改めて感じた。

4 舞子高校環境防災科

(1) きっかけ

私が舞子高校環境防災科に入ることを決断したきっかけは、小・中学校の防災学習からより防災について学びたいと考えたことである。小・中学校の授業は、阪神・淡路大震災が起これ、防災に力を入れている神戸であったため防災に関するものが多かった。しかし、勉強した内容は机上のことが多く、聞けたとしても担任の先生から聞く被災の感想や状況だった。このような勉強では防災の核心をつくことができないと考え、知り合いや両親に環境防災科は外部講師の方の講義や消防署体験などを行い、机上だけでは学ぶことができないことができると聞き、入学を決めた。

(2) 学校での活動

入学初年度は各分野における専門家の方々の講義を聴いたり、講義内容に関する体験、消防体験や近隣小学校との連携授業を行った。その中で大切だと思ったのは共通理解の重要性である。人によって災害に対する意識、対策、考え方などに違いがある。これは、家族の人数や年齢、住んでいる場所や環境などが違うことにより発生する考え方の違いであるため、一般的な防災対策を教え込むことが対策の1つとなると考えている人もいるが、私は人に命令されて行う、考えることほど苦痛であり、身につかないものはないと思う。だからこそ、役割分担や共通理解は行政だけではなく、住民も関わり決めなければいけない。共通理解は自分を助けるためだけでなく、他者も助けることができる。例を挙げると阪神・淡路大震災の際、甚大な被害を受けた淡路では、近隣住民の寝室まで理解していたことで、「まだ寝ている時間であれば、寝室であるこの場所に埋まっているかもしれない」と考え、救助がいち早く行われた。このように近隣住民の寝室まで理解するのは難しいと思うが、近所との関係を良好にしておくことも防災につながる。

(3) ボランティア活動

舞子高校ではたくさんのボランティアを経験させて頂いた。出前授業や防災イベントが主要なものだった。小学生と中学生に対して出前授業を行ったが、その中でも1番重要だと感じたのは内容の正確さである。防災の情報は日々アップデートされている中で、私たちが正確な情報を届けなければ、聞いている方々に間違った知識は、災害が起こった際に危険な目に遭わせる可能性が高くなってしまうと考えたからだ。防災イベントは大阪城公園やランチ学園都市で行ったが、それぞれのイベント会場や対象に合わせて工夫した。大阪城公園では、予測していなかった雨の状況下で来られた人ができるだけ汚れないようにマットの上で問題を解いて頂いた。問題では大阪の方々により防災意識を持って頂けるように南海トラフ巨大地震に関連したものにするなど工夫を凝らすことができた。このイベントでは臨機応変に対応することの難しさに直面できたことも良い経験になり、今後の南海トラフの時にも活かすことができるようにしたいと思う。ランチ学園都市ではぼうさい忍者という子ども向けの踊りを行ったが、恥ずかしさを捨て、楽しく学んでもらえるように笑顔を意識した。水消火器講習の際には、手の空いた時間に神戸市消防局の方から過去の経験や消防士になった経緯なども教えて頂き、夢のまだない私にとって自己分析の必要性を改めて感じるとてもいい機会となった。

(4) トルコ・シリア大震災

2023年2月6日未明(日本時間)にトルコ南部のシリア国境付近を震源とするマグニチュード7.8の巨大地震が起こり、死者が5万人近くにのぼる大変悲惨な災害となった。発災から2日たった日のホームルームで担任の先生から当時環境防災科2年生の私たちに行動を促すメッセージを頂いた。そこで委員長であった私を含めた6人が募金をしようと行動を起こした。リーダーとなった私は各クラスへの説明の人員の確保や役割分担、募金箱の制作なども行った。初めてのリーダーだったこともあり、募金を手伝ってくれたメンバーにはとても迷惑をかけてしまったが、たくさんのお気持ちを預かり、無事募金を終えることができた。トルコやシリアまで送ってくださるCODEさんへ、地域の方々や舞子高校の生徒から受け取ったお気持ちを届けるときにも帯同させて頂いた。舞子高校で行うトルコ・シリアへの募金活動の企画からCODEさんへ届けるまでほとんど全ての工程に関わり、リーダーシップの在り方や誰にでも納得してもらえる企画書の作成など大変さを実感させて頂くと同時に、いつも防災活動を企画して下さる先生や企業の方々の苦勞を知ることができ、とても意味のあるボランティアとなった。また、トルコの高校生とオンラインで交流を行い、防災に関する知識を伝えられたと同時に英語の重要性にも気がついた。日本には沢山の外国人の方々がいるが、その中には日本語を話せない方もいる。そんな時に公用語として幅広い国や地域で学ばれ、使われている英語を話せるようになることでより迅速に正確な行動や指示をすることができる。このことから、英語の知識を身につけることも防災の1つであり、自分の身や周りの身を守ることができる可能性もあると自身の考えに変化が起こった。

5 将来

(1) 将来の夢

私の将来の夢は人の役に立つ人材となることだ。私にはまだ断言できるような夢はない。しかし、ボランティア活動や授業内の活動で、沢山外部の方々に関わり、自分が頑張ったことに対して、お褒めの言葉を頂く機会が沢山あった。自分の頑張りが人の役に立つということは相手にとっても嬉しいことであり、自分にとってもやりがいや達成感を得ることができる。お互いに利益がある褒め言葉をこの世界にもっと増やしたいと考え、人の役に立つ人材になることが現在考えている将来の夢となった。

(2) 学んだことを将来へ

私は防災に関係する職業に就職する可能性は極めて低い。だからと言って環境防災科で学んだことが活かないかと言われればそうではないと感じる。地震大国である日本ではいつ、どこで発災してもおかしくない。だからこそ、自分の身は自分で守ること、市民の防災力を高めることが必要であると思う。兵庫県では、阪神・淡路大震災をきっかけに防災の考え方が広がっているが、他県では、あまり広まっていないところもあるので、他県に住むことになった場合には、近隣の住民の人々と防災について話し合い、防災力を向上させることができると考えた。

(3) 自分の課題

自分の課題はコミュニケーション能力の欠如である。私は、人と話しをすることや人の前に立ち、話や説明をするのが苦手である。この課題を克服しない限り、地域のリーダーや街づくりを積極的に行うといった将来的に行いたいと考えていることが机上だけのこととなってしまう。克服に向けて、ボランティアへの積極的な参加や委員長になるということを2年生の1年間、頑張ってみたが、それでも克服できなかった。しかし、人前での話やTP0に応じて、想定外の事態にどう立ち向かえば良いか少しわかった気がする。この結果から場数を踏むことが一番手っ取り早いのではないかと考えたため、大学に進学してもボランティア活動には積極的に参加していくことで課題は少しでも克服できると思う。

6 最後に

環境防災科として3年間過ごさせて頂き、改めて自分が無知であることを知った。だからこそ、より多くの分野に対して様々な視点でアプローチをかける必要がある。私は高校をもって防災を専門とする学科での学びを終えようと考えている。しかし、これは防災について絶縁するということではない。むしろ、ここからが始まりなのである。阪神・淡路大震災から29年という長い月日を経て、世間は異常なほどに変わった。変わりゆく社会・環境の中で一番の軸は防災・減災という考え方であり、風化させてはいけないものでもある。だからこそ、より世間は防災・減災の考えを学んでほしいと思う。

次の世代へ

原田 愛子

1 はじめに

阪神・淡路大震災が発生してから、29 年が経ち震災を経験している人が少なくなっている。このまま私たちのような震災を経験していない人々が大人になるにつれて阪神・淡路大震災の記憶は薄れていってしまう。だから、私たちが親や祖父母などに当時の体験談を聞き、残していくことが大切であると思う。そして、これから私たちのような次の世代をつくる人にも語り継いでほしい。

2 祖父の話

(1) 祖父の震災体験

祖父は当時、淡路島の洲本市に住んでおり、洲本市役所建設課の仕事についていた。

1 月 17 日早朝、大きな揺れで目が覚めたが室内に被害はなく外も暗かったので、寝床から出ることはなかった。体感では震度 4 程度かなと思った。朝テレビを見ると高速道路が壊れ、ビルが倒れ、大きな火災が発生し、神戸の街が壊滅状態であったのでとても驚いた。さらに、ニュースを見てみると淡路島北部の野島が震源地で富島、志筑で大きな被害が出ているとの報道があり、これは大変なことになったと思った。祖父は土木技術者なので、道路、港湾、河川、建物等都市の復興ができるか心配になった。

地震発生から 3 日後、祖父が勤務している洲本市役所から救援物資を神戸に送ることになり、海上保安庁の巡視船で握り飯と牛乳を運んだ。神戸港では接岸する岸壁が破損していて救援物資を陸揚げすることに一苦労した。荷捌き場に駐車していた車が海中に何台も沈んでいるのを見て、地震の怖さを実感した。帰りの出港時間まで 2 時間程あったので、神戸の街の被害状況を見ておこうと思い、元町から県庁の方へ歩いたが、建物や電柱、街路樹が倒れていて普通に歩くことができなかった。テレビで見ると実際に現場で見ると大きな差があり、改めて地震の怖さを思い知らされた。市役所の防災課では、近く発生すると予測されている、東南海地震に備えるため避難マニュアルの作成、避難訓練の実施、建物の耐震化等の対策を実施すると共に、市民への周知を行った。

(2) 祖父と東日本大震災

その後、2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生、洲本市でも津波警報、避難勧告が発令され、一部の住民が避難指定場所に避難した。後に検証した結果、問題点があることが判明した。避難指定場所は第 2 小学校と健康福祉館である。第 2 小学校までは避難道路が砂地盤なので液状化現象が予測されると共に倒木、古民家の倒壊等が考えられるので、地震発生後の歩行は困難であり、避難場所としては不適当である。もう一方の健康福祉館が適当と思われるが、土曜、日曜、祭日、夜間は閉まっていて入ることができない。また、住民 2 人が地域内にあるホテルに避難したが、受け入れできないと断られた。

(3) 祖父の防災との関わり

祖父は、このままではいざという時に助かる命も助からないのではと思い、自治会独自の避難マニュアル、マップを作成することを思い立ち、防災に詳しい先輩の協力を得て作成することができた。避難マニュアル、マップは命にかかわることなので自治会に加入していない住民にも配布した。健康福祉館は管理者である洲本市と協議し、緊急時は土曜日、日曜日、祭日、夜間も開けることで合意できたので避難場所は健康福祉館とし、健康福祉館まで行けない住民のためにホテルと話し合い緊急避難場所として指定することができた。後日、住民を集め説明会を開催すると共に指定された道順で健康福祉館まで避難訓練を実施した。

マニュアル、マップを作成する中で住民アンケートを実施したが、質問事項の 1 つに「貴方が被災した時または避難する時、誰に助けを求めますか。」との質問に近所の住民と回答した人は 62% だった。一方、「近くに助けを求める人がいたら貴方は助けますか。」との質問に 78% の人が助けると回答した。祖父はこの結果を見て住民相互の信頼、絆を高めることが一番の課題と考え、サロンの開設を決めオープンした。サロンは毎週月曜日 10 時～15 時まで開け、来訪者には 100 円支払って頂き、コーヒー、茶菓子を提供することにした。サロンには大勢の高齢者、独居老人が来訪するようになった。

10年を経過した現在もサロンは続いて地域住民の絆、信頼は深まっているとともに、参加者皆で談笑することで住民の日常生活をよりよくした。

近い将来に東南海地震や南海トラフ巨大地震が発生すると予測されており、地域住民の生命財産を守るため今後も防災、減災に取り組んでいきたい。

3 祖父の話聞いて

祖父の震災経験を聞いて、改めて地震の怖さを知った。祖父がテレビで見ると実際に見るのは全然違うと言っており、私はまだ映像や画像でしか被害の様子を見たことがないので見たいと思った。画像や映像だけでもあれだけ地震の怖さが伝わってくるのに、自分の目で見るともっと怖くなるのかなと思った。神戸や淡路島の北淡周辺は被害が大きかった。だが、祖父が住んでいる洲本市には被害があまりなかったと知り、とても驚いた。震源地が淡路島でも住んでいる地域によって被害の大きさが異なっていると知り、祖父や祖母が洲本市に住んでいてよかったなと思った。もし、違うところに住んでいたら今、いなかったかもしれない。そう思うととても怖い。

私は、祖父が洲本市役所で働いていたことは知っていた。だが、震災当時、救援物資などを送っていたことは今回初めて知った。祖父も、これまで経験したことがない震災を経験し、すぐに救援物資を送ったことはすごいなと思った。それだけ、いつも市民のことを思って、市民のために働いていたんだなと思った。今でも夏には花の水やりなど、洲本市をよりよい街にするために活動している。

私は今回、祖父の話聞いて改めて祖父は懂れる存在だなと実感した。祖父は、市民の代表になって、多くの人に頼られている。そんな祖父を見ていて私も将来、こんな風になりたいと思った。地域の中でリーダーとなり、避難訓練や地域交流をして住んでいる人全員が仲良く防災意識を高めるような地域づくりをしていきたい。そして、私が大人になってから大きな災害が発生した場合、まず自分の命を守り、その次に地域の人々の命も地域の人々が助け合えるようにしていきたい。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学しようと決めたきっかけは2つある。

1つ目は防災や災害に興味があったからだ。防災に興味を持ったのは、中学1年生の時だ。兄は当時中学3年生で高校受験の時期だった。私と兄は陸上部に所属していた。その時に、兄の陸上部の友人で環境防災科の合格が決まった先輩がいた。私は中学1年生だったため、受験のことはあまり考えてはいなかった。だが、中学校で生活して防災訓練や災害・環境問題などのニュースを見て災害や防災についてもっと知りたいと思うようになり、環境防災科に入学したいと思うようになった。

2つ目は将来に役立つと思ったからだ。これから生きていく中で災害は必ず起きる。その時、自分の命を守るためには災害・防災の知識が必要となる。だから、これから生きていくためにも災害や防災のことをもっと学びたいと思った。さらに、私は将来、看護師になりたいと考えている。災害時、患者さんの命を守るためにも、何かあった時に臨機応変に対応できるためにも知識がないとできない。だから、環境防災科に入学してたくさんのことを学びたいと思った。

(2) 学んだこと

実際に環境防災科に入学して、改めて命の大切さに気づいた。この3年間で私はたくさんの講義を受けてきた。講義では、講師の方の阪神・淡路大震災の体験談を聞くことが多々ある。講師の方の中には、当時のことを思い出すことも嫌な人もいるだろう。だが、それにも関わらず話していただいているという感謝の気持ちはいつもあった。体験談を聞いていく中で、想像もできないような状況や私たちまで苦しくなるような話もあった。だが、これが現実だと知り、私はもっと自分の命を大切にしようと思った。今の時代、自殺など、自ら命を落とす人が多くなってきているが、それは命の大切さや尊さに気づけていないからだと思ふ。だから、これから生きていく中で命の大切さや命の尊さについて自ら話し、私と関わっていく人全員が自分の命を大切にし、自分の命は自分で守れるようにしていきたい。

(3) ボランティア活動

私は、環境防災科に入学して、いくつかのボランティア活動に参加した。ボランティア活動の中でも出前授業や、募金活動など普通に生活する中では経験できないようなことをさせてもらった。

(4) 出前授業

出前授業では、私たちよりも年下にすることが多かった。だから、出前授業の内容を考えるとときに、この表現の仕方は小学生にも分かるのか、難しく飽きるような内容になっていないかなどを意識しないといけなかった。その点で注意されたことはたくさんある。さらに、言っている内容が、間違っただけを言っていないのかもよく注意されていた。誤った情報を相手に伝えてしまうと私たちに責任がある。そう思いながら活動を行っていた。出前授業は、事前の準備がとても重要となるため勉強と部活とボランティア活動の両立が難しかった。だが、活動を終えたときのやりがいはその分たくさんあった。

(5) 募金活動

募金活動は、トルコ・シリアでの地震の募金活動を行った。舞子高校で朝の登校時間に呼びかけをした。地震が発生してすぐに募金活動を行ったため、多くの人が募金をしてくれた。生徒だけでなく、地域の方々も募金をしてくれた。私たちは、募金をしてくれた人ひとりひとりに「ありがとうございます」と言うことを心がけた。私は、地域の方々が募金をしてくれた時に募金活動をしていてよかったなと思った。地域の人が私たちに「ありがとう」と言ってくれた時、とても嬉しかった。それと同時にやりがいを感じた。募金活動は、被災地を元気にするための活動だが、募金活動を行っている側も元気をもらえる活動だと知った。

5 夢と防災

(1) きっかけ

私の将来の夢は、看護師になることだ。理由は2つある。

1つ目は、私が入院した時にとっても元気をくれたからだ。私がまだ1歳の時、ロタウイルスにかかり入院していた。そのとき、看護師さんに元気づけられたことがある。毎日笑顔で話しかけてくれたり、患者さんのためにいつも気を配っていたりする看護師さんを見ていて、私もこの人みたいに人々を笑顔に、元気にしたいと思った。

2つ目は、親の影響だ。私の両親は介護福祉施設で働いている。時々、両親が働いている職場に行くことがあり、医師・看護師・介護士・理学療法士など様々な医療関係者がそこで働いている。その中で看護師の方の働いている姿を見たときにとっても楽しそうに働いていた。施設に入っている人とお話をしたり、一緒に遊んだりして周りの人を笑顔にしていた。私はそれを見て、誰にでも優しく、誰からも愛される看護師になりたいと思った。

(2) 看護師になってから

私の看護師の理想像は、患者さんに寄り添える看護師になることだ。患者さんの心が沈んでいるとき、辛いとき、大変なときに、患者さんの隣で体のケアはもちろん、心のケアもしていきたい。そのためには、患者さんとコミュニケーションをとることが必要である。私は特に、病室でのバイタルサイン測定を大切にしたい。バイタルサイン測定とは、簡単に言うと健康状態の観察のことである。特に、意識・血圧・脈拍・呼吸・体温・栄養状態・排泄状態・睡眠・心身の健康状態などすべての状態を観察することだ。このバイタルサイン測定は、朝・昼・晩の1日3回行う。私はこの時間を大切にして、患者さんの健康状態を聞くのはもちろんだが、最近あった嬉しかったことや、今はまっていることなども聞いてコミュニケーションをとっていきたい。コミュニケーションをとることによって、患者さんと看護師の距離が近くなり、患者さんが少し体に異変を感じたときに看護師に言いやすくなる。さらに、患者さんが不満に思っていることを誰かに話すことによって、ストレスがなくなることにもつながる。私は、体のケアをするとともに、心のケアもしていきたいような看護師になりたい。

(3) 看護師と防災

看護師の仕事の中で災害支援ナースがある。災害支援ナースになり、直接、防災と関わっていくことも1つの手段である。しかし、私は別の方法で防災とかかわっていきたい。

私は、病院で働き、患者さんと話すときなどに過去の災害について話したり、もし震災を体験していたら、体験談を聞いたりするなど、災害や防災の会話を通してコミュニケーションをとっていきたい。さらに、私が環境防災科で学んだ耐震についてのことや、災害発生時のとるべき行動、防災マップの紹介など、災害が発生しても生きていくためにどのような行動をとるべきなのかということも自分の知識を自分の言葉で伝えていきたい。

6 最後に

今回「語り継ぐ」を執筆する中で、震災についてもう一度考えることができた。今まで、家族との会話の中で震災の話は出てきたことがなかった。さらに、私は母や父、祖父などは阪神・淡路大震災を経験しているからこそ震災当時を思い出すことが辛いのかなとも思っていた。しかし、話を聞く際、震災の経験談を記憶に残っている中で細かく話してくれた。この「語り継ぐ」がなければ、家族で震災の話や、これからの災害についての話などはできなかったと思う。近年、南海トラフ巨大地震など大きな災害が発生すると言われている。だからこそ、この「語り継ぐ」をたくさんの人に読んでもらい、私みたいに震災について話すきっかけになったらいいなと思う。

環境防災科で、たくさんの先生方に防災や災害のことはもちろん、社会に出てからの常識など、何もできなかった私にたくさんのことを教えていただいた。さらに、人と関わることの大切さや命の尊さなども知ることができた。これは環境防災科だからこそ学べることだと思う。だから、この学んだことを無駄にせず、私が大人になった時にたくさんの人に伝えていきたい。

人の繋がり・温かみ

春名 優大

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、死者6434人を出し、兵庫県神戸市を中心に甚大な影響を及ぼした阪神・淡路大震災から早くも29年という年月が過ぎた。今では街並みも良くなり、人の生きる活気に溢れている。しかし、この年月が経過しても、被災したことによる心の痛みが消えない方々もいる。現在、震災を経験していない人たちも増え、人々の生活から震災の記憶というのは風化されつつある。だが、被災された方々の想いというのは、今後の災害の被害を少しでも減らすことにおいてとても重要であり、語り継いでいく必要があると考えた。

2 阪神・淡路大震災

(1) 父の話

災害が発生する前、父はディズニーの玩具販売をしていた。当時1人暮らしで、寝ていた時に地震が発生した。その激しい揺れによって起きた父は、ベッドが縦横に揺れ、降りることができなかったそう。また、リビングでは食器類が割れていたり、推定70キロの重さがある熱帯魚の水槽が斜めにずれていたりしたという。外を見てみると、ありえないほどにしずまりかえっていたため、様子を見に1時間ほど車で外へ出かけて行ったそうだ。幸いにも火事は起きていなかったが、ライフラインが止まっていた。そして父が出かけている最中、街の電力だけが復旧しており、部屋に戻った時には水を吸い上げて水槽に移すポンプが水槽から飛び出して床を水浸しにしていた。そうして電気がついていることに気が付いた。幸い水に電気が流れていて危ないということもなかったため、比較的安全に水を処理することができた。水を処理して、職場に向かうと系列店のスーパーが長田方面から来たお客さんで溢れかえっていたため、スーパーの手伝いをした。お客さんに話を伺うと、自分たちの地域のスーパーでは水や食料がすべて売り切れになっていたため、西区まで買いに来たと言っていた。その後は他の系列店を訪れ、店の窓掃除や倒壊したがれきの撤去をしていた。

阪神・淡路大震災発生から1ヶ月経った後、父は玩具販売をやめ、今も働いている池本醤油という場所で醤油を老人ホームや病院、児童施設、障害者施設に配達する仕事を始めた。当時配達をしていた各施設は、震災によって給食が非常食に切り替わり調味料の需要が減ったため、会社の井戸から出ている井戸水をボランティアで三宮まで片道5、6時間をかけて届けに行っていた。そのような日々を送った後、ライフラインが復旧してからは通常の生活を送るようになった。父親は本来火災があれば通行止めになるが、火災の横でも車が普通に通っていたという事実や、余震がたくさんあり、半月ほどは怖いと思っていた。半月以降は揺れても怖さを感じなくなったという災害慣れに恐怖を感じたそうだ。

(2) 話を聞いて

今までもよく父には当時の被災経験を聞いたことがあったが、ここまで事細かく聞いたのはこれが初めてだった。まずは、生きていてくれてありがとうと思った。もし当時不幸なことがあれば、今の私は存在していないだろう。それでも今こうして元気に被災体験を話してくれる父には頭が上がらない。被災してからまだ1ヶ月しか経っていないにもかかわらず、仕事を変えて人助けをしていたことを知った時はとても驚いた。しかしそれと同時に、震災から1ヶ月経ってもまだ助けが必要とされているという状況にあったことが非常に辛いことだと思った。阪神・淡路大震災の被害状況や、対応内容を現したデータには掲載されていない被災した方々の見た実状というのは、まだ私たちは知らないことばかりなのだった。また、私は父のように人の役に立つ人になり、多くの人と浅くても広いかかわりを持って、今後やってくる南海トラフ巨大地震をはじめとした色々な災害に対応できるようにしたいと思った。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、父に阪神・淡路大震災についての写真集や資料を見せてもらったことだ。その時の私は、悲惨な状況を写した写真を見てとても恐怖を感じた。防災活動をしなかったためにたくさんの人々が亡くなり、たとえそこで生き延びたとしても先が見えない避難所生活を送る

という生活が私には想像がつかなかった。また、私は中学校で行われていた朝の読書の時間に阪神・淡路大震災の被災者の物語がいくつも書かれている本を読んでいた。その本の内容は読んでいなくてもトラウマになりそうなもので、今でももう1度読もうとは考えられない。そこから私は災害について意識するようになり、今後南海トラフ巨大地震が来るといわれている中で過去の地震のような被害を減らすためにはどうしたらよいのか、高校で学べるところはないのかと進路を考えているときに環境防災科という存在を知り、ここに入りたいと考えた。

(2) 入学をして

環境防災科に入学できたのも束の間、1年生では多くの講義とレポートによって毎日寝るのが夜遅くなり大変な部分が多かった。しかし、その分学べることも多かった。講義をする人の想いや当時の活動、それから何を学び、何を教訓として大切にしていけるのかを知ることができた。

2年生では、講義の数は少なくなり、自然環境を知り防災に生かしていくというような形の授業が増えていった。また、震災メモリアル行事の会場設備や運営を行い、他の学年にサポートしてもらいながらも無事にやり遂げることができた。

そして最高学年となる3年生、今のところ部活と勉強の両立が大変な時期で、ボランティアや出前授業もままならない状態だが、最後まで環境防災科としての活動をしたいと思っている。

(3) 烏帽子中学校

私はこれまでいくつもの出前授業に参加してきたが、特に印象に残っているのは1年生のころ初めて行った烏帽子中学校だ。私はそこへ3年生が2人、2年生と1年生が1人ずつの計4人で訪問させてもらい、100人を超える生徒を相手に出前授業を行った。そこで私はとても緊張してしまい、話すときに声が震えてしまっていた。しかし、先輩達がその後、焦ることなく流ちょうに語る姿を見てとても頼もしい存在だなと思った。1人1人話し方は異なっていたが、「伝えたいことをありのままに表現する」という形がしっかりとしていた。そこで私は「伝えることの大変さ」を学んだ。話す相手が何歳なのか、何人に対しての授業なのか、声色や表情はどのようにしたらよいのかなど、一部を挙げただけでも難しいことだと思う。だが、それらを乗り越えることで本当の「伝える」になると考える。私も本当の「伝える」ができるように、過去の自分自身の発表を振り返りつつ改善していきたい。

(4) こばと聴覚特別支援学校（以下「こばと」と表記）

私はこばとの子どもたちに1年時はビデオで、2年時には実際に訪問して紙芝居や遊びを通して交流した。2年生でここに訪れる前、私はこばとの子どもたちとコミュニケーションをとることが難しいだろうと考えていた。しかし、ただ聴覚に難があるだけでほかの子どもたちとも変わらなかった。そのため、私たちも楽しく接することができた。紙芝居では、登場キャラクターになりきり大きな声を出しながら手話を行った。やり直しのきくビデオではなく目の前で行うということが難しいと感じた。だが、こばとの学校の先生方が手話に躍動感をつけてとても楽しそうに体全体を使って表現していた姿を見て、ほかの出前授業とはまた違った「伝える」ということを学ぶことができた。

(5) ボランティア活動

私は出前授業や防災ジュニアリーダーの活動を経験してきたが、ボランティア活動はこれまで参加することに消極的であった。しかし、2年生のころに私が所属していた運動部全員で、トルコ、シリア地震の支援をするために募金活動を三宮でしたことがある。そこでは、私の予想を大きく上回りたくさんの人々が募金に協力してもらえたためとても驚いた。また募金活動をしていく中で、「頑張ってください」などの応援をもらった。そのような方々の姿を見て、人と人とのつながりというのは大切なものなのだなと改めて感じた。今後卒業すると出前授業やジュニアリーダーの活動というのはできなくなるが、ボランティア活動は大学以降にも参加することが可能なため、以前よりも積極的に活動していきたいと思う。

(6) CODE

私は「Active 防災 I」の授業を通して、CODE 海外災害援助市民センターの事務局長である吉椿雅道さんに話を伺い、現在のグローバルな問題から過去に支援を行ったことまで、1年生のころ講義を受けた以上に多くのことを学ぶことができた。私はその場で、吉椿さんがウクライナ避難民とバーベキューを

通した交流会を開いていたことについてインタビューをした。交流の仕方はたくさんある中で、なぜバーベキューをすることにしたのかという質問をすると、難民の方が「神戸は都会でストレスがたまる」と言っていたため、散歩で自然に触れながらおいしいものを食べようとバーベキューをすることになったらしい。意外にもこれは好評で、今度はきちんと企画にして開くつもりだそうだ。

現在の CODE では、形が悪いなど規格外の野菜を安価で買い取り、子ども食堂、ベトナム人留学生、技能実習生の集まる寺院、留学生の暮らすシェアハウス、アフガニスタン退避者、ウクライナ避難者などに野菜を届ける「MOTTAINAI 野菜便」という活動も行っている。定期的に配達をしておりボランティアを募集しているため、機会があれば1度参加してみようと考えている。

最後に、吉椿さんは私たちに対して「これから環境防災科には災害だけではなく、犯罪や戦争などの社会と災害をもっと関連付けて行動してほしい。」と言われていたので、もっと災害に対する視野を広げて学びを深める必要があると思った。

4 今後について

(1) 卒業後について

私は、スポーツを通して体を動かすことが好きだ。また、デザイナーやクリエイターのようにアイデアを考えるとことや、何かイベントを企画、発案して運営として動くということも好きだ。高校を卒業した後は、スポーツを仕事にした職業との関わりが持てる大学や、自分の発想力をさらに向上させられる大学に進学したい。そして、勉強をしながらも時間があればボランティア活動や防災イベントに参加をして、環境防災科で学んだことをおろそかにしないよう防災や減災とつながっていきたいと思っている。

(2) 防災との関わり、どのように関わっていくのか

スポーツとアイデアを両立するようなものはないだろうかと考えて調べたときに、防災とスポーツを重ね合わせた「防リーグ」と呼ばれるイベントが各地で行われていたのを発見した。そのイベントでは阪神・淡路大震災をはじめとした災害の経験を元に防災に必要な知識や技能を、スポーツを通して身近に感じながら、防災意識を高めていく活動をしている。そのような防災活動を知り、私はまだ防災に関して知らないことが多いと思った。現在、この防リーグは新型コロナウイルス感染症の影響もあり開催されておらず開催予定もないのだが、コロナも5類に移行してだんだんと緩和されつつあるので、1度体験してみたいと感じた。また私がイベントを開く立場になったとして、防リーグにある種目とは違う新たな種目を考えた。たとえば、VRと運動と防災をかけた避難訓練だ。今までの体験は、体で学べたとしても同時に視覚も使ったものが見られなかった。しかし、今はVRだけでなくVRの中の自分を体全体を動かすことのできるコントローラーがある。それらを使い、今までよりもよりリアルな避難体験ができて勉強になると考える。ほかにも、学校の廊下に窓ガラスや火災の煙に見せかけた石や段ボールを用意し、当たらないように素早く移動するという種目も考えてみた。このように体験者目線として、運営視点として、今後の防災活動には何が必要なのか、私が環境防災科で培った知識や技術がこれからを生きる人たちにどのように伝えていくのかを考えながら自身のレベルアップを目指して取り組んでいきたい。

5 悲しみが勇気となるまで

語り継ぎが終わる前に、私が「入学したきっかけ」に挙げていた本の紹介をしたいと思う。私は、中学2年生のころに今西憲之さんの「悲しみが勇気となるまで」という、阪神・淡路大震災によって神戸に刻まれた感涙のお話が30話載せられている本を読んでいた。タイトルにある通り、どのストーリーにも切ない気持ちになるような内容が書かれているが、明日という未来に向かって必死に生きようとする被災者の姿を見ることができ、自分も頑張ろうと思うことができる。だれでも読みやすい文字の大きさと作られているため、ぜひ読んでみてほしい。

6 最後に

これまで私は、父だけでなくたくさんの被災した方々から被災体験のお話を聞いたり読んだりした。その中には、家族を助けたいのに火災によって助けられなかったこと、父が大型機械に挟まれて亡くなってしまったこと、新聞配達をしているときに被災して亡くなられたことなど事例がたくさんある。内容は人それぞれ異なるが、この災害が残していった爪痕はどの人も変わることがなく心の中にとどまり

続けている。

最後に、阪神・淡路大震災は私たちからたくさんのものを奪っていった。ヒト、建物、生活、感情に至るまで人の生きるために必要なものの多くが一瞬にして消えた。しかし、そこから教訓が生まれた。災害が発生するまでにしなくてはならないこと、発生してからの行動や避難してからの生活など多くの経験が記録として残った。実際に阪神・淡路大震災の時は、大きな地震の前例が残っていなかったために政府による支援が遅れてしまった。しかし、民間による支援活動が積極的に行われていたことが復興につながった。結果、震災以降ある程度、法や取り組みの整備が行われ、災害に対して前向きに立ち向かおうとする姿勢が作られた。だが、2次災害なども含めるとまだ対策が施されていない部分が多い。そのため、阪神・淡路大震災をはじめとした大規模災害によって生まれた教訓をないがしろにせず、今後も向き合い続けていく必要があると思った。

防災と生きる

福井 樹

1 はじめに

阪神・淡路大震災から29年が経った。私たちのような震災を経験していない世代が増えていく一方で、いつ発生するかわからない災害に私たちは立ち向かわなければならない。二度と同じ被害を繰り返さないためには、人々に災害への備えを促す必要がある。そのために、私たちは語り継ぐ。

2 阪神・淡路大震災

(1) 被災していない母が感じたこと

当時17歳の母は山梨県出身だったことから揺れは感じず、朝起きてテレビをつけてから初めて大きな地震が発生したことを知った。母は地震について無知だったことから、現地の状況のニュースを初めて見たときは余計に驚いた。また、火災によって燃え上った町並みを見慣れていなかったことから「戦争みたいだな」と感じた。ただ、映像でしか現地の状況が見られないこともあって、大変だなと他人事のように思ったのと、震災があったからといって防災についての考えを改めようと思うことはなかった。

(2) 被災した父の話

当時17歳の父は愛知県の実家から出ていて、大阪の調理師学校に通うため、大阪市生野区鶴橋駅の駅前で1人暮らしをしていた。住んでいたのはワンルームマンションの7階。当時は気にしていなかったが、建物の構造上非常に危険な物件だった。

当日の朝、突然下からハンマーで突き上げられたような強い衝撃があり、そのあとに激しい横揺れが起きた。通常では見えるはずのない大阪環状線の線路が地震で傾いたことにより窓から見えた。

「ああ、死んだな」と思った。揺れが収まった後にテレビをつけたら、大きな地震が関西で起きたというニュースが流れていた。興奮状態だったため、実家に電話すると「朝早くから電話かけてくるな」と怒られる。窓の外に少しずつボヤのような煙が見えた。鶴橋は小さな木造住宅や、朝から豚足を煮ている住居兼店舗が多かったため、大阪南部でも小規模な火事があった。

朝8時ごろ、自宅から鶴橋駅を見ると沢山の会社員で混雑していた。近鉄線は運行していたものの大阪環状線は運行休止していたため、公衆電話に沢山の人が並んでいた。会社に遅れると連絡をしようとしていたのであろう。すぐに周辺の住居にも電話を借りにくる人たちが来た。自分の部屋にもやってきたが、回線がパンクしていたのか繋がらず、結果2日間は電話が使えなかった。そのあとも余震に怯えながら過ごし、夜はバイトへ行っていた。ネットが無い時代だったことから、地震が発生した夜になっても「大変なことがおきた」くらいの情報しか無かった。数日後、就職が決まっていた神戸のイタリア料理店の就職予定が取り消しとなった。

3 両親の話を聞いて

私はこの「語り継ぐ」を執筆するまでは両親と震災の話をすることはなかった。「もし思い出したくもない記憶だったら…」とつい考えてしまい、両親に阪神・淡路大震災当時の執筆をさせてほしいと頼むときも躊躇があった。だが、両親は快く当時について話してくれた。私にとってその両親の話はとても大切な知識になった。

話を聞くにあたって、当時についてこんなにも細かく覚えているのかと驚いた。母に関しては被災していない立場であるが、それでも細かく当時について話してくれたことから、それほど印象に残る震災だったことがわかる。母が被災していないことは聞いていたが、被災していない立場の意見も大切だと思ったことから今回執筆することにした。父は今の私と同じ位の年齢で震災を経験したが、当時震災について父がそこまで知識がなかったのと親と離れて1人だったことから、とても辛い経験だったのではないかと感じた。震災によって、目に見える被害だけでは済まず、就職予定までもが取り消しになることはとても恐ろしい。また、当時ネットがなかったことからテレビでしか被災状況がわからず、情報が細かく伝わりにくい事情もあったことから、母のように他人事になる人も多くいたのではないかと思った。「戦争みたいだな」という言葉から阪神・淡路大震災が、当時の神戸の脆弱な部分を襲ったが上にとっても酷い被害状況だったことがわかる。未災者の私たちは、そんな状況を風化させないためにもこの執筆や話を通して語り継いでいかなければならない。

4 防災について学ぼうと思った経緯

(1) 小・中学校での防災学習

阪神・淡路大震災の被災地となった兵庫県の学校では、防災教育が毎年決まった日に行われる。私は未災者であり、周りで震災について話す人も居なかったことから防災教育の時間が唯一阪神・淡路大震災を知る機会となった。今振り返ると、小・中学校で学んだ内容はとても印象的で、被災状況を知った当時の衝撃を今も覚えている。

防災教育の授業では毎回被災した当時の映像を見る。高速道路が倒れているところや建物が一瞬にして崩れるところなど、私が当たり前に生活している地域とはまるで違った当時を知ることとなった。病院内の映像では、泣きわめく女性の声や怪我した息子に謝る親の姿が見られた。被災していなくても心苦しくなったことを覚えている。

ほかにも、データを使用して被害者数や被害原因を見る機会があった。被害者には高齢者だけではなく、自分と同じ小学生も数多くデータで見られた。また、膨大なる被害の背景には、地震の発生時刻や当時の人々の防災意識が原因としてあることを知った。私は、考えられないほどの桁が大きいデータの数値に動揺が隠せなかった。

防災学習全体を通して、家族や友人などを失うことや、変わり果てた町をみることへの恐怖心を抱いた。そして、その恐怖心から災害へと関心を持ち、防災について学びたいと思うようになった。

(2) 被災地への災害ボランティア活動

私が中学2年生の夏ごろに、西日本を中心とした集中豪雨(西日本豪雨)が発生した。被害がとても大きく、ボランティア活動への参加が当時呼びかけられていた。父が1度、岡山県へボランティア活動に参加しており、被害状況などの現場の状況を伝えてくれると共に、2度目の参加に私を誘ってくれたことから、私も被災地のボランティア活動に参加した。

活動場所は高齢者の夫婦が住む家だった。家へ向かう途中、私は被災した岡山の景色を見続けていた。乾燥した大地と倒壊した建物が見られた。かつては自然豊かでたくさんの色があっただろう街並みは、被災後1色に染められていたことが印象的だ。指定された場所では家に流れ込んだ土の撤去を行った。流れ込んだ土はたくさんの水分を含んでおり、ボランティア活動での支援がなければこのまま放置されていただろう。約2時間の作業が終了したころ、家主が「ありがとう」と言ってくださった。私はその言葉を聞いて嬉しかった半面、あまり変化のない現状を見て、悲しくもなったことを今も覚えている。

ボランティア活動を通して様々な出会いや経験があり、また、災害の恐ろしさを実感した。そして、災害に備えていま何かできることはないかと日々考えるようになり、防災への関心を持った。

私は主に、これらの経験を通して防災を学びたいと思った。進路先に困っているときに、両親から環境防災科を勧められ、防災を学ぶことができるカリキュラムと、ボランティア活動へ参加できる良さを知り、環境防災科を目指すことに決めた。

5 環境防災科での活動

(1) ボランティア活動

私は環境防災科に入学してからたくさんのボランティア活動に参加させてもらった。防災を幅広い年齢層の方に伝えていく活動や、被災地への募金活動をする活動、警察官と一緒に安全運転の呼びかけをする活動などを行った。私は活動を行うにあたって、相手に応じた伝え方についてとても考え、気を付けるように意識した。伝える相手と同じ高さ、または少し低く目線をあわせることや、伝える側が早口になりすぎないこと、伝えることと同時に相手の意見を大切にするなど、当たり前ではあってもその知識を実践する場が今までなかった。そしてその知識を活用できる場が環境防災科であり、活用することで人に伝えることの難しさを知った。「どうしたらわかりやすく伝えられるのか」このことによく疑問を持ち、クラスメイトに尋ねまわったこともある。このおかげもあって、今の私は相手に何かを伝えることに少し自信がつき始めている。これは、数多くのボランティア活動に参加することができる環境防災科や、身近に同じ経験をしているクラスメイトがいたおかげだと思っている。

(2) 環境防災科で見つけた夢

環境防災科の入学当初、私は将来の夢についてはっきりとしていなかった。誰かの役にたてる仕事に就きたいという願望だけがあり、その仕事を環境防災科の活動を通して見つけたいと考えていた。環境防災科では、さまざまな業種の方の講義を聴くことができる。普段の仕事内容や、災害時の活動についてな

ど、災害の知識だけではなく仕事内容についても知ることができる。私は数多くの講義のなかで、警察官の方のお話に興味を持った。ある日、警察官と交通安全の呼びかけをするボランティア活動の紙が掲示してあるのを見つけ、参加した後に、警察官の業務説明会や 1 日の警察業務の体験教室があることを知った。警察官に少し興味があったことから参加し、警察官になりたいと思った。

環境防災科には公務員を目指す生徒が多い。また、過去の公務員を目指していた先輩が置いていった参考書を使用でき、公務員関連の授業がある。したがって、試験に向けて勉強する機会が豊富で、なによりも同じ目標を目指す仲間がいることで助かる場面が多い。防災知識を得ることやボランティア活動に参加できることだけではなく、就職する人へのサポートが手厚いことも舞子高校の良さではないかと考える。

6 警察官と防災

警察官の仕事内容はいずれも防災と直結しているように感じられる。一瞬の油断や行動を誤ること
で、人の命を失いかねない。そんな責任感のある仕事だが、私は警察官になりたい。

警察官の仕事は所属する課によって異なる。私はその中でも交通課と地域課に興味がある。交通課は主に交通指導の取り締まりや子どもや高齢者を守る交通安全教育の推進を通して交通事故ゼロを目指している。地域課は主に交番での立番、パトロール、巡回連絡などを通じて、人々の 1 番近くで平和な暮らしを守り、事件・事故発生時には現場に急行して初動捜査も行う。どちらも人的被害にかかわる職種であり危険だが、誰かがその役目を背負わなければ被害に遭う人がでてきてしまうだろう。その役目を私が背負い、人々を守るような人間になりたい。それは震災時にも同じで、警察官としても 1 人の支援者としても被災者に対応していきたいと考えている。

7 南海トラフ巨大地震

南海トラフ沿いで発生する南海トラフ巨大地震は、30 年以内に 70~80% の確率で発生すると言われている。静岡県から宮崎県にかけての一部では震度 7 となる可能性があるほか、それに隣接する周辺の広い地域では震度 6 弱から 6 強の強い揺れになると想定されている。震度 6 弱は立っていることが困難になり、6 強は立っていることが出来ないと言われている。また耐震性の低い木造住宅であれば震度 6 でも倒れることもある。震度 7 は耐震性の高い建物でもまれに傾くと言われている。このような揺れが広範囲で発生することから大きな被害が予想されている。また、関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸の広い地域に 10m を超える大津波の襲来が想定されている。

被害を増やさないためにとるべき対策として、大切だと考える 2 つの対策について挙げる。1 つ目は建物の耐震化だ。いつ、どんな状況で地震が発生したとしても建物を耐震化していれば命が助かる可能性が高まる。阪神・淡路大震災では建物の多くは木造で建てられていると共に、発生時刻が早朝であったことから地震に対応できず多くの人々が圧死した。このようなケースを耐震化によって回避することが可能だ。もちろん高額な費用と時間がかかるため手を出しにくい対策ではあるが、家族で話し合ってぜひ行ってほしい。2 つ目はいち早く避難することだ。南海トラフ巨大地震では、地震発生後数分で津波が到達する場所があると想定されている。津波は 30 cm の高さから身動きがとれなくなると言われていることから、避難指示を待つのではなくいち早く避難することが大切である。また、事前に防災バッグの準備をしておくことや避難経路、避難場所の確認をすることがいち早く避難するために大切だ。避難経路に関しては地震発生後通れなくなる可能性があるので数パターン考えておく必要がある。これらに関しては簡単に行えることであるから早めに取り組んでほしい。

南海トラフ地震で想定される震度や津波の高さ 2023 年 6 月閲覧
<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/nteq/assumption.html>

8 最後に

この「語り継ぐ」の執筆を通して、私は改めて震災の恐ろしさを感じた。私のまわりには幸いなことに大きな震災が発生しておらず、私たちのような未災者が年々増えている。その未災者が震災に対して危機感を持っていなければ、阪神・淡路大震災と同じように震災によって大きな被害がもたらされてしまうだろう。そのため私たちは防災学習をして、それを伝えていくことで人々の防災意識を向上させると共に震災に強い町づくりをしていく必要がある。震災について伝える機会はこの執筆で終わらず、将来いつまでも伝えていきたい。

未災者として

藤原 陽向

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に兵庫県南部地震が発生した。この大地震によって一瞬で尊い命や美しい街並みが失われた。私は、阪神・淡路大震災発生から10年後に生まれた。月日が経つにつれて、私も含め震災を経験していない人が増え、震災の記憶が風化されつつあると感じる。阪神・淡路大震災の記憶が風化されないためにも未災者から未災者に繋いでいかなければならない。私は、神戸市民の未災者として強い責任感を持ち、語り継ぐ。

2 阪神・淡路大震災

(1) 母の話

母は当時、明石市魚住町に住んでいる小学校4年生であった。1995年1月17日、その日に限って、朝の5時30分頃に目が覚めた。まだ眠たかったため、もう少し眠ろうと目をつぶった直後に「ゴォー」という地鳴りが鳴った。最初は、雷が鳴ったのかと思っていた。しかし、その地鳴りが鳴った直後に大きな揺れが起きた。小学4年生だった母は、何が起こったのか分からず、ただ布団に潜っていた。大きな揺れが収まった時、家族の安全を確認し、全員リビングに集まった。リビングには、水槽が大きな揺れによって落ちており、飼っていた金魚が床で跳ねていた。家族全員それどころではなく、余震ごとにテーブルの下に潜った。地域住民も混乱していた。住んでいた地域の被害は少なかったが、花壇や置物が道路などに散乱していたため地域住民と一緒に片付けをしていた。ライフラインは止まらなかったため、数日でいつも通りの生活に戻れた。今でも、当時の地震の記憶は鮮明に覚えており、忘れることはないと言った。

(2) 父の話

父は当時、神戸市西区に住んでいる中学2年生であった。地震が起こる前日の夕方頃に震度1の地震が起きていたのを記憶している。神戸市西区のマンション6階で家族4人がそれぞれの部屋で寝ていた時に、大きな揺れが起きた。その大きな揺れは、今まで体験したことのない縦に揺れる地震であり、起きた瞬間は何が起こったのか分からなかった。とりあえず布団をかぶり身の安全を守った。体が突き上げられて宙に浮くような感覚でとても怖かった。この揺れで本棚や食器棚が倒れていたが、怪我人は出なかった。地震発生直後、固定電話は繋がっていたが、しばらくすると使用できなくなってしまった。電話だけではなく電気・ガス・水道・信号が止まり、学校・会社に行くという考えを持つことができないレベルであった。当時、携帯電話等は普及しておらず、固定電話頼みであったため電話が復旧するまでの数日間は親戚や友人との安否確認が取れず困惑していた。揺れが収まり、外の様子を見ると至る所に亀裂が確認でき、近所の住民の多くが住宅の倒壊を恐れて、車で広い道路に路駐し、避難しているのが分かった。その中で、いろいろなデマが流れることもあり、周りの方と同じように車で広い道路へ避難し、車のラジオで地震情報を確認することにした。車での移動中には、半壊している家屋や瓦礫が落ちている住宅、新幹線の高架橋の倒壊などが見受けられた。信号の復旧の目途も立たなかったため、途中で車での移動は危険と感じて、自宅へ戻ってラジオで情報を集めた。そのような状況の中で父は、水道・ガス・電気の中で水道が一番必要に感じた。トイレを流すにも、手を洗うにも水が必要で、ラジオから情報を得て、近くの貯水場に生活水をもらいに行った。ライフラインの中では電気が最初に復旧した。テレビからも情報を得られるようになり、水道・ガス等の復旧状況が確認でき、まず一安心できたのだ。しかし、食料品の問題点としては、2日間ほどで近くのスーパーはほとんどなくなり、開店しているスーパーにも必要な食料品は売り切れている状況であった。学校の再開には1カ月近く掛かり、怪我をしていた生徒も確認ができた。学校の至る所で亀裂や地割れが発生しており、パソコン室のパソコンは全て崩れ落ちている状況の中での学校生活再開であった。このようなことから、本当の地震の怖さに気付き、「防災」という言葉の大切さが分かったという。その後の生活では、防災グッズを家に準備するようになった。

3 両親の話を聞いて

母はそれほど被害を受けていなかったが、小学生ということもあり、どのように行動すればよいのか分からなかったということで、当時は「防災」という面では未熟であったと感じた。しかし、地震によって

花壇や置物が散乱していた時に、近所の人たちで協力しながら片付けをして困難を乗り越えていたので、共助というところではしっかりできていたのだと思った。母は、小学生でありながらも、当時の地震の記憶は鮮明に残っており、これからも忘れることはないと言っていた。震災を経験していない私たちが、この記憶を継承していかなければならないと思った。父は相当な被害を受けており、怪我はなかったもののマンションの亀裂や周りの一軒家が半壊していたり、デマが流れてしまったりなどで混乱して、不安になっていたことが分かった。地震が起これば、どうしても平常心を保てなくなるうえに、流れてくるデマによってさらに混乱していくという悪循環が生まれるのだと思った。地震が発生してからスーパーに行くと、食料品はほとんど売り切れになっているので、事前に地震に備えるということは改めて大切だと感じた。最後に、父は本当に地震の怖さに気付く、「防災」という言葉の大切さが分かったと言っており、今私は防災を学べる環境にいるので、将来に地震が起きたとしても自分の命だけではなく、他の人たちの命も守れる力をさらに付けていきたいと思った。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科に入ったきっかけは、阪神・淡路大震災のドキュメンタリー番組を見たことである。私は中学2年の冬頃までは防災に興味が無く、舞子高校環境防災科に行くという選択肢はなかった。しかし、中学2年の冬頃に阪神・淡路大震災の番組を見て、防災力が市民に知れ渡っていなかったことで被害が大きくなってしまったと知った。そこで、自分が防災について学び、広めていかなければならないと思った。そこから防災に興味を持ち始めた。そして、防災について学べる高校があるのかと調べていたところ舞子高校環境防災科が出てきた。環境防災科では、防災について専門的に学び、ボランティア活動も盛んに行っていると知った。また、講義が多くあると知り、まだ自分の将来の夢が決まっていなかった私にとって、就きたい職業を見つけるきっかけになると思った。私は、阪神・淡路大震災や東日本大震災を経験しているわけではないが、防災や地震のことを詳しく知ることによって少しでも人の役に立てるのではないかと思った。

(2) 環境防災科で学んだこと

私は、この3年間で多くのことを学ばせていただいた。1年生の「災害と人間」では、自分の意見を大事にしてそれを他の人と共有する時間が多くあった。ある問題に対して、自分の意見を持ちその考えたことを周りの人と共有することは、社会に出た時に必須なことであり、これを高校1年から力を入れてできたことはすごく自分の身のためになったと感じる。また、消防学校への体験入校では、仲間と最後まで声を出し切ることなどの協調性を高めることができた。人の命が懸かっているということを想定して行っているのだから、常に緊迫した空気が流れていた。その中で、自分の限界を超えられるようにと思い、取り組んだ結果、自分だけではなくクラス全員が成長し団結力が上がったと思う。このような活動以外にも多くの活動があった。その中で私は、多聞東小学校との連携授業が印象に残っている。今まで学んできたことを小学生に伝えるという難しさもあるなかで、より正確な情報を伝えていかなければならないという責任感があった。間違った情報を伝えるということは、震災が起きた時に混乱を生み、命にも関わることになる。そのため、まず自分が正しく理解し、正確な情報を伝えていかなければならないと思った。また、私たちが一方的に話すだけではなく、小学生の意見も聞き入れていくことの大切さも学び、お互いが多くのことを知ることができた。

2年生でも1年生の時と同じく、自分の意見を持ちその考えを周りの人と共有することが多かった。また、1年生の時に失敗したことを繰り返さないためにも何度も振り返り、復習する大切さも学ぶことができた。

3年生では、1年生・2年生で学んできたことを生かしていくことが多くなってきた。ある問題に対してもいろんな視点から考えられるようになり、それを共有していくとより深い考えに行き着くようになった。知識も多く増え、1年生の時では思い付かなかったことが思い付くようになったなど自分でも成長していると感じる。

私はこの3年間、充実した生活を送ることができた。この先どのような進路に進むかは分からないが、3年間の経験を糧にして社会を生きていきたい。

(3) ボランティア活動

私は、部活動などで数多くのボランティア活動に参加できていない。その中で、私は多聞東小学校のハ

ロウイン会のお手伝いが印象に残っている。小学生と接するうえで、目線を合わせて話を聞いてあげることや笑顔で話すことなどいろいろ気を付けないといけないことがあった。これは、被災地でも気を付けないといけないことである。子どもだけではなく、高齢者の方にも目線を合わせることもや笑顔で話すことはいい関係をつくるうえで大切なことだと学ぶことができた。震災が起きた時にどんな状況でもこのような接し方を心掛けていきたい。

5 夢と防災

(1) 将来の夢

私の将来の夢は、公務員になることだ。公務員は多くの職業があるが、その中で私は市役所の防災課で働きたい。きっかけは、環境防災科の授業の一環でまち歩きをした時に、震災後の心の揺らぎの場としての公園や、震災からの復興を記念とした記念碑、震災に強い建物が建てられたのを見て、私も将来自分の住んでいる神戸の街などを世代関係なく、もっと住みやすい環境にしたいと思ったことである。市役所の職員となり、神戸の街や他の街をさらにより良い街にし、課題があれば、できる範囲で早急に対応して安心・安全に暮らせるようにしたい。また、将来南海トラフ巨大地震が40年以内は90%以上、10年以内は30%と予想されているので、災害に強い街にして被害を減らす（減災）ための工夫を考えていきたい。

(2) 市役所について

神戸には神戸市役所がある。市役所は住民票の発行や引っ越しの際に必要な手続き、子供や高齢者、障害者の支援・相談、生活インフラの整備・管理など、市民の生活をサポートする役割を担っている行政機関の1つである。市役所には、数多くの部署があり、例えば、防災課や生活安全課、環境・まちづくり課、子育て・教育課などがある。その中で、防災課は、震災が発生したら「災害対策本部」を設置し、リーダー的存在として指揮を執るのである。また、防災拠点の整備や高層住宅の防災対策、帰宅困難者の対策などの活動も行っている。このように、市役所の防災課は震災発生後の活動はもちろん、震災が発生する前の対策にも力を入れて、市民の安全を守っている。生活安全課は、交通安全対策企画を推進に関することや違法駐車対策などの活動を行っている。交通安全では、保育所・幼稚園や小学校などに行き、子供からお年寄りまで、交通安全対策教育を行っている。違法駐車対策では、兵庫県警察と連携しながら指導啓発活動を実施するなど日頃から人々の安全を守っている。このような活動のおかげで私たちは日頃から安心して暮らせている。私たちが安心・安全に暮らすことができている背景に、市役所の職員が街をより良くするための活動を行っていることを知ってもらいたい。

(3) 市役所と防災

市役所と防災の関わりは、防災課という部署があるということだ。防災課では前に述べたように、防災拠点の整備や高層住宅の防災対策、帰宅困難者の対策などの活動で防災と大きく関わっている。まず、防災拠点の整備は災害発生時に的確な災害対応を行うために、防災拠点の円滑な運営や平常時の地域ぐるみの避難訓練などを行っている。また、町会・自治会や防災区民組織が主体となった「防災拠点運営委員会」が防災訓練の実施や避難生活のルールづくりなどの活動を行っており、その支援もしている。次に、高層住宅の防災対策では、防災マニュアルを作るための支援や防災対策についてのアドバイザーの派遣事業を行っている。また、防災対策優良マンション認定制度により、災害時も住み続けることができるためのマンション防災講習会の開催などの活動を支援している。それが、高層住宅の防災対策の取り組みである。帰宅困難者の対策では、帰宅困難者が生じることによる混乱を防止するために、一斉帰宅抑制という災害時に順番に帰宅させることの推進と一時滞在施設の確保に取り組んでいる。また、計画書・マニュアルの作成の支援も行っている。このように、市役所と防災は密接に関係しているのだ。

市役所が過去に行った災害活動の事例として、阪神・淡路大震災がある。震災発生後に、神戸市災害対策本部の設置や応急仮設住宅の入居者募集も行い、震災後の災害対応が円滑に進むように、これらの活動を行っていたのである。しかし、そのような活動の中で仮設住宅での高齢者の孤独死が多かったという課題があった。仮設住宅では、高齢者の割合が多かったのは事実であり、人の繋がりが断ち切られたことや元の生活に戻る見通しがなく、生きる希望を失ったことが原因である。この他にも多くの課題が今でも起こっていると思うので、市役所の防災課職員になったら、それらの課題に対して真摯に向き合っていきたい。

6 最後に

私はこの「語り継ぐ」を執筆していきながら環境防災科に入ってから3年間を振り返ってみると、非常に楽しく、学びも多い充実した時間であった。外部からの講師を招いての講義や消防学校の体験入校など環境防災科にしかできない経験もできた。このような講義などで、将来についてのことや災害時に自分と他人の命を守るためにすべきこと、ボランティア活動の在り方等々の考え方が大きく変わった。また、この3年間で人間的にも大きく成長できたと実感している。この環境防災科で学んだことを忘れることなく、将来に活かしたい。

「美容と防災」

古塚 康真

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災。死者・行方不明者数は6400人を超えた。多くの人が日常、時間、命を奪われ、自然の恐怖を知った日。

環境防災科で学んできたことをそのまま伝えるのではなく、自分なりに理解し、次世代へ語り継ぐ。その意味は次の世代の人たちに知ってもらい災害での被害者数を減らす目的がある。語り継ぐ中で食料調達の苦悩や、人と人がつながって生きることの大切さなどを改めて実感できる。私の生まれる前の神戸の事実。母と父とが出会う前にそれぞれ別々の場所で体験した恐怖。その忘れられない悲劇が後の人々に語り継がれ、生きる教訓となり、意味のある過去へと変える強さを私たちは持っている。

2 家族の被災体験

(1) 母の話

当時母は高校1年生だった。「ドーン、ガシャガシャガシャ」自分の部屋で寝ていたら、下からマンションが揺らされているように感じた。そして、「早く終わって欲しい」と驚きと怖さの感情でただただベッドの中で丸まっていた。ようやく揺れが終わり、祖母の「大丈夫?!」という叫び声に母も隣の部屋の兄も「大丈夫」ととりあえず答えた。リビングに出ると食器が割れて散乱していた。母の住んでいたマンションは、負傷者も火の気もなく無事のようなだった。灘にある母の高校は1か月休みだった。その間、近くの広い公園で水と食料物資の配給に朝、家族で出向く。日々続く余震におびえながら、少し離れたところで1人暮らしをしていた曾祖母も一緒に、なるべく1部屋にかたまって生活をしていた。学校でやっと学校が再開した時の集会で、在校生2名の訃報を知り、直接的に知り合いではなかったがとても悲しくて信じられない出来事だった。それまで普通の学校生活を送っていたのに、神戸の状況はあの日から一瞬にして皆生活が変わってしまった。母は地震という大きな怪獣が神戸に傷跡を残していった、まるでジオラマのようなビルの残骸に心を痛めたと言った。

(2) 祖父の話

1月16日、帰宅途中夜空を見上げると冬の星座が冷たく輝いていた。家に帰り就寝しようと布団に入ったが、なかなか寝つけずにいた。その瞬間、激しく突き上げられるような震動に襲われた。家で寝ていた妻と子ども2人に負傷はなく、当時勤務していた警察本部に急いで出勤した。兵庫署の様子がおかしいとの連絡があり山手幹線を原動機付自転車で走った。兵庫署に到着するとすでに機動隊が道路封鎖をしており付近の倒壊家屋からの救出作業を始めていた。兵庫署の1階部分は崩壊し2階建てのはずだった建物が、だるま落としのような状態だった。その庁舎の下には当直の警察官や職員数名が生き埋めになっている状態だったのだ。署内のロッカーなどが転倒し、足の踏み場がなく警察電話も書類の下敷きになっていたが、受話器を取ると通電可能だったので祖父は焦る指で番号を押した。「兵庫警察署の1階がありません。庁舎1階に生き埋めになっている者、当直隊長以下5名生存確認、行方不明者1名です」と報告した。祖父の被害写真を撮りながらも庁舎の下敷きになっている同僚を、何としてでも早急に救出しようとする機動隊の信念ある行動に胸を打たれた。その翌日から警察施設の被害実態調査に迫られ、こういう大規模な被害に対する既存資料は今までなく、被害復旧の予算執行業務を手探りで作成すること1週間、寝ずの作業と重圧のかかる業務の末、祖父の精神構造はどうかなってしまうかと思うほどだった。

天災には成すすべがない、というのが実感だが、警察職員1人1人がベストを尽くすことが県民の負託にこたえることであると祖父は言った。

(3) 話を聞いて

母と祖父の話を聞いて、今私が住んでいるこの神戸の町で1995年に実際に起こった悲劇なのだと改めて考えた。母は当時高校生で、私と同じ学生生活をしている最中の地震、祖父は現役警察官として働いている最中の地震、それぞれに今までの楽しい生活や仲間、命が犠牲になってしまったことはさぞ衝撃的な事実を突きつけられたのだろう。そしてこの貴重な体験を、まだ経験したことのない私たちとその次の世代にも、きちんと受け継いで伝えていけるように心に留めておきたいと思う。経験談を語ってくれた親族の言葉と体験談がすべて類似しているから、臨場感あふれる話を私たちが語り継ぐことができる。その災

害のリアルさを忘れないことの大切さ、これからどうやって防災を“他人事”から“自分事”にするのかを考えていくことが大事だと思う。

また、地震の恐ろしさを伝えるだけではなく、被災地となる前の土地や、被災者と呼ばれている方々の以前の暮らしに目を向けるのも大事で、それぞれの場所に暮らしていた方々の宝石のような輝いた思い出があるからこそ復興への熱い力が湧き出たのだと思う。災害の後、被災地がいかに復興に挑んだかも伝えなければならない。災害の教訓を語り継ぐことは、今後再び同じ災害を受けて改善できる点を見つけたりすることにもつながる。

「生かして伝える、学んで生かす」という語り継ぎのサイクルは、災害の教訓を生かすことでもある。阪神・淡路大震災では、互いに助け合うこと（共助）と事前に準備することの大切さを学んだ。その学びから被災地では、義援金の前払いとしての兵庫県住宅再建共済制度を設ける等、備えることの大切さを法として形に残した。

地震や津波、大雨に雷雨、大地を揺るがす天災の恐怖はたまた新型コロナウイルス感染症大流行のように目には見えないものとの戦い、人はあらゆる危機にさらされながら命を守って生きている。命を守る方法は、過去の経験から学ぶしかない。過去に起きた惨事を受け止め、正確に語り継ぐ中で、色々な人との関りが生まれる。人と人とのつながりが、新しい知恵を生み、新しい希望を生む。これからの社会、これからの世界、人と人が助け合って生きていく中で、私は自分なりに勉強してきた防災のさまざまな学びを通じてボランティア活動にも積極的に関わったり、時代に応じた社会貢献のしかたを考え、人とつながって生きていきたい。人の命を第一に考えた生き方をしたい。

3 環境防災科

(1) きっかけ

環境防災科に入学したきっかけは、特色の強いこの学科でこそ、災害の多い現代社会に合ったことが学べる授業が沢山あると思ったからだ。実際に、何度も災害復旧を支えるボランティア活動をしたり、人の介助を必要としているハンディキャップのある方たちとの触れ合いの場を多く経験した。また、私は父の背中を見て育ち消防士になりたいと思っていたことや、数多くの卒業生が防災に係る仕事で活躍している話を聞いたことも、入学を決意した理由の一つである。他にも、グループディスカッションなどの仲間意識を高めたり、社交性のある授業にとっても興味があった。地域の方々も参加できるセミナーがあり、地域社会と関わることのできる機会があるというところにも魅力を感じた。

(2) 入学後に力を入れたこと

この環境防災科に入学して防災を学び出すと、日常生活に変化が出た。今までは災害が起きたら親や先生の指示が出るのを待つものだと思っていたが、自分の判断が命を守ることを学び、家に備えている防災バッグにも興味を持ち道具の使い方を積極的に学んだ。また人によっても災害時に必要なものは異なるので、どういった人が何を持っているのかを理解しておくことも重要だと学んだ。

私はこの環境防災科に入り多くのボランティアを経験してきた。新型コロナウイルス感染症に直面し、人との距離や時間に制限をかけられる毎日だった。そんな中、様々なボランティアを通してたくさんの人と関わったことで、この学校に入学してよかったと実感した。中でも1番印象的だったのは神戸で阪神淡路大震災支援活動をされているCODEの吉椿さんに同行させていただいて、ウクライナ避難民へ支援物資を届けたことだ。当時は毎日ニュースでウクライナとロシアの戦争のことが取り上げられていたから、今まさにこの世の中で起きている大惨事に向き合い、遠く離れた地からでも自分たちができることはないか、と考え行動している周りの大人たちからの学びがまるで「生きる授業」のように感じた。

4 南海トラフ巨大地震

令和4年1月時点の内閣府のデータによると30年以内に発生する確率は70～80%とされている南海トラフ巨大地震。最大死者数は約30万人以上、被害総額は220兆円だ。高知県では最大34メートルの津波が来ると予想されている。

いつ起きてもおかしくない南海トラフ巨大地震について環境防災科で深く考えてきた。災害の被害は関連して起きることが多いため、あらゆる見方で考えなくてはいけない。ボランティアで2度、黒潮町立佐賀中学校と交流させていただいたことがある。大きな津波予測をされているだけあり、防災に対する姿勢は中学生とは思えないほど立派なものだった。ワークショップを行った際、彼らは自分たちの意見を持ちそれを堂々と主張できた。当たり前のことだが普通の中学生にしては難しい。災害時に大切な協調性、

リーダーシップを見せつけられた。全国の中学生もこれぐらい社会に強く生きたら災害時の被害も大きく減らせるだろうと思った。

5 将来の夢

(1) きっかけ

高齢化、長寿社会が進むということは、高齢者に対しての身の回りの生活サポートがさらに必要な時代になっていくだろう。私は手に職をつけて高齢者に対してできるサービスはないかと考えた。AI に侵されない真心を伝えるサービス業だ。私の将来の夢は美容師になることだ。昔から手先が器用で芸術などを深く嗜んできた。何かを作ることのワクワク感とできた時の達成感は私にとって生きがいだ。美容師は自分の実力や努力に対して、結果が 100%の仕事であり人生をかけて挑戦できる土俵だと思った。自分の性格上、得意もしくは好きなことはコミュニケーションをとりながら人を癒すことなので、私は人の役に立てる仕事に就いて、自分を成長させたい。そして災害が起きて日常生活が困難な被災地の人たちが、傷ついた心の取り戻し方の一つに洗髪や美容という仕事が役立つと信じてその仕事に就き、境遇と一緒に共感できる人でありたい。

(2) 防災とのつながり

美容師が日常的に防災に関わるのは難しいが、災害が起きた時に被災地に行き出張美容師という形でボランティアすることはできる。また日本の北から南でも、災害により困難を抱えた地域があれば必ずボランティアを要する。そしてやるべきことの中に、命からがら被災した人達が生活する上で身だしなみの配慮のお手伝いが含まれることは言うまでもないだろう。人が人と温もりを感じることで、心が生き返る、今の災害過多の時代の防災とは、まさに災害に遭った状況自体を人の力によって絆の思い出に変えていくことが大事だと思う。私がこの環境防災科で学んだ災害の現状、防災への取り組みを通して掲げる将来の夢がある。具体的なビジョンの 1 つに、高齢被災者や身体障害者、老人ホームに入居している高齢者など、外出がままならない人のために美容師として出張理容を行うことだ。ハサミ 1 つでどこにでも向かえるサービスと温もりを提供してみたいということがある。もしかしたら海を越えて外国での需要もあるかもしれない。

6 最後に

なぜ地震を怖いと感じるのか。大規模な地震が発生すると、通信設備の被害や電話の集中によって、被災地に住む人と連絡がつきにくくなり、家族の安否確認がなかなかできないといった事態が起こる。地震の発生後に電話がつながらないと、一層不安な気持ちが高まる。それは自分の命同様、もしかしたらそれ以上に自分の大切なものを奪おうとされる怖さを感じるのかもしれない。

しかし毎日恐れて暮らすには神経がもたない。大切な人と常に一緒に過ごすわけにもいかないし、1 日のうちでバラバラな時間を過ごす時の方が大半かもしれない。そこで、地震に対する恐怖と、起こったときにどう対処できるかという冷静な判断を持っていることが必要だと思う。災害に対してあれこれ考える、不安や心配があるからこそ備える策も同時に持てるのだと私は思う。

生きている以上、いろんなことに対する不安や恐怖は尽きない。自分が将来何者になれるか、人生の途中で挫折して腐ってしまうのではないか。明るい気持ちと暗い気持ちが混在してしまう。中学の 3 年間で高校の進路を決めた時、とにかく自分が強くなれる場所を探し求めている。そこでこの科を知ったのだ。

将来の進路や進む道の似たような勇士が集まるこのクラスは、良いライバル関係で切磋琢磨できる集団であったと思う。この環境防災科 20 期生で過ごした時間は本当に有意義なものだった。日本を災害に強い国にしようという仕事に就こうとしたり、人の命を守る仕事に就こうという立派な志を持ったクラスメイトと 3 年間一緒に学べて良かった。自分も毎日頑張らないと、と思えるほど素晴らしい環境だった。

入学して 1 番良かったことはコミュニケーション力がついたことだ。私は昔から人と話すのが好きで自分でもコミュニケーション力はある方だと思っていた。しかしそれはただその場での会話を楽しんでいるに過ぎない。ボランティア活動をしていくうちに人にものを伝える、教える、これもできて初めてコミュニケーション力があるというのを知った。それを学んだ私は、ボランティア活動で様々な年齢人種の人と会話をして学習した。コミュニケーション力の違いで語り継ぐ際にどれだけ確かなことを伝えられるかが変わってくる。

何不自由なく学校に行けているこの今、自分の意志で決められる進路、生きていられることが幸せだと思い、明日もこの社会の期待に応えられるよう全力で生きていく。私は当たり前生きてきたと思っていたけど、地震や津波を勉強して災害や災難から避けられたことの奇跡の連続で生きている命であることを学んだ。将来は命のありがたみや人間の強さを感じながら生きることを信念に、自分の手に職をつけて人と関わり、災害時にも助け合える生き方を貫きたい。今後もいろいろな災害に遭遇するという人間の運命と共存しつつ、かつ進化していく時代にも対応しながら、人の心と直接的に関われる美容師を目指して懸命に働きたいと思っている。真剣に取り組んだ3年間だからこそ、これから進む自分の道にも臆せず胸を張って貫く覚悟が出来ている。

「思いをつなぐ」

松本 航海

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 29 年が経とうとしている。長い年月とともに記憶の風化が進んでいる。震災の記憶を風化させないために私にできることは何か。災害大国である日本で大きな災害が発生することは不思議なことではない。しかし、災害が起こるたびに被害がでてきた。その被害を最小限にするために、防災を学んだ者の責任として私は語り継ぐ。

2 消防士のお話

(1) 阪神・淡路大震災発生時

これは阪神・淡路大震災当時、須磨消防署でレスキュー隊として活動されていた 0 さんの被災体験だ。

阪神・淡路大震災の前夜、須磨消防署のレスキュー隊は隊長が休んでいたため、0 さんが代わりに隊長を務めていた。17 日の午前 0 時頃に須磨周辺で火災が発生し、出動して帰ってきたのが午前 5 時過ぎだった。帰ってきた後、着替えて火災の報告を入力している最中に地震が発生した。最初はおしりが持ち上がるような小さな揺れだったが次第に縦に揺れ始め、大きな揺れが続いてドスンと大きな揺れに変わった。揺れの時間がとても長かったと感じた。今まで地震の経験が無かったので、地震かどうか分からず、近く的高速道路からトラックが落ちてきたように感じた。用具が上から落ちてきて地震であると気づき、0 さんはすぐ椅子の下にもぐるように指示を出した。事務所内の資機材が全部倒れてほこりやガスのにおいが充満していた。そして、揺れが収まるとすぐにガスの元栓の確認へ向かわせた。直前に火事があったことから皆が起きており、事務所内で大きな問題は発生しなかった。

その後、状況を確認するために 1 階へ行ったときに消防車が 1.5 メートルほど動いており、また、ガレージの前に 30 センチ程の段差ができていた。そのため、消防車をすぐに出せるように動かし、その時には、すでに東の空に 3、4 本の黒い煙が上がっていた。そして、すぐ指令室に災害の状況を確認しようとしたが無線に反応が無く、自己判断で動くことを決意した。須磨の近くの公園でも火災が発生し、その時は消火隊が現場に出動した。ある程度の状況判断が終わり、現場に向かおうとしていた時に市民が助けを求めて消防署に押し寄せてきた。消防車のラジオで情報を確認した後、助けを求める人が多すぎるので、地図に名前を書いてもらい通常は 4 人で 1 組だが、分かれて救助活動を行った。0 さんも救助活動を行うために出動をした。すると、あったはずの民家が全部潰れており、景色が変わっていたことで災害の規模が大きいものであると分かった。その後は、地図をもとに救助を進めていき、市民の手も借り、昼過ぎまで救助活動を行っていた。非番だった隊員が続々と署に来たがそれでも救助が追い付かなかった。0 さんは 10 年間消防に勤務していたが消防力が劣勢になる災害を経験したことがなかったので、1 つずつ対応を行っていった。

(2) 印象に残っていること

0 さんが阪神・淡路大震災で印象に残っているのは市民の手助けだ。3、4 つ目の現場の時に瓦礫の下の高齢者を救助していると助けてほしいと突っかかってくる人に囲まれた。その中に高校生ぐらいの金髪の不良グループもあり、罵声を浴びせてきた。0 さんは説得するように「ここで争っても仕方ないから手伝ってほしい」というと大人は興奮したままだったが不良グループのリーダーが「じゃあおっちゃん何したらいいん」と協力してくれ、0 さんは「消防車に積んである工具を何使ってもいいから出して」と頼んだ。リーダーがおり統制が取れていたことと、学生で力があるので心配ないと思い、私は次の現場へ向かった。この時に 0 さんは「日本は捨てたもんじゃないな」と感じた。

(3) 1 番つらかったこと

0 さんが阪神・淡路大震災で 1 番つらかったことは呼びかけに応じない要救助者の救助を断る時だ。生存確率の高い人から助けるために、呼びかけても返事がない現場の救助はマニュアル通り後回しにしていた。だから、家族が埋まっている市民に泣きながら頼まれても断って次の現場に向かっていった。そんな中で興奮した市民に罵声を浴びせられることが多々あった。しかし、消防力が劣勢な今、助かる命を優先するために罵声を相手にせず、原則に従って救助を行うのが 1 番つらかった。

3 消防士のお話を聞いて

私は消防士という職業が改めて過酷なものであると感じた。消防士であっても関西、神戸には地震がないと思っていた中で発生した未曾有の災害。地震の経験が無い隊員ばかりの中、臨機応変に対応して懸命に救助を行うけれど罵声を浴びせられ、泣きながら助けてと頼んでくる人を断り、自分にも大切な人がいる中で任務を優先している隊員に感動した。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私は小学5年生の時に消防士のテレビを見て憧れを持ち、消防士になりたいと思った。小学生のうちは憧れのままだったが、中学校に入学するとともに消防士について真剣に考えた。そこで見つけたのが環境防災科だった。被災地支援やボランティア活動などを知り、また、就職先に消防がとても多く、中学1年生の時には環境防災科に入りたいと考えていた。中学2年生になって進路について真剣に考えた時に「高校生、災害と向き合う」という諏訪清二先生の本を叔母から勧められた。諏訪清二先生は環境防災科を創られた方で環境防災科ができた理由や被災地支援について書かれてあった。それを見て、私も環境防災科に入って同じことがしたいと思い、入学の意思が固まった。

(2) 東北訪問

私は1年生の1月に防災ジュニアリーダーの活動の一環として、東日本大震災の被災地である東北に行く機会をいただいた。環境防災科に入って阪神・淡路大震災で被災された方のお話を聞く機会があったが、東日本大震災で被災された方のお話を聞くことがあまりなかったので直接目で見て、耳で聞いて感じたいと思い参加した。

東北訪問から1年以上経った今でも鮮明に記憶に残っているのは大川小学校を訪れた時のことだ。震災遺構となり、震災当時のまま時間が止まっている大川小学校を見て、ずっしりとした重い空気を感じた。曲がりくねったコンクリートの渡り廊下や2階まで津波が来たであろう痕跡を目の当たりにしてなんともいえない気持ちになった。そして、大川小学校でお子さんを亡くし、震災当時に教師でもあった語り部の佐藤敏郎さんのお話を聞いた。大川小学校は避難が遅れ、津波で多くの被害を出した。小学生でも5分あれば登ることができる裏山に避難すれば全員が助かった可能性が高かったが、避難するという判断に至らなかった。このことから佐藤さんは「分厚いマニュアルだけでは何の役にもたない」とおっしゃっており、より実践的なマニュアルの作成や避難訓練の重要性を改めて考える機会になった。そして、私が佐藤さんのお話で1番印象に残っている津波後のお話がある。佐藤さんは津波の後、生存者を確認するために瓦礫をどけていた。そこで佐藤さんは傷だらけで折り重なっている子どもたちの遺体を見た。津波は水だけではなく、木や瓦礫なども交じっており、それにぶつかって骨が折れていたり、深い切り傷があったり、強い流れに揉まれて服が脱げている人もいたという。想像するだけでも津波の脅威が感じられた。佐藤さんはこのような話のほかにも「ここは何年生の教室で…」や「ここでよく生徒が遊んでいた」など震災前の楽しい記憶なども話してくださった。佐藤さんは「あの日の前のことも語り継ぎたい。あの日のつらい体験だけではなく、その前にあったたくさんの楽しい記憶があったことも忘れてほしくない。そして、大川小学校を未来を拓く場所にしたい」とおっしゃっていた。

(3) 防災ジュニアリーダー

私は1、2年生の時に防災ジュニアリーダーとして様々な活動に参加させていただいた。防災ジュニアリーダーの活動の中にアクションプランというものがある。アクションプランとは校内や地域の防災意識を高めるために行う計画のことだ。今年の舞子高校はアクションプランを3つの柱で考えた。1つ目は避難訓練。2つ目は防災教育。3つ目は防災運動会だ。私は1、2年生とも避難訓練のアクションプランに参加した。避難訓練は毎学期末に実施され、生徒が内容を考えて行う。地震や火災の想定や非常放送のみの緊急地震速報、リアルさを出すために傘立てを倒すなど、様々な工夫を行ってきた。舞子高校は普通科生徒の数のほうが多く、防災に対する意識の違いを埋めたいと考えていた。また、避難訓練の前に行われる防災教育の内容についても防災教育班と考えて、自分の命を守ることや防災についての意識が低い普通科生徒でも、楽しく授業を受けてもらえるように工夫して考えた。また、避難訓練では毎回のように反省が出て、改善を繰り返し、速やかに自分のクラスのところ

に並べるようにビブスを作成したり、点呼がスムーズにいくように名簿をビブスに貼り付けたりと工夫をした。3年次もジュニアリーダーに入り、避難訓練班で活動するので、より良くなるための避難訓練を考えたい。そして、現在は高校生のジュニアリーダーとして主に校内で防災・減災について考えてもらっているが消防士になると地域単位で行うことができ、より広い規模で防災・減災を啓発することができ、この経験が必ず生きてくると思うので、消防士になったら防災訓練や防災教育の計画等にも携わりたい。

5 将来の夢

(1) きっかけ

私の夢は消防士になることだ。なりたいと思ったきっかけは環境防災科に入ろうと思ったきっかけのところでも触れているが、小学5年生の時に消防士のテレビを見て、憧れてなりたいと思った。小学校の時は憧れのままだったが、中学に入ってからには災害について勉強したり、トライやるウィークでは垂水消防署に行かせていただいたりし、現実的な夢として消防士を考えるようになった。

(2) 体験

高校に入って、ボランティアや防災ジュニアリーダーの活動に参加させていただいて防災について深く学び、様々な方と交流する機会がたくさんあった。垂水消防署体験や三木消防署体験、消防学校体験入校等の目の前で消防士に触れることができる活動が多くあった。垂水消防体験では実際にロープを使って高い所から降下する訓練などをさせていただいた。三木消防体験では1人で放水訓練をしてペットボトルを倒す訓練などをさせていただいた。そして、三木消防に新しく入ってきた訓練生が厳しい特訓を受けているのを見た。テレビ見たことはあったが目の前で訓練の過酷さを見て、自分もできるのかと不安になった感情と、限界を超えても走り続け、腕立て伏せをしている訓練生を見てとてもカッコいいと思った。そこで印象に残っている消防士の言葉があって「限界を勝手に決めつけるからそれを叩き壊さなアカン」とおっしゃっていて、人の命を救うということがどれほど難しいことか改めて感じさせられた。そして、もう1つ私に影響を与えた言葉があって「オレンジ服は消防のエースや。オレンジ服が降参したらその現場はもう終わりになる。だから過酷な訓練をする」という言葉で、この言葉を聞いて私は救助隊(オレンジ服)になろうと思った。消防学校体験入校は1・2年生の時にクラス全員で行き、1年生の時は座学と訓練(腕立て伏せ、腹筋、フェニックス、ランニング、放水、規律訓練等)を経験した。特に印象に残っているのがフェニックスだ。フェニックスとはバービージャンプのようなもので、飛び上がる瞬間にフェニックスと叫んで、クラスのみんなで声を合わせて訓練したのでよく印象に残っている。2年生の時には中隊長を務め、私の号令で規律訓練を行った。そして、実際に火災が発生した時のことを想定した放水訓練も行った。そこで、大きな声で指示を出していたつもりだったが、放水の音も大きいので聞き取りづらかったと後から言われた。私は大きな声に自信があったが、消防士の声と比べて質が違くと分かり、悔しかった。しかし、短くはっきりと指示を出すというテクニックを盗むことができた。規律訓練では予令と動令の言い方が難しかったり、覚える動きがたくさんあり、大変だったがなんとかこなすことができた。消火訓練では臨機応変な指示が求められて、状況を逐一報告してもらったり自分で確認したりと難しかった。しかし、大変だった分とてもいい経験になった。

(3) 特別高度救助隊

最後に、私は様々な経験を通して、消防士の中でも救助隊になりたいと考えている。さらに、救助隊の中でも特別高度救助隊に入りたいと考えている。特別高度救助隊とは、特殊な災害に対応できる強力な装備を有し、人命の救助に関する専門的かつ高度な教育を受けた隊員で構成されている部隊だ。特別高度救助隊に入ることによって、幅広い災害に対応でき、多くの人を助けることができると考える。また、私はALL HAT ひょうご防災フェスタ 2022 というイベントに参加させていただいた時に、初めて特別高度救助隊の方を見た。人と防災未来センターの屋上からロープで要救助者を救助する訓練をしていてとてもカッコよかった。そして、神消 22 のスーパーイーグル神戸(神戸市消防の特別高度救助隊)の車両を見ることができた。また、消防士の方をお願いをして、全国に8地域しかないというドラゴンハイパーに乗らせていただいた。この経験に、刺激を受けて特別高度救助隊に入りたいと思った。

6 最後に

私は「語り継ぐ」を執筆し、自分の高校生活を振り返って感じたことがある。それは、自分がとても恵まれた環境にあるということだ。1年生の時は「災害と人間」という科目で様々な災害のメカニズムや過去の災害の教訓について学んだ。また、たくさんの外部講師の方のお話を聞かせていただいた。そして、防災ジュニアリーダーの活動として、たくさんのボランティアや学習会、東北訪問に行かせていただいた。そこで1年生であっても環境防災科のビブスを着ていたら頼られ、色々な人に見られていると知り、戸惑った反面、誇らしかった。2年生の時にも防災ジュニアリーダーに入り、去年とは違い下級生を引っ張る役割として様々な活動を行った。学習会などでは司会進行や各学校の代表で発表し、大変なことも多かったがその分、成長することができた。そして、消防士の方のお話を聞くことができた、訓練をさせていただいたり、近くで消防士に触れ合うことができ、とても貴重な経験をする事ができた。3年生になっても防災ジュニアリーダーに参加させていただいて、次は自分が学んだことや経験したことを下級生に伝える仕事を担いたいと考えている。

最後に、このような恵まれた環境を作ってくださったたくさんの方々への感謝の気持ちを行動で示し、たくさんの方に繋いでいき、思いをつないでいきたい。

「人と人との繋がり」

山中 瑛大

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 29 年が経った。多くの人の命や財産を奪った震災は月日が流れていくにつれ、その記憶が風化していき、震災を体験していない世代が増えてきている。そうした中、私たちが語り継いでいく意味とは何なのか、次の世代に残していかなければならないことは何なのかを、この「語り継ぐ」を通して考えられたらと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 伯母の話

阪神・淡路大震災当時、私の伯母は神戸市灘区にある金沢病院に勤務していた。「ドンッ」と突き上げる揺れが地震は部屋のあらゆるものを倒した。その時あたりはまだ真っ暗だった。マンションに住んでいる人たちと集まって日が昇るのを待った。明るくなってから、家の近所をうろうろしたら道がひび割れていたり、水道管が破裂して水が出ていたり、遠くの方では火災が起きていた。しかしまだその時はそこまで大きいことが起きているとは思ってはいなかった。その後、職場の方から来てほしいという連絡があったが、行くすべがなかった。仕方なく新神戸から灘区の病院まで歩いていくと、灘区に入ったあたりから火災が発生していたり、家が潰れていたりして、そこから人が助け出されているところを目の当たりにした。すごいことになったのだなとここで初めて気が付いた。だが現実味はまだなかった。職場の手前まで行くと隣は消防署であったため消防署の方たちも呼び出されていた。伯母は消防の方や同じ職場の方 3 人で病院の前まで行き、着いてみると目に入った光景に唖然とした。病院前のロータリーにぎっしりと人が座ったり寝ていたり立っていたり、とにかく人がいっぱいだった。生きているのか死んでいるのかが分からない状態で倒れている人がいた。中に入っても人がごった返している。伯母は簡単な処置をしていたが薬品がなかったのでその日はその場でできることをした。近所からはがれきや家屋に埋まっていた人などが病院に来る。点滴は確保できていたので運ばれてきた人にはその処置はできていた。夜までこのような感じが続いた。夜中は真っ暗なので何もできなかった。翌日から運ばれてくるのはほとんどが遺体だった。遺体を連れてきた人たちは赤の他人である。だからその遺体が誰なのかが分からない。連れてこられた遺体は遺体安置所に移動してもらった。1 日目の晩くらいから家に帰れないほどの病状の人は入院してもらった。だが、機材や薬品がなかったのでできることは水分を入れる点滴だけだった。痛み止めは割れてしまっていないので、そばにすることしかできない。中学生くらいの子どもからお年寄りまでがその病院にいた。その中でも 1 番印象に残っているのが、中学生か小学生くらいの女の子がいて、その子が私に「お姉さん、私はまたピアノが弾けるかな？」と聞いてきたことだ。「弾けるよ」とは言ったものの、この子は助からないかもしれないとその時思って、何とも言えない心情になった。後にわかったことだがその女の子はクラッシュ症候群になっていて、その後亡くなってしまう。その時はクラッシュ症候群の細かい検査をすることもできなくて、血尿になっている状態からクラッシュ症候群と判断されていた。そのような方が何人かいた。2 日目には大阪の病院の受け入れ先が見つかり、そのあと自衛隊のヘリコプターが来て重症の方を大阪の病院に送ることができた。3 日目からは助け出される人が少ないので、病院に連れてこられる人は少なかった。病院の中にはもともと入院していた患者さんがいた。食べるものがなく飲むものもない状態になっていたが、病院の方が京都の会社と食べ物を提供してくださる契約をしており、京都からおにぎりなどが届いたため食糧不足の問題はここで解決された。震災にあって困ったことは多くあり、例えば日常生活が全くできなかったことや携帯電話が普及しておらず連絡の手段がなかったことが挙げられる。最後に「震災を経験していない世代が増えていく中で、その人たちに大切にしてほしいこと」を聞くと、「自分の身を守ってほしい」ということや震災で一番心の支えになったのが、職場の友達だったことから「助け合える友達を大切にしてほしい」と伯母は言った。

(2) 伯母の話を聞いて

私は、伯母の話を聞いて災害の恐ろしさを再度認識することができた。伯母の働いていたところは他の病院以上に患者が押し寄せ、設備もままならない中、対応を迫られていた。そんな中で働いていた伯母の苦労は計り知れないものだと感じる。多くの人が自分のことで必死な中、他人を助けるために働く伯母の行動は本当に尊敬に値するものだ。誰かが困っていたらお互いに助け合うということはあたり前のこと

かもしれないが、災害という誰しもの大変な目にあっていいる中で、そのような行動をとれることはとても難しいと感じる。私は実際にこのような現場に居合わせた時、伯母のような行動がとれる自信がまだない。その自信をつけられるようにこれからも防災の勉強やボランティア活動に参加していきたいと考える。

3 環境防災科

(1) 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、平成 27 年 9 月関東・東北豪雨で鬼怒川が氾濫した様子をニュースで見たことだ。鬼怒川を含む 80 以上の河川が氾濫し、多くの人が自衛隊やヘリコプターによって救助された。その様子をテレビで見ていた時に、やるせない気持ちとともに、自分にも何かできることはないかと思い、防災や減災を学べるこの学科に入学した。

(2) ボランティア活動

私は環境防災科に入学してから様々なボランティアに参加してきた。活動していく中で先輩や先生から「ボランティアをしてあげているのではなく、させてもらっているという気持ちの大切さ」や「募金活動では必ず事前学習をして、送り先の現状や本当に困っていることは何かを知ることの大切さ」について教えていただいた。また、災害時のボランティア活動では、「独りよがりでない支援」をすることが大切だと学んだ。親切の押し付けをするのではなく、人生の中で選択・決断をして歩いていくのは被災者本人であるので、支援者である私たちはそのお手伝いをして、地盤固めをすることが必要だと教えていただいた。

(3) 募金活動

私は募金活動を通して人と人との繋がりを知ることができた。活動の中で多くの方から「ありがとう」や「頑張ってるね」という言葉をいただいた。その中で、「舞子高校だから信頼してお金を入れるね」という言葉をいただいたことがあった。この言葉は、過去の先輩方がこの活動を繋いでくださって、継続して続けてきたからこそ、地域の方からの理解と感謝がいただけたのだとこの時初めて分かった。私たちがこの活動をやめると今までの先輩方が築き上げてきた住民の方からの信頼が崩れてしまう。そうならないためにも次の世代へとつなげるように 1, 2 年生との縦の繋がりを大切にしてこの活動を続けていきたいと考える。

(4) 東北訪問

私は 1 年生の時に東北に訪れて、東日本大震災で被災された方のお話を聞いたり、震災遺構を見学したりした。その中で私は大川小学校ご遺族のお話がとても印象に残っている。今野浩行さんのお話の中で、「学校は命を預かる場所だから、1 番安全なところでないといけない」という言葉や「学校は命を預かっているのだから、子どもの命の最期の場所になってはならない」という話があった。この話を聞いて学校の対策が不十分であるために、子どもの命が奪われるということは絶対にあってはならないと強く思った。また、大川小学校で語り部として話して下さった佐藤敏郎さんのお話の中で「防災はハッピーエンドにしないといけない」「学校の授業に過去の災害や事故などを学ぶ時間をとって教えてほしい」とおっしゃっていたことから、高校生が防災を学ぶということをかたく考えずに、防災を学べる場を増やしていくべきだと感じた。舞子高校では生徒ひとりひとりに防災マニュアルが配られ、校舎は筋交いなどの耐震化がされている。学期末には防災教育や避難訓練が行われ、生徒全体の防災意識の向上に励んでいる。このように、学校が災害時に安心して避難できるような場所や環境が作られてきているのは、過去の災害からの教訓にほかならない。学校が子どもの命の最期の場所にならないためにも、まずは私たちの災害や防災に対する意識から変えていく必要があると感じる。

(5) 福島県視察

私は福島県の浜通りに行き「請戸小学校」や「東日本大震災・原子力災害伝承館」、「J ヴィレッジ」を訪れた。私はこの福島県視察を通して「福島県のいま」について知ることができた。福島県では、今まさに復興が行われている。例えば、食堂や商店を建設したり酒やワインといった福島の特産品となるような商品を作ったりなど、多くの事業を展開している。このように、福島には復興に向けて前向きに頑張っている人が大勢いるということを知ることができた。また、福島県の食べ物の安全性についても知ることが

できた。現在、福島県など原発の被害を受けた地域では原発事故の影響で科学的に根拠のない風評被害を受けている。しかし、福島県の食べ物はすべて検査を通してから販売しているため「世界一安全」といえる。「J ヴィレッジ」では原発事故収束の対応拠点として使用されたため、7年4か月間サッカーができない状況が続いていた。ハード面が復興してきても長い期間 J ヴィレッジでサッカーをすることができなかったことから、人々の心の復興という面ではまだまだ時間がかかるように感じる。「請戸小学校」は福島県浪江町に位置しており、今は震災遺構となっている。震災遺構とは震災が発生して倒壊した建物などを、記憶や教訓のために取り壊さずに残している建物のことをいう。請戸小学校では、倒壊を免れた校舎に刻まれた脅威と全員避難することができた経験を伝えるために震災遺構となっている。このように時間が経つにつれて人々の記憶から震災の記録や記憶が風化していく中で、風化を防ぐ活動は震災の記憶を「語り継ぐ」上でとても大事だと私は思う。過去の災害の教訓を次の世代に伝えて、1人1人が笑顔で暮らしていけるように、私たちは福島県にある問題について知り、考えていくことが大切だとこの福島県視察を通して感じた。

4 夢と防災

(1) 私の夢

私の夢は、消防士になることだ。災害や火災が発生した際には、消防士の方が迅速に消火活動や救助活動を行っており、多くの人を助けて、私たちに大きな安心を与えてくれる。私はこのように、災害や火災から多くの人を守るように、日々の防災活動や予防活動をしっかりし、地域の方の笑顔を守ることのできる消防士になりたいと思っている。そのためには、地域の方とのコミュニケーションが大切だと考える。私は地域の防災福祉コミュニティの活動に参加しており、月に1回行われる地域の方が集まる会議に参加している。その話し合いの中で、「消防などの行政の機関が災害時に手の届かないところは、地域住民で補う」という話が出た。阪神・淡路大震災の際には、救助された人のほとんどの人が近隣住民の人に助けられたという話を聞いたことがある。地域の繋がりが強ければ強いほど、地域の防災力は高くなり、災害時に生き残る確率が高くなる。このように、消防と地域は持ちつ持たれつの関係であり、地域とのコミュニケーションは大切だと考える。私は少しでも地域に寄り添える消防士になるために、環境防災科の授業で学んだ防災の知識やボランティアの経験を活かしていきたいと考えている。

(2) 消防士になろうと思ったきっかけ

私がこの夢を目指すきっかけの1つに平成27年に発生した関東・東北豪雨がある。私は鬼怒川が氾濫してまちを飲み込み、多くの人々がヘリコプターで救助されている様子をテレビで見た。消防士の方が、助けを求めている人を迅速に救助している姿に強いあこがれを持ち、私も多くの人を助けることのできる人になりたいと思い、消防士を目指している。

(3) 南海トラフ巨大地震

私たちが生きている間に必ず発生すると言われている南海トラフ巨大地震だが、令和4年1月1日の時点でマグニチュード8～9クラスの地震が今後30年以内に発生する確率は70～80%と発表されている。このようないつ発生するかわからない巨大地震が広範囲に被害をもたらすため、阪神・淡路大震災のときのような他県からの支援が望めない状況にある。その中で私たちができることは日ごろの備えである。南海トラフ巨大地震が発生したとき私は消防士になって活動しているかもしれないし、店で買い物をしているかもしれない。しかし、どんな時であっても日ごろからの防災バックや備蓄の備えやあらかじめハザードマップを見て避難経路を確認しておけば、地震の被害を減らすことができ、命を守ることができる。

5 最後に

私は高校生活の3年間を通して「語り継ぐ」という言葉の意味について考えた。講師の方や語り部の方から「語り継ぐ」という言葉を多くいただき、その中で1番印象に残っているのは東日本大震災で被災され、その後語り部として活動されている雁部那由他さんが講義でおっしゃられた「語りを語りのまま終わらせない。語り継ぎの先には行動がある。行動の先には未来がある」という言葉だ。震災を体験していない私が、時間が経つにつれて風化していく震災の記憶を未来に残すためには「語り継ぎ」をしていかなくてはならない。その「語り継ぎ」の中で大切にしていかななくてはならないことは、どれだけ多くの人々の日常に「語り継ぎ」がなじんでいくかだと考える。多くの人々の日常に当たり前のように震災の記憶があり、

防災が根付いていることこそが「語り継ぎ」をする1つの目的だと考えている。いつ来るか分からない災害に対して、日常に根づいていない防災で災害に対応することは難しい。語りが多くの人の行動に影響し、その行動が直接でないにしても、その多くの人たちの未来が守られることこそが「語り継ぎ」だと私は考える。そして私が高校3年間で学んだことは防災や減災、災害のメカニズムだけではなく地域との関りや高校生も社会の一員であるということを学んだ。私たちがこれまで行ってきた活動は必ず誰かの役に立っていると私は思う。この3年間で得た教訓や経験を糧としてこれからの防災活動や日常生活に活かしていきたいと考える。

思いを紡ぐ

吉田 幹

1. はじめに

阪神・淡路大震災が起きて29年が経った、私は阪神・淡路大震災の未災者であり、今まで大きな災害を経験したこともない。しかし、神戸で生まれ育って環境防災科に入学した者として阪神・淡路大震災という大災害を次の世代へと語り継ぐ責任があると思う。

災害を受けた被災者が私たちに語り継いでくださることで、過去の悲惨な出来事が風化せずに残る。そうすることで、災害への危機感や意識が高まり、備えることで悲惨な出来事を繰り返さないようにすることができる。だから私は、過去の災害を知り被害を減らし、自分の命を守ってもらうためにも語り継ぎたい。

2. 阪神・淡路大震災の被災体験

(1) 母親

当時、母親は14歳の中学2年生で垂水区、塩屋に住んでいた。兵庫県南部地震が起きた日は火曜日で朝練があったため目覚ましは5時50分に設定していた。兵庫県南部地震が起きたのは5時46分で、その時に祖母が「逃げるで、地震やで」と起こしてきたので、夢かと思っていた。

地震による家の被害はほとんどなく、家具なども無事だった。しかし、電気、ガス、水道のライフラインが止まった。地震後とりあえず家の外に出たが近所の方に「家の中のほうが安全だ」と言われて家に戻った。地震が落ち着いてから風紀委員の挨拶当番だったこともあり学校に行こうとしたが、祖母に止められた。電気が使えないのでテレビなどの情報源がなく、電車が止まっているのすらわからなかった。その後、近所の方と一緒に給水車に水を汲みに行った。電気、ガス、水道が使えないため、ご飯はカセットコンロを使って作った。体を洗う時もカセットコンロでお湯を沸かして体を洗っていた。シャンプーは塗るだけのシャンプーがあったのでそれを使っていた。

学校に行けるようになったが学校には体育館だけでなく廊下、階段、踊り場まで人であふれていた。そのため、調理実習室が教室になっていた。運動場には自衛隊がお風呂を作ってくれていた。男女ごとで曜日が決められていた。韓国からの救援物資がたくさん来ていて、そこに並ぶと辛ラーメンが2つもらえた。辛ラーメンは辛いけど食料が不足していたため皆文句を言わず食べていた。体育の更衣室が救援物資の倉庫になっていて、中学生のための文房具などもたくさんあった。

(2) 父親

当時、父親は16歳の高校1年生で須磨区に住んでいた。ゴゴゴゴゴゴドンと地鳴りと地震の衝撃で目が覚めた。目が覚めると横揺れが続いて立ち上がることができなかった。その後も物が落ちる音とガガガガと工事現場のような騒音が続いたという。感覚的には巨人に家を揺さぶられるイメージだ。家がギシギシ音を立てて、揺れていて天井の四角形が揺れてひし形に見えた。すると、祖母の悲鳴が聞こえてきた。しかし、立ち上がれないから布団にくるまって身を守った。タンスやテレビが落ちてきたが、なぜかその日だけ父と妹の寝方がいつもと違い当たらずに済んだ。その後もゴゴゴゴゴと余震が長く続いた。揺れ自体は15秒だったが、父親は1分ぐらいに感じたと話した。

しばらく経ってから叔母と家の外に出た。当時住んでいた家が須磨区の手町という所にあり、山のふもとにあった。南側は所々赤い炎と煙が上がっていて、長田の方の灰が降ってきた。その山のふもとから下って駅のほうに歩いていると何件も家が崩れていた。友達の家がどれかわからないぐらいぺちゃんこだった。その崩れた家の多くは1階だけが崩れていて歩道がなくなっていたため、屋根の上を歩いて移動していた。しかし、今歩いている屋根の下に人が埋まっているかと思うと歩けなかった。コンビニは窓が割れていて、本屋は本のなだれが起きていて大変だった。パン屋などの食品を扱っている所には人が群がっていた。

友達の家が火事になっていたのもその方に行くと、消火し終わった後で、水浸しになった家から友達が出てきた。友達は「疲れた」と言っており、煤をかぶって真っ黒だった。何と声を掛けたいのかわからなくて大丈夫か聞いたら「大丈夫」とだけ言われた。他には、友達の妹が家で暮らすのにトラウマを覚え、家で寝られなくなったので車の中で生活をしていた人もいたそうだ。

家に戻ってから学校に行こうとしたが、電車が動かなくていけなかった。そうこうしていると長田の方から灰が降ってきた。その間、消防車の音が鳴りやまず、消防士が常にウロウロしていた。その後も5分に1回のペースで余震が続いていたため、家の外に少しの間避難していた。家の前の中学校のグラウンドは池を埋め立てて作っていたため液状化が起こり、屋上の貯水タンクは水漏れをして滝のように流れていた。

被災して1番困ったことは被災した地域と被災していない地域での温度差とガス、電気、水道などのライフラインが止まったことだ。とにかく水を支給されるのが遅くてお風呂などに使う水を鍋で沸かして頭や体を洗うのに使っていた。また、親戚の住んでいる鈴蘭台と明石にお風呂を借りに行った。水の大切さは伝えたいけど体験しないと伝わらないし、この苦しみは理解できないと言っていた。温度差を感じたのは学校に通いだしてからだ。西神中央や名谷より奥に住んでいる人達はあまり被害がなくて孤独感を感じた。1番うれしかったのは電気がすぐに使えるようになったことだ。

町は古い家を建て直し、町全体が防災を意識しだした。ものすごいスピードで復旧し、町が新しくなった。言い方は悪いけど災害を受けたことによるプラス面は、町が新しく綺麗になったことだ。

(3) 祖母

当時、祖母は51歳で須磨区に住んでいた。地震が起きる前日の1月16日は月が真っ赤で違和感を覚えた。地震が起きた時はまだ寝ていて何が起きたかわからなかった。起きようとしても起きられずにあたたかふたしていた。何とか起き上がると揺れ方がおかしく物が落ちてきて地震だと気づいた。家自体は壊れてなく、子どもも2人とも無事だった。その日は子ども2人がたまたまいつもと違う向きで寝ていて、いつもの向きなら家具などが直撃していた。当時、住んでいた所の地盤がしっかりしていたこともあり家の外に出ても瓦が落ちている家はあったけど崩れている家はなかった。高台に上り、下を見ると、ところどころ赤い煙が上がっていた。子どもはそれでも学校に行こうとする。家の前が中学校でグラウンドが見え、避難している人達や亀裂の入ったグラウンドを見るとだんだん被害状況がわかってきた。電気、ガス、水道などのライフラインは止まっていた。最初に困ったのがトイレの水だ。住んでいたところが山の近くで、少し進むとダムがあったので皆で水を汲みに行った。10日後にガスが復旧し、2週間後に電気が復旧しテレビも見られるようになった。祖母はその時、大規模な火事や高速道路が横転しているのを見てとても衝撃を受けた。電気やガスが復旧するまではお風呂も入れないし電気も付かなかったので、毎日真っ暗になる20時くらいに寝ていた。電気が使えるようになってからは友達や親戚からたくさん電話がかかってくる。親戚は電車も使えなくて道も崩れている中、遠回りをして物資を届けに来てくれた。

中学校の校庭には自衛隊や給水車が来てくれた。また自衛隊が中学校のグラウンドにお風呂を作ってくれた。しかし、並んでいて全然入れない。岡山県から来た人達は校庭で炊き出しをしてくれた。救援物資には食料や飲み物もたくさんあったけれど古着がほとんどで、パンも余るほどの量だった。水のいらないシャンプーもたくさん送られてきた。物資のお弁当はおいしくなかった。

被害が落ち着くと祖母は自分達よりもっと生活に困っている人たちのために炊き出しを始めた。その過程でお肉屋さんからお肉を寄付してもらったり、自治会に自分たちから寄付をもらいに行ったり、調理師さんが来てくれたりして地域の元気な人達とおでん、カレー、味噌汁の他にも色々な食べ物を作った。

災害時に1番困ったことは水だ。なにをするにも必ず必要になるものだから水を大事にしないとけないと思った。1番うれしかったことは最初の炊き出しだ。明るく元気に作ってくれて心も体も温まって元気になった。

3. 話を聞いて

私が被災した身内の話を聞いて1番に思ったことは、当たり前なことだけど地域によって被害も対応や捉え方も全然違うということだ。父親から聞いた話にも書いたけれど、心身共にとても傷ついて疲れている中で、ほとんど被害がない地域や、かけ離れた地域の人達と話すことが温度差や孤独感を感じて精神的にしんどくなってしまうのだなと思った。父親は、本当は学校の友達に親身になって寄り添って共感してほしいけれど、当時はまだ若い時期で周りの人がどれだけ苦しんでいたかがわからないのは仕方ないことなのかなと思った。けれど、それは災害に関するだけの話ではなくて新型コロナウイルス感染症による差別や福島第一原発事故による風評被害なども同様で、これからの課題でもあると思う。

4. 環境防災科

(1)入学したきっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは、中学生の頃にテレビのニュース番組を見ていた時に消防士が自分の危険もあるうえで人命救助を行っている姿にあこがれを持ったからだ。阪神・淡路大震災と東日本大震災の被災映像が流れてきて、その時まであまり目にしなかった悲惨な現場を目の当たりにし、とても衝撃を受けたと同時に災害への恐怖を覚えた。

その被災現場で一生懸命に救助活動や消火活動をされている消防士に憧れを待ち、私もこのような消防士になってたくさんの命を救いたいと思った。そのためには、まず災害についてもっと深く学んで自分の命や周りの人の命を守る術を身に付けたい。そうすることが、消防士になるための第一歩になり、地震大国と言われている日本で生き抜くための技術や知識の獲得にも繋がると思い、この環境防災科に入学することを決めた。

(2)入学後

私は環境防災科がどんな授業をするのか、そもそも高校がどんな場所かもわからなくて不安でいっぱいだった。しかし、クラスメイトはみんな明るくて話しやすくすぐに打ち解けられた。

授業を受けているうちに環境防災科という防災系の学科は日本に2つしかないを知り、今私が環境防災科の一員として日々楽しく生活できていることに、とても価値を感じて毎日を大切にしようと思った。

私は入学して良かったと思うことがたくさんある。その内の1つは、災害時に大きく関わってくる様々な仕事の方々による講義を受けられたことだ。なぜなら、他の学科では絶対に体験も経験もできない。私たちはそういった貴重な体験をたくさんできたからだ。この体験や経験は将来必ず役に立ち、高齢化が進んでいる日本では尚更、重要視される知識だと思う。

他には、私の将来の夢に直接関わる行事や授業が多いということだ。私は将来、消防士になりたいと思っている。そのためには先ほど述べたように災害を知ることや、自分の命を守る術が必要だし、様々な人への関わり方を理解しないといけないと思う。その教育が環境防災科はとても充実している。直接消防士の方のお話を聞けたり、消防署や消防学校に行き実際に体験学習ができたりと消防士を目指している私にとってはすごくありがたいことだ。また、クラスメイトには消防士希望が10名程いてそれぞれがいろいろな思いを持って授業を受けている。その人たちはもちろん、将来の夢が防災とあまりかかわっていない人も身を守るという意味では全員が知っていていいことだと思うし、消防体験などで学んだ規律は社会に出て働く上で必要になることだと思う。環境防災科だから得られることも多く、皆で助け合い切磋琢磨しながら成長できた。

(3)ボランティア活動を通して

私がボランティア活動を通して学んだことは2つある。1つ目は相手の立場になって物事を考えることだ。私は出前授業や防災イベントなどのボランティアに参加させていただいた。その中でも、出前授業は小学校や中学校、特別支援学校に行き授業をさせていただくことが多くて、出前授業に繰り返し参加しているうちに小学生や障害のある子どもへの対応の仕方や関わり方がわかるようになっていった。具体的には、相手の気持ちになるというより相手になりきること、これをされたら傷つく、反対にこうされたら嬉しいということを理解する。また、話す時はボソボソ話さず目を見てしっかり伝えること、言ってくれた意見に対してしっかり反応すること、何より笑顔でニコニコしながら話すことを心がけている。

2つ目は自分ができていないことを他人に押し付けてはいけないということだ。これは常識かもしれないが、つい自分もできていないことや、うろ覚えのことを他人に押し付けてしまう。それが出前授業の時に出てしてしまうとなるととても失礼だ。だから自分ができていないことを他人に押し付けるのはよくないことだと改めて気づけた。

5. 将来の夢

私の将来の夢は消防士になることだ。消防士を目指すようになったのは中学3年生の頃だ。ニュース番組を見ていてそれが阪神・淡路大震災の内容だった。そこには、自分の命の危険性を顧みずに市民の命を最優先に助けようとする消防士や自衛隊員の姿があった。そこで、私は自分も人の命を救う仕事がしたい。市民や周りの人に、私だったら大丈夫と思われる存在になりたいと思ったのがきっかけだ。そのためには今のうちから災害のメカニズムや、それに負けない防災や減災、命の守り方を学ぶ必要があると考える。環境防災科として授業を受けていくうえで全てが直接的に私の将来に関わっていく内容で毎日が有

意義な時間だと感じた。

6. 最後に

私は今回「語り継ぐ」を通して伝えることの大切さと同時に難しさを感じた。聞いた情報をそのまま伝えると傷つく人が出る可能性がある。しかし、ありのままを伝えることが語り継ぐという意味でもある。だから伝える、語り継ぐという難しさを感じることができた。その難しさとともに大切さもとても感じた。私たちが今までの大災害の被災者から語り継ぐことによって今までの悲惨な出来事や失敗、自然災害の脅威を風化させることなく次世代へと伝え、教訓を未来へ繋ぐことができるのだと感じた。

最後に、ここまで私を育てて支えてくださった家族や先生、友達の皆に感謝している。どんな時もそばにいてくれて何度も助けてくださり、私の3年間は誰よりも充実していたと言える。今まで環境防災科で得た経験を疎かにせず、これからもしっかりと活かしていきたいと思った。

繋ぐ

義村 理央菜

1 はじめに

1995年1月17日、午前5時46分に阪神・淡路大震災が発生した。そこから、現在まで29年という月日が流れた。月日が流れるにつれ、未災者も増えていく。だが、災害は繰り返し起きる。次起こる災害で、防げたはずの同じ被害を繰り返して悔いが残らないようにするためにも災害の記憶は風化させてはいけない。絶対に忘れてはいけない。だから、私は未災者から未災者へ記憶を繋ぎ続けていきたい。

2 阪神・淡路大震災

(1) 母の被災体験

阪神・淡路大震災が発生したとき、母は中学3年生だった。当時、母が住んでいた西宮は、震度7を観測した。

1月17日午前5時46分、下から突き上げるような激しい揺れが起こり、激しい横揺れが続いた。部屋のタンスや本棚が倒れ、物が散乱し、母が寝ていた布団の上は割れたガラスの破片だらけだった。リビングや台所では食器棚が倒れ、食器やガラスの破片が飛び散り、歩けるような状況ではなかった。幸いにも家族6人全員無事だった。母の住むマンションは半壊し、周りにあった木造建築は倒壊し、住宅や家具の下敷きになって亡くなられた方もいらっしやった。

発災後、家族で学校の運動場で車中泊をしながら生活をした。家族で車中泊するには寒く、狭く、足を延ばすこともできなかった。電気やガス、水道が止まり、電話は通じず、毎日余震が続いた。また、その頃は、スマートフォンやSNSもない時代であったため、情報はラジオ、テレビ、学校の掲示板が頼りだった。車のラジオから流れてくる高速道路が横倒れになった様子、長田の火災の様子、日に日に死者数が増えていく様子は、地獄のようだった。避難先の小学校の運動場は車中泊をする車でいっぱい、教室、遺体安置所であった体育館も避難者であふれていた。トイレは水が流れず、詰まることもあった。ガス、水も使えなかったためお風呂に入れない日々が続いた。

(2) 阪神・淡路大震災を経験して

阪神・淡路大震災では色々な事にありがたさを感じ、何事も当たり前ではないことを実感したそうだ。また、あの頃、世の中には地震や災害に対する危機感はなかったため、防災の知識や意識もなかった。もし、あの時知識があれば救われた命もあったはずだ。

しかし、阪神・淡路大震災であれだけ大変な経験をし、怖い思いをしても、記憶は少しずつ薄れてしまう。だから、その記憶を忘れないよう、経験していない人も一緒に大切な命を守るように日頃からの防災教育・訓練が大切だと思うと話していた。

(3) 母の話を聞いて

私は中学3年生の時、一度母に被災体験を聞いたことがある。そのときは、初めて身近な人から聞いた被災体験だったため、授業で学んだ教科書のデータとは違い、阪神・淡路大震災の被害や恐ろしさを、より身近に感じた。また、当時の母と同じ中学3年生の自分が、このような被災体験をしたらと考えると、とても恐ろしくなったことを覚えている。

改めて今回、被災体験を聞いたときは、中学生で聞いた時に比べ、さらに話が身近に、現実味をもって感じた。高校で学んできた知識や被災体験のお話があるからこそ、母が体験した阪神・淡路大震災の被害や、恐ろしさというものを身に染みて実感した。母の話の中で私は、当時死者が日に日に増えていく様子から語る「地獄のようだった」という言葉が印象に残った。あまりマイナスなことは言わない母が言ったからこそ、よりずっと重さを感じ、心が苦しくなった。また、いくら時間がたつたとしても、当時の感情は残り続けるのだと改めて感じた。

3 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科に入ろうと決めたきっかけは、中学校2年生の時に神戸ルミナリエに参加した時だ。環境防災科の先輩方が、神戸ルミナリエでブースを出展しており、阪神・淡路大震災の様子や被害について

語っている姿を見た。その時まで私は、あまり災害や防災についてあまり関心がなかった。しかし、熱心に被害を語る先輩の姿がとても印象に残り、地震の怖さについても知ったため、少しずつ防災にも興味を持ち始めた。それを機に、私も防災を学び、関心を持ってもらえるように、学んだことや、災害の記憶や教訓を環境防災科の一員として繋いでいきたいと思うようになった。

（２） 入学後

入学後私は、これから環境防災科で多くの知識を学び、ボランティアに参加し、将来にその学びを繋げていきたいと考えていた。そして、意気込みながら参加したジュニアリーダー学習会で、私は人前に立つて話すことの難しさを知った。学習会の中に、ワークショップで出た意見を、班ごとに前に出て発表する機会があった。私はその班の代表となり、初めて多くの人の前で自分の意見を発表した。しかし、緊張で声が震え、自分の言いたいことをあまり伝えることができなかった。周りの人は、堂々と意見を話している中、うまく話せなかったことに悔しさが残った。そこから、堂々と人前で話せるようにすると、目標として決めた。人前で発表する前や、ボランティア活動前は、何度も練習を重ねながら、ボランティア活動での交流や、防災学習などで経験を積んでいった。積極的にボランティア活動へ参加する中で、様々な世代の人と意見交流の楽しさや、苦手だったことが少しずつできるようになっていくことへの達成感も感じるようになった。同時に、私が環境防災科を目指すきっかけとなった先輩方のようになりたいと強く思った。

（３） ジュニアリーダー

私は１年生と２年生のとき、ジュニアリーダーで様々な経験をさせていただいた。ジュニアリーダーでは、学習会、アクションプラン実行、地域防災セミナーといった様々な活動を行ってきた。その１つ１つの経験が私にとって、かけがえのない経験や学びとなった。

その中でも特に印象に残った取り組みがある。それは、舞子高校チームのアクションプランの１つである校内の防災楽習だ。防災楽習では、環境防災科を通し学んできたことを基に、過去発生した災害、災害時の行動などについての授業を、同級生や他学年、先生を対象に行う。

防災楽習を行う中で、私が大切にしていたことがある。それは、意見交流の機会を大切にすることだ。私はワークショップの時間帯に、様々な人の意見を伺いながら積極的な交流を行っていた。

私は、自分の意見に自信が持てず、意見を言えなかったことがあった。しかし、自分の意見が言えなければ、交流のチャンスを逃してしまうことに気が付いた。実際に防災楽習を受ける人の中には、ワークショップでアイデアが思いつかず困っている人や、防災に興味のない人もいる。防災楽習を行うにつれて、そのような人も楽しく交流ができるように、サポートがしたいと思うようになった。そのため、意見が思いつかず悩んでいる人に対して考えやすくなるように、過去発生した災害の事例も取り入れながら話した。様々な人と交流をすることで、人との意見の違い、その意見の理由、思いつかなかったような勉強になる意見もあったため、私自身の新たな発見にもなることがあった。

（４） 災害メモリアルアクション KOBÉ

私は、「災害メモリアルアクション KOBÉ」略して「メモアク」の活動に３年間舞子高校チームとして参加してきた。この活動は阪神・淡路大震災の経験を次に活かすことを目指した取り組みで、未災者が災害のことを学び、未災者へ繋げていく新しいチャレンジである。

私は舞子高校チームで活動していくにあたって印象に残った取り組みがある。それは、先生に阪神・淡路大震災の被災体験や、気持ちの変化、生徒へ伝えたいメッセージについてインタビューを行い、そのお話を冊子にまとめるという取り組みだ。先生の被災体験を冊子でまとめることで、誰でも簡単に身近な先生の被災体験に触れることができる。阪神・淡路大震災の記憶を未災者から未災者へ繋げ、災害を自分事として考えてもらうきっかけを作る活動をしてきた。冊子を通した言葉で被災体験を伝えるからこそ、読者にお話を正しく伝えることの責任を実感した。誤った形で相手に伝えてしまえば、貴重なお話と先生方の思いなどを台無しにしてしまう。だから、正しく、先生の被災体験と同時に、先生の思いも読者に向けて伝わるように意識した。

私は、冊子を通し先生の被災体験に触れる中で印象に残った言葉がある。それは「できる限りの備えをする。知識があるからこそ備える」という言葉だ。環境防災科で、日頃学んでいたとしても、知識を得たからと言って満足してはいけない。知識があるのに、備えをしないことは勿体ない。だから、この言葉を知ったとき、災害が発生した時、後悔しないように自分にできる最大限の備えをしようと感じた。ま

た、学んでいるからこそ自分の中で知識をため込むのではなく、ボランティア活動や日々の暮らしの中で積極的に発信していくことの責任も感じた。

4 夢と防災

(1) 将来の夢ときっかけ

中学校3年生10月末に、祖母の家で飼っていた犬が寿命で亡くなった。私が生まれたときから、祖母の家に行っては、その犬と共に過ごしてきたため、大きなショックを受けていた。そのような時、私はニュースで、阪神・淡路大震災で多くの動物が被害を受け、亡くなったことを知った。実際に祖母は犬を飼っている間、動物への防災を行っていなかった。私は、犬が寿命で亡くなり、大きなショックを受けたが、もし災害時、被害に遭って亡くなっていたらと思うと、さらに恐ろしくなった。それを機に動物防災に興味を持ち始め、災害時、動物の役に立てるような存在になりたいと考えるようになった。

環境防災科へ入学し、通っていく中でも、その夢は変わらず、動物と防災に携わられる方法はないか探していた。そのようなときに、災害時動物の命を助けることのできる「動物看護師」という職業を知り、目指したいと思った。動物看護師とは、動物病院において、獣医師の診察のサポートや、受付、血液検査、入院している動物のお世話を行う職業だ。そして、近年国家資格ができたことにより、採血や投薬、マイクロチップ挿入も行えるようになり、仕事の幅も増えた。

災害時では被害が大きいほど、人への支援が優先的になり、動物の支援が不足しやすくなる。しかし、動物も大切な家族の一員である。動物の役に立つためにも幅広い支援を行えるように、私は国家資格を持つ動物看護師になりたい。さらに幅広い支援を目指すために災害時、ドッグトレーニングやトリミングの資格取得も目指し、災害時併せて行えるようになりたい。

(2) 動物看護と災害支援

災害時、動物看護師の存在は大切になってくると考える。

阪神・淡路大震災では多くの動物が被災し、怪我を負い、亡くなってしまった動物もいた。災害の規模が大きいほど、対策をしていない状態で自分と動物の命も守ることは困難になってくる。だから、動物病院で、普段から防災の大切さや方法を伝えたい。人にお話を伺ったりし、動物と人が共生しやすくなるような支援をしたい。また、災害時、亡くなる動物を減らすためにも獣医師と協力しながら、動物の治療ができるようにしたい。

実際に、災害時・通常時に動物看護師と獣医で結成した動物のために動く団体がいくつかある。そのうちの1つは、VMATという団体だ。これは、DMATの動物版で災害時発生からおおむね48時間の、急性期に現地へ入り、被災動物の保護や、避難所での動物管理に当たる組織だ。業務は、避難所で動物の手当て、応急処置をして、動物病院へ搬送指示、避難所にペットの健康に関する相談窓口を開設するなど様々である。私はこの団体に興味があり、将来的に目指していきたいと考えている。

また、これから動物看護を学ぶ上で、環境防災科で学んできた過去発生した災害の被害や、教訓などの知識についても大切にしたい。災害時は、混乱している人、救助の手が届いていない人、ライフラインが通常通りに使えないなど様々なことが予想される。そのような中、動物を助けたいという気持ちのみで動いてしまえば、視野が狭くなり、動物や人を余計に混乱させてしまう。だから、災害時周りを見て判断できるように、過去発生した災害の被害状況を踏まえた上で、今後災害が発生しても、予測を立てながら、動物と人の両方に気を配れるようにしたい。

次に、私は避難所で動物が人と共に過ごしていくための支援がしたい。例えば、動物看護師は定期的な動物への健康診断ができると考えている。動物が避難所などのいつもと異なる環境で過ごすと、環境の変化により、ストレスを感じてしまう。また、ペットフードや、ペットシートなどの動物用品が置いている避難所は少ないため、人間用の備蓄品で代用せざるを得ない場合も出てくる。そのため、そのことが原因で弱ってしまったり、亡くなってしまったりする場合もある。しかし、動物は自分自身の健康状態を言葉で伝えることができない。だからこそ、定期的な動物への健康管理は特に重要となってくる。具体的には、飼い主の方から動物の様子の変化、懸念点についてお話をお聞きし、実際に動物の動き、目や鼻の様子を見たりしながら検査を行う。設備があれば、血液検査や尿検査を行う。そうすることで、動物の変化に気づきやすくなり、早期発見・早期治療に繋がられる。

(3) ドッグトレーニングやトリミングと災害支援

私は、避難所での支援でトリミングやドッグトレーニングの資格も得て、動物看護と併せて行えるようにしたい。災害時は、被害も大きいほど支援が不足すると考えられるため、動物看護以外にも、動物の毛のカットを行うトリミング、動物のしつけ・訓練などを行うトレーニングについても重要となると考えている。

阪神・淡路大震災では、動物のにおいや衛生面で、他の被災者の方とのトラブルが発生した。実際に動物は、毛のカットをせずに放置すると、皮膚病や炎症の原因となり、動物にとって危険である。だから、トリミングの技術を身につけ、動物の健康被害を減らす取り組みがしたい。また、トラブルの原因を少しでも除けるようにしたい。

次に、ドッグトレーニングの資格をして、動物と飼い主の共生をしやすいするためのサポートがしたい。動物が慣れない環境にストレスを抱えてしまった場合、不安や恐怖を感じて他の避難者に吠えてしまったり、噛みついてしまったりする恐れがある。被災者であるすべての人が動物好きだと限らないため、トラブルに発展してしまったら互いに共生しにくくなる。だから、動物とほかの被災者の仲介役となり、話を伺い、解決できそうなことから問題解決に努めたい。また、飼い主の方に避難所での飼育アドバイスをを行い、動物と訓練など行い信頼関係を築きたい。

5 最後に

『語り継ぐ』を執筆するにあたり、高校生活を通してお世話になった方々に感謝を感じた。多くの方々の助けがあったからこそ、今までたくさんのボランティア活動や校内外での取り組みに参加させていただき、学びも得ることができたのだと実感することもできた。私が今まで行ってきた経験や、学びは当たり前ではない。だからこそ、高校で学んできたことや、聞かせていただいた被災体験、学んできたことは、高校で完結させたくない。将来の夢である動物看護師を目指す上で動物と関わりながら防災に携わっていきたい。

また、私は環境防災科で様々な方々に被災体験を聞かせていただく中で、教科書のデータだけでは伝わらない被災体験や思いがあることを学んできた。そのため、今まで聞かせていただいたお話を大切に、卒業しても震災を体験していないからと言ってためらわず、伝え続けていきたい。今まで、環境防災科で学ばせていただいた分、自分の言葉で語り継ぎをし、防災と関わりながら「恩送り」をしていこうと思う。

「環境防災科で過ごした3年間」

四日市 悠成

1 はじめに

阪神・淡路大震災から29年が経った。私は阪神・淡路大震災は経験していない。だからといって震災を経験していない私たちのような未災者が何もできないわけではない。災害は人々の命・財産を一瞬にして奪ってしまう。地震はいつ来るかわからないが、絶対に来ないわけではない。過去の災害を踏まえた上で同じ思い、経験をする人を少しでも少なくする。そのために私たち未災者ができることは過去の災害を風化させないことだと思う。

2 母の被災体験

震災当時、母は長田区萩乃町で1人暮らしをしていた。母は社会人で自宅の布団で寝ていたところに地震が来た。マンションに住んでいたため、トラックが突っ込んできたかと思うほどの強い縦揺れを最初に感じた。すぐに地震だと分かった。突き上げられた瞬間飛び起き、揺れが収まった後すぐにマンションの外に出た。発災直後の部屋の状況は家具などが大きく倒れているというのはなかったが、壁にあった電話の子機が飛んでいてテレビ台が大きく動いていたのを確認した。地震が起きた時の「ドン」という大きな音と突き上げる感覚は今も鮮明に覚えている。マンションの外に出ると周りの人も驚き、外に出てきていたので、そこで状況確認ができた。

自宅は無事だったため、すぐに当時働いていた中央区の会社に電話をかけたが電話はつながらず、仕事は休んだ。長田区に住んでいたが、北の山の方に住んでいたため火災の被害は近くではなかった。しかし南の方はかなり燃えていて家から火災は確認できた。阪神・淡路大震災が起きたのは1月で真冬のため、寒いはずだったが火災がすごく、熱気を感じた。その後、母の家は無事だったので友人や親戚が家に集まってきた。両親も名谷に住んでいて無事だった。しかし祖母が住み込みで働いていた板宿の会社が半壊していた。自宅も崩れてしまったため、すぐに仮設住宅に入り、何もできない母自身は、自分に無力さを感じた。近くの小学校でおにぎりや水が配られたので友人たちと並んだ。

のちに会社も半壊していたことが分かり、かなりの期間仕事へは行っていなかった。家にいることしかできず、避難所に避難していた友人も家に呼んだ。ずっと放送されている地震の映像や、日に日に増えていく死者・行方不明者の数を見て地震、自然災害の怖さを、身をもって感じた。

母が阪神・淡路大震災を通して強く感じたのは、ライフラインが当たり前にある生活のありがたさだった。電気はすぐに回復したものの、水とガスが出なかったためお風呂には入れなかった。しかし北区の友人の家でお風呂に入れてもらい、本当に助かったし心の底から嬉しかった。また近所の人たちと食べ物や飲み物を分け合う経験はとても印象に残っており、心の温かさを感じた瞬間だった。阪神・淡路大震災を振り返り、母は自分自身がボランティアどころではなく、何もできなかったのも、私には困っている人を助けられるような人になってほしい、と願っている。

3 母の話を聞いて

私が母から話を聞いて1番大切だと感じたことは日ごろからの備えである。阪神・淡路大震災が起こる以前は、兵庫県に地震は来ないと言われていたという話は何度か聞いたことがある。阪神・淡路大震災が起きた頃はそういわれていたのかもしれないが、今現在とは全く状況も違うと感じた。南海トラフ巨大地震は、30年以内に発生する確率が70%~80%程度と言われている。地震が来ることはわかっている。災害から自分自身の命を守るためには何をすればいいのか、どうすれば周りの大切な人の命を守ることができるのかを考えていきたい。防災バッグの準備、中身の確認、避難経路の確認などできることは山ほどある。私は環境防災科で多くの知識を蓄えさせてもらった。阪神・淡路大震災のような経験を未災者にさせないためにも、私は備えというものに力を入れていきたい。

そして母から言われた「人を助けられるような人になってほしい」という言葉には、大切な友人を亡くした母だからこそ、私にはその言葉が重く感じた。私の将来の夢である警察官になって、曾祖母のような経験や母のような経験をする人が少しでも少なくなるようにしていきたい。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私は幼いころからよく曾祖母と話をする機会があった。そんな曾祖母に阪神・淡路大震災の話聞く機会があった。曾祖母は阪神・淡路大震災で自宅が崩れてしまい仮設住宅に住むことになった。木造の2階建ての1階に住んでいた曾祖母は地震発生後、すぐに仮設住宅に住むことができ、とても安心したと言っていた。当時1人で仮設住宅に住んでいた曾祖母は頼れる人もあまりいなかった。そんな時、当時2階に住んでいたのが若い男性だったそうで、とても親切にしてもらった。何か月も仮設住宅に住んでいたため、その男性にお世話になったと言っていた。1番困っていた時に助けてくれた方でもあり、とても信用していた。頼ることができる人がいなかった曾祖母はすぐに警察官に相談した。その警察官がとても親切にしてくださり、とても安心したと言っていた。その話を聞き警察官になりたいと思った私は、進路選択の際、曾祖母のような災害で被害を受けてしまう人を減らしたいと思い、災害以外にも力を入れて勉強している環境防災科に入学したいと思ったのがきっかけである。

(2) ボランティア活動

私には1つ下の妹がいる。その妹と母と3人でよく行っていたのがボランティア活動である。私が通っていた小学校・中学校には、どちらもボランティアグループがあった。小学校の頃のボランティアは、正直何も考えず、母に連れられて行っていた。近所の川の清掃活動であったり、小学校で行われる祭りで出し物としてソーラン節を披露したり、裏方で仕事の手伝いをやらせてもらっていた。最初の頃はボランティアグループに入っていたから行っているという感じだった。

中学校に入り、すぐにボランティアグループについてのプリントが配られた。その時私は母に、自らボランティアグループに入りたいと言った。最初は、何も考えることなくしていたボランティアだが、参加していくうちにボランティアの良さに気づいていたのだと思う。中学生では部活動がない日や休みの日には積極的に参加した。出身小学校へのボランティアや地域のお祭りの手伝いをさせていただき、ボランティアの良さに気づく機会が多くあった。高校でも何かしらのボランティアをしたいと考えていた私は、環境防災科が多くのボランティア活動を行っていることを知り、入学したいと思ったきっかけにもなった。

(3) 環境防災科で過ごした3年間

私は環境防災科での3年間は本当に中身の濃いものになったと思う。数々のボランティア活動、環境防災科独自の授業など、環境防災科でしか経験できなかったことが多くあったと思う。災害を学ぶ上で犠牲になった方がいるということは絶対に忘れてはならないことだと思う。

「語り継ぐ」この言葉は環境防災科に入学してきて3年間私たちが追い続けてきた言葉である。私たちのような未災者ができることは何か、それはやはり、阪神・淡路大震災や東日本大震災など数々の災害があった中で、そういった過去の失敗、教訓から学び、次の世代、未災者へとつないでいくことだと思う。自分が経験していないことを他人へ教えるということは、それなりの知識や覚悟がいると思う。卒業後、自分たちの進む進路で、この3年間で学んだことを生かし、同じ失敗をしないためにも、語り継ぐことが、いま私たちにできることだと思う。

5 東北訪問

(1) きっかけ

私が東北訪問参加しようと思ったきっかけは、先輩からの勧めだ。もともと入学前から東北訪問に興味があった私は東北訪問について話を聞く機会があった。自分自身が高校一年生の冬までに学んだことからより深く、より広く学びたいと感じた。また環境防災科で東北訪問を経験している先輩方から、実際に被災地を見たほうがいい、学べることがたくさんあるから絶対に行ったほうが良いと言われ、自分の目で見て、肌で感じたい、そして被災者からの生の声を聞いてみたいと思い参加した。

(2) 実際に感じたこと

私の考え方を大きく変えたのは東北訪問だった。

当時1年生で考え方も幼かった私が、東北訪問で1番大切だと感じたのは自分の目で見る大切さである。東日本大震災で被災した大川小学校を訪れた際、バスから降りた瞬間、感じたことのないピンと張

りつめたような雰囲気があった。実際に校舎に目を向けると、言葉では表すことのできない感情が込み上げてきた。事前に学習し、何度も写真でその被災状況を見ていたが、その時とは明らかに違った感情であった。約10年たっても残る津浪のあと、見たことのない曲がり方をしている校舎や渡り廊下、そして頭によぎる津波で子どもたちが流されてしまう恐怖、校舎を見た瞬間、経験はしていないものの、なぜか津波の想像ができた。運動場では子どもたちが元気に走っている姿や、寒い中指示が出るまで待たされている姿も浮かんできた。すぐ横にある山を登れば助かったのに、なぜ先生はそこで待機するという選択をしたのか。数々の疑問が頭に浮かんだ。

また多賀城高校の生徒との街歩きでは同じ災害を学んでいる高校生と意見交換をする機会もあった。地域のスーパーマーケットには東日本大震災で襲ってきた津波の高さが示されているものもあった。これも過去の災害を風化させないためのものなのだと感じた。また、そのスーパーマーケットの屋上の駐車場に連れて行ってもらい、そこから撮影された実際の津波の映像を見せてもらった。一気に押し寄せてくる津波、そして車や家を簡単にのみこんでしまう瞬間を見たとき、災害の怖さを改めて感じた瞬間だった。

その他にも東北訪問では、多くの貴重な経験をさせていただいた。同じ災害を学ぶ多賀城高校の生徒との交流では、知識の共有や災害について学んでいくうえで、どういったことを考えて勉強しているのか、大切にしていることは何かなど同じ災害を学んでいる高校生だからこそ話し合える貴重な機会もあったと感じる。ジュニアリーダーのメンバーとも災害についていろいろな視点から考えることもできた。齋藤先生や雁部さんなど、他にも多くの方から貴重な話を聞かせていただいた。そういった意味で私自身が成長できた東北訪問であったと思う。

（３）被災者の生の声

私は東北訪問で多くの方から東日本大震災での実体験のお話を聞かせていただいた。実際に子どもを亡くされた方々は、思い出すこともつらいなかで私たちに話をしてくださった。また東日本大震災で目の前で津波に友人が飲み込まれてしまった方からもお話を聞かせていただく機会があった。そんな語り部さんたちが揃えて口にしていたのは「２度と同じことが起きてほしくない」「同じ経験をする人がいなくなっしてほしい」といった言葉だった。私はその言葉を聞いた時、私たち未災者にできることはやはり語り継ぐことだと強く感じた。これから必ず来ると言われている南海トラフ巨大地震。阪神・淡路大震災や東日本大震災など、これまでの数多くの災害から学んできたことを生かしていかなければならない。自分がそういった思いをしないためにも、周りの方々にそういった思いをさせないためにも語り継ぐことの重要性というものを改めて再確認できた貴重な機会だった。

東北訪問を通して私は、数多くの方からお話を聞かせていただいた。そのお話を自分の言葉で未災者へと語り継いでいくことが、私が東北訪問で聞いた「２度と同じことが起きてほしくない」という言葉へとつながっていくのかもしれない。

（４）ただいまとおかえり

「心のふるさととはつながっている」、これは私が東北訪問で齋藤幸男先生から大切にしてほしいと言われた言葉だ。人と人の心はつながっている。つらいことがあればいつでも「ただいま」と言って東北に帰っておいでと言われた。私たちが語り継いでいくうえで覚えておくべきことだと思う。過去の災害で数多くの方々がつらい思いをしている。私たちは次の犠牲者を防ぐために語り継いでいかなければならない。私たちが語り継ぐのは過去の災害から学びまた同じようなことを起こさないためである。同じ失敗をしないためにも、命を守るためにも私たちは語り継いでいかなければならない。

6 最後に

私は環境防災科に入って様々な経験をさせていただいた。普通科では経験できないようなボランティア活動、東北訪問など、とても貴重な経験をさせてもらったと感じている。3年間で数多くの方々から阪神・淡路大震災や東日本大震災が起こった時の話を聞かせていただいた。そこで私たちが考えてきた「語り継ぐ」ことが重要になってくると思う。多くの講義で過去の災害で課題となった部分を教えてもらい、対策しなければならないことについても教えていただいた。過去の災害から学んだことをこれからくる災害への教訓とし、必ず命を守らなければならない。日本という災害大国に住んでいる以上は、自然災害と切り離れることはできない。これから必ず来ると言われている南海トラフ巨大地震をはじめとする私たちに迫ってくる災害から自分たちの身は自分で守っていかなければならない。そのためにも

私自身の将来の夢である、警察官となり環境防災科で学ばせてもらったことを語り継いでいくとともに、自分の命を守るだけでなく、周りの大切な方々の命を守れる警察官になりたい。阪神・淡路大震災や東日本大震災などで犠牲になられたたくさんの方々の思いを負い、私たちはこれからも災害と向き合っていかなければならない。